

# 博士論文

論文題目 百回本『水滸傳』の編纂方針

氏名 荒木 達雄

百回本『水滸傳』の編纂方針 目次

序	1
第一章 基礎的状況の検討	3
第二章 宋江形象演變考	53
第三章 李逵殺虎故事成立の背景	94
第四章 エピソードの改編・創作と高級文藝化	119
第五章 宋江と李逵を軸とした作品編成	160
第六章 「義」から見た編纂方針	177
終章 水滸傳編纂の環境要因と編纂方針	260
参考文献	263

## 序

水滸傳は氣の遠くなるような長い時間をかけて無數の人々の手を経た結晶であるとはすでに手垢のついた言いようであろう。しかし、現在われわれの目にする水滸傳は確かに時代も來歴もことなる多種多様な素材の集積でありながら、また、その素材を有機的につなぎあわせるべくさまざまな處理がほどこされてできあがった、完成された一篇の長篇小説である。

この各素材のむかしの姿の研究、すなわち本事研究、來歴研究は水滸傳が研究の對象となつた當初から中心的な存在であつた。余嘉錫の史實と宋江三十六人との關係の研究、魯迅の『夷堅志』と水滸傳との類似性の指摘などはその初期の代表的なものである。その後も、水滸傳に現れる人物のモデルは誰か、エピソードは何處に由來するのかなど、各時代の水滸傳研究の第一人者と稱し得る人々が研究を重ねてきた成果がある。ここに筆者があらたに加えられることは多くない。にもかかわらず「百回本水滸傳の編纂方針」と稱して博士學位論文を執筆する理由は、なぜこうした人物やエピソードが水滸傳にとりこまれ、現在のような順序に配置され、いまでもその姿を目にすることができ

のかという疑問が解消しきれぬからである。

水滸傳には幾度にもわたる改編があり、改編前の本と改編後の本とが比較できる場合ならば、「いつ」、「なぜ」改編されたのかをかなりの程度推測することができる。本稿で考えたいのは、それよりまえ、いま見られる最初の水滸傳が、「なぜ」その形になっているのかである。この時、考慮しなければならぬことはおおきくわけて二つある。ひとつは、材料自体がいかに形成されたのかである。これについては、水滸傳以前のさまざまな時代、地域、階層の人々の好み、望み、主張を考えなければならぬ。もうひとつは、水滸傳をいまの形に整えた人物の「編纂意圖」であり、「そこにこめた思い」である。「物語にこめた思い」とはそもそも抽象的な言いかたであるし、物語は論文ではないのだから明確にその「意圖」や「思い」を伝えるべく書かれているわけでもない。實際には、「なにが書かれているか」、「なにが採用されたのか」、「なにが捨てられたのか」、「なにが變更されたのか」などの現象の觀察を積み重ねることにより、その背後にある思想を推測していくしかない。悠久の時を経、無數の人々の思いを蓄積したのが水滸傳であるのならば、その思いを可能な限り探っていくことは、水滸傳のみならず、中國の小説史、文化史研究にも

資するところがある。本稿が全面的にその目的を果たせるとは思わないが、こうした興味の一端を掘り下げていきたいと考えている。

本稿では水滸傳の成立過程を「自然形成期」と「最終編纂期」とにわけける。前者は水滸傳の前身となった物語がその時々が発信者なり受容者なりの興味や習慣を反映して不斷に變化を續けている時期、後者は「百八人の好漢がそれぞれ理由で梁山泊に集い、のちには招安を受け朝廷のために力を尽くしながらも非業の死を遂げる」という全體的な枠組みに合わせて整理される時期である。むろんこの命名は議論を進めやすくするための便宜的なものにすぎず、兩者の中間のようなあいまいな「意圖」によっておきた變化もあるだろう。また、「自然形成期」、「最終編纂期」と書いてしまうと、水滸傳は一直線に發展してきたかのようにあるが、もちろんことはかように單純ではない。水滸傳の前身となり得る物語は無數に存在したであろうし、一人の人物について相矛盾した複數の傳承が存在することもあっただろう。そのなかのごく一部が最終編纂期にとりあげられ、調整を受けたにすぎない。現在の水滸傳からさかのぼって考えれば、最終編纂期があり、そのまえに自然形成期があるというように直線的に見えるが、それは川のなか

に築を仕掛けて引き上げ、そこに閉じ込められた魚群を見て、これらの魚はどこからどのように來たのかを考えているようなものである。そもそも築にかすりもせずに通り返って逃げ切った魚もあれば、ひっかかりかけたもののかろうじて多くは現在もう見ることはできないが、水滸傳に見えるエピソードによく似たほかの作品や、現在も中國各地に傳わる、水滸傳と異なる人物像やエピソードを有する口頭傳承などはそれら築に入らなかった魚の影である。水滸傳成立過程研究は本來ならばこうした水滸傳にならなかった水滸傳にも焦點をあてるべきなのであるが、資料を體系的に整理するだけの準備が現段階ではできていないこと、篇幅が膨大になりまともりがつかなくなるおそれがあることなどから、本稿では水滸傳からさかのぼれる範囲とその周辺に對象を限定し議論をすすめていくことにしたい。

## 第一章 基礎的状況の検討

### 一・「成立」とはなにか

水滸傳は多くの研究者の注目を集めつづけている対象であるだけに、その成立時期に關する論考も數限りなく發表されている。書籍としての水滸傳は明代中ごろにはじめて刊行されたであろうことは多くの研究者の一致するところであるが、その文章は刊行直前に書かれた、より以前から存在してはいたが『紅樓夢』のように抄本などの形で傳わっていたために現存する本がないなど、さまざまな意見がある。かつて中國では、元末に施耐庵ないし羅貫中の手によつて完成されたとするのが定説で、大學生向けの教科書にもそのように記されていた<sup>一</sup>。この説は『録鬼簿續編』に元末の戲曲作家として羅貫中の名があげられていること

一 たとえば章培恒・駱玉明主編『中国文学史』（复旦大学出版社、一九九六年）は水滸傳を「第六編 元代文学」のなかに置き、その完成者を元末明初の人、施耐庵としている。

二 高島俊男『水滸傳の世界』（大修館書店、一九八七年）十一「誰が水滸傳を書いたのか？」

三 高島俊男『水滸傳の世界』十一「誰が水滸傳を書いたのか？」、二百五頁

四 李伟実「从水滸戏和水滸叶子看《水滸传》的成书年代」

がひとつの根據であるほか、高島俊男の説くように政治的な要因も後押ししているため、長い間權威を持ちつづけている<sup>二</sup>。

しかしやはり、「一人の天才が早くも元の末に、百五十年ものちの明の後期にいたつて出てくるような長篇小説を數十種もちゃんと書きあげていて、どこかにうずもれて一般世間が追いついてくるのをじつと待っていたというのは、道理にあわない<sup>三</sup>」と考える研究者が多かったのか、成立時期を引き下げる論が徐々にあらわれはじめた。比較的早いものとして、李偉實が一九八八年に、水滸傳の成書は成化年間よりさかのぼらないとする説を發表している<sup>四</sup>。この論はあまり廣泛な議論を呼ばなかったようだが、

（『社会科学战线』一九八八年第一期）。その後、「从杜堇的へ水滸人物全图看《水滸传》的成熟年代」（『社会科学战线』一九九一年第三期）、「《水滸传》成书于元末明初之说不能成立——兼论《水滸传》的作者为罗贯中非施耐庵」（『社会科学战线』一九九三年第六期）、「《水滸传》成书于明朝中叶可以定论」（『广东技术师范学院学报（社会科学）』二〇一一年第六期）を發表し、水滸傳は弘治正徳年間に書かれたという説の補強を行っている。

二〇〇一年、石昌渝「《水浒传》成书于嘉靖初年考」<sup>五</sup>が發表されるや、これに反駁する論、石昌渝のさらなる反論と、さまざまな論文が數年にわたって陸續と發表され、百家争鳴の様相を呈した。この間の論文は筆者が目睹し得たものだけでも十數種にのぼり、実際にはより多くの論文があったと思われる。本稿でこれらのひとつひとつに觸れることはしないが、この論争の中心にある「成書」、「成立」という語の定義については整理を試みる必要がある。

管見の限りではこれらの論文において「成書」、「成立」の定義を明確に説明したものはきわめて少ない。それぞれの論文がどのような状態をそう稱しているのかは文脈から判断するほかないのだが、筆者が推測し得た含意はさまざまあり、一定ではない。自明のごとく用いられているものもとても大事な用語の含意にずれがあるのだから、議論がかみ合わないのも當然である。

これらの論考で用いられる「成書」、「成立」の含意は次の四種に大別できる。

一・現在見られる水浒传とまったくおなじものが完成す

ること。

二・現在見られる水浒传とおおむねおなじものがあらわれること。

三・現在見られる水浒传の主要部分が出そろい、ひとつらなりのものがたりを形成すること。

四・水浒传という名の長篇小説が登場すること。

一がもつとも厳格な判断基準である。水浒传に現れる事物、制度、人名、地名などを根據に成立時期の上限を推定していく石昌渝の論法が代表例であろう。この基準をつきつめていけば、現在われわれが水浒传と認めるものと一字一句おなじ文章でなければ水浒传と呼ぶことはできない。

二は、やや判断基準をゆるめ、一字一句おなじであることまでは求めない態度である。陸容（一四三六～一四九六）の『菽園雜記』に見える梁山泊好汉の綽名と姓名には水浒传と一致しないものがあり、潘之恒（一五五六～一六二二）『水浒传子』のそれは一致することから、水浒传の成立時期はこの二者の間にあるとする王齊洲・王麗娟の考

え方<sup>六</sup>などがこれにあたる。

三は、現在の水滸傳と比べてエピソードに出入りがあったとしても、全體の構成がおおむねおなじであれば水滸傳の成立と認める態度である。現存するいくつかの版本に記される「施耐庵撰 羅貫中編」にもとづき、施耐庵がまず水滸傳の原型をつくり、羅貫中が手を加えていまの形にしたと考える場合、この基準を採用しなければ「施耐庵が水滸傳をつくった」とは言えなくなってしまう。もし一の基準であれば、「水滸傳の作者」は羅貫中になるからであ

る。この基準では、成立時の水滸傳と現行水滸傳の間には相當の隔たりがあり得る。かつて水滸傳は現在の第十三回到當たる部分からはじまっていたと述べる聶紺弩<sup>七</sup>、征遼故事を含まない水滸傳があったと考える鄭振鐸、『宋江演義』なる書があったと主張する陳松柏<sup>八</sup>らの各説がそうである。

四は、文獻上に水滸傳という題名が見えればその時點ですでに水滸傳はあったとする考えである。

<sup>六</sup> 王齊洲・王丽娟「从《菽园杂记》、《叶子谱》所记《叶子戏》看《水浒传》成书时间」(『南开学报(哲学社会科学版)』二〇一一年第三期)。

<sup>七</sup> 聶紺弩『《水浒传》四议』(北京大学出版社、二〇一〇年) 第

一九八八年時點で李偉實が元末明初説を評して、「元末明初に百八將を描いた百回本水滸傳が生み出されたというなら、それを宣徳初年までの六十年間誰も見ることができず、さらに三十數年経た成化初年の人々も見えておらず、その後また六十數年過ぎ嘉靖初年に至って突如現れるということになる。無茶苦茶な理屈ではないか」と述べたように、かつて元末成立説をとる研究者は一の立場であつた。しかしそれが非現實的であることが感覺的にも資料面でも明らかになり、少なからぬ元末説の學者がいまでは二、三、四の基準に移行している。つまり、元末に成立したのは現在の水滸傳とまったくおなじではないが水滸傳と呼び得るものだとの立場である。

さすれば、こうした新たな元末説は石昌渝の嘉靖初年説などと根本的に相容れないものではなく、兩立することも十分可能なはずである。たとえば鄭振鐸は元末明初成立論者であるが、その論を詳しく見れば、水滸傳の「祖本」は施耐庵、羅貫中によつて作られ、それを現在の姿にしたの

二 议「《水浒传》的思想性和艺术性是逐渐提高的」。

<sup>八</sup> 陈松柏「宋江演义是连接宋江等三十六人故事与水浒传必不可少的链条」(『明清小说研究』二〇〇八年第一期)。

は嘉靖年間の「ある無名作家」であるという<sup>九</sup>。鄭振鐸はこの「祖本」をもつて水滸傳の成立とみなすがゆえに元末明初成立説になるのであるが、この説と、石昌渝の、高俅、王進、林冲のエピソードは嘉靖期の作者の獨創で、新たに盛り込まれたものとする説<sup>十</sup>との間にいかほどの本質的な違いがあるのだろうか。嘉靖以前に現在の水滸傳の主要エピソードを備えたものがたりがあったと考える點で、兩者の間に大きな隔たりはない。嘉靖期の改編がいつごろなされたと見なしているかでいくらか時間差が生じる程度である。

わが國にはこの成書論争に正面切つて参加する研究はないようであり、まず「原水滸傳」と呼び得るものがあり、それを核に水滸傳が形成されていったとする説がひろく行われている。かつて「原水滸傳」があったという考えは胡適がはやくに提唱している。

してみれば、先に挙げた成立の定義三種（第四種は性質が異なるため除外）は、ほぼおなじ過程のどの段階を成立

と稱するかの違いにすぎない。つまり、現在の水滸傳の核となつた物語を「水滸傳」と稱するか、「原水滸」などと稱するかは差異である。しかし、どのような経緯をたどつて水滸傳が形成されたのかを考える成立過程研究においては、その各段階の呼稱に研究者によつてちがいがあろうと、甲論文がAと稱する段階を乙論文ではaと稱していることが明確にできれば大きな支障はないはずである。

侯會は作中人物の登場詩に着目し、かつて現行本の第十三回にあたる部分にはじまるものがたりがあったとの聶紺弩の論を支持しているが、その際侯會はかつてあったと想定する本を「帶詩本」、現在見られるテキストは「今本」と称し、「水滸傳の成書」などの語を用いない<sup>十一</sup>。本題からそれた成書論争にまきこまれないようにとの考えがあつてのことかもしれない。事實、侯會は「今本」は嘉靖年間に書かれたと、石昌渝と同様の説を唱えているのにもかかわらず、批判的な論文を次々と發表されるような事態には至っていない。

<sup>九</sup> 鄭振鐸『中國文學史(下)』(五南出版、二〇一五年)「第六十章 長篇小説的進展」、三百九十八頁

<sup>十</sup> 石昌渝「林冲与高俅」、《水浒传》成书研究」(『文学評

论』二〇〇三年第四期)

<sup>十一</sup> 侯會『《水浒传》源流新证』(华文出版社、二〇〇二年)第五章「《水浒传》的最终写定」48「从“帶詩本”到今本」



聶紺弩もまた石昌渝同様、高俅が王進、林冲を迫害する話は現行本水滸傳がつくられるときにつけくわえられたと想定している。ただ、その追加が水滸傳成書後に行われたと言っているだけの違いである。

この違いをもつて侯會、聶紺弩の兩名と石昌渝とを「元末明初成立説」と「嘉靖成立説」の兩説にわけること意義があるとは筆者には思えない。いまの水滸傳とほぼ同じ内容をもつ水滸傳が書かれたのは明中期であるという點で、ほとんどの學者の説におおきな差はないのである。

にもかかわらず、明中期ないし明後期成立説が現れるた  
びに、その内容というよりも「元末明初成立ではない」ということばに反應して強烈な批判が浴びせられる構圖は基本的に變わらず、時にその批判はほとんど信仰に近い気配すら漂わせることがある。蕭相凱、苗懷明が『水滸傳』が元末明初に成書したとする結論はいまなおくつがえすことはできない。のみならず、元末明初成書という結論は十分信ずるに足ると言うべきであろう<sup>十二</sup>と、石昌渝の言を完全に否定する文言で反論をしめくくっているように、

基準の異なるさまざまな「成立」をあたかもおなじ概念であるかのようにあつかう論が多いのが「成立過程論争」の特徴と言える。

無論、「原水滸」をもつて成立とするか否か、文學論としては輕視できない問題であろう。しかしそのためにはそもそも成立とはなにかという議論が必要であり、成立の定義がゆらいだままできる論争ではない。また、それを定義しなければ水滸傳の成立過程はまったく議論できないというものでもない。

また、いまひとつ筆者が違和を覺えるのは、現在の水滸傳のもとになるものがたりは書物の形をとっていたと信ずる説が多いことである。多くの先行研究の言うように水滸傳以前に宋江を中心とする、ある程度まとまった物語があったと筆者も考えるが、それはかならずしも書物の形であったとは限るまい。たとえば侯會の言う「帶詩本」は、詩、すなわち韻文を中心とする以上、書物の形をとらない語り物であった可能性も十分にあるう。あるいは、水滸傳は元末明初に成立した小説であるという前提があるため

<sup>十二</sup> 蕭相凱、苗懷明「《水滸傳》成書于嘉靖說辯證——与石昌渝先生商榷」(《文学遗产》二〇〇七年第五期)「《水滸傳》成

書于元末明初的結論迄今为止尚不能推翻：不仅不能推翻，其成書于元末明初的結論还应该说是相当可靠的。」

に、無意識裡に元末明初のころから本があったと思ひこんでしまっているのだろうか。

本稿はこの論争を解決せんとするものではない。ただ、この論争を他山の石となし、本稿における「成立」の定義をはっきりさせておかねばならない。

先行研究で「成立」、「成書」を明確に定義しているものには次のようなものがある。

#### 馬幼垣

現在の第七十回までと招安部分を合わせたものがたりの完成をもつて成書とする<sup>十三</sup>。

#### 李偉實

水滸傳とは百八將を描いたもので、その規模は現在見られる水滸傳に近い。三十六人だけを描いた平話の類のことではない。<sup>十四</sup>

#### 齊裕焜

水滸傳の成書時期とは、梁山泊百八人の好漢、林冲らの逼上梁山、英雄排席次、全夥受招安など主要な故事を含む水滸傳が書かれたことである<sup>十五</sup>。

それぞれに定義は異なるが、「成立」、「成書」を議論する以上、この三氏のごとき断りは缺かせない。では本稿ではいかなる状態をもつて「成立」とさだめるか。

水滸傳の成立過程はおおむね、資料や傳承が雑多に存在していただけの段階、それらの一部がまとまって水滸傳の核となる物語を形成していく段階、現在見られる水滸傳のうちもつとも古いものが書き上げられた段階をたどってきたとする見方はこれまでの研究の多くが共有するものである。

本稿の目的は水滸傳を現在の姿にせしめるにいたった環境要因、人的要因を考えることである。なかでも、雑多でさまざまな物語がいかにして首尾整った形に整理されたの

<sup>十三</sup> 馬幼垣『水滸論衡』（臺北：聯經，一九九二年）「從招安部分看水滸傳的成書過程」。

<sup>十四</sup> 李偉實「〈水滸傳〉成書于元末明初之说不能成立——兼论〈水滸傳〉的作者为罗贯中非施耐庵」

<sup>十五</sup> 齊裕焜・冯如常等『水滸学史』（上海三联书店，二〇一五年）第三章「本文生成——丰厚的积累与杰出的创造」第二節「未完的考证——成书时间」

かを考えることである。水滸傳の各部分は長い時間に、さまざまな人々の影響によって形づくられたものであろうが、首尾整った形になる段階では、ある時期に、一定の方針をもつて整理がすすめられたとしか考えられない。この段階に、編纂者がなにを考え、いかなる作業をおこなったのか。本稿ではこの段階を水滸傳の最終編纂期と稱し、その結果を水滸傳の「成立」と定める。この定義は中國語の論考で用いられる「寫定」の意に近いが、筆者はこの段階における材料の取捨選擇、書き換え、創作などの作業を重視したいため、「文字化」に意味の重點がある「寫定」の語は採用しない。

本稿における「成立」は、現在の水滸傳に限りなく近く改編がなされた時點のことであるが、通俗小説のテキストは流動的で常なきものであり、一語、一字單位まで追求すれば、この世に同じテキストはふたつとないということにすらなりかねない。先に整理した「成立」の定義のうち、一の立場をとれば、ある人がほんのわずかの字句の修正をほどこしたことで現在のものと一字一句おなじ水滸傳ができあがった場合、それが水滸傳の「成立」になってしまふ。假に嘉靖年間以前に存在しなかった官職名が水滸傳中に見えたとして、その語が嘉靖以降に書かれたというこ

とはできても、水滸傳の文章全體が嘉靖以降のものであるとする根據には足りない。極端な言いかたをすれば、その一語のみが嘉靖以降に加筆された可能性もまったくないとは言ひ切れまい。この基準を適用すれば、最後の加筆がなされるまえのものはどんなものであろうと「水滸傳ではない」ことになる。しかし、本稿で議論したい最終編纂の意圖とは最後のわずかな加筆修正の意圖のことではない。

ゆえに本稿では、この種のわずかな加筆修正は水滸傳成立後、版本流傳の過程で生じた差異とみなし、最終編纂とはみなさない。もう少し具體的に定義すると、梁山泊を根據地とする、宋江を頭領におおぐ集團の物語で、百八人の顔ぶれがそろい、全百回の構成を有し、エピソードが過不足なく現在の順に配列が完了した物語が書きあげられた時點をもつて水滸傳の「成立」とみなす。これ以降にこの構成を動かさない範圍での加筆、削除、修正などがなされ、それが現在見られるテキストである可能性も十分あるが、それはみな「成立」以降の出來事と見なす。また、假にこの「成立」時の物語が當時「水滸傳」と呼ばれていなかったとしても、本稿では「水滸傳の成立」と稱する。反対に、かつて「水滸傳」と稱されていた物語が存在したとしても、上記の條件を満たしていなければそれは本稿の對象

とする「水滸傳」ではない。結果として、先に整理した各種の定義のうちでは「二」にもっとも近いということになる。

## 二. 使用するテキスト

### 1 初期のテキストの変遷

宋江と梁山泊集團の物語がどのように編纂されて水滸傳になったのかを考えるには、成立時の形式、文章をもっともよく保存している版本を参照せねばならない。單純に考えればそれは現存するもっとも古い版本ということになる。

周知のごとく水滸傳の版本は文繁本系統と文簡本系統とにわかれる（以下「繁本」、「簡本」と略稱）。繁本は文章が相對的に長く、描寫も細微に至っている。簡本は詳細な描寫は少なく、物語をおおまかに追うことを主眼に作られたものと思しい。兩者の關係については、そこに現れる文

<sup>十六</sup> 大内田三郎「水滸伝版本考―繁本と簡本の關係を中心に―」（『天理大學學報』二十卷二号、一九六八年）、『水滸伝』版本考―再び繁本と簡本の關係について―（『伊藤漱平教授退官記念中國學論集』汲古書院、一九八六年）。繁本と簡本との關係についてはほかに、丸山浩明「水滸傳簡本淺

言を丹念に比較する研究が行われた結果、簡本に見える文言はほとんどが繁本のなかにも見えるだけでなく、簡本だけでは文意が不通な部分も繁本を見ると意味がわかることが少なくないことがわかつている。ここから、繁本が先に成立し、その文章を削ることで成立したのが簡本であり、その際無茶な削りかたをしたために文意不通の箇所が生じてしまったと考えるのがもっとも合理的であることが判明した<sup>十六</sup>。簡本系統内にも文章の繼承、變更など複雑な關係はあるものの、簡本の本文の由來をさかのばれば必ず繁本につきあたることになる。水滸傳と稱し得る版本で、ほぼ完全な形で現存し、もっとも古いものは萬曆二十二年刊行の『京本増補校正全像忠義水滸志傳評林』である。これは上圖下文形式の簡本であり、このテキスト自体は先行する簡本をひきうつしたものであるが、その先行する簡本の文章は現存する繁本とほぼ同じ文章を削ってできたものと考えて間違いなく、この本以前に現存する繁本とほぼ同じ文

探―劉興我本、藜光堂本をめぐって―」（『日本中國學會報』第四十集、一九八八年）、范宁「『水滸傳』版本源流考」（『范宁古典文學研究論文集』、重慶出版社、二〇〇六年）を参照した。

章の繁本があったことは確實である。たとえ現存する簡本の刊行年が繁本より早かろうとも、水滸傳完成時の様子をおうかぐためのテキストの筆頭に擧げることとはできない。

このほか、かつては『大宋宣和遺事』に記される宋江と梁山泊集團の物語を水滸傳版本系統の源泉とする見方もあった<sup>十七</sup>。たしかに水滸傳には『大宋宣和遺事』にあるものとよく似たエピソードが見え、かつ重要な位置に据えられてはいるが、そこに現れる文言はほとんど重ならず、人名も地名も異なり、エピソードの構成にも違いがある。『大宋宣和遺事』を水滸傳のテキスト繼承のなかに位置づけるのは妥当ではなく、あくまで水滸傳の重要な材料のひとつであるとみなすべきである。

上海圖書館で『京本忠義傳』殘葉が発見された際にはこれぞ水滸傳版本の原型であるとする説もあった。『京本忠義傳』は繁本より文字数は少ないが、簡本のように極端に

字数が少なく、描寫が粗雑であるわけでもなく、これを簡本と見なすべきか、初期の繁本として扱うべきかなどの議論もあった<sup>十八</sup>。しかし本稿で注目しているのはいずれのグループに屬させるかといった整理上の問題ではない。『京本忠義傳』と繁本とを比べると、『京本忠義傳』は先行する繁本の文字を削ることで作られた可能性がもつとも高い<sup>十九</sup>。ゆえにこの本も水滸傳の成書時のさまを伝えるもつともよいテキストとはならない。

繁本には分卷百回本、不分卷百回本、百二十回本、七十回本が現存する。かつて百回本としてまとめて考えられていた諸本も、文章の類似度から大きく二つのグループにわけられることに氣づいたのが齋藤護一<sup>二十</sup>であり、その各グループはそれぞれ分卷、不分卷の別にあたることを白木直

<sup>十七</sup> 魯迅『中國小説史略』（『魯迅全集 第九卷』人民文學出版社、一九八九年）「第十五篇 元明傳來之讲史（下）」百四十五頁、鄭振鐸「水滸傳的演化」（『中國文學論集 上集』開明書店、一九四九年）二百二十六～二百二十七頁、聶紺弩「《水滸》的思想性和艺术性是逐渐提高的」（『《水滸》四议』、八十一～八十二頁）

<sup>十八</sup> 刘冬、欧阳健『『京本忠义传』评价商兑』（『贵州文史丛

刊』一九八五年第二期、總第十七期）、刘世德「论『京本忠义传』的时代、性质和地位」（『明清小说研究』一九九三年第二期、總第二十八期）參照。

<sup>十九</sup> 中川諭「上海圖書館藏『京本忠義傳』について」（『新大國語』第二十二号、一九九六年）

<sup>二十</sup> 齋藤護一「百回水滸傳考」（『漢學會雜誌』第六卷第一號、一九三八年）

也がつとに指摘している<sup>二十一</sup>。不分巻百回本は百二十回本から二十回をとりさることによってつくられたとする説があったが<sup>二十二</sup>、笠井直美の検証により、分巻百回本に次いで不分巻百回本が作られ、そこに二十回加えることで百二十回本ができたという順序のほうがより可能性が高いことが確かめられている<sup>二十三</sup>。七十回本の成立はより遅れ、百二十回本に大幅に手を加えることによってできたものである<sup>二十四</sup>。したがって、成立時のものにもっとも近い水滸傳

<sup>二十一</sup> 白木直也「一百二十回水滸全伝の研究―發凡を通じて試みた―」(『日本中國學會報』第二十五集、一九七三年)。聶紺弩はほぼ同じ分類をし、分巻系統を「李卓吾本」、不分巻系統を「非李卓吾本」と稱している(聶紺弩「《水滸》的版本斗争」『《水滸》四议』、百五十二頁)。

<sup>二十二</sup> 神山閔次「水滸傳諸本」(『斯文』第二十編第三號、一九三〇年)、白木直也「一百二十回水滸全伝の研究―發凡を通じて試みた―」、高島俊男『水滸伝の世界』十四「『天都外臣』とは誰ぞや?」(二百五十六頁)、聶紺弩「《水滸》的版本斗争」(『《水滸》四议』、百五十二頁)。

<sup>二十三</sup> 笠井直美「李宗侗(玄伯)旧藏『忠義水滸傳』」(『東洋文化研究所紀要』第百三十一冊、一九九六年)、「北京大學圖書館藏『忠義水滸全傳』―『萬曆袁無涯原刊』情報の一人歩き―」(『名古屋大學中國語學文學論集』第二十一輯、二〇〇九年)。なお、ここで言う順序は、その文章がはじめて書かれた順のことである。カリフォルニア大學バークレー校東アジア圖書館には百二十回本に改變を加えて百回本に仕立て直

を参照せんと欲するならば分巻百回本のうちなるべく古いものを見ればよいことになる。

現存する分巻百回本としては現在、容與堂本、嘉靖殘本、石渠閣補刻本、四知館本が知られている。この四種は、數文字の脱落、入れ替わり程度の差異はあるものの、文章は一致し、同一系統の版本であることは確實である。このなかから本稿の目的にもっともかなうテキストを選定したい。

したものの(巻頭題『忠義水滸全書』)が、東京大學文學部には同じく百二十回本から最後の二十回を削ることで百回本に見せかけたものの(同)が藏されている。これを百二十回本から作られた百回本と呼ぶことはできる。しかし前者は百二十回本の版木を改造して不分巻百回本の文章を復元しただけであり、後者は文章自體には手を加えておらず、新たな文章が誕生したわけではない。文章としての版本(テキスト)とは、實體として存在する書物としての版本(エディション)とは、厳に區別しなければならぬ。新たなテキストの出現という意味では百二十回本から生まれた百回本は確認されていない。拙稿「两种『水滸傳』为何“再造”一百回本―加州大學柏克萊校藏本与东京大学文学部藏本」(『河北学刊』二〇一六年第一期)参照。

<sup>二十四</sup> 小松謙「『水滸傳』諸本考」(『京都府立大学學術報告人文』第六十八号、二〇一六年)

四種のうち、容與堂本、石渠閣補刻本、四知館本は一巻一回仕立て、全百巻百回の形式を有す。嘉靖殘本は第四十七回から第四十九回、第五十一回から第五十五回までの全八回分が残るのみであるが<sup>二十五</sup>、第五十一回回頭に「第十一巻」の文字が見える。つまり第五十回までが十巻に収められていたわけで、單純に計算すれば全二十巻百回の仕立てであつたと考えられる。分巻本は、二十巻本が先にあらわれ、のちに百巻本に仕立てなおされたと考えられているから、百巻本より成立時に近い姿をとどめている可能性がある<sup>二十六</sup>。

四知館本は巻頭題を『鍾伯敬先生批評忠義水滸傳』<sup>二十七</sup>とする。この本は、文章が容與堂本とほぼ同じであるのみ

<sup>二十五</sup> 『國立北平圖書館刊』第八卷第二号（一九三四年）がこの本の第五十回と思われる見開き寫真一葉を載せるが、筆者が二〇一一年に中國國家圖書館にてマイクロフィルムを閲覧した際にも、二〇一五年に同所にて原本を閲覧した際にもこの第五十回一葉は含まれていなかった。

<sup>二十六</sup> 嘉靖殘本については、佐藤晴彦『「水滸傳」“嘉靖”殘卷について』（『神戸外大論叢』四十二卷三号、一九九一年）、大内田三郎『「水滸傳」版本考—容與堂本について（二）』（『大阪市立大學文學部紀要 人文研究』第四十五巻第五分冊、一九九三年）、馬幼垣「嘉靖殘本『水滸傳』非郭武定刻本辨」（『明代小説面面觀 明代小説國際學術研討會論

ならず、評語も容與堂本のものに多少手を加えつつほぼそのまま利用したものであることから、容與堂本にもとづいてつくられたものであることがわかつている<sup>二十八</sup>。

石渠閣補刻本は發見以來毀譽褒貶の激しい版本である。發見直後、鄭振鐸らがこれを現存最古の百回本善本と認めた一方、清代に入ってから補刻葉が多數認められることから、補刻葉のみならずもとのテキストも清代に刊行されたものではないかという疑いを持つ研究者もあつた。たしかに補刻葉のなかにはかなり時期の遅れると認められるものもあるが、補刻に攜わった石渠閣は明天啓年間には南京で活動していたことが確認でき、明代の版本をうけついでものである可能性も否定できない。テキスト面や版面

文集』学林出版社、二〇〇二年）、馬幼垣「嘉靖殘本『水滸傳』非郭武定刻本辨」（『水滸二論』（生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇七年。前項と同一論文だが、二〇〇三年付「後記」が附されている）、佐藤晴彦「國家圖書館藏『水滸傳』殘卷について—“嘉靖”本か？」（『日本中國學會報』第五十七集、二〇〇五年）、拙稿「“嘉靖本”『水滸傳』と初期の『水滸傳』文繁本系統」（『日本中國學會報』第六十四集、二〇一二年）参照。

<sup>二十七</sup> 「古本小説集成二輯」に収める影印本（一九九一年刊）を使用した。

<sup>二十八</sup> 齋藤護一「百回水滸傳考」参照。

の特徴から見ても、古い百回本の姿をとどめている部分があるのではないかとの見方もある<sup>二十九</sup>。

容與堂本は百回本水滸傳の研究の際にもっともよく用いられる版本である。その理由は、全巻そろっていること、現存する繁本のなかでも早い時期である萬曆三十八年の刊行と考えられていること、影印本が参照しやすいことなどである。

<sup>二十九</sup> 石渠閣補刻本については、黄倣成『《水滸》版本衍变考论』

（『扬州大学学报（人文社会科学版）』第5巻第1期、二〇〇一年）、高島俊男「水滸傳石渠閣補刊本研究叙説」（『伊藤漱平教授退官記念中國學論集』汲古書院、一九八七年）、范寧『《水滸傳》版本源流考』、拙稿「石渠閣出版活動和《水滸傳》之補刻」（『漢學研究』三十五巻三期、二〇一七年）参照。石渠閣について筆者はかつて「水滸傳と石渠閣」（中國古典小説研究會二〇一四年度大会、二〇一四年九月三日）、「石渠閣補刻本水滸傳與明清出版業」（國家圖書館漢學研究中心主辦「寰宇漢學講座」、二〇一五年三月十二日）という口頭報告を行っており、この成果も利用している。上原究一「『李卓吾先生批評西遊記』の版本について」（『日本中國學會報』第六十三集、二〇一一年）のまとめによれば、通俗小説の刊行には時期による流行があり、

容與堂本は現在七部のこっているようだ。筆者が目撃し得たものには中國國家圖書館藏本二部（以下「北圖A本」、「北圖B本」と稱す<sup>三十</sup>。A本は原本、B本はマイクロフィルムにて閲覧）、天理圖書館藏本のマイクロフィルム（「天理容本」）、國立公文書館内閣文庫藏本（「内閣容本」）、上海圖書館藏本（「上海容本」）があり、このほか中國社會科學院文學研究所、北京大學にも各一部を藏する由

萬曆三十年代、四十年代には江南地域で版式に共通の特徴を有する李卓吾評『三國志演義』、『水滸傳』、『西遊記』が次々と出版されていて、李卓吾批評を謳う容與堂本もこの時期の刊行と推定される。そして「西遊記」、「三國志演義」は萬曆二十年前後にこれら李卓吾評本に先立つ版本が南京で刊行されている。この論を踏まえて考えると、今後の研究次第では石渠閣補刻本と萬曆二十年前後の南京刊通俗小説との關聯を見出すことができるかもしれない。

<sup>三十</sup> 「A本」、「B本」の別は高島俊男『水滸傳の世界』十三「いちばんいいテキスト」による。高島は「北京A本」、「北京B本」と稱するが、おなじく北京にある社科院容本、北大容本と區別するため本稿では「北圖A本」、「北圖B本」とした。高島が二十回を缺くほうをAとしたのは、おそらく北京圖書館に歸した順序を優先したゆえであろう。



である（それぞれ「社科院容本」、「北大容本」と稱する）。内閣容本の序文に萬曆三十八年の署名があることからこの時期に刊行されたとも考えられているが、他の容與堂本にはこの序がないため、これを疑う研究者もある。ただ、容與堂の活動時期や版本の版式、出版業界の状況などから、萬曆三十年代の刊行とみてさしつかえないようである<sup>三十一</sup>。

北圖A本は第十一回から第三十回を缺いている。B本は全百回を備える完本である。兩者の最大の相違は、各巻頭、巻末に記される「李卓吾先生批評忠義水滸傳」および版心上部に記される「李卓吾批評水滸傳」が、A本の一部でそれぞれ「諸名家先生批評忠義水滸傳」および「諸名家水滸傳」になっている點、版心下部の「容與堂藏板」五文字が、B本ではほぼすべての葉に見えるのに對し、A本では一部の葉にしか見られない點である。また、第百回、梁山泊の一員であつた關勝の最期を描く場面が、B本では「關勝在北京大／名府總管兵馬甚得軍心衆皆欽伏一日操練

軍馬回來／因大醉失脚落馬得病身亡」（／は改行を示す）であるのに對し、A本では「關勝在北京大／名府總管兵馬甚得軍心衆皆欽伏後來劉豫欲降兀術／關勝執義不從竟為所害」となっている。

天理容本は全百回を備えるが缺葉や補抄がまみえられる<sup>三十二</sup>。天理容本と北圖A本とは、「容與堂藏板」がほとんど見られないこと、「諸名家先生」、第百回の改刻などの特徴が一致する。北圖A本と天理容本はひとつの系統としてまとめてよからう。

内閣容本はほぼすべての葉に「容與堂藏板」を有し、巻頭および巻末の題も「李卓吾先生批評」である。また、北圖B本が小字雙行方式で文字の修改を行っている部分も同様になっている。そして内閣容本にはさらに多くの小字雙行の修正が存在することなどから北圖B本の版木に修正を加えたものと考えられる<sup>三十三</sup>。

上海容本は第五十一回途中から第五十五回途中までの残本である。この本は巻頭、巻末、回末總評、版心題に見え

<sup>三十一</sup> 上原究一『李卓吾先生批評西遊記』の版本について」  
<sup>三十二</sup> 大内田三郎『水滸傳』版本考―『容與堂本』について  
て』（『ビブリア』No. 79、一九八二年）、高島俊男『水滸傳の世界』十三「一番いいテキスト」

<sup>三十三</sup> 大内田三郎『水滸傳』版本考―『容與堂本』について」  
て」、氏岡真士「容與堂本『水滸傳』3種について」（『中国古典小説研究』第十九号、二〇一六年）、小松謙『水滸傳』諸本考」

る「李卓吾」および李卓吾を指す異稱をすべて削りつつ、いる點に特徴があるが、それ以外はすべて内閣容本に一致するため、内閣容本に手を加えて作成されたものと考えてよい。

つまり容與堂本にはB本系統とA本系統とがあるのだが、B本系統でもっとも古い形を残すと考えられる北圖B本と、A本系統で最も古い文章を有すると見られる天理容本との関係がかねてから疑問とされてきた。

たとえば、上にあげた北圖B本と天理容本との相違の三點は、いずれもB本がA本に先立つことを示すと考えられる。「容與堂藏板」はもとあったものが消されたと考えればよい。A本において版心題が「諸名家」になっている箇所は、ほぼ巻の最終葉であり、もし「諸名家」を「李卓吾」に改めたのだとすれば、なせもともと目立つ巻頭巻末に「諸名家」を残し、文字が小さく修正の手間もかかるうえ、あまり読者の注意も引かない版心題を「李卓吾」に改めたのかという疑問が残る。A本第百回の「關勝執義不從」は文字の間隔が不自然に廣くとられ、七格分の空間に六文字しか配されておらず、結果この行のみ二十一字になっている。あとから改刻した結果だと見るのが自然だろう。しかし大内田三郎の諸論考に述べられる通り、文字の修正がなされ

ている箇所を比べると、天理容本のほうが古い形に近いのではないかと思わせる部分も少なくない。このため、大内田は天理容本のほうが古い姿に近いと考え、高島俊男は北圖B本が原刻に近いと述べるというように研究者の見解は一致しなかった。

また、北圖B本の後修本であるはずの内閣容本は、第百回にA本系統と同じ「關勝在北京大／名府總管兵馬甚得軍心衆皆欽伏後來劉豫欲降兀術／關勝執義不從竟為所害」という文言を有し、「關勝執義不從」六文字の配置もそっくりである。これをA本とまったく無関係と見なすことはできない。されば北圖B本から内閣容本への修改の過程に枝分かれがあり、その枝の先に天理容本があると考えればよい。いかというと、それでは天理容本が北圖B本より原刻本に近いと見られる箇所を有していることの説明がつかない。

このような状況下、近年容與堂本について新たな論考が相次いで発表された。氏岡真士「容與堂本『水滸傳』3種について」および小松謙「『水滸傳』諸本考」である。氏岡は、本文の修改のみならず版面や字体、字形まで廣く比較をしたうえで、北圖B本は容與堂原刻本の後修本、天理容本は原刻本の覆刻本であり、北圖B本と直接の繼承關係を持たないと結論づけた。小松はこの基礎に立ち、天理容

本は原刻者の許可を得て作製された覆刻版であり、B本系統の修改作業と連動して修正を経た結果の版本であろうと推定した。つまり、もともと容與堂本を覆刻した板木があり、これがA本系統の祖となり、そのA本系統が重印される際、その同時点で存在したB本系統の後修本を参照して修正を加えたのが天理容本なのだというのである。この際、B本にほどこされた修正をすべて引き寫すことなく未改變のままのこした部分があったと考えれば、天理容本に北圖B本より古い箇所があることも了解できる。二氏の論考により三種の容與堂本間の關係はかなり理解できるようになった。筆者は、天理容本が参照したのは北圖B本と内閣容本との中間の状態のテキストであろうと考えている。

北大容本および社科院容本については聶紺弩「論《水浒传》的版本斗争」に紹介がある。聶紺弩は容與堂本を北京大學圖書館と北京圖書館の藏する「有序本」と、社会科学院文学研究所の「無序本」とに分けている。「北京图书馆『不全』」<sup>三十四</sup>、「北京图书馆一部已残」<sup>三十五</sup>との記述から、この北京圖書館藏本とは北圖A本のことであると察せ

られる。聶紺弩は、第三十回に見える蘇軾「水調歌」詞の一節が「有序本」では「轉珠簾低綺戸」、「無序本」では「高捲珠簾低綺戸」となっている點を挙げ、「無序本」に修正を加えたものが「有序本」であると言う。北圖A本は第三十回を缺くから、この「有序本」はすなわち北大容本のはずである。北圖B本と天理容本は「無序本」すなわち社科院容本と同じく「高捲珠簾低綺戸」である。これに對し内閣容本では「轉朱閣低綺戸」と一文字少なく、七格分に六文字を入れた不自然な字配りになっている。北圖B本と天理容本の「高捲珠簾低綺戸」には字配りに不自然さはなく、容與堂本本来の一行二十二字の行款も守られているから、こちらが原刻本の文字なのだろう。北大容本も六文字であるから、内閣容本と同様不自然な字配りになっている可能性が高い。

なお實際の蘇軾「水調歌頭」の文句は内閣容本と同じ「轉朱閣低綺戸」である<sup>三十六</sup>。つまり北大容本は北圖B本、天理容本と内閣容本との中間の狀況を呈しているらしい。本来の詞牌通りであれば六文字でなければならぬとこ

<sup>三十四</sup> 聶紺弩「論《水浒传》的版本斗争」、百五十一頁  
<sup>三十五</sup> 聶紺弩「論《水浒传》的版本斗争」、百五十三頁

<sup>三十六</sup> 鄒同慶・王宗堂『蘇軾詞編年校注』、中華書局、二〇〇二年

ろであるから、それに合わせたのだろうか。

先に筆者は、天理容本が参照したのは北圖B本と内閣容本の間状態のテキストだろうと述べた。それは、参照したのが内閣容本以降のB本系統であったとすれば、いったん消された「高捲珠簾低綺戸」を再び元に戻したことになるってしまうからである。「高捲珠簾低綺戸」は蘇軾の原作と異なる文字であり、戻さなければならぬ理由は見当たらない。ゆえに内閣容本より前に「高捲珠簾低綺戸」のままの本があり、これを参照して天理容本が作られたと考えられる。聶紺弩の紹介する北大容本に關する情報は非常に少なく、多くを想像に頼るしかないのだが、「水調歌頭」を手がかりとする限りでは、原刻本以来の「高捲珠簾低綺戸」を版式に逆らってまで六文字に改めている點で北大容本と内閣容本とはなんらかの關係があると考えるべきである。可能性としては、①B本系統の補修本であり、「水調歌頭」の字數を詞牌に合わせて削ったが、文言を誤ってしまい、これを修改したのが内閣容本、②B本系統で、内閣

容本が正しく直した「水調歌頭」を彫り間違えた、③A本系統の後修本であり、天理容本を修正する際に「水調歌頭」の文字を誤ってしまった、などが考えられる。北圖B本、天理容本、北大容本とは「珠簾低綺戸」の五字が一致するから、「高捲珠簾低綺戸」を削って「轉珠簾低綺戸」にし、さらに「轉朱閣低綺戸」へ修正したという①の順序がもつともありそうである。

そうなると北大容本はB本系統ということになるが、これでは聶紺弩が北大容本と北圖A本とを同一種とみなす立場と一見矛盾する。しかし、聶紺弩が北大容本と北圖A本とを同一種と見なす理由に「有序」以外の要素はないのだから、北大容本が「序」以外の北圖A本の要素、すなわち「諸名家先生批評」、「容與堂藏板」、第百回の相違までをも含んでいることまでが保證されたわけではない。原本を目睹し得ない以上、結局北大容本がB本系統なのかA本系統なのかを斷定する決め手はないので、これ以上の詮索はやめておきたい<sup>三十七</sup>。いずれにせよ、北圖B本や天理容本

三十七  
二〇一五年に北京大學に留學されていた京都大學大學院人間環境學研究科博士課程（當時）の中原理恵さんに北京大学圖書館藏本および社会科学學院圖書館藏本について問い合わせた。北京大學圖書館は、目錄に容與堂本が掲載

されていない以上そのような本は收藏していないはずであり、聶紺弩の記述は誤りであろうと回答したとのことである。しかし聶紺弩が「有序本」として北京大学圖書館藏本と北京圖書館藏本とともに挙げ、一箇所とはいえ北京圖書館藏

より修改が進んだ状態の本であるにはちがいない。

社科院容本については、聶紺弩によれば序のほか、他の容與堂本では冒頭に附されている「文字優劣」、「人物優劣」を有さず、また、「有序本」との間に「插图和别的微小的差別」<sup>三十八</sup>があるという。挿繪が異なるのであれば、社科院容本と北圖A本とは異版である可能性がある。本文の差異については、第三十回の「水調歌」が「高捲珠簾低綺戸」となっている以外、具體的な言及はない。この情報

本では確認できない特徴を記していることから、北京大學圖書館藏本は烏有本ではないと思われる（自身で實見したのではなく傳聞によつて書いた可能性はあるが）。もしいまだかつて北京大學圖書館に容與堂本が收藏されたことがないのであれば、他處に藏される本を聶紺弩が北京大學圖書館藏と書き違えたことになる。しかし「水調歌頭」を「轉珠簾低綺戸」とする容與堂本は現在のところ見つからない。さらに、『中國古代体育文物図録』（中華書局、二〇〇〇年）「角力」項に「武松醉打蔣門神」の挿繪が掲載されており、その引用元として『《李卓吾先生批評忠義水滸傳》插图・武松醉打蔣門神 框纵22.5厘米，横13.3厘米 北京大学图书馆藏书」と記されている。南京圖書館製作のウェブサイト「中國传统体育图片数据库」（最終閲覧日は平成二十八年二月三日）の「角力」項は、『中國古代体育文物図録』の圖像を轉載したうえで、「北京大學圖書館藏書。框纵22.5厘米，横13.3厘米，《李卓吾先生批評忠義水滸傳》一百回，明吳鳳台、黃應光刻圖，萬曆間（公元1573 - 1620年）武林容與堂刊

のみで推測するならば、社科院容本はB本系統の本であろう。あるいは北圖B本とまったく同段階の版本である可能性もあるが、その場合は「優劣」をも有する北圖B本のほうがより完本に近いことになる。

結局、現在本文を確認できる容與堂本のなかで最も原刻本に近いのは北圖B本、つづいて天理容本ということになる。<sup>三十九</sup>

水滸傳という書物についての記載は嘉靖年間から確認で

本」と記している。本の大きさ、刻工の名などは聶論文には記されないから、聶論文以外にも「北京大學圖書館藏容與堂本」に關する情報があつたのである。轉載された挿繪が眞實北京大學圖書館藏本であるか否かは別としても、北京大學圖書館に容與堂本があると考えられていたことは確かである。やはり北京大學圖書館はかつて實際に容與堂本を藏していたのではあるまいか。この本がいまだ北京大學圖書館のいずこかにあるのか、あるいは流出して他者に歸したのかはわからないが、本稿の言及した他のどの容與堂本でもないと考えられる。また、社会科学學院は容與堂本を所藏してはいるもの、閲覧許可は得られなかったとのことである。中原さんのご盡力に感謝する。

<sup>三十八</sup> 聶紺弩「《水滸》的版本斗争」、百四十四頁

<sup>三十九</sup> 四知館本について、范寧「《水滸傳》版本源流考」は内閣容本が底本であるとし、大内田三郎『水滸伝』版本考―

きるため、容與堂本より古い版本を特定せんとする研究も多数ある。なかでも名高いものが郭武定本と天都外臣序本である。郭武定本は嘉靖年間に武官・郭勛が彫らせた版で、『晁氏寶文堂書目』<sup>四十</sup>子雜類には「忠義水滸傳」と

「水滸傳武定版」の二種が記されている。著者晁璠は嘉靖二十年の進士<sup>四十一</sup>であるから、この版本は容與堂本より五十年から八十年ほど古いことになる。これまで、現存する

『鍾伯敬先生批評水滸傳』について――（『人文研究』第四十六卷九号、一九九四年）は北圖B本にもとづいたものだとする。四知館本の第三十回「水調歌頭」の一節は「高捲珠簾低綺戸」で、北圖B本、天理容本におなじ。第百回の關勝の最期の場面は北圖A本、天理容本、内閣容本に見える十八字に及ぶ改刻後の文字と一致する。このことから四知館本は、A本系統あるいは内閣容本以前のB本系統を参照したものと思われる。小松謙「『水滸傳』諸本考」は四知館本にも修改の痕跡が見られ、その修改方法が天理容本と一致することから、四知館本はA本系統と協同作業の關係にあり、A本系統の本が修改されるたびに連動して修改されたものではないかと述べている。以上のことから、四知館本は容與堂原刻本の状態をうかがうための最適な版本ではない。

版本のいずれかを郭武定本ないしその忠實な後繼本と認めようとする試みが多くなされてきたが<sup>四十二</sup>、決定的な證據はいまだ出ていない。筆者は、郭武定本についての諸記録<sup>四十三</sup>を見比べて、郭武定本は不分卷百回系統のテキストなのではないかと考えている。つまり成立時の水滸傳に極力近いテキストという定義にそもそも合わないことにもなる<sup>四十四</sup>。

<sup>四十</sup>『四庫全書存目叢書』（莊嚴文化事業、一九九六年）史部目錄類第二百七十七冊

<sup>四十一</sup>『四庫全書總目提要』（河北人民出版社、二〇〇〇年）による

<sup>四十二</sup>たとえば、排印本『水滸全傳』（人民文學出版社、一九五四年）鄭振鐸「序」は『忠義水滸傳』二十卷（一百回、殘存第十一卷一卷、即第五十一回到第五十五回）、明嘉靖間武定侯郭勛刻本」と記す。

<sup>四十三</sup>錢希言『戲瑕』卷一「水滸傳」（『戲瑕』三卷、万曆四十四年自序、國立故宮博物院藏明萬曆四十一年新野馬之駿刊本）、周亮工『因樹屋書影』卷一（『續修四庫全書』子部雜家類、上海古籍出版社、一九八七年）、『忠義水滸全書』（東京大學文學部藏本）「發凡」、張鳳翼「水滸傳序」（『續修四庫全書』集部別集類『處實堂集』續集卷六）

<sup>四十四</sup>范宁「《水滸傳》版本源流考」がこの立場である。また、諸記録の記す郭武定本にもっとも近い特徴を有する本に無窮會藏本がある。この本は不分卷百回本である。佐藤鍊太郎「無窮會圖書館所藏、織田覺齋舊藏李卓吾評『忠義水滸

天都外臣序本は、沈徳符『萬曆野獲編』<sup>四十五</sup>卷五「武定侯進公」において郭武定の善本を繼承した本として紹介されている。石渠閣補刻本こそがこの天都外臣序本であるとする説もあるが<sup>四十六</sup>、確たる證據があるわけではない

<sup>四十七</sup>。石渠閣補刻本は分卷百回本であるから、郭武定本は不分卷百回本であるとする筆者の立場からするとなおさら首肯できない。

郭武定本は、水滸傳受容史において廣く讀者を有しかつ毀譽褒貶さまざまな評価を残した點で、水滸傳演變史においてもその後の版本に影響を与えた重要な版本であることは疑いを容れぬ。また、郭武定本にせよ、天都外臣序本に

傳』一百回」(『汲古』第八号、一九八五年)によれば、無窮会藏本は清代の刊行であることを示す特徴が多々あり、郭武定本そのものではあり得ないが、郭武定本の嫡流である可能性は高い。一方、小松謙「水滸傳諸本考」は、明清の諸記録は郭武定本が刊行された時期から離れた時期のものばかりで現物を見て記録したものではない可能性が高く、その特徴に關する記述は臆測や他書との混同の恐れがあることから、全面的に信用することはできないと言う。これらの證言を疑つてかかることで、郭武定本を嘉靖殘本、容興堂本と同系統の版本として再検討する餘地が生まれ、嘉靖殘本や容興堂本の祖先にあたる本である可能性すら浮上する可能性を示唆している。

せよ、現存する容興堂本よりはよい刊行であるから、これが出てくれば優先して底本として検討しなければならぬものではあるが、郭武定本、天都外臣序本ないしその後繼本であると思ふに足る版本が特定できていない以上、本稿ではこれ以降はこれらの名に言及することなく論を進めていくほかない。

以上のように、現存する各本のうち百回本成立時點のテキストに近い可能性があるものは、容興堂本北圖B本、天理容本、嘉靖殘本、石渠閣補刻本である。嘉靖殘本は、もつとも古い姿をとどめている可能性もあるものの、八回分しか残っていないため、水滸傳全體を検討するためのテキ

<sup>四十五</sup>『野獲編三十卷補遺四卷』(『四庫禁燬書叢刊』史部4、四庫禁燬書叢刊編纂委員會、北京出版社、一九八七年)  
<sup>四十六</sup>排印本『水滸全傳』鄭振鐸「序」に「『忠義水滸傳』一百卷(一百回)、明萬曆十七年己丑(一五八九年)天都外臣(汪道昆)序刻本」と記すのがこの本である。この『水滸全傳』を「天都外臣(序)本」として引用する研究者は鄭序にしたがってこの本を郭武定本の後繼本と見なしていると考えてよい。  
<sup>四十七</sup>高島俊男「水滸傳石渠閣補刻本研究敘説」は、石渠閣補刻本を天都外臣序本とみなすべきではないという立場をとっている。

ストにはできない。石渠閣補刻本は補刻、印刷が清代であることは間違いなく、補刻の正確性がまだ保證されていないため、選定しにくい。ただし、第三十回の「水調歌頭」が「高捲珠簾低綺戸」、第一百回の關勝の最期の部分が

「關勝在北京大／名府總管兵馬甚得軍心衆皆欽伏一日操練軍馬回來／因大醉失脚踏馬得病身亡」となっていて、容與堂本のなかでも北圖B本に近い。今後、石渠閣補刻本が水滸傳の初期のテキストの姿に近づくために重要な版本となる可能性があることは一言申し添えておきたい。

北圖B本と天理容本とは、雙方ともに容與堂原刻本に近と思われる箇所があり、どちらが真に原刻本に近いのかはわからない。本稿では水滸傳の成立は現存するものと一字一句おなじ文章の出現を指すのではなく、現存するものとおなじ登場人物、エピソード、物語構成の出現を意味するものであるから、この点でまったく差のない北圖B本と天理容本はともに本稿のテキストとするに足る。しかし一本のテキストとしてみたとき、補鈔、補刻葉のある天理容本よりそれがない北圖B本のほうが完整な姿をしていると認められることから、本稿では北圖B本を主テキストとす

る。次節以降では特に断りのない限り「容與堂本」といえば北圖B本を指す。

### 三・史實から説唱まで

#### 1. 史實から南宋の傳説まで

つづいて、水滸傳成立以前に存在した材料についておおまかに追っていく。

宋江率いる集團の名が現れるもっともはやい文献は南宋・王稱による『東都事略』<sup>四十八</sup>であろう。

三年……二月……癸巳、大赦天下。方臘陷楚州。淮南盜宋江犯淮陽軍、又犯京東、河北、入楚海州。夏四月……庚寅、童貫以其將辛興宗與方臘戰于青溪擒之。五月丙申宋江就擒。(卷十一)

(宣和)三年……二月……癸巳、天下に大赦を下す。方臘が楚州を陷す。淮南の盜・宋江淮陽軍を犯し、また京東、河北を犯し、楚、海州に入る。夏四月……庚寅、童貫の部將辛興宗が青溪にて方臘と戦い、捕らえた。五月丙申宋江が擒に就いた。



於時宋江寇京東、蒙上書陳制賊計。曰「宋江以三十六人橫行河朔京東、官軍數萬無敢抗者。其材必過人、不若赦過招降、使討方臘以自贖、或足以平東南之亂。」徽宗曰「蒙居間不忘君、忠臣也。」（卷一百三「侯蒙」）

宋江が京東を犯すと、侯蒙は書をたてまつって賊を制す計略を述べた。曰く「宋江は三十六人をひきつれて河朔、京東に横行し、官軍數萬、これにあらがおうとするものはありません。宋江の能力は人並みすぐれたものに違いありません。罪を許して招き、方臘を討伐してみずから罪を償わせれば平東南の亂を平らげるのにちょうどよいかもしれません。」徽宗曰く「蒙は隱居してはいても主君を忘れぬ忠臣である」と。

出知海州、會劇賊宋江剽掠至海、趨海岸劫巨艦十數。叔夜募死士千人、距十數里大張旗幟誘之、使戰密伏壯士匿海旁、約候兵合即焚其舟、舟既焚、賊大恐、無復鬪志、

四十九 百衲本二十四史『宋史』（臺灣商務院書館、一九八八年）

五十 史實の張叔夜および傳承や通俗文藝における宋江ないし梁山泊集團と張叔夜とのかかわりについては馬場昭佳『水滸

伏兵乗之、江乃降。（卷一百四）

轉出して知海州になるや、劇賊宋江が海州まで掠奪にやってくるのに出くわした。海岸まで押し寄せて巨艦十數隻を襲った。張叔夜は決死隊千人を募り、十數里離れたところで大きな旗を掲げて宋江をおびき寄せる一方、海邊に壯士を潛伏させておき、作戰通り誘導隊が宋江と戦いはじめるや宋江の船を焼いた。船が燃えているのを見て賊は動搖し、戰意を失った。伏兵がこれに乗じて現れると、宋江はついに投降した。

『宋史』<sup>四十九</sup>にもほぼおなじ記述がある。

史書であるがゆえ、集團の出没地や時期、官側の對應が記されるに過ぎないが、頭領の名が宋江であること、三十人という人数は確かに水滸傳に影響を與えているだろう。水滸傳で、朝廷内における宋江の數少ない理解者であり、招安に盡力する人物の名が張叔夜であるのも、この記録と關係があるのだろう<sup>五十</sup>。もっともここに見える宋江集

傳』の成立と受容——宋代忠義英雄譚を軸に」（東京大学大学院人文社会系研究科二〇一三年度博士学位論文）第一部第三章「張叔夜から見る『水滸傳』宋江の忠義化」に詳しい。これによれば、張叔夜は水滸傳でこそ端役にすぎぬけれども、

團は張錦池の考察<sup>五十一</sup>のとおり據點を持たぬ、少數の、機動性の高い流賊であり、山東とも梁山泊とも深い関係は見出せない<sup>(補注二)</sup>。三十六人という人数も宋江を含むのか含まぬのかわかりにくい。

史書の記載以外では、はやくも北宋末の李若水(一〇九三—一二七)の「捕盜偶成」詩<sup>五十二</sup>に

去年宋江起山東 白晝橫戈犯城郭  
殺人紛紛翦草如 九重聞之慘不樂  
大書黃紙飛敕來 三十六人同拜爵  
擲卒肥驂意氣驕 士女駢觀猶駭愕

なる一節があり、山東で暴れていた宋江率いる三十六人の賊が赦されて歸順したと考えられていたことがわかる。も

水滸傳以外の宋江集團の物語においては重要な役割を担うことが多く、物語の語り手や受容者からは宋江の物語に深く關わる重要人物だとみなされていたとのことである。

<sup>五十一</sup> 張錦池『《水滸傳》考論』(人民出版社、二〇一四年)第一章「一支流動的盜俠武裝」

<sup>補注一</sup> 本論文の口頭試問の際、小松謙先生より、この上書ののち候蒙は知東平府に任じられていることから、少なくともこの時點では宋江集團の主要活動地域は山東であると考えら

つとも、李若水是科擧に及第した官僚ではあるが、靖康元年に太常博士に任じられるまでは各地の官を轉々としていたから<sup>五十三</sup>、どこまで正確な情報かはわからない。

上の各資料には投降してのちの宋江の事績は記されていないが、『皇宋十朝綱要』<sup>五十四</sup>卷十八には次のごとき記載がある。

宣和三年……二月……庚辰、宋江犯淮陽軍、又犯京東河北路、入楚州界。知州張叔夜招撫之、江出降。……六月……辛丑、辛幸宗與宋江破賊上苑洞。

宣和三年……二月……庚辰、宋江淮陽軍を犯し、また京東、河北路を犯し、楚州界に入る。知州の張叔夜が招撫すると宋江は降った。……六月……辛丑、辛幸宗と宋江は上苑洞の賊を破った。

れていたことがわかり、「山東と深い関係は見出せない」は言いすぎであろうとのご指摘をいただいた。

<sup>五十二</sup> 李若水『忠愍集』(四庫全書珍本四集、臺灣商務印書館、一九七三年)卷二

<sup>五十三</sup> 『東都事略』第百十一「忠義傳九十四」

<sup>五十四</sup> 『皇宋十朝綱要』(『續修四庫全書』三四七)、上海古籍出版社、一九九七年)

投降した宋江が即方臘討伐戦に投入されたようにも見える。このほか、徐夢莘『三朝北盟会編』<sup>五十五</sup>、楊仲良『續通鑑長編記事本末』<sup>五十六</sup>卷百四十一「討方賊」が方臘討伐戦に宋江の名を記録している。ただしそこに、この宋江は元流賊の宋江であると書かれているわけではないし、宮崎市定「宋江は二人いたか」<sup>五十七</sup>、高島俊男「宋江実録」<sup>五十八</sup>の考察に明らかなように、流賊宋江が投降後即方臘討伐に従軍して功を擧げるには時間的にも地理的にも無理があり、現実には流賊宋江と官軍宋江は同一人物ではない。しかし、史書の記載をきっかけとして流賊宋江が降伏後ただちに方臘討伐に向い手柄をたてたと考える読者が少なからずあり、噂話、物語の領域ではその「事実」にもとづいて物語が形成されていたのだろう。

<sup>五十五</sup> 南宋・徐夢莘『三朝北盟会編』（上海古籍出版社、一九八七年）卷五十二、卷二百一十二  
<sup>五十六</sup> 『續通鑑長編記事本末』（北京圖書館出版社、二〇〇三年）  
<sup>五十七</sup> 宮崎市定「宋江は二人いたか」（『宮崎市定全集 12 水滸

## 2. 南宋の傳説と藝能

宋江集團の名は南宋領域でもひろく知られていたようである。周密『癸辛雜識』<sup>五十九</sup>に引用される龔聖與「宋江三十六贊」は、宋江集團の成員ひとりひとりの繪に四字四句計十六字からなる贊を附したものである。残念ながら『癸辛雜識』にその繪はなく、序と贊が引かれるのみである。序には「宋江事街談巷語」とあり、また『東都事略』の「宋江以三十六人橫行河朔京東、官軍數萬無敢抗者。其材必有過人、不若赦過招降使討方臘、以此自贖。或可平東南之亂」という部分が引用されている。「宋江三十六」はここでは「宋江とその手下三十六人」を指す。龔聖與の聞いた宋江三十六人はどのような集團だったのか。水滸傳で宋江集團の根城といえば梁山泊であるが、「宋江三十六贊」には山西太行山と結びつけられた人物が五名もいるのに對して梁山泊の三字はまったく見えない。もちろんこれをも

伝』岩波書店、一九九二年）  
<sup>五十八</sup> 高島俊男「宋江実録」（『東京大学東洋文化研究所紀要』百二十二、一九九三年）  
<sup>五十九</sup> 周密『癸辛雜識』（『百部叢書集成・學津討原』、藝文印書館、一九六五年）

って當時宋江集團の根據地が太行山だと考えられていたとは言えないが、ともかく龔聖與の聞いた宋江集團は梁山泊とは縁もゆかりもなかったようである。

南宋・羅燁『醉翁談錄』<sup>六十</sup>甲集卷一「小説開闢」に南宋の皇都・杭州で演じられた物語の題目が記されている。ここに見える「青面獸」、「花和尚」、「武行者」はそれぞれ水滸傳の青面獸楊志、花和尚魯智深、行者武松と關係があるのではないと言われる。「宋江三十六贊」にも青面獸楊志、花和尚魯智深、行者武松の名が見え、おなじ人物を指すのかもしれない。ただし聶紺弩が、水滸傳の成立過程には「水滸傳承外の人物を水滸の人物に語りなおす」作業と、「水滸傳承外の人物のエピソードを水滸の人物のエピソードとして語る」作業とがあったと指摘するとおり

<sup>六十一</sup>、『醉翁談錄』の物語が宋江の部下としての物語であったか否かはわからない。余嘉錫の考證によれば、北宋

<sup>六十</sup>羅燁『醉翁談錄』、古典文學出版社、一九五七年

<sup>六十一</sup>「把非《水滸》人物說成《水滸》人物」、「把非《水滸》人物的故事說成《水滸》人物的故事」（聶紺弩「《水滸》是怎样写成的」『《水滸》四议』北京大学出版社、二〇一〇年。四十一頁）

<sup>六十二</sup>余嘉錫『宋江三十六人考實』（作家出版社、一九五五年）「青面獸楊志」

末、もと賊軍で朝廷の招安を受けて方臘征伐に従軍した楊志なる人物が實在した<sup>六十二</sup>。小松謙は「青面獸」はこの楊志が語りものになったもので、『醉翁談錄』がこれを「桿棒」という、武人が馬上で武器をふりかざして戦うような話柄に分類していることから、水滸傳第十二回の演武場での武術比べのもととなる話であつただろうと推測している

<sup>六十三</sup>。

杭州の瓦舎はもとと軍隊の娛樂施設として設けられた。設置したのは西北出身の將軍楊和王で、その軍隊には西北出身で、轉戦の果て南宋までたどりついた兵士が多数いたため、彼らの好む西北の武人の話がよくかけられたのではないかという<sup>六十四</sup>。楊和王の軍のみならず、南宋軍の主力は北方出身の將軍と兵士であり、西北出身の將軍である韓世忠や張俊のものがたりも瓦舎で語られていた<sup>六十五</sup>。そこには聴衆のみならず、北方から移ってきた藝人も多く

<sup>六十三</sup>小松謙「梁山泊物語の成立について——『水滸傳』成立前史——」『中國文學報』第七十九冊、二〇一〇年

<sup>六十四</sup>金文京『戲』考——中国における芸能と軍隊——（『未名』第八号、一九八九年）、小松謙「梁山泊物語の成立について——『水滸傳』成立前史——」

<sup>六十五</sup>松浦智子「楊家將『五郎為僧』故事に関する一考察」（『日本アジア研究』（埼玉大学大学院文化科学研究科博士後

あり、北方の語り物が臨安に大量にもたらされていたらしい<sup>六十六</sup>。地理的には南方であるが、杭州瓦舎の藝能には北方の傳承の後繼者といえる面があつたようである。實在の楊志は一時太行山を據點としていたとも伝えられる。楊和王が楊家將の末裔を名乗っていたため、同じ楊姓の楊志が抗遼英雄として持ち上げられたとの説もある。水滸傳でも楊志はみずから楊業の子孫と言っている。おなじく山西にある五臺山は北宋末から南宋初期にかけて抗金勢力の最前線で、その戦いには五臺山の僧も加わっていたという。

『夢梁錄』に見える「花和尚」は、西北で異民族と戦う僧の活躍を語るものだったのではないかという説がある

<sup>六十七</sup>。水滸傳の青面獸楊志と花和尚魯智深も「關西」つまり山西出身者であり、彼らが用いる一人稱「洒家」は、南方の人が物語内の「北方出身者」に用いたラベルであるというから<sup>六十八</sup>、杭州の説話と同じく南方にいる人から見た北方人という視点で描かれていることになる。「武行者」についてはいくわからないが、もし水滸傳の武松の材料の

ひとつであるならば、水滸傳の武松が山東清河縣出身であることから、やはり北方人の英雄物語だったのではないか。「宋江三十六贊」に太行山がよく見えるのも杭州の藝能と同じ理由なのだろう。南宋時期、宋江集團のメンバーおよびのちに宋江集團のメンバーとされる英雄たちは北方にゆかりのある人物が多かったようである。しかしそこに梁山泊の影は見えず、山西の太行山や五臺山といった抗遼、抗金の據點の影響が感じられる。

### 3. 宋江集團の説話

『夢梁錄』に見える説話は個人の活躍をあつかったものに相違なく、「宋江三十六贊」も集團としての行動は『東都事略』を引くのみで、中心は宋江集團に参じた個性的な強人を紹介することにある。

宋江集團が官軍に抵抗し、のちに招安をうけて外敵と戦うストーリーはいかにして生まれたのか。陳松柏は、山と湖に守られた天然の要害を根據地とし、官軍と戦ってこれ

期課程紀要)』八号、二〇一一年)

<sup>六十六</sup> 李永祜「『水滸傳』語言的地域色彩与南北文化融合」

(『明清小説研究』二〇〇八年第二期)

<sup>六十七</sup> 松浦智子「楊家將『五郎為僧』故事に関する一考察」

<sup>六十八</sup> 小松謙「梁山泊物語の成立について——『水滸傳』成立前史——」

をさんざんに打ち破り、のちに歸順して官軍となり異民族と戦うというストーリーが岳飛のそれに類似していることから、南宋期、岳飛の物語がタブー視されていた時期に岳飛が宋江におきかえられてきたのではないかという

六十九。

中鉢雅量は、水滸傳の対遼戦争と楊家將ものがたりとが、(一) 君側の姦との対立と遼との戦い、(二) 綠林英雄や地方の勢力家を味方に引き入れる、(三) 北宋期を舞台とする物語である、(四) 北方、特に山西、山東、河北、河南を舞台とする、などの共通点を有しており、兩者は南宋の藝能の時期以來「共通の場で成長した兄弟分」であるゆえ、「その成長の過程で相互に影響し合」ったと説明している<sup>七十</sup>。馬場昭佳は、個別の物語が直接影響したのではなく、宋朝に仕える忠義の士が夷狄との戦いで手柄をあげながら奸臣に疎まれて非業の死を遂げるという物語類型「宋代忠義英雄譚」があり、この型が宋江集團に適用さ

六十九 陈松柏『水浒传源流考论』(人民文学出版社、二〇〇六年)第三章「宋江三十六人故事的历史性变革」第一节「话本

《宋江》的形成与发展」

七十 中鉢雅量『中国小説史研究—水滸伝を中心として—』(汲古書院、一九九六年)第II部「水滸伝研究」第三章「楊家將演義と水滸伝」二「兩者の構成上の類似」、百六十頁

れたと見ている<sup>七十一</sup>。中鉢説は、宋江集團が招安を受けて異民族と戦う筋書きがもとよりあり、それが楊家將の故事をとりこむことでより豊かになったということであり、陳松柏や馬場昭佳は、朝廷のために異民族と戦うという筋書き自体がほかから借り受けたものであったという考えで、若干の違いはあるが、すでに流行していた藝能が大きな影響を及ぼしたと考える点では一致している。侯會は、水滸傳で蓼児洼という地名が梁山泊内と楚州兩方に見えること、蓼児洼はそもそも淮南の地名であることに着目し、宋江集團が淮南を根據地として金と戦う物語がかつて存在し、根據地を山東梁山泊とする物語に變じたのちにもその設定が一部のこつたと推測している<sup>七十二</sup>。水滸傳の宋江は死後蓼児洼に葬られ、廟を建てられて地元の守り神となるのであるが、山東鄆城出身で山東梁山泊を根據地とした人物が、死の直前に一時任官しただけの楚州で祀られたとい

七十一 馬場昭佳『『水滸伝』の成立と受容—宋代忠義英雄譚を軸に—』第一部「『水滸伝』の成立—宋代忠義英雄譚への転換—」

七十二 侯會「从南北蓼児洼看《水浒》故事与淮南之关系」(《文学遗产增刊》十八辑、山西人民出版社、一九八九年)

うよりも、淮南を據點に夷狄と戦った英雄が死後その地の守り神となる話のほうがあたしかに自然であるし、わかりやすい。史書にも宋江集團の活動範圍として淮南があげられ、「淮南盜」と記すものもある。宋江集團が宋金對立の

最前線であつた淮南を據點として金と戦つたとする故事があつても不思議ではない。水滸傳第七十一回で百八人が勢ぞろいした際、宋江は「替天行道、保境安民」を誓い、「中心愿平擄、保民安國」なる句を含む滿江紅詞を作る。

宋江は終始朝廷への忠義を標榜し、招安を待ち望んでいるが、この時點では招安實現の氣配すらない盜賊集團にすぎず、契丹や方臘の影も見えない。このような段階で一足飛びに「境を安んずる」、「虜を平らげる」などのスローガンを掲げるのは氣が早すぎるくらいがある。侯會はこれを、北宋末南宋初の政府がお墨付きを與えた民間組織「忠義巡社」のスローガンをそのまま轉用したものだとする。なぜ轉用されているのかといえ、宋江集團を忠義軍とする物語がかつてあり、それが水滸傳の材料になったからである

七十三。對金戦争の最前線に根據地があつたのならば、賊軍

であろうが官軍であろうが、仲間一同が生死をともにする誓いを立てる際、もつとも身近に迫つた敵を意識するのは不自然なことではない。

明後期の呉從先に「讀水滸傳」と題する一文がある

七十四。呉從先が感想や考證をまじえながら水滸傳のあらすじを記したものだが、その内容はわれわれの知る水滸傳とはいくらか異なる。宋江を中心とし、梁山泊に據つた強人集團の物語には違いないのだが、肝腎の梁山泊が「淮」にあるように書かれているうえ、宋江らは宋室を支えて金人を討つと誓っており、はっきり宋室南渡後の物語になっているのである（補注二）。淮南の宋江集團の傳承は明後期までのこつていたようである。

宋江集團の物語には楊家將、岳飛、忠義軍のような史書の支えがない。集團全體の形成、發展、衰退というストーリーは、先に發展していた英雄物語から移植されたのだろう。南宋期、宋江集團は先にあげた英雄たちに人氣面で相當に水をあけられた存在であつたはずであるから、先行する諸傳説のいいところを吸収してより人氣のある物語に仕

七十三 侯會「从南北夢儿注看《水滸》故事与淮南之关系」

七十四 呉從先『小窗自紀』（國家圖書館藏明萬曆末年刊本マイ

クロフィルム）卷三

立てようとする努力があつたであらうことは想像に難くない。そうしたなかで、同時期に、複数の、設定の異なる、時には相矛盾する内容の物語が語られることは十分にあり得る。遼と戦う北宋の宋江も、金と戦う南宋の宋江も、同時期に平行して存在していたのであらう。しかし水滸傳最終編纂者が採用したのは北宋、梁山泊に據り、遼と戦うという設定であつた。

#### 4. 大宋宣和遺事

ここまでとりあげた宋江集團の傳説の起源はみな、水滸傳に見える痕跡からさかのぼったものであり、直接過去の姿が觀察できるわけではない。これに對し、宋江集團のストーリーの原初的な状態が見られる資料が『大宋宣和遺事』<sup>七十五</sup>（以下、『宣和遺事』）である。

『宣和遺事』は北宋末の歴史を題材にした讀物である。そのなかに、宋江集團の物語が収められている。その構成

は次のとおり。

（一）花石綱運搬の歸り、殺人事件を起こしてつかまつてしまつた楊志が、花石綱運搬の仲間に助けられ、ともに太行山に落草する。

（二）北京留守梁師寶が蔡太師の誕生日祝いに送ろうとした金銀財宝を奪い犯罪者となつた晁蓋一味が宋江の助けを得て捕縛を逃れ、太行山梁山泊へ落ちのびて楊志と合流する。

（三）宋江が四人の豪傑を梁山泊に推薦し、送りこむ。宋江は娼妓の閻婆惜を殺したことで捕り方に追われるが、九天玄女の廟に隠れて事なきを得る。そこで宋江ら三十六人の姓名と「忠義を行い姦邪を滅ぼせ」との命が記された天書を得る。さらに九人の仲間を連れて梁山泊へ赴くと晁蓋はすでに死んでいたため、頭領の座に収まつた。

<sup>補注二</sup> 本論文の口頭試問の際、小松謙先生より、呉從先の記述は、見ていないものをでたために書いたという可能性も排除しきれず、慎重に扱う必要があるうのご指摘をいただいた。

<sup>七十五</sup> 『新刊大宋宣和遺事』四卷（國家圖書館（臺北）藏）、『古本宣和遺事』二卷（中央研究院（臺北）歷史語言研究所藏デジタル畫像データ）、『新刊宣和遺事前後集』（『百部叢書集成・士禮居叢書』、藝文印書館、一九六六年）排印本



(四) 梁山泊集團が州県を襲い掠奪をおこなったため朝廷は討伐軍を送ったが、逆にその將二人が宋江に投降する。さらに魯智深が加わり、三十六人そろったため、東嶽參拝を行う。

(五) 朝廷の使者として張叔夜がおとずれ、宋江集團は朝廷に歸順。方臘征伐に従った。

「太行山」、「太行山梁山泊」、「梁山泊」と根據地の名が一定しないなど、安定した物語とは言えない部分もあるが、宋江を中心とする梁山泊集團の形成過程と招安を語っており、水滸傳の重要な材料と認められる。

『宣和遺事』の成立時期には南宋末から明初までさまざ

<sup>七十六</sup> 國家圖書館の古籍調査を行った阿部隆一（調査當時の名稱は國立中央圖書館）もこの本を宋末元初に福建で刊行されたものとしている。筆者が國家圖書館善本書室の職員にうかがったところ、善本の書誌情報は阿部の調査結果にしたがっている場合が多いとのことであったから、國家圖書館が本書を「宋末刊本」とするのも黄丕烈および阿部説を採用した結果なのだろう。

<sup>七十七</sup> 大塚秀高「水滸説話について―『宣和遺事』を端緒とし

まな説がある。現存するなかでもっとも古いと思われる『新刊宣和遺事』前後集を所有していた黄丕烈はこれを宋刊本とみなし（以下、黄藏本と稱す）、自身の士禮居叢書でこれを重刻した際に宋本重刊と稱した（以下、士禮居本と稱す）。現在この本を所蔵する國家圖書館（臺北）でも「宋刊本」としている。ただし本書中に刊行時期をうかがわせる刊記があるわけではない<sup>七十六</sup>。一般には元代刊行説をとる研究者が多く、そのなかには、單に元代に完成したという説<sup>七十七</sup>も、宋代からあつた物語が元代になってから刊刻されたという説<sup>七十八</sup>もある。成立、刊行時期は限定せずに、宋江集團の部分は南宋時期の藝能で語られていた内容がとりこまれたものだとする説もある<sup>七十九</sup>。明代成立と

て―」（『中国古典小説研究動態』第二号、一九八八年）、馬幼垣「『宣和遺事』中水滸故事考釈」（『水滸二論』臺北…聯經出版、二〇〇五年）、中鉢雅量『中国小説史研究―水滸伝を中心として―』第Ⅱ部「水滸伝研究」第一章「水滸伝の成立と杭州」二「水滸伝成立の三段階」、新江「九天玄女授天書―水滸札記」（『世界宗教文化』一九九六年第四期（总八号））<sup>七十八</sup> 胡士莹『话本小说史』（中华书局、一九八〇年）第十七章「关于讲史」、董国炎『扬州评话研究』（社会科学文献出版社、二〇〇九年）第二章「『水滸伝』评话演变与『武松』」<sup>七十九</sup> 小松謙「梁山泊物語の成立について―『水滸伝』成立前

見る説は少ない<sup>八十</sup>。

『宣和遺事』冒頭部分は藝能の語り口風で、殷の紂王、周の幽王、陳の後主、隋の煬帝、唐の玄宗など亡國の皇帝ならびに道樂で國を傾けた皇帝をたてつづけに語り、宋代に及ぶ。そこで

徽宗即位、……朝歡暮樂、依稀似劍閣孟蜀王論愛色貪  
盃、彷彿如金陵陳後主。

徽宗は即位するや、……朝に歡び夕に樂しみ、劍閣の後蜀後主が色を好み酒を貪ったのにも似、金陵の陳後主を彷彿した。

と、徽宗をも亡國の皇帝の列につらね、花石綱が民衆を苦しめ、宋江や方臘の叛乱を招いたと語る。つづいて蔡京、童貫、楊戩、朱勔ら奸臣佞臣が語られ、徽宗は政治を顧みず音樂を樂しみ、妓女李師師のもとへ忍んでいくさまが描かれる。當時の人にとって北宋と南宋とはひとつらなりの

史一、李永祐「《水浒传》三題」(『明清小説研究』二〇一五年第三期)

<sup>八十</sup> 管見の限りでは佐竹靖彦が明初成立説をとっている。

王朝であり、徽宗の失政が天下の半分を失う原因であったと認識する人が多かったとしても、現王朝の皇帝をこれほど無能なものに描き、さらに印刷して本にすることなどそうできることではあるまい。士禮居本では趙匡胤の「胤」の一面が缺筆されているが、黄藏本では缺筆されていない。宋末刊本だと信ずる黄丕烈が「あるべき姿」に改めたのではないか。このほかにも士禮居本で改められた表記は少なくない<sup>八十一</sup>。

『宣和遺事』にはところどころ通俗藝能のごとき文體が見えるものの、基本的には「建中靖國元年」、「崇寧元年」など年號を見出しに立て、その年に起きた出来事を記していく編年體史書の體裁をとっている。氏岡真士「平話の基づいた史書——平話の作り手についての試論——」<sup>八十二</sup>は、その材料となった史書を特定し、史書による編年記述を主體に、民間傳承など他の資料を加えて作つたものだと述べる。宋江集團や徽宗と李師師のくだりなどは、民間傳承がとりこまれたものようである<sup>八十三</sup>。

<sup>八十一</sup> 特に俗字、異體字は徹底して正字になおされている。  
<sup>八十二</sup> 氏岡真士「平話の基づいた史書——平話の作り手についての試論——」(『日本中国学会報』第四十九集、一九九七年)  
<sup>八十三</sup> 胡士莹『话本小说史』第十七章「关于讲史」

複数の史書の記載を拾い集め、さらに民間傳承を加えることで作られた歴史書といえほかにも例がある。小松謙は、いわゆる全相平話シリーズはそもそも通俗小説として作られたのではなく、通俗歴史書と民間傳承とを組み合わせ、教養レベルの低いものにわかりやすく歴史を説くことを目的とした通俗教養書であったという<sup>八十四</sup>。全相平話や五代史平話など、初期の通俗小説と言われるものが歴史ものばかりであるのは、そもそもそれが通俗小説ではなく、歴史を學ぶための教養書と考えられていたためであり、作り話による娯樂書を出版するという發想はもとよりなかったのである。

『宣和遺事』の作られ方は全相平話によく似ている。それならば出版目的も似通っていたのではないか。『宋史』史部故事類には「開元天宝遺事」、「令狐澄貞陵遺事」、「柳玘續貞陵遺事」など、「遺事」のつく書物が記録されている。「遺事」は「歴史故事の本」なるジャンル意識を表すのだろう。明・高儒『百川書志』も史部故事類に『宣和遺事』を著録している。高級なものではないにせよ、『宣和遺事』が史書と認識されていたことは明らかである。

八十四 小松謙 『「現実」の浮上―「せりふ」と「描写」の中国文

編纂方法のみならず、黄藏本は年號部分を黒地白抜きにするなど、版面にも全相平話シリーズに似た特徴がある。これらの點を考え合わせ、筆者は現存する『宣和遺事』は、元代に、宋江集團のくだりなど、藝能由來の材料も一部採用しながら、通俗的な史書として編纂、刊行されたもの<sup>八十五</sup>と考える。

その宋江集團部分には、三十六人を星の生まれ變わりとされていること、九天玄女が宋江の守り神として登場することなど、水滸傳の重要な要素となった設定や事件の多くが、現存資料のなかでもっとも早く現れている。とりわけ重要なのは宋江集團の根據地が梁山泊となっていることである。

『宣和遺事』の宋江集團は大きく分けて三つのグループと、個別に仲間入りした數名からなる。楊志グループは太行山、晁蓋グループは太行山梁山泊、宋江グループは梁山泊に落草する。とはいえ、宋江が梁山泊に落草して楊志グループ、晁蓋グループと合流したのだから、三グループが別々の場所に落草したのではなく、同じ場所の名稱が途中でかわっているのである。『宣和遺事』の宋江集團は、天

学史』(汲古書院、二〇〇七年)第六章「白話文学の確立」

書と本文とで人物の入れ替わりがあり、宋江を人数に含めるかどうかがよく計算が合わないという指摘が古くからある。馬幼垣はこれを、本来は三十六人のなかに入っていないかった宋江が、自らを無理に三十六人の一員であることにして自らの価値を高めようとしていることを暗示する描寫であり、宋江のたくらみ深い性格を表現し得ていると言うが<sup>八十五</sup>、おそらくそうではあるまい。落草した地点の名が違っていたり、名簿と本文があっていなかったりするの、物語内部の人物のあざかり知るところではなく、異なる材料をすり合わせをすることなく並べたことが原因であろう。『宣和遺事』にはほかにも二箇所、宋江の名が見える。最初は徽宗即位記事の直後で、「宋江三十六人関州劫縣、方臘一十三寇放火殺人」を挙げる。二度目は宣和二年の記事で「又宋江等犯京西北等州、劫掠孫子女金帛殺人甚眾之」<sup>八十六</sup>とある。盗賊集團として簡潔に記録されるのみであり、のちの宋江集團物語部分との関連性は微塵も見えない。『宣和遺事』には前後の記述を照應さ

せようという編纂方針があまり見られないのである。宋江集團のくだりも似たようなもので、むしろ「太行山梁山泊」なる地名を仲立ちに根據地を統一している分だけ工夫されていると言わなければならない。

楊志は先に見たとおりそもそも太行山とゆかりが深い人物で、楊志のグループが太行山入りするのは南宋の語りものからそうであったのだろう。

晁蓋グループの落草した太行山梁山泊とは、楊志の太行山と宋江の梁山泊をつなぐために作られた地名であろうから、『宣和遺事』にとりこまれる以前の物語で晁蓋がどこに落草していたのかはわからない。大塚秀高は晁蓋は泰山と因縁のふかい「泰山系」ともいべきグループの首領であったのではないかという<sup>八十七</sup>。晁蓋グループもそもそも梁山泊と関係がなかったのだとすれば、梁山泊と縁があったのは楊志グループと晁蓋グループとを除いた十六人のみであったことになる。

楊志の物語も晁蓋の物語も堅氣の世界から落草して盗賊

<sup>八十五</sup> 馬幼垣『宣和遺事』中的水滸故事考釋」

<sup>八十六</sup> 文字は兩例とも黄藏本による。

<sup>八十七</sup> 大塚秀高「水滸説話について―『宣和遺事』を端緒とし

て」。また、水滸傳と泰山との関係については「天書と泰山―『宣和遺事』より見る『水滸傳』成立の謎」(『東洋文化研究』所紀要)第百四十冊、二〇〇〇年)でも分析をしている。

になるまでのいきさつを語ったものであり、つまりは宋江と同種の物語である。三十六人を一箇所に集めるには、ひとりひとりの來歴を語っていくよりは何人がまとまって仲間入りしてくれるほうが語り手としては助かる。楊志と晁蓋の物語が、似たもの同士である宋江を中心とする物語に合流させられたのであろう。そして、なぜ彼らではなく宋江が首領になるのかの理由づけとして採用されたのが九天玄女の場面なのではないか。

どのグループにも屬さず、最後に名前だけ紹介される三人は、もともと宋江とも梁山泊とも關わりがなかった可能性が高い。特に花和尚魯智深は個人の活躍の物語がすでにあり、人數あわせならびに人氣者を導入して聽衆を引きつけるために加えられたのだろう。さらに、宋江の推薦を得て、あるいは宋江に率いられて梁山泊入りする十五人も、楊志グループ、晁蓋グループと明らかな違いがある。前者は楊志の救出と逃亡、後者は生辰綱強奪という犯罪行為をともにした面々がうちそろって山寨に入る。對して宋江は、閻婆惜を殺して逃亡する道すがら知り合った豪傑四人に梁山泊への推薦狀をわたし、つづいて天書にある三十六人の名簿とすでに梁山泊にいる面々とを比べて足りない人物を探し、そのうち九人を梁山泊へ連れていくのだが、宋

江がこの九人といかにして出會ったのかには言及がない。他の二グループのように苦難をともにすることで結ばれた關係ではなさそうである。宋江の経験した重要な事件、閻婆惜殺しと九天玄女との邂逅はいずれも單獨で行動しているときに起きている。グループとは言い條、實際には宋江個人の物語が展開されているのであり、實質「梁山泊グループ」は宋江一人だけなのではないかとすら感じさせる。そうだとすれば、宋江一人のために楊志や晁蓋のグループは梁山泊へ移籍させられたことになる。現在うかがえる南宋期の語り物からは梁山泊の影が感じられないから、『宣和遺事』は宋江集團の物語が梁山泊集團の物語に變化していく初期の狀態を伝えるものと言えよう。

『宣和遺事』はその後も幾度も版をあらためて流通していたらしい。筆者が目睹し得たものには、國家圖書館（臺北）藏『新刊大宋宣和遺事』四卷、中央研究院（臺北）歷史語言研究所藏『古本宣和遺事』二卷（デジタル畫像データ）がある。前者は卷頭に「金陵王氏洛川校正重刊」と記されている。每半葉九行毎行二十字。後者は本文每半葉九行毎行二十字、眉批と圈點が施され、さらに各卷頭に見開きの繪がそれぞれ六幅と八幅附された豪華なものである。

八十八。宋江集團の部分の眉批に水滸傳との違いが注記されているので、水滸傳刊行後のものであることは明らかである<sup>八十九</sup>。胡士瑩『話本小说概论』に、「中国科学院图书馆」に「璜川吳氏旧藏明季刊本」の『宣和遺事』が所藏されていると記される<sup>九十</sup>。二卷、半葉九行毎行二十字、卷首

に圖あり、「旌德郭卓然刻」の署名あり、と胡士瑩のあげた特徴すべてが中研院史語所藏本と一致するため、同一の版本、少なくとも同一系統の本なのだろう。このほか、葉盛『茶竹堂書目』『史』に「宣和遺事一冊」、晁璠（嘉靖癸丑進士）『寶文堂書目』『子雜』に「宣和遺事」と「宣和遺事舊刻」、嘉靖庚子序を有す高儒『百川書志』卷五「史・傳記」に「宣和遺事二卷」が著録されている。『宣和遺

八十八 本来はそれぞれ八幅であったと思われる

八十九 この本の詳細な書誌は陳兆南「讀『明刊古本宣和遺事』」（『書目季刊』十八卷三期、一九八四年）参照。陳兆南は、この本の序を書いた錢允治の卒年を姜亮夫『歷代人物年里碑傳綜表』（『姜亮夫全集』十九、雲南人民出版社、二〇〇二年）に従って成化十七年（一四八一年）とみなし、序文末尾に「八十老人錢允治功父甫題」と署名していることから、水滸傳は成化年間にすでに存在していたとしている。しかし錢保塘『歷代名人生卒録』（北京圖書館出版社影印民國二十五年五月海寧錢氏清風堂刊本、二〇〇二年）は「錢允治 成化十七年十二月四日生」としている（卷七）。この場合錢允

事』は明中期になっても供給され續けていたようである。

百二十回本水滸傳である『李卓吾先生批評忠義水滸全傳』、『李卓吾先生批評忠義水滸全書』はその卷頭に『宣和遺事』の宋江集團のくだりを附している。水滸傳の登場によつて『宣和遺事』があらためて脚光を浴びたという面もあるのだろうが、それもそもそも『宣和遺事』が知識人向けの書籍として刊行されていたからこそ起きた現象であろう。黄藏本『宣和遺事』には黄丕烈の手跋が残っており、そこで黄丕烈は、この本を手に入れるや手元にあった別の版本と比較したと言っている。清末にも複数の異なる版の『宣和遺事』が流通していたのである。水滸傳の最終編纂者が『宣和遺事』そのものを利用することは十分に可能で

治は嘉靖年間に八十歳をむかえたことになる。また、錢謙益『列朝詩集小傳』（上海古籍出版社、一九八三年）丙集「朱處士存理」に「余はこれ（朱存理の手稿）を錢允治功甫より得」云々とある。錢謙益は萬曆十年（一五八二年）の生れである。さらに、『四庫全書總目』卷百九十五「文心雕龍」には「明末常熟の錢允治」という文言がある。成化に卒した人物を「明末」と稱すとも思えない。『古本宣和遺事』序を根據に水滸傳が成化年間にすでに存在したと見るのは早計であろう。

九十 胡士瑩『話本小说史』第十七章「关于讲史」、七百十四頁

あっただろう。ゆえに『宣和遺事』と水滸傳の直接比較は、最終編纂の意圖をさぐる有効な方法となり得るはずである。

## 5. 元人雜劇

南宋の傳承から水滸傳に至るまでの期間のもので、ある程度まとまった量がのこっている資料として注目されてきたのが梁山泊を舞台にした元人雜劇、いわゆる「水滸戲」である。現在でも六種のテキストが残っているほか、梁山泊の好漢に關係のありそうな劇目がいくらか傳わっており、元代、梁山泊の好漢の活躍が雜劇の題材のひとつだったことがわかる。

しからばそれらがいかほど水滸傳の材料になったのかとみれば、水滸傳にはこれらを直接とりこんだ部分はほとんどない。確實なのはわずかに「梁山泊李逵負荊」雜劇が第七十三回後半に利用されているのみである。このほか劇目のみが傳わる作品のうち、『太和正音譜』、『録鬼簿』に見える「黒旋風喬斷案」雜劇と「黒旋風喬教學」雜劇の二種は第七十四回「燕青止智撲擎天柱 李逵壽張喬坐衙」の材料であるかもしれない。そうであるとしてもたった三種、全百回中の一回半にすぎない。

雜劇作品と水滸傳との關係については先行研究ですでにある程度共通の認識ができあがっている。高島俊男の説明を例にあげる。

元代水滸戲と水滸伝とはあまり似ていない。あるいは、血縁關係が濃くない。

水滸伝の中心は豪傑たちが梁山泊へ集まってゆく過程であるが、この段階をあつかった水滸戲はない。水滸戲では、はじめから豪傑たちはもう梁山泊にいる。さりとて官軍になるの盜賊や外国を討伐にゆくといった話もなく、それらしい気配もない。

では水滸戲とはどういうものなのかというと、梁山泊の豪傑たちの一人もしくは数人が山をおりて下界へ行き、事件に出あったり解決したりして山へもどってくる、という話なのである。つまり、主要人物の所屬はたしかに梁山泊なのだが、話の内容は梁山泊とはそれほど關係はない。

水滸伝は、梁山泊集團の形成、発展、衰滅のものがたりである。しかるに水滸戲のほうは、梁山泊自体に動きがない。事件のほうは關係のない下界でおることだから、どんな事件であつてもさしつかえなく、ただそれ

に、たまたま山をおりてきた豪傑がからむというだけで、だからそういう単発の話はいくらでも作れるわけだが、いくらたくさんあっても梁山泊にはなんの変化もおよぼさない。水滸戯と水滸伝が似てないというのはそういう意味である。（高島俊男『水滸伝の世界』十「講釈から芝居まで」、百八十頁）

細かい点では誤りもある。「たまたま山をおりてきた豪傑」というのは不十分で、小松謙のように「梁山泊から出た好漢が民間人に恩を受け、その民間人の危機に駆けつけて恩返しをする」型と「無法な目にあわされた庶民の訴えを聞いて悪者を退治する」型があると言ってはじめて十全であり<sup>九十一</sup>、この説明は前者の型にしか當てはまらない。しかし概要はこのとおりである。本稿では高島の解説に見える「梁山泊集団の形成、発展、衰滅のものがたり」を「變化型」、「梁山泊にはなんの變化もおよぼさない」話を「安定型」と呼ぶことにする。

梁山泊もの雜劇が現在の水滸傳にほとんどとりこまれて

いない最大の理由はこの「變化型」と「安定型」という筋立ての違いにある。豪傑個人の銘々傳、梁山泊集團の形成、官軍との集團戦から朝廷への歸順を経て崩壊までという變化型ストーリーが軸になっている以上、そこに安定型の故事が入り込む餘地はほとんどない。水滸傳において梁山泊集團が完成し、安定した状態を維持しているのは第七十二回から第七十五回の四回分しかないのである。そう考えると、その四回のうち一回半分に採用された梁山泊もの雜劇はなかなか健闘しているとも言える。

なぜ水滸傳は變化型の物語として構想されたのか。どこ誰が構想したなどと指摘できない以上、明確な解答は望むべくもないが、『宣和遺事』などの變化型物語を原型にしたからなのだろう。それも、最終編纂期に變化型と安定型とを天秤にかけて前者をとったというのではなく、『宣和遺事』より詳細かつ豊富な内容の變化型のストーリーが形成され、質量ともに相當充實してきた段階にいたってようやく雜劇の要素が入ってきたものと思しい。ではなぜその段階まで安定型故事の影響を受けなかったのか。安定型

九十一 小松謙「水滸雜劇の世界―『水滸伝』成立以前の梁山泊物語」(『水滸伝の衝撃 東アジアにおける言語接触と文化受

容』勉誠出版、二〇一〇年、三十一頁)



故事のほうが発生が遅かったのだろうか。しかしそう思わせる證據はない。

ここで考慮すべきなのが北方系故事と南方系故事の別である。

史書に記される宋江集團の活動時期は北宋末宣和年間であり、その後まもなく金の進攻によって北宋の都汴京は陥落、逃げ延びた皇族らが南渡して朝廷を建てなおし、金と南宋による南北分裂の時代がはじまる。このとき、宋江とその集團にまつわる物語の傳播も南北に分かれ、別々の變化をたどったと考えられる<sup>九十二</sup>。

北宋か南宋か、敵は遼か金かの違いはあれど、宋江集團の形成、招安、奸臣との対立、異民族との戦いを経て壊滅へ向かうという變化型ストーリー構成が南宋期に形成されたという點で陳松柏、中鉢雅量、侯會の見方は一致する。

<sup>九十二</sup> 胡以存「南、北支水浒故事与《水浒传》成书」（『明清小说研究』二〇一五年第三期）は、雜劇を「北支故事」の代表、『宣和遺事』を「南支故事」の代表と見なし、吳從先の讀んだ『水浒传』を南支故事が北支故事の影響を受けた姿であると述べている。水浒故事の南北の地域差については、孫楷第「水浒传傳舊本考」、小松謙「梁山泊物語の成立について——『水浒传』成立前史——」にも議論がある。

<sup>九十三</sup> 國家圖書館（臺北）藏抄本のマイクロフィルムによる。

そしてこの集團のストーリーに、個別に活躍を語られていた好漢が續々と加わっていったのである。

これに對し、北方系故事はどのようなものであったのか。

先に、南方系故事で宋江と梁山泊が結びつけられた様子があるが、ええなことを述べた。北方系の故事においてはどうであったのか。

李若水「捕盜偶成」詩冒頭の句「去年宋江起山東」は、史書に見える河北や淮南ではなく山東と宋江とが結びつけられている例として注目すべきである。宋江は山東を活動領域とする賊であると李若水は考えていたのである。しかし、それ以上に具体的な地名は挙げられていない。宋江と梁山泊がたしかに結びつけられている最初の記録はおそらく『楚石大師北遊詩』<sup>九十三</sup>である。ここに「宋江分贓

このほか、朱一玄、刘毓忱『水浒传资料汇编』（四十九頁）、高島俊男『水浒传の世界』などが、ほぼ同時期の至治二年（一三三三年）、梁山泊の近くで船頭がここが宋江のいたところだと語ったという『所安遺集補遺』の記述を紹介するが、筆者は原本、影印問わずこの書をいまだ確認できていない。

臺」と題する詩が収められ、その序に「宋徽宗時大盜三十六人同日拜官。見李若水詩集。在梁山泊中」とある。歐陽江琳「兩首稀見的元代水滸詩」<sup>九十四</sup>によれば、この詩は楚石大師が至治三年（一三二三年）に大都に行き、翌泰定元年（一三二四年）に南へ戻る途上作ったもので、詩は作成順にならべられ、直前に「梁山泊」という詩があることから、この詩も梁山泊を通った際のものと考えてよいのである。少なくとも梁山泊周辺では宋江の根據地がそこにあつたと考えられていたようである。このころすでに元による南北統一が果たされているから、宋江を梁山泊の主とする物語が南方へ傳わることもあつただろう。

北方に傳わっていた宋江集團の故事を知る最大の手がかりはやはり雜劇である。小松謙によれば、元代水滸戲の作者はみな北方人であり、「北方人の觀客を想定して、北方で傳承されている物語をもとに作られた」<sup>九十五</sup>。もつとも盛んに作られたのは東平府で、梁山泊もの雜劇はいわばご當地ものとして作られ、演じられていたらしい。こうした

環境で作られた雜劇作品はみな安定型の構成を有する。北方の作者、觀衆にとって梁山泊は目と鼻の先にある現實の場所である。彼らにとっては、助けが必要な時に「義賊」がおりてきて、「問題が解決すれば、後腐れのない形で消えてくれる」のがもつとも望ましい筋書きであつた<sup>九十六</sup>。それは明初につくられた朱有燬の雜劇でも變わらない。明朝の宮廷演劇は元朝の雜劇を繼承したものであるし、朱有燬の王府は河南の開封にあり、北方系傳承が身近にあつた。朱有燬の梁山泊もの雜劇は元代のその基本設定を踏襲したものとみなしてよい。

現在残る梁山泊もの元人雜劇テキストは、そのほぼすべての冒頭で宋江が、自身が梁山泊入りするまでの來歴として『宣和遺事』に似た變化型ストーリーの概略を語っている。これを根據に元代の雜劇作者は變化型ストーリーを共通認識として持つていたとする考えかたもあるが、現在見られる雜劇テキストが元代に書かれた時點での文字をどれほど傳えているかには留意しなければならない。

<sup>九十四</sup> 欧阳江琳「兩首希見的元代水滸詩——楚石梵琦《梁山泊》、《宋江分贓台》考釋」（『中国典籍与文化』二〇一四年第三期）

<sup>九十五</sup> 小松謙「梁山泊物語の成立について——『水滸伝』成立前史——」（三十五〜三十六頁）  
<sup>九十六</sup> 小松謙「梁山泊物語の成立について——『水滸伝』成立前史——」（四十二頁）

現存する雜劇テキストの多くは明人の手加わっている。<sup>九十七</sup> わずかにのこる元刊本から知れるように、元代のテキストには白や科がほとんど記されない<sup>九十八</sup>。現存する元刊雜劇テキストには梁山泊ものがないため類推でしかないが、元代に梁山泊もののテキストが存在していたとしても、冒頭の宋江の白は記されていなかった可能性が高い。さすればそこに語られる宋江の経歴も、梁山泊の威容も、明人の手によってはじめて文字化されたものということになる。それは、元代に上演されたときにもある程度内容の定まった白があつて明人がそれにもとづいて書いたのかもしれず、あるいは元代の事情を踏まえずにほぼ創作のごとく書き下ろしたのかもしれない。馬幼垣は、宋江の白に見える「大夥三十六、小夥七十二」のうち、「七十二」とい

<sup>九十七</sup> 吉川幸次郎『元雜劇研究』（岩波書店、一九四七年）「序説」四「元雜劇の資料」、笠井直美「白話小説・戯曲版本の分化と特徴」（『東アジア書誌学への招待』第二卷、東方書店、二〇一一年）

<sup>九十八</sup> 吉川幸次郎『元雜劇研究』「序説」四「元雜劇の資料」。小松謙『「現実」の浮上―「せりふ」と「描写」の中国文学史』第六章「白話文学の確立」は、雜劇のテキストはもととは曲を鑑賞することを主目的に刊行されたためにセリフやト書きが充實していかなくても差し支えなかったのではないかと説明している（百六十六〜百六十七頁）。

う數は明代になつてから水滸傳に合せて書き加えたのではないかと見ている<sup>九十九</sup>。たしかに明・宣德八年（一四三三年）刊行の朱有燬「豹子和尚自還俗」雜劇では梁山泊の頭領は三十六人となっている。おなじく朱有燬「黑旋風仗義疏財」雜劇は二種のテキストで比較ができるが、周藩原本に近い呉梅の『奢摩他室曲叢』所収テキストでは冒頭に宋江の白がなく、宮廷内で改編された後の状態を反映する脈望館抄本テキスト<sup>百</sup>では他の雜劇とほぼ同様の白が書き加えられていて、頭領の數も三十六プラス七十二である<sup>百一</sup>。宣德八年の原作刊行時點で三十六人だったものが、改編にあたってその時よく知られていたデータに書き換えられたのだろう。朱有燬が依據した先行作品や北方系傳承で

<sup>九十九</sup> 馬幼垣『水滸論衡』「從招安部分看水滸傳的成書過程」  
<sup>百</sup> テキストについては小松謙『中国古典演劇研究』（汲古書院、二〇〇一年）Ⅱ「明代における元雜劇」第一章「明本の性格」参照。

<sup>百一</sup> 「黑旋風仗義疏財」雜劇は白だけではなく筋書きまで含めて大幅にテキストの書き換えがなされている。笠井直美『「義賊」の誕生―雜劇『水滸』から小説『水滸』へ―』（『東洋文化』第七十一号、一九九〇年）、小松謙『中国古典演劇研究』Ⅱ「明代における元雜劇」第一章「明本の性格」参照。

は梁山泊の頭領は三十六人であつたと考えてよい<sup>百二</sup>。また、梁山泊もの雑劇の曲辭には梁山泊、三十六は出てくるものの、七十二は見えない。曲辭にしても明人の編集を経たものであるから<sup>百三</sup>注意は必要だが、それでもやはり白とは異なり、元刊本の時點から存在していたものに手を加えるわけであるから、そのなかには元刊本からあつた文字が残留したものもあるはずである。その曲辭にすら七十二という數は見えないのであるから、元人雑劇では梁山泊の豪傑の數はやはり百八ではなかつたのである。「七十二」が明人による編集の際に書き加えられたものであるならば、その前後の文章もその時點での認識に合わせて書かれた可能性が高い。

ゆえに、現存テキストに依據する限りでは、元代雑劇の

<sup>百二</sup>「豹和尚自還俗」に見える三十六人の名簿は水滸傳より『宣和遺事』と共通する點が多く、この時點ですでに北方に『宣和遺事』そのもの、ないし『宣和遺事』系の故事が伝わっていたことが推測できる。

<sup>百三</sup>笠井直美「白話小説・戯曲版本の分化と特徴」が「楚昭王疎者下船」の元刊本と明刊本と違いを詳細に比較し、この劇では曲辭までもが大幅の入れ替え、變更をなされていることを指摘している。

背景に宋江集團の形成過程とその後の運命を語る變化型のストーリーがあつたことは證明できない。南宋と金、南宋と元と、南北に異なる支配者があり相互の移動が困難であつた時期の北方系傳承は、梁山泊という根據地を有する三十六人の盜賊集團の存在を前提とする安定型物語が中心であつたと考えられよう。

三十六人の傳承はいつまで主流であつたのか、百八人になつたのはいったいいつごろなのか。

水滸傳第七十八回回頭に、好漢たちの活躍を詠んだ詩があるが、そこでは「天庭三十六員」としか言わず、水滸傳本文の描寫と符合しない人物もいる。この詩は水滸傳以前から傳わる宋江集團の傳承をそのまま轉用したものではないかと言われているが、おそらくそうなのだろう<sup>百四</sup>。ここ

<sup>百四</sup>陈松柏「宋江演義是连接宋江等三十六人故事与水滸傳必不可少的链条」は、この詩に地煞星七十二人がまつたく出てこないことから、この詩は水滸傳の原作にあたる「宋江演義」からひきついだものだとする。水滸傳以前に「宋江演義」なる書物が刊行されていたという説には筆者は懐疑的であるが、この詩が現在の水滸傳のために書き下ろされたのではなく、先行する三十六人の物語で使われていたものの轉用であるという指摘は的確であろうと考えている。

に見える三十六人は次のとおり。

混江龍、九紋龍、玉麒麟、青面獸、索超急先鋒、劉唐赤髮鬼、小李廣、病關索、黑旋風、船火兒、花和尚、武行者、短命二郎、立地太歲、兩頭蛇、雙尾蝎、阮小七活閻羅、秦明霹靂火、穆弘沒遮欄、董一撞、朱仝雲長、林冲翼德、李應撲天鵬、雷横插翅虎、燕青徐寧、公孫勝入雲龍、石秀、張順浪裡白跳、戴宗走神行太保、關勝、呼延灼、没羽箭、小旋風、智多吳學究、替天行道宋公明

水滸傳では縁が薄い盧俊義（玉麒麟）と楊志（青面獸）が一組に詠まれているのは、二人がともに太行山グループに属していた『宣和遺事』に近い。一方、水滸傳では盧俊義の忠實な部下である燕青は雷横と對になっている。水滸傳で雷横とコンビを組む朱仝は關羽張飛になぞらえて「林冲翼德」と對になっている。關勝を關羽の末裔とする設定はなかったと思しい。小旋風は没羽箭と組みで、「弓馬熟閑」と言われているからおそらく武將で、水滸傳のような後周皇族の末裔・小旋風柴進ではなかったのだろう。また、宋公明との三字對のためかもしれないが、吳學究という呼稱も『宣和遺事』と同じである。一方、「兩贏童貫、

水戰三敗高俅、施恩報國、幽州城下殺遼兵、仗義興師清溪洞裡擒方臘」という文言があることから、官軍との戦い、遼への遠征、方臘討伐などの要素は三十六人の傳承のところにすであつたことをうかがわせる。

梁山泊に關する傳承は同時多發的に無數につくられていたであろうから、水滸傳以前に百八人の物語がなかったと言いつけることはできない。しかし、明代に入つても三十六人の物語が主流であつたことは間違ひなく、水滸傳にもその影響が残っている點から考えて、最終編纂者は三十六人の物語を軸に水滸傳を編んだと考えてよいだろう。

こうして整理すると、おおまかには、「南方／淮南ないし山西／集團が形成されるまでのいきさつとその後の行動／變化型」と「北方／梁山泊を根拠地とする／集團に屬する個々の英雄の活動、個別の事件をあつかう／安定型」という區分が見出せる。そしてどちらの傳承においてもながら集團の人数は三十六であつた。

元によつて南宋が滅ぼされた一二七九年以降は、主に藝人、商人、軍隊など移動を常とする人々によつて南北の宋江集團の故事も移動、交流し、融合や吸収によつてその形を變えていったと思われる。なかには強い支持を受けた故事に押されて消滅してしまつた故事もあつただろう。そし

て、變化型ストーリーの枠組みを有していた南方系故事が北方系故事の要素を吸収した先にあるものが水滸傳なのだと筆者は考える。この南北故事相互の影響には交通の大動脈である大運河も一定の役割を果たしたはずである。大運河は大都から梁山泊を有する山東を縦断し、長江を経て杭州に至る。その中間にある淮南地方には淮陰、宿遷、徐州など重要な宿駅がある。この山東、淮南、杭州各地の傳承の名残と思われる要素がすべて現在の水滸傳に見られるのは偶然ではあるまい。

筆者は『宣和遺事』の宋江集團部分は、南宋以來の傳承に、元代に入ってから北方系の「宋江の根據地は梁山泊である」という傳承が流れ込んで形成されたものであると考えている。『宣和遺事』で晁蓋グループが「太行山梁山

<sup>百五</sup>小松謙「梁山泊物語の成立について―『水滸傳』成立前史―」、四十三～四十四頁

<sup>百六</sup>宮崎市定「水滸傳と江南民屋」(『宮崎市定全集 12 水滸傳』)は、水滸傳の武松の故事に描寫される家屋の構造が江南地方のそれと類似し、北方とは似ていないことから、この部分を完成させた人物は南方にいたのではないかと述べる。高島俊男『『小嘍囉』小考』(『中哲文學會報』第七號、一九八二年)は、雜劇で「抜け目ない」、「ずる賢い」などの意味でよく用いられる「嘍囉」という語が水滸傳では同じ意味で

泊」なる場所に落草するのは、「北方の地理をほとんど知らない人々」が「兩グループにかかわる地名をそのままつなげた」という小松謙の指摘<sup>百五</sup>どおりであろう。北方系の設定の影響を受けたとはいえ、物語構成の基礎は南方系であり、その内容をさらに豊富にし、水滸傳の直接の原型となった物語もまた南方で作られた<sup>百六</sup>。呉從先の讀んだ水滸傳はおそらくその過程を示すものである。梁山が「淮」あたりにあるという設定は、南北故事の接觸の様子を示している。

こうして、江南ないし浙江地方において、南方系故事を主體に宋江集團の成員の來歴、集團の形成過程と完成後を語るストーリーが形成され、内容がそれなりに充實してきた段階<sup>百七</sup>でようやく雜劇がとりこまれはじめたため、安定

はほとんど用いられぬことから、「この物語がはぐくまれ練り上げられて行つた時・所においては、その概念をこの語では表さなかった」と考え、雜劇の「嘍囉」は北方の言葉であり、水滸傳は南方で育つたのではないかと考察している。<sup>百七</sup>ただしそれが現在の水滸傳のごとくひとつの長篇物語に仕立てられていた確證はない。「變化」の一部をとりあげて語る故事がいくつもあり、それらをあつめることで「變化」の全容が想像できるといった状態であつたかもしれない。

型エピソードにあまり紙幅が割かれないう構成になったのではない。最終編纂期にとりこまれた雑劇は、「回数あわせ」で「散漫」な部分と酷評されることもあれば<sup>百八</sup>、水滸傳の思想性や藝術性に少なからぬ影響を与えたと評価される場合もある。雑劇がとりこまれることによって水滸傳全體にいかなる變化が生じたのか、あるいはたいした變化は生じなかったのについては後ほど考察することにした。

## 6・明前期から中期へ宋江集團傳承から水滸傳へ

明代に入ると宋江集團に關するまとまった資料は一氣にとぼしくなる。雜劇冒頭に書き込まれた宋江および集團の經歷は明初期の傳承の反映であろうが、その内容は『宣和遺事』と大きく變わるものではない。

明中期には文人の筆記、書目などに宋江集團に關わるものが少しづつあらわれはじめる。主なものをおおむね時代順に列記すると次のようになる。

<sup>百八</sup>「宋江三十六人の話、すなわち水滸説話は、いろんな形でつたえられ、小説水滸伝はそれらを取捨選択し、つなぎ合わせて作られたものと考えられるが、元代の水滸戲はそれらの材料の一種であったわけだ。ただしあまり採用されなかった。なにしろ、たしかなのは、……『李逵負荊』が水滸伝の

陸容（成化二年進士）『菽園雜記』

闘葉子之戲、吾崑城上自士夫下至僮豎皆能之。予游崑庠八年、獨不解此、人以拙嗤之。近得閱其形製、一錢至九錢各一葉、一百至九百各一葉、自萬貫以上皆圖人形。

葉子で戰う遊びは、わが崑城では士大夫から子どもまでみなどける。わたしは崑城の學校に遊學して八年になるのに一人だけわからないのでみなにバカにされる。近ごろ葉子を見る機會を得た。一錢から九錢まで一枚づつ、百から九百まで一枚づつ、萬貫以上はみな人物が描いてある。

萬萬貫呼保義宋江、千萬貫行者武松、百萬貫阮小五、九十萬貫活閻羅阮小七、八十萬貫混江龍李俊、七十萬貫病尉遲孫立、六十萬貫鐵鞭呼延灼、五十萬貫花和尚

第七十三回の後半にとりこまれていただけなのだ。しかもこのあたりは、百八人が勢揃いしてから招安を受けるまでの、最も散漫な、回数あわせと評される部分なのである。」（高島俊男『水滸伝の世界』十「講釈から芝居まで」、百八十三頁）

魯智深、四十萬貫賽關索王雄、三十萬貫青面獸楊志、二十萬貫一丈青張橫、九萬貫插翅虎雷橫、八萬貫急先鋒索超、七萬貫霹靂火秦明、六萬貫混江龍李海、五萬貫黑旋風李逵、四萬貫小旋風柴進、三萬貫大刀關勝、二萬貫小李廣花榮、一萬貫浪子燕青。

……蓋宋江等皆大盜。詳見宣和遺事及癸辛雜識。

宋江らはみな大盜である。宣和遺事と癸辛雜識に詳しい。

田汝成（嘉靖五年進士）『西湖遊覽誌餘』卷二十五

錢塘羅貫中本者南宋時人。編撰小説數十種而水滸傳叙宋江等事。姦盜、脫騙、機械、甚詳。然變詐百端、壞人心術、其子孫三代皆啞、天道好還之報如此。

錢塘羅貫中は南宋の人である。小説數十種を編纂

し、水滸傳では宋江らのことを述べた。盗み、騙し、からくりなど非常に詳しく書かれている。騙しごまかし言いくるめる方法ばかりで、人の心を損なうものであったから、その子孫は三代にわたってみな口が聞けなくなった、天の報いとはかくなるものである。

高儒『百川書志』（嘉靖十九年序）卷六

忠義水滸傳一百卷

錢塘施耐菴の本、羅貫中編次。宋寇宋江三十六人之事并從副百有八人當世尚之。周草窗癸辛雜志中具百八人混名。

忠義水滸傳一百卷

錢塘施耐菴の本、羅貫中編次。宋の賊宋江三十六人の事績と、それに次ぐ百八人（の物語）は現在流行している。周草窗の癸辛雜志は百八人の綽名をそなえている。

周弘祖（嘉靖三十八年）『古今書刻』上編「都察院」

水滸傳

郎瑛（成化二十三年生、嘉靖四十五年卒）『七修類稿』卷二十三「三國宋江演義」

三國宋江二書乃杭人羅本貫中所編。予意舊必有本、故曰編。宋江又曰錢塘施耐庵の本。昨於舊書肆中得抄本錄鬼簿、乃元大梁鍾繼先作、載元宋傳記之名而于二書之事尤多。據此尤見原亦有迹、因而增益編成之耳。



三國と宋江の二書は杭州の羅本貫中の編んだものである。もとづく本があるから編というのだろう。宋江はまた錢塘施耐庵の本とも言う。先ごろ古本屋で抄本録鬼簿を手に入れた。元大梁の鍾繼先の作で、そこに載っている宋元傳記は、この二書に關わるものをもっとも多い。ここから考えるに、もとづくところがあつて、増やしたり補ったりして編纂したのだろう。

#### 同卷二十五「宋江原數」

史稱宋江三十六人橫行齊魏、官軍莫抗、而侯蒙舉討方臘。周公謹載其名贊于癸辛雜志。羅貫中演爲小説、有替天行道之言。今揚子濟寧之地皆爲立廟。據是逆料當時非禮之禮、非義之義。江必有之、自亦異于他賊也。但貫中欲成其書、以三十六爲天罡、添地煞七十二人之名。又易尺八腿爲赤發鬼、一直撞爲雙槍將、以至淫辭詭行飾詐眩巧、聳動人之耳目。是雖足以溺人而傳久失其實也多矣。今特書其當時之名三十六于左。

史書に宋江三十六人が齊魏に橫行し、官軍も逆らわなかつたが、侯蒙が方臘を討たせようと進言したとある。周公謹がその名と贊を癸辛雜志に記した。羅

貫中が敷衍して小説とし、替天行道の言を書いた。今揚子、濟、寧の地では宋江のために廟を立てている。當時から非禮の禮、非義の義だと考えられていたのだろう。宋江は實在し、ほかの賊とは違っていたのだ。ところが羅貫中が本を書こうとしたとき三十六を天罡とし、地煞七十二人を追加した。また、尺八腿を赤發鬼、一直撞を雙槍將に改めるなど、いい加減に脚色したり偽りを書いたりして人々の耳目を集めた。人を引き込み、長く傳わるようにすることはできたとはいえ、失われた事實も多い。特にここに當初の三十六人の名を記しておく。

宋江	晁蓋	吳用	盧俊義	關勝	史進	柴進	阮小
二	阮小五	阮小七	劉唐	張青	燕青	孫立	張順
張橫	呼延綽	李俊	花榮	秦明	李逵	雷橫	戴宗
索超	楊志	楊雄	董平	解珍	解寶	朱仝	穆橫
石秀	徐寧	李英	花和尚	武松			

李開先（嘉靖八年進士。弘治十五年生、隆慶二年卒）

#### 『詞虐』

崔後渠、熊南沙、唐荊川、王遵嚴、陳後岡謂、水滸傳

委曲詳盡、血脈貫通、史記而下便是此書。且古來更無有一事而二十冊者。

崔後渠、熊南沙、唐荊川、王遵嚴、陳後岡が言った。水滸傳の文章は委曲を盡くし、たいへん詳細で、しかも首尾一貫、史記に次ぐものといえはこの書である。古來よりひとつの物語で二十冊にもなるものなどはなかった。

張丑（萬曆間の人）『清河書畫舫』卷十二上

又一好事家收文徵仲小楷古本水滸傳。全部法歐陽詢、未及見之。

ある好事家が文徵仲の小楷古本水滸傳を手に入れた。歐陽詢の書體にならっているというが、私はまだ見ていない。

ポイントになりそうなのが『菽園雜記』である。李偉實は、著者陸容の讀書への興味、交友關係などを総合すれば、もし水滸傳がすでに出版されていたとしたらそれを知らないはずがなく、この記事に水滸傳の名が見えない以

上、當時水滸傳はまだなかったということになるという百九。「あれば讀んでいたはず」、「讀んでいれば書いたはず」という假定に假定を重ねた推論であるから慎重にとり

あつかう必要があるが、『菽園雜記』からは陸容が「宋江三十六贊」と『宣和遺事』を知っていたことはたしかにわかるし、水滸傳を知らなかった可能性が高いと考えることもできる。

田汝成の記す水滸傳は、全何回なのか、根據地はどこで、何人の集團なのかわからない。ただ、羅貫中を編者としているから、「羅貫中編次」を掲げる嘉靖殘本と同一系統の本であるのかもしれない。

興味深いのが『百川書誌』である。「忠義水滸傳」、全百回、施耐庵、羅貫中の名、百八人という人數から現行百回本とおなじものと見てよさそうである。ここで高儒は史實の宋江をつたえる資料として『癸辛雜識』をあげるのだが、そこに百八人のあだなが記載されているという。單なる誤記の可能性もあるが、水滸傳の百八人のイメージが強く、『癸辛雜識』もそうだと思ひ込んでいたのかもしれない。もしそうであるならば、水滸傳は高儒に相當な影響力

を有していたことになる。

これと好対照をなすのが郎瑛の記事である。郎瑛は、百人の名は水滸傳が捏造したものであると斷罪している。

郎瑛は高儒とほぼ同時代の人である。宋江集團はもとより百人であつたと誤解していた高儒のような人が多かったのだろう。李開先もまたほぼ同時代の人である。大木康は、『詞話』の記事が水滸傳について新鮮な驚きをもって記されていることから、はじめて水滸傳を讀んだ感想を記したものであろうと考え、水滸傳の完成も嘉靖の頃であつたのではないかと推測している<sup>百十</sup>。李開先がはじめて讀んだことと、水滸傳がはじめて世に出たこととはもちろんイコールではないが、この記事に名が見える崔後渠、熊南沙、唐荊川、王遵嚴、陳後岡らがみな最後まで讀んだことがなかったと考えれば、水滸傳の出版からさほど遠くない時期のことである可能性は高い。

以上を総合すると、「梁山泊」の「百八人」の水滸傳は弘治の終わりから嘉靖の前半にかけて知識人の目に觸れるようになり、嘉靖中期にはかなりの知名度と影響力を有していたことになる。そしてまた、その直前までは三十六人の

の故事が主流であつたこともわかる。

いまひとつ注目したいのは、上に列記した面々が宋江集團の物語を記した書籍として擧げるものが『癸辛雜識』、『宣和遺事』、水滸傳しかないことである（雜劇は「集團」の物語とは言えない）。つまり、集團の物語に限る、われわれが現在参照できる資料と、彼らが目にした書籍の種類とは基本的には大差ないのである（無論、書籍の量や同一書籍の版本の種類には大きな差がある）。

『菽園雜記』に見える人名が『宣和遺事』と水滸傳のどちらに似ているかといえば『宣和遺事』に近い。賽關索王雄、混江龍李海は水滸傳には見えず『宣和遺事』に見える名であるし、一丈青が扈三娘ではないのも水滸傳と異なる。黒旋風李逵と小旋風柴進とが並んでいるのは「宋江三十六贊」、『宣和遺事』と同様この二人が一組として認識されていたことを反映するだろう。しかし『宣和遺事』とまったく一致するわけでもない。『宣和遺事』にいた關必勝はなく、水滸傳とおなじ關勝がいるし、李海とは別に混江龍李俊という水滸傳とおなじ名があらわれている。この記

事が陸容の聞き間違い、記憶違いなどによるものでなければ、この「葉子戯」は『宣和遺事』と水滸傳の中間、やや『宣和遺事』よりの状態の物語を反映していると言い得るのだが、陸容はこの中間的な物語を記した書籍には言及していない。

つまりこれらの文献は、書目や筆記を記し、それがいまにまで伝えられるほどの知識人が「印刷されて本になった宋江集團物語」を目にする機会は今時から『癸辛雜識』、『宣和遺事』、水滸傳しかなく、書籍に關する限り、『宣和遺事』から水滸傳までが長い空白になっていることを示唆するのではないか。陳松柏は郎瑛の「三國宋江二書」という言いかたに注目し、水滸傳以前に宋江を主人公とした「宋江演義」なる書があったと見ている<sup>百十一</sup>。しかし郎瑛の擧げる書誌情報は高儒のもっていた水滸傳と一致し、郎瑛の記事のみをもって「宋江演義」の存在を證明するのは勇み足であろう。水滸傳の成立を假に最大限引き上げて弘

<sup>百十一</sup> 陳松柏「宋江演義是连接宋江等三十六人故事与水滸傳必不可少的链条」

<sup>百十二</sup> 孫楷第「水滸傳舊本考」(『滄州集』中華書局、一九六五年)

治年間としても數十年、嘉靖中期だと考えれば百年ほどがそっくり文献資料の空白期となっていて、その間の宋江集團物語の變化の様子を詳しく知ることはできないのである。

かつて孫楷第「水滸傳舊本考」<sup>百十二</sup>は、水滸傳は書物になる以前に詞話の形式で廣まっていたと推測した。近年においても紀德君「『水滸傳』与說唱詞話之關係新証」<sup>百十三</sup>が水滸傳に韻文と散文が交互に現れる部分があること、錢希言『戲瑕』卷一に水滸傳には毎回冒頭に韻文があったと記されていること、文徵明が宋江の故事を聞いたと語っていることなどを根據に孫説を支持している。本邦でも高野陽子・小松謙「『水滸傳』成立考―語彙とテクニカル・タームからのアプローチ」<sup>百十四</sup>が、水滸傳に說唱で常用される語彙や常套句が頻出する部分があるとの分析結果を出している。

文献が現存しないことが即存在しなかったこととはなら

<sup>百十三</sup> 紀德君「『水滸傳』与說唱此話之关系新証」(『广州大学学报(社会科学版)』第十一卷第三期、二〇一二年)

<sup>百十四</sup> 高野陽子・小松謙「『水滸傳』成立考―語彙とテクニカル・タームからのアプローチ」(『中国文学報』第六十五冊、二〇〇二年)

ないが、語り物として流行していたためその期間の文獻が存在しないという考えはたしかに合理的である。文字に固定されない以上その内容は不斷に變化を續けていただろうし、その變化も單線的、一方向的なものではなく多様性をもつものであったにちがいない。その一部が最終編纂者によつて採用され、水滸傳に残つたのである。

同様の環境で流行した物語は人物や故事の類型のみならず、語り手や聞き手の嗜好、思想、知識まで共有する可能性が高い。そして、数少ないながらも語り物を材料とした出版物が参照できる。元代に刊行された「全相平話」シリーズ、『新編五代史平話』および明成化年間に刊行された説唱詞話シリーズである<sup>百十五</sup>。なかでも説唱詞話の刊行時期は宋江集團物語の空白期と重なり、注目に値する。刊行されたのは實際に演じられた数々のバリエーションのひとつにすぎぬであろうし、讀書に適するよう整理を経たものである<sup>百十六</sup>。語りのさまを伝える貴重な資料であるには違いない。

陳松柏は元代に『全相平話宋江』が出版されていたと主

張し、具体的に回数と回目まで推測している。しかし葉德輝は、元代の評話、平話は宋代の講史にたつたもので、内容は歴史物語に限定されると述べている<sup>百十六</sup>。既に発見されている全相平話シリーズはすべて歴史を軸に構成されている。これらの状況から、史書をまったくと云つてい

いほど引用できない宋江集團物語が單獨で平話として出版されていたとは考えにくい。また、全相平話も五代史平話も、物語の單位に「回」は用いない。「回」は明中期になつてから用いられた比較的新しい單位であろう。陳松柏の論は水滸傳元代成立説（「宋江平話」をもつて成立する）と明代成立説（最終編纂をもつて完成とする）とを兩立させるための苦肉の策と言える。『宣和遺事』が出版されているように、あるいは葉德輝が「宋徽宗花石綱、秦檜東窗事犯等」が語られていたと推測するように、宋江を主人公とする物語ではなく、北宋末の歴史を語るなかで部分的に宋江が登場する書籍はあつたかもしれないが、それではとも水滸傳の核にはなりえない。

これに對して成化説唱詞話は、史書の裏づけがない、あ

るいは史書に合致しない荒唐無稽な要素で構成された物語である。それが実際に刊本の形で残っているのだから、宋江の説唱詞話も印刷され、知識人の目に觸れることもあったかもしれない。

「三國志演義」にほんのわずか顔を見せる關索なる人物がいったい何者なのか、説唱詞話が出土するまではほとんどそれを知る手がかりはなかった。それは知識人の著す史書、筆記などには見えないからであった。説唱詞話によってようやく關索の傳説がくわしくわかるようになったのである<sup>百十七</sup>。そしてこれが民間傳承であることがわかると、地方志など、民間傳承を反映しやすい資料に關索に関する記載が散在していることもわかってきた<sup>百十八</sup>。成化説唱詞話は官人の墓地から出土しているし、花關索や楊文廣の説唱詞話を好む知識人がすくなくあつたことをうかがわせる資料もある<sup>百十九</sup>。成化説唱詞話のように印刷されたものを讀んだ知識人もあつただろうが、讀書記録などは残すに値しない、程度の低いものと考えていたのだろう。宋江

集團の説唱詞話が刊行されていたとしても、知識人がそれを記すことはありえなかった。知識人にとって、宋江集團について記した、書きとめるに値する資料は依然『癸辛雜識』『宣和遺事』止まりであつた。記録するに値する文獻をもたなかった宋江集團の物語は、それゆえに定型を得ることなく不斷にその形を変えていたはずである。そもそも語り物自体がそのような性質をもつ藝能である。宋江集團の説唱詞話が印刷されていたとしてもそれはさまざまなバリエーションのなかのひとつが偶然文字となっただけであり、その後語られる話の筋書きを固定化することはなかっただろう。定型を有さず、演じられる場所・時間・聴衆・語り手など諸要素に應じて變幻自在にさまざまなエピソードが生み出されていったこの文獻空白期が水滸傳の「自然形成期」である。この時期に形成された物語のなかで、最終編纂者の眼鏡にかなったものが水滸傳編纂の核になったのであろう。その物語はいかにして形成されたのか。まずはこの件から考えていきたい。

<sup>百十七</sup> 井上泰山・大木康・金文京・氷上正・古屋昭弘『花關索伝の研究』（汲古書院、一九八九年）Ⅰ「解説篇」一「成化本説唱詞話について」（金文京）

<sup>百十八</sup> 『花關索伝の研究』Ⅲ「資料篇」（大木康）  
<sup>百十九</sup> 宮紀子「花關索と楊文廣」（『汲古』第四十六号、二〇〇四年）

## 第二章 宋江形象演變考

### 一・主人公宋江

水滸傳の編纂にあたりもつとも重要なことのひとつが、全體の軸となる主人公、宋江のエピソードを完成させることにあつたことは想像に難くない。この際最終編纂者は史書や『宣和遺事』なども参照したであろうが、それだけではとても十分な材料とは言えない。核となつたのは語り物として廣まっていた宋江の物語であつただろう。當時、宋江の物語は無數に存在していたはずだが、編纂者が選び出した宋江像は史書や『宣和遺事』から想像されるものとは大きな徑庭がある。この宋江像はいつたいいかにして成立したのだろうか。また、なぜ編纂者はこの宋江像を採用したのだろうか。

### 二・宋江像の變遷

水滸傳前史の資料群から宋江の人物形象に關わる部分を抜き出してみると次のようになる。

まず、史書では盜賊集團の首領の名としてあげるのみで、宋江その人についての評価はほとんどない。わずかに『東都事略』に「其材必過人」という人物評があるが、具

體的な人物像を想起させるようなものではない。

『醉翁談錄』の語り物の題目には宋江らしきものも、宋江集團らしきものも見當たらなない。

「宋江三十六贊」においてようやく當時傳えられていた宋江の人物像の一端がうかがえる。その序文は、宋江は柳盜跖に迫る能力があるが僭稱はしなかつた、ひどいのは事理もわからず災厄をまきちらす乱臣賊子のほうだと述べ、「與其逢聖公之徒孰若跖與江也（「聖公」の連中に出くわすぐらいなら盜跖や宋江のほうがましではないか）」と結ぶ。宋江個人については「不假稱王 而呼保義 豈若狂卓專犯諱忌（假りて王を稱さず保義と呼ぶ。豈に狂卓のごとく専ら諱忌を犯さんや）」と言う。龔聖與は宋江を積極的に肯定してはいない。董卓のように天子を輕んじ名分秩序を亂す企みのないだけでしたと、奸臣批判の引き合いにしているにすぎない。「橫行天下、侵暴諸侯、穴室樞戶、驅人牛馬、取人婦女、……萬民苦之（天下に橫行し、諸侯を侵暴し、室を穴し戸を枢し、人の牛馬を驅り人の婦女を取

り、……萬民之に苦しむ」という盗跖と併稱している以上、宋江もまた猖獗を極めた盗賊の首領なのである。

『宣和遺事』ではもう少し詳しくわしく宋江の個人像がうかがえる。鄆城縣の「把筆司吏」（文書係の下吏）であつた。

義兄の晁蓋が逮捕されるとの情報を本人に通知し逃亡させる。娼妓の閻婆惜とその間男を殺し逃亡する。官兵が逮捕に来るも九天玄女の廟に隠れて助かる。九天玄女より天書を賜り、その記載に従って人を集め梁山泊にのぼる。晁蓋が死んでいたため跡目をついで首領となる。三十六人の手下を率いて州縣を掠奪し、放火殺人をはたらく。朝廷の招安を受け方臘征伐に従う。

元人雜劇には宋江を主役としたものは現存しない。現存する梁山泊もの元人雜劇ではどの劇でも宋江は冒頭に登場し、自身の経歴と梁山泊の威容を語る。その内容はおおむね同じである。姓は宋、名は江、字は公明、綽名は順天呼保義。もと鄆城縣の押司。天下の英雄と交際するのを好む。酔って娼妓の閻婆惜を殺し、燭台を蹴飛ばして役所を焼いた。押送の途上晁蓋らに助けられ、梁山泊第二の頭領となった。晁蓋が陣没するや頭領の座を引き継ぐ。手下を

率いて放火殺人をはたらいている。『宣和遺事』と似た部分が多いが、これは明代に『宣和遺事』系の物語の影響を受けて書かれたゆえであると考えられる。

ここからうかがえる宋江の人物像は、血の氣の多い、凶悪な人物といったところであろう。

呉從先「讀水滸傳」には閻婆惜殺しについては書かれていないが、罪を得て江州に流される途上梁山泊の強人に救われ頭領の座におさまったという筋はほぼ変わらない。

水滸傳において宋江は大きく姿を變えて現れる。初登場の描寫は次の通り。

那押司、姓宋、名江、表字公明、排行第三、祖居鄆城縣宋家村人氏。爲他面黑身矮、人都喚他做黑宋江。又且于家大孝、爲人仗義疎財、人皆稱他做孝義黑三郎。

その押司、姓は宋、名は江、字は公明、排行は第三、代々鄆城縣宋家村の人。顔は黒く背は低く、人はみな黒宋江と呼ぶ。家にあつては孝子、人となりは仗義疏財、人はみな孝義黒宋江と呼んでいる（第十八回）



これまで見えなかった要素ばかりである。このほか個人像が窺える言動として、豪傑との交際を好む、慈悲深いことから及時雨とあだ名される、閻婆に棺桶代を與え、謝禮として娘の閻婆惜を妾に贈られる、晁蓋が逮捕されるとの通知を受け、義兄弟の誼を重んじて晁蓋に知らせる、梁山泊との關係を告發すると閻婆惜に脅されてもみ合いになり殺してしまう、逮捕され護送の途上晁蓋らに救出されるが朝廷への忠と父親への孝を理由に仲間入りを斷り刑に服す、梁山泊入り後も忠を訴え、朝廷への歸順を目標とする、などがあげられる。これ以前の宋江と表面上似通った言動もあるが、その性格には大きな違いがある。同じ妾殺しても、間男の存在に怒ったり酒に酔ったりして殺すのと、脅迫されて押し問答の末殺してしまったのではその兇悪性はかなり異なる。「一騎当千のつわものたちを統率する総大将なのだから、どんなに強いやつかと思うと、これがちつとも強くない。……頭がいいのかというと決してそうではない。……せめて見かけくらいは立派なのかというと、それもそうでない。……にもかかわらず、百七人の豪傑たち

はみな宋江を尊敬し、異論なく大将として立てている。あんなやつを大将にしておいていいのか、などと言い出す者は決していない」三、「宋江はなぜかまったく取柄のない人物に形象されている。知力や戦闘力のなさはいたしかたないにせよ、……風采も『面黒身矮』と、まったくあがらない」三と言うとおり、亂暴者どころかむしろひ弱な印象すら與える、一見盜賊の親玉にふさわしくない人物になっているのである。とはいえ、そのような人物像を編纂者があえて採用したこともまた事實である。そこにはいかなる意味がこめられているのだろうか。

### 三・宋江故事流傳環境

この宋江の人物像が誕生したと思われる元末から明中期はちやうど水滸傳前史の文獻資料空白期にあたっており、その大轉換の様子を詳しく知ることはできない。しかし、宋江の傳承そのものを見ることはできないとはいえ、時代や種類の近い資料を参照して語り手、聞き手に好まれた主人公像を観察することを通じ、宋江像の轉換の原因の一端

二 高島俊男『水滸傳の世界』二「総大将宋江」二十一〜二十五頁

三 大塚秀高「瘟神の物語―宋江の字はなぜ公明なのか」(宋代史研究会編『宋代の規範と習俗』汲古書院、一九九五年)

を推測することは可能であろう。

たとえば、同時期の語り物である説唱詞話で活躍する花關索について金文京は、ユーラシアに広く見られる小柄ないし童子姿の英雄の傳説と類似点が多いと指摘する<sup>四</sup>。宋江も小柄であり、大男の李逵と對をなして描かれる點もこの小童英雄の特徴に合致する。一方で花關索らとは異なり、宋江は突出した武力も武器にまつわる神秘的なエピソードも持たない。宋江もこの傳説の影響を受けているとは思われるが、全面的に受け入れたものではない。

説唱詞話にはもう一人著名な英雄がいる。包公である。宋江と包公には「富農出身」、「三男坊」、「黒臉」、「星の轉生」、「天界、特に女神の庇護を得る」などの共通要素がある。そこで次に詞話の包公像を詳しく観察したい。

#### 四・包公傳説

『宋史』卷三百十六の包公は、名を拯、字を希仁、孝心にあつく、相手が皇族や高官であろうとひるまない剛毅な

人物とされている。のちに名裁きで有名になるが、包公の裁いた事件は一件を記録するのみである。

包公は早くも南宋期には物語に登場しているが、包公を主役とするものは残らない。『醉翁談錄』壬集卷一に見える話本「紅綃密約張生負李氏女」では最後の場面でようやく現れ、「物語の結末を団円に導く副次的役割」<sup>五</sup>を果たすにすぎず、元人雜劇でも「語り手、乃至聴衆の関心は、裁判官が誰であるかよりは、むしろ事件の推移なり顛末なりに多くかけられ」<sup>六</sup>るのが常である。包拯が事件を裁く

「合同文字記」は雜劇と話本と、二種の文體で残っている。明嘉靖年間刊行の話本「合同文字記」<sup>七</sup>では全篇の三分の二以上が事件の経緯の描寫で、包公は最後に原告の提出した證據にもとづき争いを収めるのみである。「合同文字記」雜劇では筋はもう少し詳しくなり、被告が隠した證據の文書を包拯が計略をもつて提出させるくだりがあり、包拯に活躍の場が與えられてはいるが、その人となりや生い立ちなどは見られない。これらの作品は包拯を、清廉で

<sup>四</sup> 金文京「關羽之子與孫悟空——明成化説唱詞話『花關索傳』的神話意義」(『中外文學』第十五卷第四期、一九八六年)  
<sup>五</sup> 根ヶ山徹「明代における包公説話の展開」(『中国文学論集』第十五号、一九八六年)

<sup>六</sup> 岩城秀夫『中国戲曲演劇研究』(創文社、一九七三年)「元の裁判劇における包拯の特異性」、四百六十一頁  
<sup>七</sup> 『清平山堂話本校注』中華書局、二〇一二年

公平無私な官僚として登場させるものの、一般的な清官の印象を具現化した人物として描くにすぎず、包拯個人の物語を伝えようとの意圖はなかったようである。なお、雜劇や南戲に現れる包公は、名は史書と同じく拯、字はほとんど見られないが現れるときは希文となっている。説唱詞話、『清平山堂話本』および後發の小説『百家公案』では包公、包相、包待制などと稱し名も字も現れない話が多いが、名が見える場合は文拯となっている。本稿では引用部分を除き、史上の人物を包拯、物語内の人物を包公と稱して區別する。

重要な脇役という立場を一變させ、主役として活躍させているのが説唱詞話、なかでも「包待制出身傳」、「包龍圖陳州糶米記」の二種である。説唱詞話には八種（上下に分かれるものは合わせて一種と数えた）の包公の物語が見えるが、残る六種はまず包公に関わりなく事件が発生、その後包公が事件解決に盡力するという筋書きで、活躍場面は十分にあるものの終始包公を中心に展開する話ではない。その生い立ち、人となり、容貌は「出身傳」で詳しく語られる。出生直後のさまは次の如く歌われる。

听唱清官包待制 家住廬州保信軍

离了廬州十八里 鳳凰橋畔小包村  
爺是有錢包十万 媽々称呼叫太君

……

十万親生三个子 頭生兩子甚超群  
未遇三郎生得醜 八分像鬼二分人  
面生三拳三角眼 太公一見怒生嗔

包太公一見弟三个兒生得醜陋、叫童々便抱去南山下澗水中淹殺免得后来千年之害。……大嫂拜告免把三叔淹杀。

正義の役人包待制の歌物語をお聞きなされ、住まいは廬州保信軍。廬州を離ること十八里、鳳凰橋畔小包

村。父は金持ち包十万、母は太君と呼ばれます……十

万儲けし三男子、上の二人は人なみ優れ。なんと三郎

醜く生まれ、八割化け物二割人。三つの瘤に三角眼、

太公見るなり怒り心頭。

包太公は三男が醜いのを見るや、下男に南山の谷川に

沈めて殺し、千年の害を拂うよう命じた。……大嫂は

拝して三男を殺さぬよう頼んだ。

その後包十萬は包公を畑にやった。すると太白金星が占  
い師に化けて包公の前に現れ、將來高位高官に登ること  
になると預言する。包公を救った大嫂こと汪氏はこのことを

聞き、包公に讀書をさせ、都へ受験にやる。包公は實は文曲星の轉生であつたため城隍神に導かれ、下界に謫せられていた仙女張行首に出會い援助を受ける。狀元及第し郷里に戻るが、農民の姿をしていたので誰にも氣づかれず、輕んじられる。かつての仕打ちを恨むことなく父母を拝して謝する（以上「出身傳」）。赴任の道中でも身分を明かさず書生のなりをしていたため各地で役人や權力者などに侮られる（以上「陳州糶米記」）。

これらはこれ以前の資料に見えないものばかりである。孔繁敏『包拯年譜』<sup>八</sup>が早世した兄が二人あると記しているから三郎と呼ばれていた可能性は皆無ではないが、『宋史』には「廬州合肥人」とあるのみで父母以外の家族は記されない。嘉慶八年刊『廬州府志』<sup>九</sup>卷十三「選舉表上」によると包拯の父・包令儀は太平興國年間（九七六―九八四年）に進士及第している。包拯は天聖五年（一〇二七年）の進士である。太平興國元年から天聖五年までの間、廬州治下で進士及第したものは七名ある。包氏父子以外

は、同じく合肥縣籍の馬亮（太平興國年間）、馬仲甫（天聖五年）父子と姚鉉（太平興國八年）、無為州に咸平三年（一〇〇〇年）の徐起と大中祥符五年（一〇一二年）の徐越の五名である。徐起と徐越は名に「走」を共有するのと、及第年が近いことから兄弟かいとこなのだろう。つまりこの五十二年間、廬州で進士を出したのはわずか四つの家のみであり、うち三家は二人づつ輩出している。包拯はまぎれもなく書香の家の子であり、包氏は地元で数少ない望族であつたと言えよう。少なくとも説唱詞話に描かれるような、進士及第の捷報の使者を盜賊と勘違いしてあたふたするような家ではありえない。包公の出身もまた虚構の産物である。万曆二十二年刊『包龍圖判百家公案』<sup>十</sup>は包公の物語を集大成したもので、その後の包公物語に影響を与えた。その冒頭近くに収められる「包待制出身源流」は「出身傳」詞話とほぼ同じ内容で、説唱詞話の人物形象がその後もひきつがれたことがわかる。

<sup>八</sup> 孔繁敏『包拯年譜』（黃山書社、一九八六年）  
<sup>九</sup> 『廬州府志』（中國方志叢書・華中地方・第七二六号、成文

出版社、一九六六年）  
<sup>十</sup> 『包龍圖判百家公案』（「古本小説集成二集」、上海古籍出版社、一九九一年）

## 五・包公と宋江

同時期に同様の環境で育まれた虚構の主人公が共通點を有することは、そこに同様の含意がある可能性を示唆しよう。ふたりの共通點にはいかなる意味があるのだろうか。

### 1. 天界との関係

宋江と天との関係は『宣和遺事』にすでに見える。宋江は九天玄女廟にて天書を得、忠義を行い奸邪を滅ぼすよう命を受ける。李豊懋「暴力修行…道教謫凡神話与水滸的忠義敘述」<sup>十一</sup>は、この天書に「天罡院」の語があるため、この時すでに宋江らは星の轉生とされていたと見ている。無名氏「争報恩三虎下山」雜劇<sup>十二</sup>には宋江は天上の惡魔星であると記される。しかし他の現存する雜劇には見えず、この設定が雜劇作者に共有されていたか否かはわからない。水滸傳では九天玄女が現れ、宋江は星の轉生で「替天行道を主となし、全忠仗義を従となし、國を助け民を安んじ、邪氣を取り去り正に歸す」ことが使命であると告げる（第

四十二回）など、宋江と天界との関係がよりはつきりと示される。

包公の説唱詞話でも天界との関係が明確に示される。太白金星、城隍神、玉帝、仙女の庇護に加え、二種の物語冒頭で文武の官はみな天上の星と、また他の二種では包公を文曲星の、狄青を武曲星の轉生であると唱う。各詞話冒頭の唱はすべてまず歴代皇帝の名を並べ、「約束でもあるかのように四帝仁宗が持ち出され、その有道と天下太平とが称えられる」<sup>十三</sup>。うち五種ではつづけて能臣として文の包公と武の狄青ないし楊氏（おそらく楊文廣）をあげる。包公の物語には「時代背景として仁宗皇帝とその治世の太平とを説くことが必須の前提とされていた」<sup>十四</sup>と見られる。

水滸傳「引首」でも宋太祖から仁宗までの歴代皇帝が紹介され、仁宗は赤脚大仙の轉生で、文曲星包拯と武曲星狄青が補佐役として送り込まれたことが語られる。齊言體と散文という文體の相違ゆえ字句には違いがあるが、内容は包公の詞話冒頭にそっくりである。水滸傳は冒頭こそ仁宗

<sup>十一</sup> 李豊懋「暴力修行…道教謫凡神話与水滸的忠義敘述」（『人文中國學報』第十九期、二〇一三年）

<sup>十二</sup> 王季思主編『全元戲曲』第六卷（人民文學出版社、一九九〇年）

<sup>十三</sup> 澤田瑞穂『四帝仁宗有道君——明代説唱詞話の開場慣用句について——』（『中国文学研究』第四期、一九七八年）

<sup>十四</sup> 澤田瑞穂『四帝仁宗有道君——明代説唱詞話の開場慣用句について——』

の時代であるが舞台はまもなく徽宗の治世に移り、そのまま最後まで物語が展開される。それゆえ仁宗の降誕傳説や包拯と狄青の傳説について詳しく語る必要などなさそうに思える。宋代の故事を語るのに必須の要素なのかといえ、そうでもないようである。『三遂平妖傳』<sup>十五</sup>の物語はまさに仁宗の治世にはじまるが、「さて大宋仁宗の時代に：」と言うのみで時代背景の説明はない。『楊家府世代忠勇演義志傳』<sup>十六</sup>では物語の途中で仁宗が即位するや儂智高の亂が起きる。ここで討伐の將としてまず狄青、次に楊文广を推薦するのが包公だが、脇役にすぎず、文曲星の傳説などには言及されない。討伐終了後の八卷冒頭でも「さて仁宗の在位四十一年間、英宗の在位四年間、國は太平で民も安らかであったが：」とあるばかりで、悪役となっていない狄青はともかく、仁宗や包公を稱える一言半句もない。『大宋演義中興英烈傳』<sup>十七</sup>は冒頭に天地開闢以来の歴史を述べる説唱詞話と同じ一句七言の詩を置くが、宋太祖の事績を歌ったところで終わり、本文の徽宗の失政につづく。

<sup>十五</sup>『三遂平妖傳』（「古本小説叢刊第三十三輯」、中華書局、一九九一年）

<sup>十六</sup>『楊家府世代忠勇演義志傳』（「古本小説集成第四集」、上

これらはいずれも明代後期に出版されたもので、それ以前も仁宗や包公は語られていなかったと斷言することはできないが、少なくとも小説に採用されていないのは事實である。もちろん物語の展開上不要だからであろう。同様に物語展開には関係ないはずの水滸傳が、冒頭で丁寧仁宗と包公の傳説に觸れ、それが明末に刊行された本にまで残っていることにはなんらかの理由を想像せざるを得ない。

それは第一に物語世界構造の類似ゆえであろう。兩者とも、宋代に天から下された星の生まれ變わりが皇帝を輔佐せんと努めるという設定を持ち、包公には張行首、宋江には九天玄女という女神がその後押しをする。根ヶ山徹が、包公物語の太白金星や玉帝、宋江にとっての九天玄女、毘沙門天の化身・托塔天王晁蓋のような虚構成分がストーリーを展開させるのは當時の風潮であったと述べるように、構造自体に直接の模倣関係はないのかもしれない。しかしわざわざ冒頭の紙幅を割いて他の物語の人物を説明する行為には、その知名度を利用しようという意圖がうかがえま

海古籍出版社、一九九二年）  
<sup>十七</sup>『大宋中興演義』（「古本小説叢刊第三十七輯」、中華書局、一九九一年）

いか。これが理由の第二である。水滸傳は楚漢、三國、説唐、五代、楊家將などさまざまな物語の人名、エピソードを引用したり、その登場人物の子孫を登場させたりする。宋江の物語はこれら英雄の物語に比べて知名度も人氣も劣るものであり、それゆえ有名人ゆかりの人物を登場させて聴衆をひきつけようとしたり、他の物語の英雄を引き合いに出して登場人物の容貌や性格を想像しやすくしたりと工夫をこらしたのだろう。引首に關しても同様で、すでに有名であった仁宗と包公を借りてこれから展開する物語世界の構造を理解してもらおうとしたのではないか。

## 2. 容貌——黒臉

第六十八回で梁山泊の頭領に推された宋江は、自分が頭領にふさわしくない理由の第一に「色黒で背が低く不格好」を挙げる。水滸傳には宋江の容貌を「黒」、「矮」、「胖」と形容する例が多出するが、その多くは宋江だと氣づかぬ人物や敵對者の口から罵語として吐かれる。だからこそ宋江と知りながら面と向かって「山東黒宋江」と言っ

た李逵は、粗野だと叱責されるのである（第三十八回）。

他の人物を見ると、盧俊義が「九尺の體驅、銀のごとく凜」として」と正反對の姿であるほか、「身長八尺、腰周り十圍」（魯智深）、「身長八尺」（林冲）は背の高さを、「銀の器のような顔」（史進）、「全身雪のような肉體」（燕青）は真っ白な皮膚を稱えられている。これらが豪傑らしい容貌だというのだから、本人の辯である以上幾分かの自己卑下も含まれているにせよ、豪傑の間ではとても誇れぬ容貌であったことは疑いない。宋江はことさら豪傑らしくない姿に設定されているのである。黒い顔については大塚秀高が黒臉の道教神・趙公明がモデルであるという説を唱えている。雜劇でも宋江の字は公明となっているが、黒臉と考えられていたかはわからない。

現在の戯曲、ドラマなどでは黒臉で知られる包公だが、元雜劇の時點で黒臉で演じられていたことを示す確實な證據はないという<sup>十八</sup>。説唱詞話でも黒いと言われることはなく、『百家公案』に至ってようやく「黒臉」、「黒漢」と明記される（第七十四回公案「斷斬王御史之賊」）。とはいえ

<sup>十八</sup> 阿部泰記『包公伝説の形成と展開』（汲古書院、二〇〇四年）第一章「民衆から生まれた清官」第一節「剛毅な醜貌の

三男坊、黒面伝説」三「明の説唱詞話と演劇」

「包龍圖斷白虎精傳」詞話には「從來只道包清正、元來却是麴烏盆」、「張龍李虎將言罵、相公正是面烏盆」（傍線は筆者による）との文言が見える。「清正」に對しての「烏盆」であるから「能なし」、「理不盡」といった罵語なのだろうが、「烏帽」、「烏雲」などのように、「烏」は「黒」を表す語としてもよく用いられる。「麴」は「面」に通じよう。根ヶ山徹によれば成化說唱詞話は一度に刊行されたのではないそうであるから、他の物語でどうであったかはわからないが、「斷白虎精傳」詞話の語り手は包公は黒い顔だと考えていたのだらう。よしそうでなくとも、聴衆が「烏」から黒臉を想像することは十分にあり得ただろう。

吳真「紅黑臉譜与戏曲角色类型化的形成」<sup>十九</sup>によれば黒臉は祭祀演劇に發する。黒は本來、病、恐怖、醜さなど人が恐れるものの象徴であり、ゆえに瘟神は黒臉で演じられた。その後、疫病から護ってくれるよう人々が瘟神を崇拜するようになったため黒臉は邪を拂う意味を獲得し、驅邪の神に黒臉が多くなった。鍾馗、趙公明などの神仙、張飛、周倉などの武將がそれであり、包公は數少ない黒臉の

文人であるという。人々を害する悪人を罰する包公は驅邪の神の投影であるとも言えよう。水滸傳第百回で宋江は死後廟に祀られ、「人々は四季祭祀を絶やさず、梁山泊では風を祈れば風、雨を祈れば雨が得られた。楚州蓼兒洼もまた靈驗あらたかであつた<sup>二十</sup>」という民衆の神となった。大塚秀高もまた、黒は病の象徴ゆえ瘟神は黒臉なのだと考へ、本疫病をまき散らし人々を懲らしめる役割だった瘟神が、その病を自らの體で引き受けることで人々を守る「善なる瘟神」へと變化したと論じた。包公は強い力を持つ驅邪の神、宋江は人々を守る心優しい神とその表情は異なるものの、いずれも瘟神のもつさまざまな顔つきのひとつであると言える。黒臉は二人が神となり得る存在であることを暗示しているのである。

### 3. 容貌二——貴相

小川陽一によれば、明代の占卜書と照らし合わせると宋

<sup>十九</sup> 吳真「紅黑臉譜与戏曲角色类型化的形成」(『民族艺术』二〇〇一年第三期)

<sup>二十</sup> 「百姓四時享祭不絶。梁山泊内祈風得風禱雨得雨。又在楚州蓼兒洼亦顯靈驗。」



江の顔は「大富貴」の相にあたる<sup>二十一</sup>。聴衆のなかにはそれに氣づく者もあつただろう。

包公の状況もこれによく似る。父は顔の醜さを嫌ったが、汪氏は「兩耳は肩まで垂れ、齒は銀のよう、鼻すじまつすぐ口は四角で額は広い、國家太平の相<sup>二十二</sup>」という貴相であると見抜いた。同様に占卜書と照合してみるとその見立て通りで、『新刻天下四民便覽三台萬用正宗』<sup>二十三</sup>卷三十「相法門」には「肩まで垂れた耳」は「天下第一人、大貴」の、「四角い口」は「厚祿を食み、富貴にして榮華」の相だとあり、『新刊校正増釋合併麻衣先生人相編』<sup>二十四</sup>卷二も「肩に垂れた耳は大貴、天下一の人」、「方口は貴相、厚祿を食む」と記す。そもそもこれらの書を徴せずとも「肩まで垂れた耳」と聞けば即座に劉備を想起する人は多かつたろう。『三國志』<sup>二十五</sup>卷三十二「蜀書」「先主傳」は「顧れば自ら其の耳を見る」とするのみだが、『三

國志平話』<sup>二十六</sup>卷之上で初めて劉備に出會った張飛は「盛り上がった鼻、小さくつりあがった目、肩よりも垂れさがる耳、手は膝の下まで届く、親分にすべき相だ」と言う。劉備の容貌も語り物において定着し、廣まったものなのだろう。汪氏や張飛の臺詞はこの人物が出世をとげることを聴衆に早めに知らせておく効果をもつ。一見奇妙な外見ながらわかる人にはすぐわかるという場面は、うわべのみで判断する人物の見る目のなさをも浮かび上がらせたことだろう。また、「鼻すじまつすぐ口は四角」は水滸傳の魯智深の容貌「丸い顔に大きな耳、鼻すじまつすぐ口四角」（第三回）と共通する。魯智深は酒を飲み肉を食らう破戒僧であるが、非業の死をとげる多くの豪傑と異なり、自ら死期を悟るや坐禅を組んだまま死んで行く、神秘的な最期をとげる人物である。

しかし包公の容貌にはいささか疑問も残る。「三角眼」

<sup>二十一</sup> 小川陽一『日用類書による明清小説の研究』（研文出版、一九九五年）第三篇「明代小説と占卜」第一章「明代小説における相法」

<sup>二十二</sup> 「兩耳垂肩齒似銀 鼻直口方天倉滿 面有安邦定國紋」

<sup>二十三</sup> 『新刻天下四民便覽三台萬用正宗』（明代通俗日用類書集刊6、西南師範大學出版社、二〇一一年）

<sup>二十四</sup> 『新刊校正増釋合併麻衣先生人相編』（劉永明主編『四庫未收術數古籍大全』第七集(三)、黃山書社、一九九五年）

<sup>二十五</sup> 『三國志』中華書局、一九五九年

<sup>二十六</sup> 『歷史通俗演義 全相平話武王伐紂書・全相平話樂毅図斉七国春秋後集・全相秦併六国平話・全相平話前漢書統集・全相平話三國志』國立中央圖書館編印、一九七一年

は『麻衣先生人相編』巻二で「目が三角の者は必ず悪」とされる凶相なのである。これはどういうことであろうか。たとえば『董解元西廂記』<sup>二七</sup>巻二で寺を襲撃する孫飛虎は「眼は三角で鼻は大きく唇は厚い」と描寫される。確かに強暴な悪人役である。ところが『漢天師世家』<sup>二八</sup>巻二では初代天師張道陵が「大きな眉に広い額、赤い頭に緑の瞳、盛り上がった鼻すじに四角い顎、目は三角、美しいひげ、手は膝より下にとどき、すわる姿は龍、歩くさまは虎」と記されているのである。著者は第四十二代天師の張正常で、祖師をことさら凶相に描く必然性もない。案ずるに目が三角とは鋭い目つきということであろう。刺すような眼光は人に力を感じさせる。幼いころから勉學に励み、厳しい環境での修行に耐えた張天師の強靱な精神力が「三角の目」に表れ、それが悪人の目つきと一致したということなのではないか。神將を召喚して驅邪、治病、祈雨などを行う雷法は元明期には正統な道教の法術とみなされ盛んに行われたそうだが、その雷法を掲載する『清微元降大

<sup>二七</sup> 『董解元西廂記』（人民文學出版社、一九六二年）  
<sup>二八</sup> 『漢天師世家』（『中華道藏』第四十六冊、華夏出版社、二〇〇四年）

法』<sup>二九</sup>には羅元札（卷十三「九天煙都太乙五雷」）、楊顯（卷十七「二楊真君召用符」）など「三角目」を有する神將が見える。神將は強い力を有していなければ役に立たないのだから眼光鋭い恐ろしい顔とされるのも道理である。悪は力と密接な関係にある。腕力にせよ權力にせよ、これをもつて無辜の人を害すれば悪となる。ベクトルが逆を向き人々に害をもたらすものと戦えば守りの神となる。力は二面性をもった諸刃の劍である。さらに卷二十三「上清西靈宏元大法」の趙公明もまた「赤黒い顔に盛り上がった眉、三角の目」である。かつて瘟神であった趙公明は元明期には元帥神の一員として民間で盛んに信仰された。瘟神もまた、病で人を苦しめるか、病から人を守るかという二面性をもつ存在であった。同様に「三角眼」をもつ曹操<sup>三〇</sup>は「治世の能臣、乱世の奸雄」であり、これも二面性の表れのように思える。包公は決してにこやかに人民を見守る福の神ではない。犯人と疑うや「三尖眼」をつりあげて「皮膚は破れ、全身血まみれ」になるまで拷問をつづけ自

<sup>二九</sup> 『正統道藏』第六冊（新文豐出版公司、一九七七年）  
<sup>三〇</sup> 小川陽一『日用類書による明清小説の研究』第三篇「明代小説と占卜」第一章「明代小説における相法」

白を迫る、暴力の行使者である（「歪鳥盆傳」）。包公の父は人を害する凶悪な力の表れと見誤ったが、實は畏怖すべき正義の味方になる貴相だったのである。

宋江には攻撃的な面は目立たない。大塚秀高は宋江と李逵が正と負の力を分け合っているのだと述べる。金文京が指摘する、小童英雄の物語にしばしば現れる大きな體、負の力を持つ大男というのもまた李逵に符合する。李逵のおかげで宋江は二面性を背負わずに濟み、明確な貴相に収まったのだろう。この正負の力の分け合いは、屈強な盜賊の親分からひ弱な頭領への變化とも關わろう。

#### 4. 家庭——富農の三男

作中人物のさまを想像するには家庭環境、生育環境も重要な情報となる。宋江の出身地は史書、「三十六贊」では全く語られない。『宣和遺事』、雜劇では鄆城縣の下吏であることから地元出身者であることが知れる。『宣和遺事』では縣城内出身ではないこともわかる。兄弟は影も形も見えない。

水滸傳に至り設定は俄然詳細になる。宋家莊出身で單身鄆城縣に勤めに出ている。郷里では父・宋太公と弟の宋四郎こと宋清が「農業にはげみ、田畑を守る」生活をしてい

る。第二十二回、殺人を犯した宋江が宋家莊の家に逃げ込んだ際、四十あまりの兵が家を取り圍み二手に分かれ搜索をした。その際都頭の朱仝は兵に氣づかれることなく佛堂の地下に隠れていた宋江を見つけ、ことばを交わしている。宋家は廣大な敷地を有していることがわかる。

初登場時に「排行第三」と明記され、「宋三郎」とも呼ばれる宋江だが、宋清以外に兄弟は現れない。同姓で年上のいとこが二人いると考えることはできるが、なぜわざわざ「第三」と知らせる必要があるのか。兄弟もいとも姿を見せないにもかかわらず三郎であることを強調するのは何か意味があるのではないかと考える所以である。

包公の家庭環境は具體的に描かれる。「家有水田三千頃 每雇長工千百人 好養耕牛千百个 鳴鑼便是放牛人（家は有水田三千頃、住み込み下男は千百人、養う耕牛千百頭、銅鑼を鳴らすはこれ牧童）」（「包待制出身傳」）。豪農と言つてよい。二人の兄も登場する。父は兄二人には讀書をさせながら包公には放牧、刈入れなどの勞働をさせた。ところが科擧に及第したのは包公であった。包公は「陳州糶米記」で「江南八十一州轉運使」、「西川五十四州都督使」等の高官に任じられる。包公が得た官には現實と虚構の官職が入り混じっている。「江南八十一州」、「西川五十四州」

は正史に見えない語であるが、『三國志演義』には見え、それぞれ孫權と劉備の支配領域を表す。その地域の王や帝であることと、轉運使なり都督使という官であることには雲泥の差があるが、三國の物語に親しんでいる聴衆がその影響力の廣さを想起しやすい語を用いたのだろう。實の父にすら虐げられる末っ子から、「天下第一人」への躍進という筋書きはある故事類型を想起させる。「發跡」故事である。

## 六・飛黃騰達

故事類型「發跡」は貧しかった人、身分の低かった人、能力を認められなかった人が苦勞のすえ高貴な地位に昇りつめたり名譽を手にしたりする筋書きを有する。本稿では、当時發跡故事に分類されていたり話の中に發跡の語が現れたりしていなくともこの筋書きに適っていさえすれば發跡故事とみなす。「平話では智者策士、知識人、英雄が

下層出身であるのみならず、多くの帝王までもが平民の出である。帝王が平民出身であることは往々にして重要なエピソードとして描かれる」<sup>三十一</sup>、「最下層出身の遊民が一躍皇帝專制社會のピラミッド上の人となろうとしたら、いかほどの苦闘や、いかほどの傳説的な巡りあわせがあり、どれほどの權謀術數を用い、いくたび信義に背き、残忍非道な手を使えば實現できるというのか。これらすべてが刺激に富んだ通俗小説の題材である」<sup>三十二</sup>と説明されるように、發跡故事は語り物や通俗小説に廣く受け入れられた。この話柄では主人公の當初の身分が低ければ低いほど、苦勞が多ければ多いほど、また苦しいほど、物語の魅力は増すことになる。

詞話の包公はこの型にあてはまる。生家こそ富農であれ、三男として生まれ、父に見捨てられ、一族の集まりにも呼ばれないさまは繼子あるいは下僕同然の立場といえる。しかし黒臉、貴相、太白金星の預言はこのままの身分

二〇〇七年）第五章「江湖艺人与通俗文艺作品」三「早期通俗文艺作品所反映的游民生活与游民意识」3「“发迹变态”的故事」、二百七十頁

<sup>三十一</sup> 卢世华『元代平话研究——原生态的通俗小说』（中华书局、二〇〇九年）第三章「平话分析」第三節「平话的思想意识」五「渴望发迹」、二百二十一—二百二十三頁  
<sup>三十二</sup> 王学泰『游民文化与中国社会（增修版）』（同心出版社、

では終わらぬことを示している。包公の出身、容貌、天界との関係は全て發跡物語を魅力的にする要素なのである。この後いかなる危機に見舞われようとも後に成功をつかむことは約束されている。

『五代史平話』<sup>三十三</sup>「漢史平話」には劉知遠が庶民から皇帝となる發跡が描かれる。劉知遠は繼父との不仲から家出するが、その發跡すべき運命を見抜いた李長者に婿に迎えられる。しかし李長者の死後、その實の息子である義理の兄二人に虐げられ、また家を出る羽目になる。金海南

『水戸黄門「漫遊」考』は劉知遠と包公の物語の類似性に着目し、「英雄物語の同一の原型とその各要素が、ことなる歴史上の人物に投影された結果」であると言う<sup>三十四</sup>。

おなじく『五代史平話』「梁史平話」には、のちの朱全忠である朱温が父の死後兄弟三人そろって劉崇という人の家で牛飼、小作人、豚飼いとして生きていく場面があり、「唐史平話」の石敬瑭もまた家出して羊飼いをしていた身から皇帝までのしあがっている。これらもやはり身分

<sup>三十三</sup> 『五代史平話』（『宋元平話五種』河洛圖書出版社、一九八一年）

<sup>三十四</sup> 金海南『水戸黄門「漫遊」考』（新人物往来社、一九九九年）第四章「英雄伝説と神話」、百二十七、百三十六頁

秩序の最下層からの出發と言つてよい。董國炎「論《水浒传》对《五代史平話》的承袭」<sup>三十五</sup>は、朱温の故郷に近い河南や、黄巢の配下から朱温のもとに投降した部下の出身地山東などで朱温の物語が伝えられ、宋江の形象にも影響を與えたと見ている。

張真「《三国志平話》中的刘备形象」<sup>三十六</sup>は、『三国志平話』は平民階級から出世した劉備集團の興亡史であると見る。つまり平話は三国志に名を借りた劉備の發跡故事であるとも言える。

水滸傳には數多の英雄が登場するが、宋江が登場しないあるいは目立たない場面をそぎ落とせば、農家のせがれが名聲を得て盜賊の頭領に推され、ついには官軍となり、奸臣に毒殺されるも民衆に神として祀られるようになるまでの發跡故事が残る。農村出身、奇なる容貌、天の佑けなどはどれも發跡物語をいづる要素である。水滸傳が詞話の宋江像をそっくりそのまま傳えているとは限らず、削られたり改變されたりした部分も少なくないにちがいない。し

<sup>三十五</sup> 董國炎「論《水浒传》对《五代史平話》的承袭」（『明清小说研究』二〇一五年第一期）

<sup>三十六</sup> 張真「《三国志平話》中的刘备形象」（《许昌学院学报》二〇一二年第三期）

かし宋江が發跡物語の主人公であったことはうかがえよう。史書には下層の出身であったという證據の一切ない包公や宋江は、語り物として廣まるうちに發跡ものを好む趣向の影響をうけて低い階層の出身に設定されるようになったのではないか。

さらに、發跡ものの主役たちのうち少なからぬ者が共有する要素が「三郎」である。

宋江と包公のほか、朱温も三男で、「朱三」と呼ばれていた。劉知遠は實の兄弟は現れないものの、李家に婿入りしたことで事實上義理の兄二人の下の子としての待遇を受けている。そして、發跡する三男の存在は平話や詞話にとどまらない。

『雍熙樂府』卷七、『太平樂府』卷九に収められる散曲「高祖還鄉」には、漢の高祖劉邦を故郷の庶民が「劉三」と稱す場面がある<sup>三十七</sup>。『史記』、『漢書』、後世の通俗小説である『兩漢開國中興傳誌』や『西漢演義』には高祖が三男であるとは記されない。しかし司馬貞が「史記索隱」の

なかで、高祖の兄弟は長男から順に伯、仲、季と名づけられているから季は字というより名と言うべきものだとか證していることから、高祖を三男とする説もあったことがわかる<sup>三十八</sup>。高祖の事績も庶民から皇帝まで登りつめた典型的な發跡であり、「成り上がりものの三郎」のひとりと言える。むしろ元祖と言つてよいかもしれない。

ここで思い出されるのが呉從先「讀水滸傳」で宋江が亭長から身を起こしたと言っていることである。これは劉邦の發跡傳説を宋江が受け入れた痕跡ではあるまいか。劉邦の出身地沛縣は呉從先の讀んだ水滸傳で物語の中心地となっていた淮河流域から遠くない。

劉邦の建てた漢王朝を中興した光武帝劉秀も三男であった。明の通俗小説『東漢演義』および「雲臺門聚二十八將」雜劇<sup>三十九</sup>では、劉秀は追手から逃れ、途中苦境に陥りつつも奇跡的な出來事に助けられて叔父の劉良のもとに落ちのび、兄二人とともに成長したことになる。おなじく明代の通俗小説『全漢史傳』、『兩漢開國中興傳誌』で

<sup>三十七</sup> 四部叢刊廣編『雍熙樂府』（臺灣商務印書館、一九八一年）、四部叢刊正編『朝野新聲太平樂府』（臺灣商務印書館、一九七九年）

<sup>三十八</sup> 按漢書名邦字季、此單云字。亦又可疑按漢高祖長兄名

伯、次兄仲、不見別名。則季亦是名也」『二十五史1史記』（藝文印書館、刊行年未詳）卷八「高祖本紀」

<sup>三十九</sup> 楊家駱編『全元雜劇外編』（世界書局、一九六三年）所收脈望館鈔校內府本

は劉秀は景帝の血を引くがゆえに王莽に殺されそうになり、両親がみずから命を絶つなか劉秀ひとり生き延び、ころうじて叔父の劉良のもとにたどりつき、劉良の息子、つまり従兄弟二人とともに育てられる。これも廣い意味で三人兄弟の末っ子と言ってよいだろう。劉秀はもとより皇帝の血筋にあるとはいえ、朝廷を追われ、おたずねものの身からふたたび皇帝の座を奪いかえすまでの經歷は社會の底邊から頂點へという發跡故事に類似する。兩漢王朝の創業者二人がともに「三郎」であったことは、のちの發跡ものに「成り上がりもの三郎」が多いことになにかしら關係があるのかもしれない。

包公や宋江はこれらの仲間なのであろう。語り物の世界に「成り上がりもの三郎」と言うべき型があり、二人をこの型の主人公にあてはめた物語が誕生し、受け繼がれたのだと思われる。

とはいえ、三郎であることが物語内でいかなる實際的意味をもつかは判然としない。包公や劉知遠のように、三郎であるがゆえに家庭内で不利な立場に置かれたという場合もあれば、『東漢演義』や「雲臺門」雜劇のごとく兄が

命を賭して三男を守るという筋立てもある。三郎であることになんらかの具體的な意味があったものがのちに薄れてしまったのか、あるいははじめから單なる符號に過ぎなかったものかわからない。水滸傳では宋家莊にいたころの宋江のエピソードはえががれない。水滸傳が採用した宋江物語にそもそもその部分がなかったのか、あったけれども最終編纂段階で捨てられたのかはともかく、宋江における三郎の具體的效果は不明である。

「三人兄弟の末子」という題材は洋の東西にかかわらず廣く存在することがすでに指摘されている。千村涉「兄弟譚の昔話―その優劣を中心に―」<sup>四十</sup>によれば、日本にも三人兄弟を主題とした故事が多く傳わり、「末子成功譚」がそのなかの多くを占めるという。千村のまとめでは、末子成功譚の發生起因については、(一) 輕侮されがちな末子に對する弱者同情から生まれたとする説、(二) 内容の漸次的高潮を意圖した文藝的技巧であるとする説、(三) 末子相續制度の反映とする説、(四) 古代信仰における末子神聖觀が背景となつているとする説がある。本稿で觸れた三郎の發跡譚では長男次男の失敗はあまり語られない

四十 千村涉「兄弟譚の昔話―その優劣を中心に―」(『日本昔話

研究集成4 昔話の形態』名著出版、一九八四年)

め、(二)は該当しない。また、中國は傳統的に均分相續が廣く行われていたため、(三)も當たらぬ<sup>四十一</sup>。稲田浩二によれば「昔話における末子成功はかならずしもわが国固有のことではなく、海外諸民族の昔話でもおよそ同様」<sup>四十二</sup>であり、民話分析に用いられるA T分類にも六百五十四番「三人兄弟(The Three Brothers)」が一項目として立てられている<sup>四十三</sup>。「三郎」については他地域の故事との関係も含めたさらなる検討が必要であるが、この分析は本稿の任に餘る。少なくともいわゆる中國文化の範圍内で庶民出身の「成り上りの三郎」が發跡故事のひとつの型として存在することは確からしく、宋江が發跡故事の「原型とその各要素」を「三郎」もふくめてパッケージのごとくまとめて受け入れた故事が生まれ、さらに水滸傳に採用されたという一連の經過が想定できることを指摘するにとどめたい。

<sup>四十一</sup> 仁井田陞『唐宋法律文書の研究』(東京大学出版会、一九八三年)第十三章「家産分割文書(分書)」、薩孟武『水滸傳與中國社會』(三民書局、一九七一年)「梁山泊的社會基礎」參照。

<sup>四十二</sup> 『日本昔話事典』(弘文堂、一九九四年)「末子」、八百

## 七. 非暴力不服従

宋江と包公は民間の語り物の影響で發跡故事類型を獲得したらしいことがわかってきた。とはいえ、彼らの發跡物語と平話や詞話の發跡英雄たちとは顯著な違いもある。

發跡故事には文人發跡故事と武人發跡故事とがあるとされる<sup>四十四</sup>。『五代史平話』の劉知遠、朱溫、石敬瑭、『三國志平話』の劉備、說唱詞話の花關索などは武力と腕力によって出世の道を切りひらく武人發跡故事である。これに對し、宋江と包公はさしたる武力をもたない。

詞話で包公と併稱される狄青は下級武官から樞密使へ出世をとげた人物である。文曲星包公と武曲星狄青とは文武の重臣というだけでなく、道筋の異なる發跡の代表者二名でもあったのである。

文人か武人かと問われれば、包公や宋江は武人ではない。しかし二人の物語を單純に文人發跡故事とみなすのも適切ではないと思われる。

六十四頁

<sup>四十三</sup> 『日本昔話事典』「三人兄弟」、四百五頁

<sup>四十四</sup> 徐大军『中国古代小说与戏曲关系史』(人民文学出版社、二〇一〇年)第四章「元杂剧与小说关系的继往与开来」



たとえば徐大軍は南宋の小説や元雜劇における文人發跡を、不遇の文人が科擧あるいはふとしたきっかけで能力を認められ成功をつかむ筋書きであると定義しているし

<sup>四十五</sup>、洪曉銀は「早年不得志」、「才高氣大、懷才不遇」の王粲が「萬言長策」を獻じたことから「兵馬大元帥」になるという筋書きの鄭光祖「王粲登樓」を「文人發跡型故事」と稱している<sup>四十六</sup>。こうした故事は司馬相如、朱買臣など、古くから存在する。

これらに比して、宋江と包公の物語は異なる點があまりに多い。包公は科擧を通じて官僚となるが、それ以前に文人として不遇をかこっていたわけではない。宋江にいたっては科擧に應じた形跡すらない。縣吏が文人と言えるかには疑問の餘地もあるうが、武松との別れ際に浣溪沙の詞を作って贈り、酒樓の壁に「自幼曾攻經史」なる一句に始まる野望を表明した詩を書いて大騷動を引き起こし<sup>四十七</sup>、宴席で招安を願う詞を歌わせて反歸順派の反發を招くなど重

<sup>四十五</sup> 徐大軍『中国古代小说与戏曲关系史』第四章「元杂剧与小说关系的继往与开来」

<sup>四十六</sup> 洪曉銀「从文人戏《王粲登楼》看元代文人心态」（『闽西职业技术学院学报』二〇一四年第一期）

要な場面で詩詞によって心情を表現し、第三十九回の詩では自らを「自幼曾攻經史」と詠んでいる宋江は確かに文をもって自任している人物である。また、五十一回回頭の宋江をうたった詩にも「幼讀經書明禮義 長為吏道志軒昂」とあり、最終編纂者も宋江を文の人としてあつかっていることがわかる。にもかかわらず二人の物語はむしろ武人發跡に似た點が多い。人に使われ放牧や農作業をする包公の年少期や、二人のまえに立ちはだかる貪官、權勢者やその威を借る無法者、山賊や水賊などの障碍は、平話の英雄たちや詞話の花關索の物語にそっくりである。異なるのはその障碍を乗り越えるのに武藝も腕力も用いない點である。

喝起親隨手下漢 拿住供書两个人  
木棒拳頭打一頓 背剪麻繩縊定人  
二人押上泰康縣 将他下在土牢中

……

<sup>四十七</sup> この場面の宋江については、詩をもつて政治を批判したことのみならず、「題壁」という行為自体もすぐれて文人的な行為であるとの指摘もある。佐々木睦『漢字の魔力』（講談社選書メチエ、二〇一二年、第八章「浮遊する文字——漢字のトポグラフィ——」、二百十四頁）

五牢押獄忙收住 苦打凌持二个人  
便把秀才高吊起 吊起唐公院子身  
軟底麻繩硬底棒 打他二个問元因  
誰交你惱秦衙內 今朝該死在牢中

……

押獄當時忙便取 取他腰內宝和珍  
揭起衣裳看子細 只見金牌耀日明  
押獄見了痴呆定 慌忙便去解麻繩  
便請相公高処坐 低頭八拜說元因  
陳州糶米包丞相 私行來到路途  
中 耐知縣秦衙內 有眼无珠不識人  
錯把相公來拿住 今朝押在土牢中  
五牢押獄不認得 錯打龙鬚包相公  
伏望相公可怜迂 饒我殘生一命魂

書生二人をひとつとらえ、棍棒拳固で打ちすえて、後ろ  
手麻縄縛りつけ、秦康縣へひったてて、土牢の内へ坐  
らせし……五牢の押獄引き受けて、二人を厳しく打ち  
つけり、秀才（包公）高々つるしあげ、唐公（從者）  
の身もつるしあげ、柔い麻縄堅い棒、二人を打って拷  
問す、なにゆえ秦衙内にたてつけり、今日こそ牢にて  
死せるべし……（酒代をせしめようと唐公の腰巾着を

さぐる）……かの時押獄慌てて見るや、腰なる寶玉取  
り出だし、衣装をめくりとつくり見れば、ただ金牌の  
眩しく輝く、押獄見るやあつけにとられ、慌てて麻縄  
解きほどこき、相公（包公）上座へ導きて、低頭八拜申  
し開き、陳州糶米包丞相、お忍びの旅のその途中、に  
つくき知縣の秦衙内、節穴ばかりで見える目なく、相公  
殿をつかまえて、今朝は土牢に押し込めし、五牢の押  
獄つゆ知らず、誤りて打つ包相公、伏して願うは相公  
殿哀れに思ひて、この老いばれの命をどうかお助けく  
ださい（「包龍図陳州糶米記」）

この場面で包公はなんら抵抗を見せない。牢役人が包公  
の正体を知り自らひれ伏すまでじっと待つのみである。  
宋江は第三十二回から四十二回まで各地を巡り、のちに  
梁山泊入りする豪傑たちと知り合うのだが、初めは敵とし  
て相對する者も少なくない。以下は清風山の賊に捕えられ  
た場面である。

小喽囉把宋江捆做粽子相似、將來綁在將軍上。……宋江  
嘆口氣道「可惜宋江死在這里」。燕順親耳聽得宋江兩  
字、便喝住小喽囉。……「你莫不是山東及時雨宋公明。

殺了閻婆惜逃出在江湖上的宋江麼」。宋江道「你怎得知。我正是宋三郎」。燕順聽罷吃了一驚、便奪過小嘜囉手內尖刀、把麻索都割斷了。便把自身上披的棗紅紵絲襖脫下來裹在宋江身上、抱在中間虎皮交椅上。喚起王矮虎鄭天壽快下來、三人納頭便拜。……燕順道「小弟只要把尖刀刺了自已的眼睛原來不識好人」。

兵卒が宋江を粽のように巻いて將軍柱に縛りつけた……宋江は溜息をついて「あたらし宋江ここに死す」と言った。燕順は「宋江」の二字を聞くや兵卒を止め……「まさか山東及時雨宋公明だというのか。閻婆惜を殺し江湖に逃げた宋江なのか。」宋江「どうしてご存じで。私がその宋三郎です。」燕順は聞くやびつくり仰天、兵卒の手から刀を奪いとり麻縄を切つて、羽織っていた赤い麻糸の上着を脱いで宋江の体を包み、中央の虎の皮の椅子に導き、王矮虎と鄭天壽に早く下りよと命じ、三人額づき拝礼した。……燕順、「愚弟、刀でこの人を見る目のない目玉をくりぬいてしまいたいほどです……」（第三十二回）

宋江もまた抵抗せず、ただ身の悲運を嘆く。ところがその獨り言で正體がわかり、山賊たちはひれ伏す。直前まで主人公を痛めつけていた人物が一轉見る目のなさ、非礼をわびる「眼ありて瞳なし」、「泰山を知らず」などの言はこの種の場面にたびたび現れる。説唱にも身分を隠した貴人が各地を巡るいわゆる貴種流離の故事があり、それが決まり文句まで含めて用いられたのだろう。包公は朝廷の官であるから衣冠や金牌など身分を示す確かな證があるが、宋江はそうはいかない。そのため地の文で幾度も宋江の名聲は天下に轟いていると強調している。この設定ゆえ腕力によらずとも相手を屈服させられるのである。金海南は中國における貴種流離譚を、地方官が身分を隠して巡察をしているという現実的側面と、王ないし王に準ずるものが試練を経て王として再生する儀禮という神話的側面から解釋している<sup>四十八</sup>。包公と宋江は發跡は約束されているものの、人間界では生まれながらの貴種ではなく、低い身分からはいあがつて貴種の地位を手に入れ、その後身をやつして各地

を旅する。發跡故事類型に貴種流離譚を加えたような塩梅になっっていると言えよう。

包公と宋江の物語は武人發跡故事の枠組みに武力を用いない主人公がすえられたような構造をしている。これを文人發跡故事とひとしなみに扱うのは不合理であるため、むしろ武人發跡故事の亜種として「非武力式發跡故事」と稱したい。このような故事が存在するのはなぜか。

南宋の小説のジャンルに武人や無頼漢が活躍する「朴刀」、「桿棒」がある。南宋・杭州の瓦舍では武人の求めに應じて武人の好むものがたりが演じられていた。下層階級から腕一本でのしあがっていく發跡故事の主人公は、武人たちにとって自分たちのグループから生まれたスーパースターであった。また、元代に多くの文人發跡劇が書かれたのは、作家自身が不遇の文人で、自らの不満や希望を劇に込めたからであるという<sup>四十九</sup>。藝能でどのような故事が演じられるかは語り手や聞き手の立場と密接に関わる。

この考えに照らせば、詞話の包公は農村出身の人々のス

<sup>四十九</sup> 譚艳玲「论元杂剧中的文人发迹戏」『韶关韶学院学报・社会科学』第三十三卷第五期、二〇一二年）  
<sup>五十</sup> 小松謙「『現実』の浮上―「せりふ」と「描写」の中国文学史」第七章「『現実』の浮上」、二百十四頁

ターとして形象されたことになる。また、詞話では婦人の活躍も目立つ。花關索傳では鮑三娘が活躍するし、包公の詞話でも山賊の娘、謀殺された夫の恨みを雪ぐ妻、夫とはぐれ苦難に遭う妻が重要な役割を担う。唱部分の主要な形式である一句七字が、女性が主な担い手であった彈詞に通じることも受容者に女性がいたことを想像させる<sup>五十</sup>。包公手下の吏卒、科擧を志す書生とその家族が好意的に描かれることから、こうした人々も聴衆であったかもしれない。宮崎市定は「水滸伝の中の古い部分は、語り物や戯曲となつて大衆を相手に演ぜられたもので、それはなんととしても大衆の共感を引かなくてはならない。……その大衆の中には胥吏たちが時に混っていることがある」と考え、その胥吏たちは「地方的な存在」であるがゆえ、宋江の全国的な名聲は「狭小な地方ギルドの構成員の、全国的な交際網をもつ官員ギルド会員に対する羨望の情」が生み出したものと解釋している<sup>五十一</sup>。

雜劇では田舎の者、下層階級の者は往々にして滑稽な存

<sup>五十一</sup> 宮崎市定『宮崎市定全集12水滸伝』Ⅱ「水滸伝―虚構のなかの史実―」第七章「戴宗と李逵」、二百九十～二百九十一頁

在として描かれる<sup>五十二</sup>。しかし詞話は包公自身に堂々と

「我是庄農出身（わしは農民の出である）」（「師官劉都賽上元十五夜看燈傳」）と語らせる。農村出身者が滑稽な役

柄であるとの氣配はない。雜劇と詞話には共有する題材もあるのだが、語り手の意識は相當に異なるのである。これに對し「太郡夫人将言罵 便罵包公老畜生 你爺在庄為保正 阿娘織布摘桑人 大哥在庄開解庫 三哥西庄賣酒人（太郡夫人罵りて、老いばれ畜生包公め、おまえの父ちゃん村の庄屋、母ちゃん布織り桑をつむ、長男村で質屋稼業、次兄は村で酒を賣る）」（「包龍圖斷曹國舅公案傳」）のごとく、上層階級の者がいなかの農民であることを理由に包公を見下す場面がある。『三國志平話』の劉備も落ちぶれた家の出であることで敵役に侮辱される。彼らはいわば下層階級を代表して侮辱を受けているのである。

主人公が敵役にとるに足りないものと侮られて罵られる、殴られる、金品を脅しとられる、殺されかけるといった場面は包公の「出身傳」、「陳州糶米記」詞話につごう四度、宋江が各地を巡る過程で六度見える。正體が明らかに

なるや、ある者はひれ伏し、ある者は手痛い懲らしめをうける。事件のきっかけは主人公からの挑発である場合もあり、不條理と言えば不條理なのだが、庶民出身者が貪官汚吏、權勢者、無法者、賊などを平伏させるのは聞き手にとって痛快な場面であつたろうから、立場が逆轉した後との落差が目立つよう、敵役がより居丈高になる筋書きを用意したのでらう。主人公の出身、好意的に語られる人物、敵役などの要素から見て、包公や宋江の物語は農民、書生、吏卒などの「平民に語った物語」の性質を持つ。聴衆は、壓倒的な腕力も武藝もない平民が一躍發跡を遂げ、自分たちでは太刀打ちできない、日ごろいばり散らしている連中をやりこめる非武力式發跡の物語を楽しんだのであらう。包公は科擧で高官になるという正統派路線、宋江は江湖の好漢を集める非合法路線という違いはあるが。語り物で下層階級からの發跡が好まれたため、實在の人物の物語も、本來の人物像や史書のから離れて發跡故事となることが少なくかつたのだらう。包公と宋江はこの發跡英雄の大家族のなかでも、「成り上がりもの三郎」、非武人という特徴

五十二 林雅清『中国近世通俗文学研究』（汲古書院、二〇一一年）第二部「元雜劇研究」第六章「『黑旋風双献功雜劇』の

喜劇性」

までも共有するきわめて近い関係にあると言えよう。

## 八・貴人の流浪

發跡故事のなかによく現れる要素のひとつに貴種流離譚があった。ここでこの類型についても少し考えておきたい。

貴種流離譚とは、本來高貴な身分であつたが一時的にその身分を失っている人、あるいは將來高貴な身分を得る運命にあるものの現在には卑賤な身分にある人が各地を流浪し、さまざまな難に遭いながらも最後には高貴な身分を回復ないし手に入れることで立場が一變するという故事類型である。貴種流離譚において主人公が下賤な身分にある時期に遭遇する苦難は、その人物が神性を手に入れる、ないしは回復するための通過儀禮であるのだという<sup>五十三</sup>。この神性の回復と通過儀禮はすぐれて神話的なもので、知識人向け読み物として整理された明後期の白話小説では印象を薄められているが、語り物の面影を濃く残す文獻ではその

様子がよくうかがえるという。

その例として金文京、小松謙があげるのが光武帝劉秀の傳説である。

小松謙は、劉秀をえがいた明後期の通俗小説『兩漢開國中興傳誌』、『全漢志傳』、『東漢演義』および雜劇「雲臺門聚二十八將」の冒頭、王莽の追手から命からがら逃亡した劉秀が登場する場面の描寫は史實とかけはなれているうえに設定は不自然かつ荒唐無稽で、あとにつづく物語との關連性もうすく、全書のなかでほとんど孤立しており、「よそから借りてきて付け加えられたもの」のようになっていくことから、民間傳承が中途半端にとりこまれ、殘存したものであると言う<sup>五十四</sup>。朱介凡の調査を見ると、たしかに地方志や中國各地の傳承に、劉秀の逃亡にまつわるさまざまな言い傳えが無數にあることがわかる<sup>五十五</sup>。また、この傳説がまとまった形で残っているものとして金文京、小松謙が注目しているのが敦煌變文「前漢劉家太子傳」である。ここには、劉秀が名を變えて隠れ住んでいたこと、布

<sup>五十三</sup> 金海南『水戸黄門漫遊考』第四章「英雄伝説と神話」、百三十五～百三十六頁  
<sup>五十四</sup> 小松謙『中国歴史小説研究』（汲古書院、二〇〇一年）

<sup>五十五</sup> 第四章「劉秀傳説考」、九十七～九十九頁  
<sup>五十六</sup> 朱介凡『『王莽趕劉秀』傳説的分析』（『俗文學論集』、聯經出版、一九八四年）

鼓の奇跡により王莽から逃亡し得たこと、土中にもぐって追手を免れたことなどが語られている。これらはみな劉秀が皇帝としての身分を回復するための試練とみなされる

五十六。

宋江の物語にも貴種流離譚の要素がある。罪人として護送される途上、ちびで色黒で金持ちの流刑者とあなどられ、幾度も殺されかける。その後、かの有名な宋江であると知れるや、迫害していたものはあわててひれ伏し、罪を謝す。

金文京によれば「變装」、「變身」は王者への變身、あるいは王性の回復の象徴として貴種流離譚に缺かせない要素である。その變装、變身は、平話の劉知遠や說唱詞話の包公のように、ときに話の合理性を損ねる不自然な形でえがかれる場合もある<sup>五十七</sup>。水滸傳の宋江の場合、ほとんどの場合みずから望んで身をやつしているのではなく、受刑者であるがゆえに輕んじられているのであるから、平話や詞話に比べれば合理的な筋の運びになっている。

宋江の物語に貴種流離譚が深く入り込んでいると思われる場面がもうひとつある。第四十二回、父を梁山泊へ迎えるべく郷里に戻った宋江が、待ち伏せていた捕り方に追われる場面である。宋江は廟のなかの小さな厨子にもぐりこむ。外からは捕り手の兵卒の声が聞こえ、宋江はほぼ觀念した。そこで意識が飛び、氣づくとき美しい宮殿にいる。そこで女神のような人物に、實は宋江は罪を得て下界に下された星であることを告げられ、「替天行道、去邪歸正」を命じられる。もとの世界に戻ると、宋江を救うべく梁山泊から駆けつけた豪傑たちによって捕り手は蹴散らされていた。

劉秀の傳承にも狭いところに隠れて危機を脱する場面がある。傳承にはさまざまあるが、共通するのは土中に埋まって追手を逃れるという点である。さらにカムフラージュのために上に馬を立たせると馬は劉秀を踏みつぶさないよう足に力を入れなかったとか、虫が通氣口を開けてくれたおかげで窒息せずにすんだとかさまざまないわれがつく。

五十六 金文京「中国民間文学と神話伝説研究—敦煌本『前漢劉

家太子伝(変)』を例として」(『史学』第六六卷第四号、一九九七年)、小松謙「中国歴史小説研究」第四章「劉秀傳説

考」

五十七 金海南『水戸黄門漫遊考』第四章「英雄伝説と神話」、百三十五〜百三十六頁

こうした詳細は小説、戯曲では語られず、民間傳承、地方志や敦煌變文などでもよく明らかにする<sup>五十八</sup>。小松謙は、劉秀が土中にもぐりこむ場面は「一度假の死を経て再生したことを示」し、貴種流離譚に共通して見られる王者となるための試練ないし通過儀禮のひとつである「死と再生のモチーフ」に当たると説明している<sup>五十九</sup>。

第四十二回の宋江も狭い空間にもぐりこんでいるし、九天玄女の宮殿に行くくんだりには異世界、死後の世界の體驗ともとれる。ここで九天玄女より真相を知らされ天書を受けることで宋江は貴種として生まれ變わり、その後は天から謫された百八星の頭領、ある種の王としての道を歩むことになる。この場面をもって宋江の貴種流離譚は終了する。また、明確に頭領としての身分を手に入れたことで、發跡故事の主要部分も終了したと見てよい。宋江個人の物語は終わりを告げ、以降は梁山泊集團の頭領としての物語となる。梁山泊の頭領晁蓋はこのときまだ存命であるが、物語の構成上では、すでに頭領は代替わりしたのである。それ

は水滸傳全體にとっても重要な轉換點である。

從來、宋江が天書をくだされたことにはあまり深い意義を認めない説が少なくなかった。現代日本の水滸傳研究に必讀とも言える書に「この天書は、……あまり役に立たらしくは見え」<sup>六十</sup>ず、「現在の水滸傳を作った人も、……まあ昔から宋江は天書を持っているということになっていくから持たしておくが、使うことはめったになく、使っても大して役には立たぬということにしたのであろう」<sup>六十一</sup>と述べるように。

小松謙は、劉秀を主役とする明後期の通俗小説の冒頭に、物語本篇と關連性がうすい劉秀の生い立ちを語るくだりが設けられている理由として、當時よく知られていた傳承だったがゆえにとりこまないわけにはいかなかったものの、その内容があまりに荒唐無稽であるため、「ある程度知識階級の讀者のことをも想定に入れねばならぬ以上」、全面的にとりいれることもできず、その結果不自然な状態になってしまったのだと分析している。

<sup>五十八</sup> 朱介凡『王莽趕劉秀』傳說的分析

<sup>五十九</sup> 小松謙『中国歴史小説研究』第四章「劉秀傳說考」百二十五～百二十九頁

<sup>六十</sup> 宮崎市定『宮崎市定全集12水滸傳』II「水滸傳―虚構のなかの史実―」第八章「張天師と羅真人」、三百十三頁

<sup>六十一</sup> 高島俊男『水滸傳の世界』二「總大将宋江」、三十二頁



最終編纂者がまとめた、出版物としての水滸傳も「知識階級の讀者」を想定に入れたものであるから、同様にあまりに荒唐無稽な要素は極力減らしたかったのではないか。

しかし、宋江が九天玄女に出會うくだりは水滸傳全體の構成における重要な轉換點であるからはずすわけにはいかない。高島俊男の指摘のとおり、『宣和遺事』にすでに見られる、由來の古いエピソードであるだけにはずせなかったという事情もある。宋江の貴種流離の物語には、劉秀や劉知遠のそれと同様、民間傳承ではより多くの荒唐無稽な要素が含まれていたものの水滸傳では採用されず削られたという事情が想定できる。天書も民間傳承においてはより強力かつ有効なはたらきをしていたのかもしれない。水滸傳において、戦闘の際に天書の力だけでは足りなかったとき窮地を救うのが公孫勝の道術である。公孫勝は『宣和遺事』には名のみ現れ、具體的な行動の描寫はない。公孫勝の身分、性格など個人設定は最終編纂時期に設定されたと考えられるから<sup>六十二</sup>、語り物における天書のはたらきが、

水滸傳では公孫勝の仕事にとりかえられたのではないか。貴種流離譚のもっていた神話的要素、荒唐無稽な要素が知識階級の讀者を對象にふくめたときに削られたり薄められたりする現象は他の發跡故事にも看取できる。

劉相雨「论古代白话小说中流氓无赖发迹的母题模式及流变」<sup>六十三</sup>が、『五代史平話』の黄巢、朱温、石敬瑭、劉知

遠、郭威の發跡故事が明代に白話小説になるにあたってどのように變化したかをまとめている。平話の發跡の主人公には、社會の底邊で人に使われた経験があり、死別や出奔などの理由で父に従っておらず、權威や禮法から逸脱していて徳や品に缺け、流氓と選ぶところのない言動をするところがあり、兄弟の義を重んじ、義のためには人も殺せるなどの共通點がある。明代白話小説になるとこの英雄像に變化が生じる。出身階層がやや高くなり、母に對しては孝の心を持ち、流氓氣質よりも豪快でまっすぐな性格、義による人助け、弱者のために不平を討つ面が強調され、流氓無賴風の言動は軽い描寫ですまされるようになる。平話の郭

<sup>六十二</sup> 侯会「后来居上的《水滸》人物——公孫勝」（『《水滸》《西游》探源——与德堂古典小说研究丛稿』、学苑出版社、二〇〇九年）参照。

<sup>六十三</sup> 刘相雨「论古代白话小说中流氓无赖发迹的母题模式及流变——以《五代史平話》为中心」（『郑州大学学报（哲学社会科学版）』、二〇〇二年第二期）

威は酒代を払わず店主を殺すような無法者である。一方『喻世明言』『史弘肇龍虎君臣會』の郭威は盗みも博打もケンカもするが、衙内にさらわれそうな庶民の娘を助けようとして衙内を殺してしまうという、義憤からのやむを得ぬ殺人者として描かれているように、正義感と合理性も強調されている。また、英雄とその妻となる女性とのエピソードは、描寫が淡化されたり、そもそも回避されたりする傾向が見られる。

劉相雨の挙げる各要素を見ると、『宣和遺事』と水滸傳の宋江との違いに合致する點が少なくない。『宣和遺事』の宋江は血の氣の荒い亂暴者で、義兄弟との義をなにより重んじる。水滸傳の宋江は徳や品に缺けるどころかむしろ權威や禮法に従順な小役人として描かれるが、その一方で義のために法をも犯すことがある。『宣和遺事』では痴情のもつれであつた閨婆惜殺しはやむにやまれぬ殺人に變わっている。宋江は平話の發跡故事の主人公たちと同様、明代小説に至る過程でかなり牙を抜かれているのである。これを逆にたどれば、宋江は元來平話の主人公たちと同様の個性やエピソードを有していた可能性が考えられよう。

六十四 類似的の詩句は元雜劇にも見える。

## 九・同病相憐

宋江と包公は發跡英雄の大家族のなかでも近しい人物像を有しているが、もちろん異なる點もある。なかでも注目したいのが「援助の對象」である。

詞話で包公が救う對象のうち「斷歪烏盆傳」の楊宗福、「斷曹國舅公案傳」の袁文正、「張文貴傳」の張文貴、「斷白虎精傳」の沈元華の出身が包公ときわめて似ていることは目を引く。四人はともに地方で育ち（楊宗福は福州人、袁文正は潮州人、張文貴は溪州人、沈元華は明記されない）、父は裕福さから「楊百萬」、「張百萬」、「沈百萬」と呼ばれる。天下の讀書人を求める皇榜を見て勇躍京師へ向かう。彼らはまた腕力や武藝を持たぬ點でも共通する。「刻苦勉励した地方の若者が榮耀榮華を求めて科擧に向かう途上で困難に遭う」故事類型があつたのだろう。それは都へ旅立つ決意をする際の文言がそっくりであることからわかる（傍線は筆者による<sup>六十四</sup>）。

十年窓下無人問／一舉成名天下知／求得一官並半職／改

換門庭作貴人（楊宗福）

十年窓下功文字／九載灯前看古文／求得一官並半職／不  
往灯前吃苦辛／若得一舉成名曰／光耀門庭显祖宗／……  
／夫妻衣錦还鄉日／光显門庭作貴人（袁文正）

兒子数年勤習孝／要將書筆現明君／求得一官並半職／改  
換門風作貴人／……／十年窓下無人問／一舉成名天下聞  
（張文貴）

要將書筆跳龍門／求得一官並半職／改換門風作貴人（沈  
元華）

包公もまた彼らと同類である。ただ、父は資産十分の一の  
「包十万」<sup>六十五</sup>であり、両親に讀書をさせてもらえなかつ  
た分、不利な位置からの出發である。

<sup>六十五</sup> 明世德堂刊『西遊記』（古本小説集成四輯、上海古籍出版  
社、一九九二年）第四十回に「我祖公公姓紅。只因廣積金  
銀家私巨萬、混名喚作紅百萬、……近來人事奢侈家私漸發改  
名喚作紅十萬。」という發言が見える。冗談めいた言い方で  
はあるが、「十萬」、「百萬」というあだ名がある程度經濟規  
模を反映したものであることはわかる。詞話の語り手も、  
「包十萬」より「百萬」を父に持つ若者たちのほうがより裕  
福で恵まれた育ちであるという認識はあっただろう。

<sup>六十六</sup> 田仲一成『中国巫系演劇研究』（東京大学出版会、一九

舊時農村に、一族の優秀な若者に讀書をさせて官界に送  
り込み一族を繁榮させようとの願いが廣くあったことは、  
田仲一成『中国巫系演劇研究』に収める安徽の祭祀演劇  
「劉文龍趕考」からもわかる。この劇は劉文龍が科擧を受  
け、官となつて一家全員が封を受けるまでを描いている。  
途中、玉皇大帝、魁星、土地神が主人公を守る點も包公の  
詞話によく似ている<sup>六十六</sup>。

果たして四人は順調に都にたどりつくことができない。  
楊宗福は山賊に殺害され、袁文正は國舅に妻を奪われたう  
え殺される。張文貴は山賊に殺されかけ<sup>六十七</sup>、逃げ出した  
ものの山賊の砦で得た寶物を狙う宿の主に殺される。沈元  
華は美女に化けた白虎の精に誘惑される。これらの事件を  
解決するのが包公である。包公は同類の中の成功者として

九三年）。本書は二種の「劉文龍趕考」を採録している。う  
ち一種で劉文龍は皇帝の命で匈奴征伐に赴く。さらに九天玄  
女が現れ寶劍と天書を賜わるなど、宋江の物語によく似てい  
る。  
<sup>六十七</sup> 山賊に捕えられ、柱に縛りつけられ、スーパの具にされ  
そうになる場面は、宋江が清風山の賊につかまる場面とよく  
似ている。宋江の物語が包公の詞話と同様の環境で形成され  
たことを想像させる一例である。

後輩たちを助けているのである。この構圖は、平民から登りつめた人物は本を忘れず、同じ道を歩まんとする者に救いの手をさし伸べてくれるはずだという期待の反映ではないか。ゆえに包公自身にも「農民の出」と言わせるのだろう。いわば仲間意識が背後にある。

宋江の物語はやや趣を異にする。宋江の援助対象は相手の身分、地位、職業によらない。一般庶民だけでなくならず者でも流れ者でも助けるのである。さのみならず敵對者を屈服させたのち、自らの手下に組み入れることがままある。宋江からは包公ほどの同類意識を感じとれないのである。

なぜ腕力も武藝もない宋江が海千山千の強者の頂點にいるのか。小松謙『「四大奇書」の研究』第三部『水滸伝』第三章『「水滸伝」はなぜ刊行されたのか』がこの問いへの回答をこころみている。梁山泊の豪傑には社會秩序の埒外にあった者が多い。役人、農民、都市民などを除く非定住民である。秩序外にある者は秩序内にある者から白眼視され、法律の保護もなく、同類同士助け合うほかな

い。宋江は法律の庇護下にある定住民であつた。その「まっとうな人」がよるべのない非定住民に手を差し伸べるばかりか、義兄弟にまでなろうとする。彼らにとっては望外の喜びであり、恩返しのために命も惜しまぬようになる。

六十八 ここで小松が非定住民を「科擧の受験資格を持たない人々」とまとめているのは興味深い。包公は主に「科擧の受験資格」をもつ人々とその家族を救っているからである。包公の詞話には堅氣の人々の相互扶助の考えが色濃く漂う。両者の個人設定は近いのに、救う相手の身分は多少の交錯はありながらもおおむね好對照をなしている。

もし凶悪な強盜、屈強な將軍のままであつたならば、宋江もまた非定住民内の相互扶助というあたりまえの物語の主役になつていただろう。しかし盜賊の首領が文人の端くれを自任する定住民となつたことで物語は變質した。平民のスターが遊民の救い主をも兼ねることになつたのである。この同類の相互扶助の枠を超えた構圖によって、より廣範な讀者をひきつけることが可能になつたのではないか。そして定住民の相互扶助の性格が強かつた包公の物語

六十八 小松謙『「四大奇書」の研究』（汲古書院、二〇一〇年）  
第三部『「水滸伝」』第三章『「水滸伝」はなぜ刊行されたのか』

か、二百四十五、二百五十一頁

が清代の『三俠五義』になると非武力の文の親分が無頼の徒を率いる宋江型の物語へ變容していることもまた興味深い現象である。

## 十・宋江のバックアップ

これまでの考察を通じて、水滸傳最終編纂者が採用したのが非武力式發跡故事の宋江であったことが推測できた。宋江はそもそも凶悪な盜賊と考えられていたのだから、非武力式發跡故事以外に、武人發跡の宋江の故事も多數存在していたであろう。そして水滸傳の宋江を見ると、武人發跡故事の痕跡がところどころに感じとれる。たとえば宋江が閻婆惜の家から足が遠のいていくくだりに「只愛學使槍棒、於女色上不十分要緊（槍や棒の稽古ばかりを好み、色事はあまり顧みない）」とあり、第三十二回では逃亡の旅の途上に逗留させてくれた地主の息子、孔明孔亮兄弟に鎗棒を教えたところのように、武藝の得意な宋江という設定が見え隠れする。しかし宋江の武藝が實際の戦いにおいて發揮される場面はまったくないのである。これは武人發跡故事の宋江をも部分的にとりこんだ結果まざった要素なのだろう。

ここで、非武人化された宋江が失ったものについてもう

少し掘り下げて考えてみたい。武人發跡故事の宋江を復元することはすなわち最終編纂者が採用しなかった宋江像を推測することであるから、最終編纂者の眼鏡にかなわなかった宋江形象から最終編纂の方針を垣間見ることができのではなからうか。

本章でとりあげた發跡故事の主役たちと宋江との特徴を並べたものが表1である。先行研究でも宋江と表裏一体の存在として指摘されている李逵をこの表に加えてみると、人を殺めて逃亡する、博打好きなうえによく負ける、理不盡な理由で暴れて反感を買う、しかしけんかに強いたため誰も逆らえない、自分を信用してくれる人物には義理堅いなど、ちょうど水滸傳の宋江が有していない欄において他の發跡英雄たちと性質を共有していることがわかる。

武人發跡故事の痕跡に關してさらに興味深い示唆を與えてくれるのが Andrew Plaks の考察である。

Plaks は水滸傳において宋江に似た形象を有する人物として李逵、王英、武大、劉唐をあげる。そして水滸傳において宋江の物語の間に武松の物語が配置されているのは、武松の潘金蓮殺しと宋江の閻婆惜殺しとを對比するためであり、閻婆惜が張文遠を待っていると知りながら閻婆惜と一晚を過ごす宋江のさまは武大を想起させると述べ

表 1							
英雄	作品	呼稱	兄弟	容貌	性格	奇跡	出身
劉備	三國志平話			龍準鳳目・禹背湯肩。重手過膝。	學を好まず、馬、衣裳、音楽を好む。		母は蓆や靴を編んで生業とした。
朱全忠	五代史平話	朱三、潑朱三	兄二人		無頼漢とつきあい、酒を飲み博打をし、人を殺して材を奪う。	寝ているとき、赤い蛇が鼻の穴を出入りする。	人に雇われて豚を飼う。
劉知遠	五代史平話		義兄二人 (義父の死後虐待される)	赤黒い顔。	博打と酒を愛し、槍棒を使う。	寝ているとき、黄色い蛇が鼻の穴を出入りし、紫の袍を来た人物が黄色い涼しい傘をさしかける。	貧しい家で母一人に育てられる。
花關索	説唱詞話		關羽の第二子	四尺五に満たない。小柄。			父母とはぐれ、索員外に育てられた。
宋江	水滸傳	宋三郎、黒三郎	弟一人	顔は黒く背は低い。	鶏を縛る力もない。	九天玄女に天書をたまわる。	富農の家。押司。
	吳讀本水滸傳				酒を好み、朋友と交際する		亭長。
	大宋宣和遺事				なじみの娼妓閻婆惜がほかの男をいるのを見て怒り、殺す。部下を率いて掠奪放火殺人を行う。	九天玄女に天書をたまわる。	押司。

李逵	水滸傳	鐵牛	兄一人	黒い猛獸のような大男。	亂暴、短氣、欲望に正直。酒好き、博打好き。		農村の次男坊。人を殴り殺して逃亡し、獄吏になる。
漢高祖	史記	劉季	兄二人	左股に七十二のほくろ。	吏たちとなれなれしく付き合う。酒好き、好色。		
光武帝	全漢志傳 阿漢開國中興傳誌		従兄二人	非凡な外見。大君主の相		常に紅い光、紫の霧を身に帯びる。	父母は自ら死に、劉良に養われる。農業に従事。
	東漢演義		長兄、次兄は先に戦死	身長七尺三寸、美しい鬚に大きな口、盛り上がった額。	剛毅慷慨な性格。	生れたとき、赤い光が部屋を昼のごとく照らした。	孤児になり叔父に育てられる。
	雲臺門雜劇		長兄、次兄は先に戦死	容貌端正	武藝・兵法を好む。		

る。王英については、宋江が扈三娘を王英に與えて妻とした一事を、自分の妻にするか悩んだ揚げ句、自分によく似た王英に與えたものだ と解釋する<sup>六十九</sup>。

扈三娘は、第四十七回から第五十回にかけてえがかれる梁山泊と祝家莊との戦いで梁山泊軍のまえにたちだかる敵將である。祝家莊は隣接する扈家莊と同盟をむすんでおり、扈三娘は扈家莊の當主の娘にして祝家莊の三男・祝彪の許婚であった。武藝をよくすることから戦陣にたち、好色ものの王英がまずかかっていくがあっさり捕らえられ、その後も梁山泊の頭領たちと互角の勝負をくりひろげる。最後にようやくこれを捕らえたのが林冲で、扈三娘は捕虜として梁山泊にいる宋江の父・宋太公のもとへ送られる。祝家莊戦勝利後、宋江は扈三娘を王英にとつがせる。

Plaks の指摘通りに武松の潘金蓮殺しと宋江の閻婆惜殺し、宋江と武大の類似が意圖的な配置であるとすれば、これらは宋江のひ弱さを強調する効果を持つ。つまり、最終編纂者は宋江が腕力にものを言わせる亂暴者ではないこ

とを讀者に知らしめたかったということになる。

では宋江と王英との類似ならびに王英に扈三娘を與えたことにはいかなる背景があるのか。

王英といえど水滸傳では数少ない好色な人物である。水滸傳は「英雄色を好まず」という雰圍氣に満ちている。しかしこれは英雄の絶對的なないし共通の條件ではないようである。武人發跡故事の英雄にそのような雰圍氣は感じられないからである。表2のとおり、色を好むというほどではないが、少なからぬ武人發跡故事が妻を娶る場面を有する。朱温、石敬瑭、劉知遠、郭威らは婿入りすることで發跡の途が開けている。花關索にいたっては武力比で勝利した相手を次々妻にしている。劉邦も呂太公から娘を妻として與えられているし、劉秀は陰長者の娘の美しさに魅せられ、妻に迎えている。英雄の結婚は、不可缺とは言えないまでも、發跡故事によく見られる要素である。武人發跡故事の宋江が妻をもっていたとしても不思議はない。『宣和遺事』や雜劇では娼妓の閻婆惜のもとに通っていたのだから色事を避けていたとは思えないし、呉從先「讀水滸



表 2					
英雄	作品	容貌	性格	出身	妻
劉備	三國志平話	龍準鳳目・禹背湯肩。 垂手過膝。	學を好まず、馬、衣裳、音楽を好む。	母は蓆や靴を編んで生業とした。	
朱全忠	五代史平話		無頼漢とつきあい、酒を飲み博打をし、人を殺して材を奪う。	人に雇われて豚を飼う。	燕孔目の女
劉知遠	五代史平話	面紫黒	博打と酒を愛し、槍棒を使う。	貧しい家で母一人に育てられる。	李三娘
花關索	説唱詞話	不長四尺五。 身材不抵拳來大。		父母とはぐれ、索員外に育てられた。	鮑三娘
宋江	水滸傳	面黒身長	鶏を縛る力もない。	富農の子。押司	
	吳從先所讀水滸傳		酒を好み、朋友と交際する	亭長	
	大宋宣和遺事		なじみの娼妓閻婆惜がほかの男をいるのを見て怒り、殺す。部下を率いて掠奪放火殺人を行う。	押司	
李逵	水滸傳	真黒な体にごつごつした皮膚。	粗暴。酒、博打、殺人、放火を好む。	獄卒	
王英	水滸傳	背は低いが目は鋭く、ごつごつした体。	がさつ。財と色を好む。放火、殺人。	山賊の第二の頭領	扈三娘
漢高祖	史記	美須髯・左股有七十二黒子。	更たちとなれなれしく付き合う。酒好き、好色。		呂太公の娘
光武	全漢志傳・司	非凡な外見。大君主の		父母は自ら死に、劉良に養われる。農業	陰長者の娘

帝	漢開國中興傳	相		に従事。	
	誌				
	東漢演義	身長七尺三寸、美しい鬚に大きな口、盛り上がった額。	剛毅慷慨な性格。	孤児になり叔父に育てられる。	南陽新野の陰睦の娘が美しいと聞いて喜び、妻に迎える
	雲臺門雜劇	容貌端正	武藝・兵法を好む。		陰太公の娘

傳」でも宋江に妻子があつたという。むしろ、宋江が女色を遠ざけようとする水滸傳のほうが異質なのではないかという氣さえしてくる。

王英は水滸傳では好色の一面ばかりがクロージアップされがちだが、そもそも清風山の山賊の頭領のひとりで、旅の者を襲つては金銀財寶を奪つて過ぎてきた。

王英の形象は表1の英雄たちと同種と言つてよい。李逵、王英などはそのまま平話の武人發跡故事の主人公にもなれそうな人物なのである。

王英は水滸傳では地煞星二十二番目に位置づけられ、水滸傳前史には影も形も見えないから、その人物像は最終編纂段階に形成されたと考えられる。さすれば王英と宋江の形象が似ているのは偶然ではなく、宋江が失つた形象を王英が引き受けたからなのではないか。そうなれば、かつて扈三娘を妻にとつていたのは宋江自身だった可能性が出てこよう。ならば宋江が扈三娘を宋太公の義理の娘にしたことにも合點がいく。王英と結婚させるのが目的であるならばそのような手続きを踏まずとも「義兄」ないし「頭領」

の権限でできるはずである。しかしもとも宋江が扈三娘を妻とする話があつたがゆえに、扈三娘が宋太公を義理の父として仕える設定が残つたのではあるまいか。

松浦智子『楊家将演義』における比武招親―その祖型と傳承の一端をめぐつて―」は、武藝にすぐれた女將と男性英雄が武力比べを経て結婚するエピソード、「比武招親」の由來について論じたものである。松浦は、山東で生まれた比武招親の故事類型が軍隊のなかで語り繼がれ、各地へ傳播していったと述べる。そしてこの比武招親故事が

明初に流行した説唱詞話にとりこまれた結果、花關索、楊文廣の物語にも比武招親のくだりが見えるようになったのだという。比武招親故事に現れる女性の特徴は、松浦のまとめによれば次のごとくである。一族で某某莊という集落をかまえ、盜賊稼業をいとなむ、ないしは武裝した集團に屬している。兄をもち、武藝にすぐれている。英雄に戦いを挑んで互角の勝負をし、英雄はこの女將に敗れるか、計略などにより辛勝する<sup>七十</sup>。

水滸傳の扈三娘はこれらの條件によく合致する。扈三娘

<sup>七十</sup> 松浦智子『楊家将演義』における比武招親―その祖型と傳承の一端をめぐつて―」（『中国文学研究』第三十一期、二

〇〇五年）

という名も、花關索の比武招親の對象である鮑三娘を想起させる。王英や宋江が小男であることも、花關索が小柄であることに通じよう。

以上の條件を綜合し、他の發跡英雄たちと同様、發跡の途上に妻を娶る一段を含む宋江の故事があったと考えた。そしてその結婚は説唱詞話の花關索、楊文廣と同様武藝を戦わせたあとであつた可能性が高い。

祝家莊の名は元人雜劇、朱有燉の雜劇の冒頭にも見える。ここで宋江は閻婆惜を殺したために逮捕され、護送の途上で助けられて梁山泊へのぼり、祝家莊との戦いで晁蓋が戦死したためにその跡目を繼いだことになっている。水滸傳と比べると閻婆惜殺しのあとの逃亡、逮捕されて江州へ流される旅路、江州での騒動が足りない。また、水滸傳では、晁蓋は祝家莊戦ではなくその後の曾頭市との戦いで死ぬことになっている。曾頭市戦は、エピソードを増やすために最終編纂段階で祝家莊戦のコピーとして附け加えられたものであると宮崎市定がつとに指摘している。つまり扈三娘は最終編纂段階以前の宋江集團故事における祝家莊

戦ですでに登場していた可能性がある。そこで頭領の晁蓋は戦死し、宋江は扈三娘を妻とし、首領の跡目を繼いでいたのではないか。

水滸傳で扈三娘を捕らえた林冲は、『宣和遺事』と一部の雜劇に名前のみ現れるほかは水滸傳前史に見えない人物である。それが水滸傳では重要人物となって現れる。天罡星三十六員のうち史進、魯智深に次ぐ三番目に登場し、知識人の倫理觀を代表する人物としてえがかれ、なにより水滸傳に奸臣に迫害を受け落草を餘儀なくされる「逼上梁山」の概念、「好漢對奸臣」という「對立の構圖」を持ち込んだ人物である<sup>七十一</sup>。この、水滸傳の構成の確立に多大な貢獻をする具體的な人物形象が固まったのは最終編纂段階であろう。さすれば、林冲が扈三娘を捕らえる話もそう古いものではないのだろう。宋江が非武力發跡故事を受け入れ武人でなくなったことによつて直接扈三娘と戦うことができなくなった。そのため宋江の分身として作られた王英がまず扈三娘と戦い、敗れることになった。さらに最終的に扈三娘と戦つて勝つ人物が必要となり、水滸傳前史で

特定の役割をもたず、最終編纂段階になって重要人物になった林冲が代打として起用されるにいたったのではないか。

宋江が扈三娘と戦わないことが宋江の非武力化と關わるのに對し、捕らえた扈三娘を自分の妻としないこと、閻婆惜が娼妓ではなく恩を施した人物の娘であること、閻婆惜を殺したのは痴情のもつれではなく仲間との義によるものとしたことはすべて宋江を色事から遠ざけるための處置と言える。説唱詞話の包公にも武藝や色事にまつわるエピソードはない。非武力式發跡英雄にはこれらの條件が求められたのかもしれない。

扈三娘のくだりと閻婆惜のくだりは宋江に武力と色事を放棄させた代表例と言える。このとき發跡英雄の好色な部分を引き受け（、さらに誇張し）た宋江の影としての王英像が確立したのだろう。

## 十一・民間傳承から水滸傳まで

本章では、口頭傳承の世界において宋江が先行する英雄物語の各要素を吸収して發跡故事の主人公となったこと、おなじく民間傳承で語られていた貴種流離譚の主人公の要素をも吸収したこと、非武力式發跡故事の要素を受け入れ

て文人氣質の非暴力の宋江の故事が生まれたことを論じた。最終編纂者は民間傳承の宋江をおおいに利用しつつ、知識人讀者を念頭において、好ましくない要素を排除、淡化、交換したものの、いまでもその痕跡は部分的に觀察できる。この變化は平話から明清小説への変遷と並行する部分もおおいにある。ここであらためて宋江像の変遷をまとめて本章のしめくくりとする。

北宋末の流賊に由來する宋江集團の傳承は、南宋支配地域で語り物として演じられた。このとき流行していた、西北を舞台とする武人、とりわけ抗遼抗金の義士の物語、五代史などに見られる武人發跡故事などの影響を受け、宋江も發跡故事の主人公となり、率いる集團は異民族と戦う英雄集團となった。このときの宋江は腕力や武藝によって下層階級からのしあがっていく流氓であつただろう。酒好きで、亂暴者で、豪傑と交際するのが好きで、兄弟の義をなにより優先する。女色を遠ざけることもなく、妾や妻もいたであろう。また、神話的な要素を多分に含むエピソードも語られ、九天玄女のくだりや、宋江らは星の生まれ變わりであるという要素などはより強く前面に押し出されていたかもしれない。

元末から明代に説唱詞話で語られた花關索、楊文廣、包

公の物語も宋江の物語と共通する要素をもつ。これらの故事の背景にある故事類型、人物類型の影響を宋江も受けたのだろう。女將と戦って妻とする比武招親エピソードなどはここから得たものであるかもしれない。そしておそらく、この説唱詞話の世界において、新たな大轉換が生じた。非武力式發跡故事の受容である。このとき宋江から流氓、武人の要素が排除され、非暴力の文人氣質の頭領が生まれた。そして水滸傳編纂者が採用したのはこの非武力式發跡の宋江であった。のみならず最終編纂段階において宋江からさらに牙を抜く改編がなされ、宋江は多くの要素を失った。しかし、宋江の身からは離れたものの水滸傳内にはとどめられた要素も少なくない。

亂暴者、無法者、禮法の破壊者という流氓氣質は主に李逵に受け継がれた。酒好き、女好き、女將と戦い妻に迎えるなどの諸要素は王英が引き受けた。こうして宋江は妾（閻婆惜）も妻（扈三娘）も失った。李逵は色黒、王英は小男で山賊の頭領など、宋江から分け與えられたと思われる身體的特徴をも有する。王英像、李逵像の形成は宋江像の大轉換と不可分の関係にある。彼らは宋江からとりあげられた各要素を保存した、いわば宋江のバックアップである。

平話や説唱詞話における變化、民間傳承や神話の要素の吸収は本稿の定義する自然形成段階にあたる。時間、場所、語り手、聞き手などの環境要因によって變幻自在に語られ方が變化する時期である。

これに對し、さまざまな宋江故事の一部を選び出し、宋江が失った要素が他の人物に分け與えられたのが最終編纂段階である。従來の高級文藝にはなかった、素朴で直情的な要素を豊富に持つ民間傳承が知識階級に好まれ、ついには印刷に付されて書籍として讀まれるにいたったと考えられるが、民間傳承の要素がすべて無條件にとりこまれたわけではない。知識階級に讀ませるといふ明確な意圖があれば、そこにはなんらかの編集方針が立てられていたはずである。

『三國志平話』と『三國志演義』とを比較すると、後者では劉備の無法者、亂暴者氣質が薄められているなど、主人公の知識人化は廣く認められる。知識人となった主人公にふさわしくない要素は切り捨てたり、他の人物のエピソードとして書き換えたりして、許容できるものだけを残したのだろう。この平話的要素の後退が、知識階級に讀ませるべく小説を編纂する際の共通方針であるとすれば、最終編纂者が武人發跡の宋江ではなく非武力式發跡の宋江を採

用したのは當然のことと言えよう。すでに知識人化された宋江像が存在する以上、これを利用しない手はない。そして武人發跡の宋江が有していた要素のうち、文人氣質の宋江にふさわしくないものは手下にゆずりわたされた。禮法にしばられず、なにもかも打ち壊す破壊力を持ち、欲望を隠さない無法者は非文人として描かれる。知識階級向けの白話小説は、發跡故事や無頼漢の物語に興味はあったものの、主人公にそれらの要素を背負わせたままにはできなかったのである。呉從先の讀んだ水滸傳では宋江は非武力化されていたようである。その筋書きは『宣和遺事』や雜劇冒頭に附されたものに近く、現水滸傳よりも古い語り物を保存したものであるとの指摘<sup>七十二</sup>もある。これが「古本」として尊重せらるることなく消失してしまったのは、「讀者」にふさわしい改編がなされなかったことも原因だったのではないか。

最終編纂時期、民間ではぐくまれてきた宋江物語を採用しながらも知識階級の讀書にも堪えるようにという方針のもと宋江像は形作られていった。宋江個人の物語の重要な部分は第十八回から第四十二回（ただし第二十三回から第

三十二回は武松個人の物語が挿入されていて、宋江には關係がない）にまとめられている。それ以前は豪傑個人なし小集團の銘々傳が並んでいるだけである。第四十二回で宋江は豪傑たちの首領としての身分を得、第四十三回以降は宋江を核とする集團に豪傑たちが三々五々と集まってくる過程を描く物語に變質する。次章ではこの水滸傳の第二段階の冒頭にすえられたエピソードを分析する。

＊本章は拙稿「宋江形象演變考」（『中国—社会と文化』第三十号、二〇一五年）を加筆・修正したものである。

### 第三章 李逵殺虎故事成立の背景

#### 一・李逵像検討の意義

水滸傳前史において李逵は数ある無頼の豪傑のひとりにすぎなかった。秩序の破壊者、亂暴者、酒好き、博打好き、義に厚いなどの要素は無頼の豪傑たちに廣く共有されたものであり、とりたてて李逵を特徴づけるものではない。

宋江もかつてこのような無頼の豪傑の一員であった。しかし水滸傳の最終編纂者は非武人化された宋江の物語を選んだ。このとき宋江から失われた特徴の多くを物語内に残すべく引き受けたのが李逵であった。編纂者によって李逵は宋江の分身に引き上げられたのである。そのことは、第四十二回をもって宋江個人の發跡故事が終了し、水滸傳が本格的に宋江を中心とする集團の物語に入ったところに李逵の故事が配置されていることからもうかがい知れる。本章では李逵が水滸傳の編纂にいかなる貢獻を果たしたのか

について、第四十三回を例に検討する。

#### 二・李逵殺虎故事

宋江が天より豪傑たちを率いることを命じられたあと、集團の物語の開卷劈頭に配されるのが第四十三回「假李逵剪徑劫單人 黑旋風沂嶺殺四虎」である。李逵を主役とするこのエピソードは、水滸傳成立の際に創作された可能性が高いと推測されている<sup>一</sup>。その概要は次のとおり。

宋江が郷里から父を迎え、公孫勝も母を訪ねて山を下りたのを見た李逵は、自分も母を山寨へ迎えたいと訴え、郷里へ向かう。道中、黑旋風李逵を名乗る追剝に襲われるが簡単にやつつけ、逆にこのニセ李逵を殺そうとする。しかし九十歳の老母を養うために追剝をしていたという哀訴を聞き、自分も母を迎えに行く身であることを思い、銀子を與えて逃がした。そのまま旅を續け、路端にあった民家の女に食事をさせてくれるよう頼み、食

一 「来源は定かでない。ただ、李逵の虎殺しが武松の虎殺しの焼き直しと思われる点からすると、その成立は比較的新しい可能性が高いであろう」（小松謙『『水滸傳』成立考―内容

面からのアプローチ―』『中國文学報』第六十四冊、二〇〇二年、八十九頁）



事を待っているとその女の夫が歸ってきた。それはなんとさっきのニセ李達で、老母を養っているというのは嘘であった。夫婦が李達を殺そうと相談するのを聞き激怒した李達は夫を殺し、妻は逃げ出した。李達はニセ李達の腿を焼いて食い、家に火を放って立ち去った（本稿ではここまでを「ニセ李達故事」と稱する）。

郷里の家につくと、母は失明してしまっていた。李達は役人になったと嘘をつき母をつれて歸ろうとした。兄の李達はお尋ね者の李達を官へつきだすべく村の仲間を呼びに行ったが、そのすきに李達は母を背負い梁山へ向かった。

山中で母が水を飲みたいと訴えたので母を石の上に坐らせ水を探しに行った。戻ってくると母の姿はなく、血の跡だけが見える。跡をたどると、仔虎二頭がなにかしやぶっている。それは人の足のようにであった。母を食われたと悟り、悲しみ怒った李達は二頭を斬り殺し、虎の

巢穴にもぐりこみ、戻ってきた母虎を突き殺し、巢穴を出て父虎も斬り殺し、母の仇を討った。虎四頭を殺した李達はふもとの村で英雄として宴に招かれるが、席上で素性がばれて捕らえられてしまう。しかし梁山泊の仲間の朱貴らに助け出され、新たな仲間を伴って梁山へ戻った（同じく「李達殺虎故事」と稱する）。

この故事に關する先行研究は大きくわけて二種類ある。ひとつは第二十三回に見える武松打虎故事と比較して文學性、藝術性を論じるもの。もうひとつは水滸傳以前の文獻から材料を探しだそうとする本事研究である。

前者の研究はおおむね二方向の結論にわかれる。第一は、李達殺虎は武松打虎と同じ題材を利用しながらも異なる行動、心理、情景を描き出し、讀者に武松打虎とまったく異なる印象を與えることに成功しているとし、ともに高い評価を與えるもの<sup>二</sup>。第二は、武松打虎の精緻な描寫や

二 譚邦和『明清小说史』（上海古籍出版社、二〇〇六年）上編第二章第四节「犯中见避的情节艺术」、邓宇英「试论『水浒传』的史传笔法」（『广州大学学报（社会科学版）』二〇〇二年十月第一卷第十期）、刘承训「简论“武松打虎”、“李达

杀虎”描写中的犯与避」（『怀化师专社会科学学报』一九八七年第三期）、代顺利「试论古典小说中的“犯笔”」（『湖北师范学院学报（哲学社会科学版）』一九九九年第十九卷第四期）、石剑「句句出奇 字字换色——武松打虎与李达杀虎之比

緊張感のある文章に對し、李逵殺虎の描寫は粗雑かつ不十分で、出來の悪い模倣品にすぎず、遠く及ばないとする論である<sup>三</sup>。

藝術性の評価基準について本稿では検討しないが、これらの論述からは諸家が無意識裡にも武松打虎がすぐれた作品であることを前提としていることが読みとれる。そのため武松打虎がすぐれているわけを分析し、次に李逵殺虎を分析するという手順になる。李逵殺虎の評価は二様に分かれるが、武松打虎を基準に測らんとする點は變わらない。武松打虎が先にあったと考えられる以上<sup>四</sup>、それを意識した可能性は確かにある。しかし、仔細に見れば武松打虎故事と李逵殺虎故事とはあまり似ていない。虎にでくわす経緯も異なれば、虎の頭數、武器の有無もちがう。武松を意識したからこそあえて重複を避けたのだと説明する方

法もあろうが、客觀的にみれば「豪傑が虎を退治する」以外の共通點はないのである。それならば、なぜ子路でもなく李存孝でもなく武松の模倣だと言えるのか。「豪傑の虎退治」というテーマのもと兩者を比較することに一定の意義はあるが、相違點が多くある以上、武松打虎故事との比較に拘泥することで李逵殺虎の特徴を見落としがちになるおそれがあることも否めない。

兩故事を比較する見方はいつごろからあったのか。水滸傳に附された評からその變遷が見てとれる。容與堂本第二十三回回末の總評は以下のごとく兩故事を比較している。

人以武松打虎到底有些怯在、不如李逵勇猛也。此村學究見識、如何讀得『水滸傳』。不知此正施羅二公傳神處。

李是為母報仇、不顧性命者。武乃出于一時、不得不如此

較」(『天中学刊』一九九八年八月第十三卷增刊)、羅宪敏

「李逵形象塑造的艺术经验」(『明清小说研究』一九九六年第三期)

<sup>三</sup>馬成生「在形似与神似之间『水滸』中『武松打虎』与『李逵杀虎』赏析」(『杭州师范学院学报(社会科学版)』一九八四年第三期)、孙绍振「武松打虎和李逵杀虎」(『名作欣赏』二〇〇

七年第二十三期)、陈东林「李逵杀虎虎写得精彩」(『南京理工大学学报(社会科学版)』二〇〇七年第四期)

<sup>四</sup>小松謙「『水滸傳』成立考——内容面からのアプローチ——」は、潘金蓮物語以外の武松の物語は元代の『醉翁談錄』に名が見える話本「武行者」に由來すると推測している(八十六頁)。

耳。

武松打虎は結局のところ怖れがあり、李逵の勇猛には及ばないと人は言うが、この田舎學者の考えでどうして水滸傳がわかるうか。ここがまさしく施、羅二公の寫實的なところであることがわかっていないのだ。李逵は母の仇討ちのために命をも顧みなかったのである。武松は一瞬のことであり、こうならざるを得なかったのだ。

これに對し、『水滸志傳評林』、『水滸全書』、四知館本の評語では比較は一切されていない。特に四知館本は第四十三回末には容與堂本と同じ評語を附しているが、第二十三回末の評語は容與堂本とまったく異なり、「畫出武松打虎、筆筆傳神。恐畫也沒這般妙（武松打虎を描き出す全ての筆が眞に迫っている。繪畫でさえこれほどすばらしくはないだろう）」と言うのみである。

一方金聖歎の貫華堂刻本では、李逵殺虎の文中の夾批で「寫武松打虎純是精細、寫李逵殺虎純是大膽（武松打虎の描寫はすべてが精細、李逵殺虎の描寫はすべてが大膽）」、「武松文中一扑、一掀、一剪都躲過。是寫大智量人讓一步法。今寫李逵不然。虎更耐不得、李逵也更耐不得、劈面相

遭。大家使出全力死搏、更無一毫算計、純乎不是武松（武松の文では虎の叩き、蹴り、拂いをすべてかわした。知恵ある人の「讓一步法」を描いているのである。この李逵の描寫はそうではない。虎はがまんできず、李逵もがまんできず、正面衝突した。雙方全力で戦い、全く何らの計算もない、全く武松とは異なる）」など、幾度もかつ詳しく武松を引き合いに出して論じている。兩故事の比較は、容與堂本にわずかに見られるものの、本格的かつ全面的に行つたのは金聖歎がはじめと言つてよからう。初期の批評者はこの方法をとらなかつたのである。

ではそれらの批評はなにに目を向けていたのかと言え、  
「一首詩中見李逵勇孝俱全（この詩の中に李逵が勇と孝とを兼ね備えていることが現れている）」（評林本九卷15a上層）、  
「李大哥殺死四虎、不特勇猛過人、亦是純孝格天地（李兄貴が虎四頭を殺したことは人並み外れて勇猛であるのみならず、純粹な孝が天地を感じしめたのもある）」（容與堂本、四知館本第四十三回末總評）のように、「勇」、「孝」といった李逵の性格であつた。現存する他の版本は、評語がないものや、この部分を缺いているものもあるため参考にできない。

つづいて過去の本事研究の検討にうつる。本事として指

摘されているのは南宋・洪邁『夷堅志』所収の故事である。まず『夷堅志』支丁卷四「朱四客」<sup>五</sup>。内容は次のごとし。

朱四客は山道で強盗に襲われたが、隙を見て崖の下に蹴落として逃げた。その夜泊まった民家はなんとその強盗の家だった。夫婦の會話を盗み聞きしてそれを知った朱は家に火を放って逃げた。

確かにニセ李逵故事に似ている。しかし、強盗は老母がいると訴えてはいないし、強盗を許して逃がしたのでもない。朱が家に火をつけたのは殺されるのを恐れたためであり、強盗が嘘をついたことに怒るという要素はない。また、強盗を殺してもいいない。

殺虎故事の本事とされる『夷堅志』甲卷十四「舒民殺四

虎」<sup>六</sup>の内容は次のとおり。

虎に妻をさらわれた男が激怒し、虎の巢穴にいた仔虎二頭を殺して巢穴に隠れ、歸って來た雌虎を刺して妻を取り返したが、もう妻は死んでいた。さらに雄虎も殺し、妻の恨みを晴らした。

親族が虎に殺され、危険を顧みず仇討ちに行き四頭殺すという筋のみならず、殺す順序までも同じで、本事として指摘するには申し分ない。しかし、さらわれたのは母ではない。

このように、現在見られる李逵殺虎故事のもつ要素で、『夷堅志』の故事にも見えるものは少なくないが、『夷堅志』には求められない要素もある。たとえば、水滸傳の各種評が注目している李逵の「孝」や、ニセ李逵が嘘をつい

<sup>五</sup> 孫楷第『滄州後集』（中華書局、一九八五年）卷一「水滸

傳人物考 附一夷堅志與水滸傳」、馬雍『《水滸傳》李逵故事

来源』（『文史』一九八〇年第八期）、侯会『《夷堅志》中的

《水滸傳》素材』（『明清小说研究』一九九九年第二期）、項

裕榮「试论李逵形象塑造的南北融合」（『学术论坛』二〇〇七年第一期）。『夷堅志』は中華書局一九八一年刊行の排印本を

使用。

<sup>六</sup> 魯迅「馬上支日記」『魯迅全集』第三卷「華蓋集續編」（人民文學出版社、一九八九年）、孫楷第「水滸傳人物考 附一夷堅志與水滸傳」、馬雍『《水滸傳》李逵故事来源」、項裕榮「试论李逵形象塑造的南北融合」

て李逵をだますくだりなどである。これらは一體なぜ李逵故事に組み込まれたのだろうか。

前述の故事以外に、侯會『夷堅志』中的『水浒传』素材が『夷堅志』丁卷十一「豊城孝婦」を本事としてあげている。

夫婦、夫の母、子二人の一家が水害を避けて他郷へ行こうとしていた。夫は老母を重荷に思い、捨てていこうと妻に言い、子連れて先に小川を渡った。妻は老母を捨てるに忍びず、支えて川を渡ったところ對岸に夫の姿はなかった。子に聞くと「黄色と黒の斑の牛にくわえられて行った」と言う。林の中を探すと、夫は虎に噛み殺されたように死んでいた。不孝の罰が下されたのである。

<sup>七</sup> 文徵明が所藏していた宋刊元印本『夷堅志』八十卷が、清代に陸心源の藏になり、これを重刻した十萬卷樓叢書『重刻宋本夷堅志』（百部叢書集成所収、臺北・藝文印書館、一九六五年）がある。ここには「舒民殺四虎」と「豊城孝婦」は収録されているが「朱四客」は収録されていない。『新編分類夷堅志』（東京大學東洋文化研究所藏）は、宋・葉祖榮が『夷堅志』の記事を「忠臣門」、「孝子門」など三十門に分類しなおした本を、嘉靖二十二年に洪楩が清平山堂で覆刊した

侯會は、李逵殺虎故事はこれを「反用」したのだと言う。母を故意に水邊に捨てようとした人が虎に食われてしまう話を裏返すと、母のために水を探しに行き、思いもかけないことに母を虎に食われてしまう話になるといことだろう。侯會はそう明言してはいないが、前掲の本事だけでは「孝」が足りないため、「孝」の供給元となる虎の故事を探したのではないか。

しかしそもそも『夷堅志』のみで李逵故事の要素をすべて説明する必要はないのである。『夷堅志』は南宋期の成立以來、明代に至ってもなお廣く讀まれていたとはいえず、李逵故事はそれ以外の明代當時の知識、思想なども反映して編集されたと見ることもできよう。そこで次に明人の知識、思想を反映していると思われる資料をとりあげ、李逵故事の要素を検討していくことにする。

もの。「豊城孝婦」は収めるが、「舒民殺四虎」と「朱四客」は収めていない。元代から明代前中期の人は『夷堅志』の「朱四客」を目にしていなかった可能性がある。『夷堅志』の版本については胡紹文『《夷堅志》版本研究』（大理学院学报）第一卷第二期、二〇〇二年）、張祝平『《夷堅志》的本研究』（《古籍整理研究學刊》二〇〇三年第二期）を参照した。

### 三・明代の虎イメージ

李達故事に盛り込まれた思想を見るための恰好の資料として『虎苑』<sup>八</sup>、『虎薈』<sup>九</sup>という二書が現存する。

『虎苑』は王穉登が嘉靖三十三年ごろに刊行した<sup>十</sup>。上下二卷、十四篇に分かれ、唐代傳奇や『太平廣記』などから引用した記事のほか、いまでは出處のわからない項目も多数ある。

『虎薈』は、黄庭鳳の跋文によると、万曆二十五年六月、病床にあった陳繼儒が『虎苑』を見て、より規模の大きな本の編纂を思い立ち、翌年六月に完成、七夕に跋文が書かれた。全六巻で、項目数は『虎苑』の約二・五倍にのぼるが、巻名、篇名はない。内容に應じた整理もなく、手

当たり次第に材料をかき集めて並べただけという印象を受ける。『虎苑』にある項目も百一條収録されている。陳繼

儒の本の多くが、人々が手分けしてさまざまな書物から抜書きを集めるという方法で編纂、出版されたというが<sup>十一</sup>、この本の編纂の速さ、内容の亂雑さはまさにそのような事情によるのだろう。『虎薈』は四庫全書の存目に見える

が、提要も「凡所引用多，拉雜無倫。：與談虎無涉，亦皆漫為牽綴（およそ引いているものは多いが、亂雑で秩序もない。：虎を語るのとは關係のないものでもいい加減にあつてある）」と批判するばかりである<sup>十二</sup>。『虎苑』は四庫提要には見えない。清代には消えてしまっていたのか、とるに足りない本と見られたのであろう。

兩書は正統な文學觀からの評価は低かったが、當時手に

<sup>八</sup> 『虎苑』（『說郭三種』『說郭續』所収、上海古籍出版社、

一九八六年）、『虎苑』（『續集四庫全書』子部、上海古籍出版社、一九九五年）

<sup>九</sup> 『虎薈』（『百部叢書集成十八 寶顏堂祕笈』、藝文印書館、一九六五年）

<sup>十</sup> 高明「王穉登《虎苑》研究」（『图书馆杂志』二〇〇五年第五期）の推定による。

<sup>十一</sup> 「ここ」（\*引用者注…錢謙益『列朝詩集』丁集下「陳徵士

繼儒」）には陳繼儒の書物の具体的な様子、つまりその書物の多くが、アルバイトを使つての切り貼り作業によつてできあがつたものであつたことが記されている」（大木康『明末江南の出版文化』研文出版、二〇〇四年、百六十六頁）、「こうした分業体制で書物を作れば、たしかに大部の書物でも多種多様な書物でも、生み出すことは可能である。」（同百七十頁）

<sup>十二</sup> 『四庫全書總目』（中華書局影印、二〇〇三年）卷百十六「子部譜録類目」

入る資料をほぼそのまま轉載しただけで、編纂者による創作や改變の可能性は低いため、當時の知識を再現するにはむしろ大いに有用な書であると言える。『本草綱目』、『三才圖會』という、明代に刊行された博物的知識を伝えるための書物とほぼ同じ記載が見られることもそのことを裏づける<sup>十三</sup>。兩書は明代中後期の虎に關する知識の収集と再分配の様子を示しているのである。このため、李達故事の編纂者が兩書を直接見たという限定的な意味ではなく、この時期の人が接し得た虎知識を再現できる資料という位置づけで兩書を利用することは許されよう。これ以降兩書所収の項目に言及する際は、『苑』篇數（ローマ數字）・篇内の項目番號（アラビア數字）、『薈』卷數（ローマ數字）・卷内の項目番號（アラビア數字）」と記す。つまり

『苑』Ⅰ・1は『虎苑』上卷「德政第一」第一條を、  
『薈』Ⅱ・2は『虎薈』卷二第二條を表す。同じ内容が兩書に掲載されている場合は『苑』Ⅰ・3Ⅱ『薈』Ⅰ・5のように記す。また兩書は故事形式のものと、物語の體裁に

<sup>十三</sup> 「月暈時乃交」、「虎知衝破、能畫地觀奇偶以卜食」、「虎食狗則醉、狗乃虎之酒也」（『本草綱目』獸部第五十一卷上「虎」）、「知衝破、能畫地以卜」（『三才圖會』「鳥獸三・獸類・虎」）と「虎交而月暈」（『苑』『薈』）、「虎行、以爪坼地

なっていない知識や情報とをともに収めるが、本稿では「項目」をこれらの總稱として用いる。

兩書が収める項目にはどのようなものがあるのか。『虎苑』は全百四十二項目を内容に應じて十四の篇に分配している。順にあげると、「德政第一」、「孝感第二」、「貞符第三」、「占候第四」、「戴義第五」、「極暴第六」、「威猛第七」、「靈怪第八」（以上上卷）、「參擾第九」、「博射第十」、「神攝第十一」、「人化第十二」（『說郛續』所収本の正文は「第十一」と誤記）、「旁喻第十三」、「禿志第十四」（以上下卷）である。また、汪玢玲『中国虎文化』<sup>十四</sup>が、歷代傳奇小説中の虎故事を「一、神虎型故事」、「二、義虎型故事」、「三、人化型故事」、「四、人虎婚故事」、「五、虎媒型故事」、「六、虎皮井故事」、「七、虎外婆型故事」、「八、虎醫型故事」、「九、虎寓言型故事」、「十、虎笑話及虎戲故事」と分類しているのも参考にする。

この雑多な内容をおおまかに整理すると、一端に自然の虎に關する知識を伝える項目があり、對極に人の倫理道德

ト食觀奇偶而行」（『苑』）、「虎食犬則醉、犬乃虎之酒也」（『薈』）など。

<sup>十四</sup> 汪玢玲『中国虎文化』（中华书局、二〇〇七年）

を理解し行動する虎の項目があり、その中間線上にさまざまな性質の虎が散らばっていると言える。そこには「人を襲う凶暴な虎（自然の虎）」、「なんらかの命のもとに人を襲う虎（凶暴性の合理化）」、「悪い人を襲い、いい人は襲わない虎（さらなる合理化）」、「自らの経験に基づき恩を返したり善人を助けたりする虎（人との関係を理解する虎）」、「人の倫理道徳を理解し、自らの価値観で行動する虎」という目盛りをふることができる。「トラがヒトを襲う理由を、ヒトはあれこれと考えたようである。単なる野生動物としてではなく、霊の世界の生き物として畏れていた<sup>十五</sup>」ことが、このようにさまざまな虎が語られた原因のひとつであろう。

この二書以前に虎に関する項目をあつめたものに、『太平廣記』（北宋・太平興國三年成書。以下『廣記』と略す）巻四百二十六「虎一」から四百三十三「虎八」、および『太平御覧』（同八年成書。以下『御覧』と略す）巻八百九十一「虎上」、巻八百九十二「虎下」がある<sup>十六</sup>。『虎

苑』所収の項目には『御覧』との、『虎薈』には『廣記』との重複が多いという傾向が見られるほか、宋代の二書に多く見られる、人が虎になる、または虎が人になる項目や、佞鬼（虎に食われた人の鬼）の項目が明の二書にはあまり多くとられていない一方、人の倫理道徳を解する虎の項目の占める割合が高くなっている。この「倫理道徳を解する虎」が汪玢玲の分類に見える「義虎」である。

明中期の人で、呉中四才子の一人にも数えられる祝允明に「義虎傳」という一文がある<sup>十七</sup>。ある男が他人の妻を奪わんとしてその夫を林の中に連れ込んで撲殺し、妻には夫は虎に食われてしまったので自分に嫁ぐように言ったところ、本當に虎が飛び出してきて男をさらって行った、夫は實は氣を失っただけで、夫婦は再會できたという話である。祝允明は、虎が義なのではなく、天の義が虎にこのような行動をさせたのだと解釋している。

馮夢龍は『情史』<sup>十八</sup>巻二十一「情通類」に「虎」と題して同じ故事を引き、「傳義虎者」として祝允明の解釋も記

<sup>十五</sup> 上田信『トラが語る中国史』（山川出版社、二〇〇二年）、九十一頁

<sup>十六</sup> 『太平御覧』（人民文學出版社排印、一九五九年）

<sup>十七</sup> 祝允明「義虎傳」（『舊小説』『戊集』、上海書店、一九八五年）

<sup>十八</sup> 『情史』東京大學文學部藏用芥子園藏版刊本



している。また、巻十二「情媒類」の「勤自励」は『太平廣記』（引『廣異記』）所収の同名の故事を引いたものである。概要は次の通り。

勤自励は妻・林氏を残して出征したまま十年戻らず、林氏の両親は娘を他家に再婚させようとした。歸郷した勤自励は事の次第を知り、林家へ向かった。道中雨に遭い、雨宿りのため木のうろに入り、そこにいた仔虎三頭を殺した。しばらくすると大虎が人をくわえてきた。それはなんと林氏だった。勤自励は虎を斬り殺し、林氏を連れ歸った。

馮夢龍は末尾に、徳を示しながらかえって殺されてしまった虎は哀れだが、虎が人を害さないと信じられないのだからやむを得ないと記している。この二種は、虎は凶暴で人を襲う印象が強く、人の道德を解する虎という存在を信じられないという、義虎故事の初期の姿と言えよう。

<sup>十九</sup>『醒世恒言』（『馮夢龍全集』二十四～二十五、上海古籍出版社、一九九三年）巻五「大樹坡義虎送親」。佐藤晴彦「『醒世恒言』における馮夢龍の創作（Ⅰ）——言語的特徴からのアプローチ——」（『神戸外大論叢』第三十九巻第六号）一

馮夢龍はさらに「大樹坡義虎送親」を『醒世恒言』に収めている<sup>十九</sup>。入話は「虎」を利用した、人の妻を奪いとうと謀った男が虎に食い殺される話である。正文は「勤自励」を敷衍したもののだが、冒頭に勤自励が畏にかかっていた虎を逃がしてやる場面を設けてある。逆に勤自励が仔虎を殺すくだりは削除され、虎が林氏を届けた場面では勤自励は虎を殺さず、感謝のことばを言う。ここに至って誰の命でもなく人の倫理道德を理解して行動する虎と、それを理解して虎に接する人間とによる義虎故事が完成したと言える。祝允明や馮夢龍は王穉登や陳繼儒とは異なり、虎に関わる故事ばかりを集めていたのではない。その二人が世に無数にある物語の中から義虎故事を選び出したことは注目している。この時期蘇州文人の間に義虎にまつわる話が注目を集めていたのだろうか。

ひと口に「人間の倫理道德を解する」と言っても、その内容はさまざまである。孫正國の整理<sup>二十</sup>によれば、典型的

九八八年）が、この巻の入話は馮夢龍による創作、正文は先行する話本に「馮夢龍がかなり手を加えた」ものと推定している。

<sup>二十</sup> 孫正國「中国义虎型故事的文化传承」（『西南民族学院学

な義虎故事は「一・虎が苦難に遭い、助けられる（a・喉や足にトゲが刺さる。b・木の間にはさまる。c・難産。d・罠にはまる。e・その他）」、「二・恩人が災難に遭う（a・陥れられる。b・貧困に苦しむ。c・養ってくれる人がいない。d・妻がいらない。e・その他）」、「三・山を出て恩を返す（a・獲物を贈る。b・男女の仲をとりもつ。c・恩人を獄などから救い出す）」という展開を持つ。恩を受けた前提なしに義によって行動する虎の故事もあり、その内容には「a・罪（人を食った）」を認めて罰を受ける。b・孝子が孝を尽すのを助ける。c・誓いを交わした男女を結びつける。d・妻のない男のために女をさらってくる。e・悪人を成敗する。f・神仙などを守る」がある。

言うまでもなく「義」は水滸傳のキーワードのひとつである。水滸傳には、筆者が数えたところ四百十二度「義」ということばが現れる<sup>二十一</sup>。しかし、その水滸傳に四度登場する虎はいずれも義虎ではない。一度目は第一回で、皇帝の勅使・洪大尉が龍虎山の張天師を訪ねる山中に現われる。これは洪大尉の心を試すために天師が送ったものである。

り、道教の色彩が濃い。残る三度はすべて凶暴な野生の虎である。第二十三回では、酔った武松が景陽岡を歩いていて人食い虎に遭遇し、素手で殴り殺す。第四十九回は、人里を荒らす虎を捕えよとの官命に應じて解珍・解寶兄弟が罠をかけて捕えるが、地主の毛太公に横取りされたうえに投獄されるという話である。

李逵殺虎故事に現れるのが凶暴な野生の虎であることは別段おかしいことではない。『虎苑』、『虎薈』にも人を襲う凶暴な虎は見えるし、武松や解兄弟の故事に合わせて虎の形象に一貫性を持たせたということも考えられる。しかし李逵故事には他の武松、解兄弟の虎故事とは大きく異なる要素がある。それが「母の仇討ち」である。

『虎苑』、『虎薈』にも、襲われたため、狩のため、人々を悩ませているためなどの理由で虎に立ち向かう人が見られる。そのなかには親族を助けるものもある。虎と戦うことで助きたい相手への気持ちの強さが表現される。それが父母であれば「孝」である。薈Ⅱ・20は父をくわえて行こうとした虎を杖で追い拂い唐太宗に「至孝」と称えられた話、苑XIV・30Ⅱ薈Ⅵ・23は、母を虎にさらわれた仔犬が

虎にかみつき母をとり返す話、苑Ⅱ・1Ⅵ舊Ⅰ・21は、虎にさらわれた父を助けるため楊香が丸腰で虎に立ち向かい、太守に表彰される話である。楊香の話は元・郭守敬『二十四孝詩』<sup>二十二</sup>や『御覽』にも採られている。さらに朱權『太和正音譜』「古今無名氏雜劇一百一十本」には「楊香跨虎」という劇目が見える。テキストは傳わらないようだが、楊香と虎の故事であることは間違いない。「跨」という語から判断するに、クライマックスの場面で虎に馬乗りになるなどはげしい演出を加えたものかもしれない。ともあれ、楊香の虎退治はジャンルを超え、長い期間にわたって知られていたようである。李達殺虎故事もこの故事類型に似た構造をしている。この類型ではふつう父母が生きて歸ってくることで子の孝心は實を結ぶ。虎は人の「孝」を顯すための脇役にすぎぬのだから、故事の都合上「孝」の對象を消してしまうはずがないとも言える。とはいえ、兩書に人が虎に食われる項目は少なくともなく、子と思う母が子を虎に食われてしまう項目もあるのに孝子の父母が殺されることが一切ないのは注目すべき現象である。

孫正國の整理にもあるように、義虎が解する「人の倫理道德」には「孝」も含まれている。苑Ⅱ・2と舊Ⅳ・36には人の孝行を手伝う虎が、苑Ⅱ・3Ⅵ舊Ⅰ・28、苑Ⅱ・4Ⅵ舊Ⅳ・19、苑Ⅱ・5Ⅵ舊Ⅳ・21には、襲いかかった相手が孝子であることを知り手を引く虎が見える。さらに、虎が人に化けて孝行を説いて回るという項目すらある（舊Ⅲ・48）。もちろん兩書にあるものが當時知られていた虎知識のすべてだというのではない。しかし少なくとも兩書においては明らかな偏り——虎は凶暴だが孝行を壊すようなまねはしないものだという考え——があることは指摘できる。

李達殺虎故事は孝子が父母を虎から救い出す故事類型を利用して李達の「孝」、「勇」を描き出したものの、そのなかに、母が虎に食われるという、『虎苑』、『虎薈』の虎イメーজと符合しない要素を持っている。編纂者はそのことを意識しなかったのだろうか、それともあえてそうしたのだろうか。

野生の虎が山中に一人で坐る老婆を食い、孝なる息子が怒り、仇討ちに虎を殺すという筋立て自体に矛盾はない。

この点だけを考えれば、「孝を知る虎」より水滸傳のほうが眞實性に徹しているとも言える。しかし筆者は、編纂者は義虎故事を知っており、その虎イメージに反する要素があることも十分認識したうえで李逵殺虎故事を編んだものと考ええる。そう思わせる描寫は、殺虎故事の直前、ニセ李逵故事にある。

#### 四・李逵と虎

小松謙がまとめて「李逵探母故事」と稱しているように<sup>二十三</sup>、ニセ李逵故事与李逵殺虎故事は一組のものとして作られたと考えられる。まず、李逵がニセ李逵をゆるす場面を掲げる。

李逵道「叵耐這廝無禮、却在這裏奪人的包裹行李、却壞我的名目！學我使兩把板斧、且教他先吃我一斧！」匹手奪過一把斧來便砍。李鬼慌忙叫道「爺爺！殺我一個、便是殺我兩個！」李逵聽得、住了手問道「怎的殺你一個、便是殺你兩個？」李鬼道「小人本不敢剪徑、家中因有個九十歲的老母、其實並不曾敢害了一個人。如今爺爺殺了

小人、家中老母必是餓殺。」李逵雖是個殺人不斷眼的魔君、聽的說了這話、自肚裏尋思道、「我特地歸家來取娘、却倒殺了一個養娘的人、天地也不佑我。罷、罷、我饒了你這廝命！」放將起來、李鬼手提著斧、納頭便拜。

李逵は「この無禮者めが、ここで旅人の荷を奪って俺の名を汚しおつて。俺の二丁の板斧をまねようつてんなら、まず俺の一撃を食らえ」と言い、片手で斧をひとつ奪いとりたたき切ろうとした。李鬼は慌てて叫んだ。「だんなさま！俺一人を殺すことは二人殺すことでございますぞ！」李逵はこれを聞くと、手を止めて尋ねた。「なぜおまえ一人を殺すことが二人殺すことなんだ？」李鬼は言った。「わたくしめはそもそも追剥はしたくないのですが、家に九十歳の老母がいるので：本當に一人も殺しちゃいけません。いまだんながわたしを殺せば、家の老母は必ずや餓死します。」李逵は人を殺してもまばたきすらせぬ魔君であつたが、このことばを聞き、心の中で思うよう、「わざわざお袋を迎えに歸るところだつてのに、母を養う者を殺したのでは天も地も俺を助けてはくれまい。やめだやめ

だ、てめえの命は助けてやる！」放してやると李鬼は起き上がり、手に斧を持ち平伏して拝した。

次に『虎苑』、『虎薈』におさめる義虎と孝子の故事のうちのひとつ。

朱泰、家貧養母、百里鬻薪、親極滋味。戴星伐木、虎負之去。朱厲聲曰「食我不惜、母無托耳。」虎棄泰于地去。(苑Ⅱ・5Ⅵ薈Ⅳ・21)

朱泰は家が貧しいなか母を養っていた。百里先まで薪を売りに行き、よいものを食べさせていた。朝早く木を切りに出かけると、虎が泰を背負って行こうとした。朱泰は聲をはりあげて言った。「私は食われてもかまわないが、母がよるべがなくなるのだ。」虎は泰を地に捨てて去った。

水滸傳のほうが描寫が詳しいが、「遭遇」、「殺されかけ」、「母がいるという哀訴」、「解放」という展開は一致し

ている。『虎苑』、『虎薈』所収の他の二例も同様である。

登場人物に目をむけると、虎の登場しない水滸傳ではニセ李逵が孝子の役を、李逵が義虎の役を果たしている。その後ニセ李逵を殺す場面は、反道徳的行為をした者に對する懲罰とも讀める。ここでは形を変えた義虎故事が展開されているのである<sup>二十四</sup>。

李逵が虎であるとは突飛な説と言われてしまうかもしれないが、展開の一致以外にもそれを思わせる要素はある。

李逵は黒旋風という綽名をもつ暴れん坊である。第三十八回、初登場時の詩はその風貌を「黒熊般一身粗肉 鐵牛似偏體頑皮(黒熊のごとき全身の筋肉、鐵牛のごとき体中の硬い皮)」とうたい、第四十回には「又見十字路口茶坊樓上、一個虎形黒大漢：(さらに辻の茶屋の屋上には虎のような姿の黒い大男が見え)」という描寫が見える。李逵の形象は「牛」、「熊」、「虎」などさまざまに形容される。「黒い猛獸」であったと言つてよい。

一方『虎苑』、『虎薈』にも「黒虎」の現れる項目があり(苑Ⅵ・4Ⅵ薈Ⅴ・69、苑Ⅹ・8Ⅵ薈Ⅱ・18、苑ⅩⅣ・33

り、義虎と孝子の故事の淵源となった可能性も考えられる。

二十四  
惡人が義のある人を許す故事があるように(『世說新語』德行第一「荀巨伯」など)、惡人が孝子を許す故事があ

Ⅱ 薈 VI・24、薈 III・7、薈 V・16)、一例のみだが子どもが虎を「黒牛」と誤認する項目もある(苑 VI・2。『夷堅志』「豊城孝婦」の類話。ただし『夷堅志』の「黄黒斑牛」が、「黒牛」に替わっている)。

もちろん外見上の類似の指摘のみでは證據として不十分である。そこで「なぜ黒い虎が現れるのか」について検討したい。

抽象的な意味合いが込められた虎としてもっとも有名なものは、五行にもとづく「朱雀・玄武・青龍・白虎」、つまり白い虎ではないかと思われる。實際、『虎苑』、『虎

薈』にも白虎は幾度も現れる(苑 I・7、苑 III・1、苑 III・5、苑 XI・3 Ⅱ 薈 II・48、薈 I・2、薈 I・24、薈 I・73、薈 III・46、薈 X・42、薈 X・53)。では「黒虎」はなにを意味するのだろうか。再度先にあげた「黒虎」の現れる項目を見ると、そのうち二項目で玄壇神が現われていることに氣づく。それぞれの内容は次の通り。

美しい寡婦の隣に住む木客が夜中に木を寡婦の家の庭に置き、盗まれたと訴えた。寡婦は日ごろ信仰していた玄

壇神に祈った。玄壇神は夢で「吾虎」を遣わすと言った。まもなく木客は山中で黒虎にさらわれた。(苑 VI・4 Ⅱ 薈 V・69)

呉では鬪蟋蟀が盛んだった。いつも負けていた張生は、普段から信仰していた玄壇に祈った。玄壇は夢で「吾虎」を遣わすと言った。目覚めてから大きな黒蟋蟀を手に入れた。勝負すると連戦連勝で大もうけし、しばらくすると蟋蟀は死んだ。(苑 XIV・33 Ⅱ 薈 VI・24)

ここで黒虎は玄壇神の手下とされている。前者は萬曆年間に刊行された故事集『耳談』<sup>二十五</sup>卷十三「玄壇神」にもやや詳しい記述で載っている。そこでは「嘉靖年間」と時期が明記されるほか、木客は仲間六七人といったところをさらわれていて、虎が偶然ではなく命令通りに対象を選んだことがはっきりわかる。また、玄壇神のことばは「已命黒虎(すでに黒虎に命じた)」で、「黒」がより強調されている。苑 XI・7 Ⅱ 薈 III・45にも、虎の色は書かれていないものの神術の使い手が「玄壇法」を用いて虎を操るさまが

書かれ、末尾に「蓋道家謂玄壇能伏虎耳（思うに道家は玄壇が虎を抑えられると考えている）」とある。

玄壇神とは道教の元帥神のひとり、「趙元帥」のことである。『三教源流搜神大全』<sup>二十六</sup>によれば、姓は趙で諱は公明、秦の頃に世に背き山中で修行し、玉帝に召されて元帥となった。鐵冠をかぶり、鐵鞭を手にし、顔は黒く、鬚鬚を生やし、虎に跨っている。漢代、初代張天師が仙丹を練る時に守護にあたり、正一玄壇元帥の位を授かった。その後永く龍虎山を護っている。雷電を走らせ、風雨を呼び、瘟役・瘡疾を鎮め、災厄を拂うことができる。冤罪を訴えれば公平に裁いてくれ、財を求めれば利が得られる。寡婦が冤罪を晴らしてほしいと祈ったこと、張生が賭けでもうけたいと祈ったことは確かに玄壇神の職掌<sup>二十七</sup>に對

<sup>二十六</sup> 『三教源流聖帝佛祖搜神大全』（『中國民間信仰資料彙編』第一輯第三冊正編第二種 臺灣學生書局、一九八九年）。一階堂善弘『道教・民間信仰における元帥神の変容』

（関西大学出版部、二〇〇六年）によれば、本書は永樂年間以降明後期までに成立し、基本的には元から明にかけての元帥神信仰の體系を反映している。趙元帥の記述は元代に成立した『道法會元』、『搜神廣記』もほぼ同じであるという。

<sup>二十七</sup> 趙元帥は現在ではもっぱら財神として知られる。野口鐵郎・田中文雄編『道教の神々と祭り』（大修館書店、二〇〇四年）遊佐昇「財神」参照。二階堂善弘『道教・民間信仰に

應している。何事が起きたときのために職掌の多彩な玄壇神を日ごろから信仰していたのだろう。これが明人の實情を反映しているとすれば、かなり身近な神であったと言える。また、水滸傳第一回で虎の現れる龍虎山が玄壇神とゆかりの深い場所であることもわかる。『三教源流搜神大全』に虎の色は書かれていないが、明・正統年間に成立した『正統道藏』<sup>二十八</sup>所収の『清微元降大法』卷十七「上清西禁大法」には「黒虎從之（黒虎がこれに従う）」とあるほか、第三十八回には白い肌をもつ張順と李達との格闘シーンに「一個是馬靈官白蛇托化、一個是趙元帥黒虎投胎（かたや馬靈官の白蛇が托化し、かたや趙元帥の黒虎が投胎する）」なる句が見える。遅くとも水滸傳成立のころには趙元帥は黒い虎を手下に從えているという考えが廣まっ

における元帥神の変容』は、『道法會元』卷二百三十四の「正一龍虎玄壇金輪執法如意秘法」は招財の法術であり、民間系の出自を持つと思われると述べる（百五十七頁）。

<sup>二十八</sup> 『道藏』洞真部方法類『清微元降大法』（上海涵芬樓藏本）（上海商務印書館、一九二三年）。『道藏』については胡春華「明清時期古籍丛书浅探」（『华夏文化』二〇〇四年第一期）、趙京深「道教的经书总集——《道藏》」（『内蒙古统战理论研究』二〇〇八年第五期）を参照した。

ていたと見てよいだろう。虎の色が黒とされたのは、玄壇神が北方の神であること、顔が黒いことなどによるのだろう。玄壇神と虎に關して、もうひとつ虎苑<sup>三</sup>、10をあげたい。

荊南に虎が増えたので人々は城内へ引越した。張四も引越そうとしたが、それが終わらぬうちに虎が來てしまった。張が梁に隠れると虎は皮を脱ぎ人間の男になった。張はその皮を隠した。それに気づいた男は赤い札を取り出し、この天符に名がある人は張以外すべて殺したが、皮を返せば張は殺さないと約束した。皮を返すと虎に戻り、去っていった。翌日虎は雷に打たれて死んでいた。

『廣記』に多く見られる、人が虎になる要素を受け継ぎ、天の命を受けて死ぬべき人を始末しているとして、虎が人を襲う理由を合理化している。その命を與えたものは、雷に打たれたところから推測すれば、雷電を操る玄壇神なのかもしれない。

苑X、8Ⅱ薈Ⅱ、18には黒虎のみが現れ玄壇神は見え

ない。背景に玄壇神と關わる要素があるのか否かはわからない。ほかに外國や少數民族に關わる黒虎もあるが、これらはしばらく措く。

水滸傳で李逵の主人と言える人物は二人ある。ひとり、初登場時、李逵の上司であった戴宗である。戴宗は神行太保とあだ名され、一日八百里を走れる秘術、神行術を習得している。太保とは「宋代では怪しげな祈禱をする妖人を意味」<sup>二十九</sup>したという。戴宗は第百回で朝廷より賜った官を辭し、泰山で出家する。編纂者に道士としてあつかわれていた人物と考えてよい。第五十三回では李逵と二人で公孫勝を訪ねていく道中、神行術で李逵を懲らしめる場面がある。李逵はさらに、公孫勝をたずねあてた先で、公孫勝の師匠・羅真人にこっぴどく仕置きを受ける。黒虎同様、李逵も道士に弱いようである。

もう一人の主人は宋江である。第三十八回で宋江と初めて對面して以降、李逵は宋江を命をかけてつき従うべき義兄とみなし、つねに行動をともにしている。その宋江は道士ではなく、儒家思想に忠實な知識人である。しかし黒虎の主である玄壇神趙元帥と共通點をいくつか有しているこ



とは見逃せない。まず、字が玄壇神の俗名とおなじ「公明」であり、「黒い顔」である點も一致する。また、天から謫された百八星のトップである宋江は天魁星と稱される。魁星は北斗七星の第一星で、玄壇神の守護する北方にある。

宋公明と趙公明の關わりについては大塚秀高「瘟神の物語——宋江の字はなぜ公明なのか」<sup>三十一</sup>がすでに論じている。大塚は趙公明が北方に位置づけられ黒臉とされるようになった時期は明初であり、宋江は「瘟神趙公明を念頭に形象された」と述べている。かくのごとく趙公明と宋公明に類似性が認められるのであれば、その手下、つまり玄壇神の手下の黒虎と宋江の手下の黒い猛獸・李逵とのつながりを認めることもさほど無理なことではなからう。大塚は宋江を「善なる瘟神」、李逵はその分身の「惡の瘟神」と見なし、手下とは述べていないが、筆者は、李逵が宋江の手下としての身分と、分身としての身分の兩方を有していても物語の展開上矛盾は生じないと考える。大塚も「善なる瘟

神は惡の瘟神にくらべ、力そのものは弱くてもかまわなかった。惡の瘟神をおさえつける能力さえもっていればよかったのである。この考え方が反映されたものが宋江と李逵の力關係であり体軀の相違だった」と述べているように、兩者をまったく對等なものと見ているのではない。

瘟神としての趙公明は『三教源流搜神大全』「五瘟使者」に見える。二種の趙公明について二階堂善弘は、趙元帥が瘟神から發展したことは間違いないがその性格はかなり變化し、『封神演義』成立以降はほとんど瘟神として意識されなくなったと言う<sup>三十一</sup>。『封神演義』の成立は萬曆年間後半から天啓年間の間と考えられるだけで詳しくはわからないため<sup>三十二</sup>、兩「公明」の瘟神イメージが水滸傳編纂當時どの程度のものであったかはここで確定することはできないが、これまでにあげた各要素から見て、兩「公明」とその手下同士を結びつけることは十分可能であろう。そこから見えるのは、趙公明に遣わされ善人を助け悪人を懲らしめる黒虎と、宋公明の山寨から下りてきて孝心

<sup>三十一</sup> 大塚秀高「瘟神の物語——宋江の字はなぜ公明なのか」  
<sup>三十二</sup> 二階堂善弘『道教・民間信仰における元帥神の変容』、二

百三頁  
<sup>三十三</sup> 二階堂善弘『封神演義の世界 中国の戦う神々』（大修館書店、一九九八年）、九十八頁

を發揮し、嘘つきを殺す李逵という並行關係の構圖である。

以上の諸要素から、ニセ李逵故事は李逵が虎の役割を果たしている義虎故事の一變種であり、ニセ李逵故事と李逵殺虎故事とは、「虎」と「孝」を主要要素とし、正反對の行動をとる「虎」を描く組み合わせとして構想されたものと考えられる。

これにもとづいて李逵探母故事を整理すると次のようになる。

まず李逵が虎の役割を演じ、義虎が孝子をゆるす故事が展開される。水滸傳の虎は凶暴な形象で統一されているので虎そのものを義虎とすることはできないが、人間である李逵ならば可能である。この故事は李逵の孝心を表現すると同時に、後で孝を無視する虎が現れることの埋め合わせである。

續く強盜の家に偶然行ってしまう場面で嘘をついた強盜を殺すのは、水滸傳の表面上の意味としては李逵の凶暴な性格を表現している。義虎として見れば、反道徳的な行為

をした人に懲罰を下しているのである。強盜の腿を焼いて食うのは懲罰であると同時に、あとで虎が李逵の母の腿を食うことに對應しているのかもしれない<sup>三十三</sup>。

郷里で母と再會してからは「孝子」李逵の故事である。母を食った虎に立ち向かうのは虎から親族を救う故事の踏襲であり、李逵の勇猛と孝心を表現し得る恰好の場面である。この虎は人の道徳など解するはずもない凶暴な獣であり、ほかの梁山英雄と虎の故事とも一貫している。そして一時囚われの身となる危機に見舞われながらも、最終的には仲間の助けを得、さらに二人の新たな仲間を連れ歸り、探母故事は幕を下ろす。

## 五・李逵殺虎故事の背後に見えるもの

この李逵探母故事の検討から、われわれは水滸傳の編纂方針を垣間見ることができる。

まずひとつは、構成上の要請にいかに応えようとしたかということである。

李逵探母故事は水滸傳の構成上、重要な役割を擔ってい

<sup>三十三</sup> もつとも、李逵は第四十一回でも宋江の敵の黄文炳の肉を食っているため、「人を食う」行為自体はニセ李逵故事特

有のものとは言えない。

る。水滸傳で、百八人うちそろって招安を受ける以前に李逵が山を下りる場面は都合四回ある。そのうちのひとつは雜劇「梁山泊李逵負荊」をとりこんだものである。そのほかの三例において、いずれも李逵は新しい仲間を伴って戻ってくる。殺虎故事では青眼虎李雲、笑面虎朱富の二人が加わり、宋江が「四頭の猛虎がお前に殺され、山寨に生きた虎が二頭加わった」(第四十四回)と言う。この三例で仲間に加わるのは『宣和遺事』には見えない人物ばかりである。ここから、李逵のエピソードは百八という頭數をそろえるべく、それまではつきりした來歴や個別の物語を持つていなかった人物を集めてくる役割を果たしていることがわかる。水滸傳以前は三十六人しかいなかった宋江の集團を一氣に百八人まで増員し、その全員を、扱いの違いはあるとはいえ、とにもかくもひととおりの顔見せさせ、かつそれを全百回、梁山泊集團の萌芽、成長、完成、崩壊の流れのなかに収めることが最終編纂者の大きな仕事のひとつであった。編纂者は、魯智深、武松、楊志など、既存の英雄物語をとりこむことで多くの讀者をひきつけようと試

み、おそらくはそれに成功したのであるが、有名な故事をならべただけで水滸傳ができるわけではない。これら既存の英雄物語は、員數合わせにはほとんど貢獻していないからである。特に、武十回とも稱される第二十三回から第三十二回までの武松を主役とする部分は高島俊男の述べるごとく獨立性が異様に高く、なかでも第二十三回から第二十六回は「武松以外にもたくさんの人物が登場するのに、それらはすべてこの部分のみの人物であって、他の部分から完全に孤立して」<sup>三十四</sup>いて、四回も費やしながら百八人の名簿を埋めるといふ目的には一切力になっていない。「武松は、水滸傳の重要人物ではあるが、梁山泊の重要人物ではない」<sup>三十五</sup>と言われるのももつともなのである。これに對し李逵の三つの故事は、百八人をひととおりに登場させるという編纂方針に少なからぬ貢獻をしている。李逵は最終編纂者が「英雄故事の集合體」を「水滸傳」たらしめるために不可欠な役割を與えた人物であった。

ひとつひとつの故事の獨立性が強いとはいえ、水滸傳はひとつつらなりの長篇であるから、それぞれの故事の間には

なんらかのつながが必要である。李逵探母故事の場合は、直前に見える宋江の父と公孫勝の母の話題を利用している。宋江と公孫勝の言動が李逵の孝心を呼びさまし、探母故事がはじまるという展開にしたのである。

また、李逵故事からは最終編纂者の新故事の創作方法をもうかがい知ることができる。

水滸傳が吸収した英雄故事は、その多くが宋元以来、口頭藝能や舞台藝能で練り上げられてきた、素朴で力強い古風なおもむきを持つものだと言われている。そのなかでも明代の最終編纂時期まで生き残ったものであるのだから、受容者、編纂者に高い評価を受けた、人氣の故事ばかりであったのだろう。最終編纂段階の新故事はこれら年季の入った有名故事にいかにして對抗しようとしたのか。

古くから水滸傳は部分ごとに使用される語彙や語り口が異なると言われてきた。さらに近年、高野、小松の共同研究、達富睦の研究など、使用語彙の分布の緻密な計量により、語彙や決まり文句、言い回しなど、古いものが集中し

て現れる部分と、新しいものが多く使われる部分がかなりはつきり別れていることが証明された<sup>三六</sup>。佐藤晴彦の分析によれば、「三言」においては、明代に作られたと思し

き作品のなかに、宋元話本に見られる用字法を意圖的に用いて古くから傳わる作品であるかのように見せかけたものがあるという<sup>三七</sup>。これに對し水滸傳では、一部「意圖的に『宣和遺事』や話本を模倣したことによる可能性が想定でき」<sup>三八</sup>る部分があるほかは、語彙や定型表現などにはつきりと違いが見られる。模倣することができるともかわらず多くの部分でそれがなされていない以上、最終編纂者には、古風な物語に合わせようという考えも、ましてそれに見せかけて新作故事であることを隠蔽しようという考えも希薄だったのではないか。

李逵探母故事は廣く材料を集めて作られている。『夷堅志』、『太平廣記』、『太平御覽』などに類話が見られることから、古くから傳わる故事も材料として拒否されているわけではない。その一方で、明代に知識人の注目を集めてい

<sup>三六</sup> 高野陽子・小松謙『『水滸傳』成立考―語彙とテクニカル・チームからのアプローチ―』、達富睦「用字の違いから見る『水滸傳』の成立」(『和漢語文研究』、二〇〇三年)

<sup>三七</sup> 高野陽子・小松謙『『水滸傳』成立考―語彙とテクニカル・チームからのアプローチ―』、百三十六頁

<sup>三八</sup> 小松謙『四大奇書の研究』第三部「水滸傳」第二章「『水滸傳』成立考」、二百二十三頁

たと思しき義虎の話、おなじく明代に確立したと思われる玄壇神の形象やその信仰をもとりこんでいる。北宋末が舞台であるからといって古い故事ばかりに材料をもとめず、同時代的な知識や思想もふんだんに利用されているのである。この「思想」にはいわゆる道教も含まれるが、正規の教義・儀式というより民間習俗として溶けこんでいたものの反映と言ったほうがよいだろう。これら同時代的要素は、編纂者が題材探しをする際に身近なものに安易に手を伸ばした、日常に溶け込んでいた習俗であったため無意識にとりこんでしまったなど、「ミス」である可能性も完全には否定できない。とはいえ、語彙、決まり文句、言い回しの面でも堂々と新しいものを使用している事実と合わせ考えると、むしろ同時代の読者を意識し、読者が親しみ、興味を感じるであろう要素を積極的に組み込んで新たな故事を創作しようとの考えであった可能性のほうが高い。

そしてまた、編纂者は同時代的な材料をそっくりそのまま利用したわけでもない。既存の虎の故事をとりいれながら、虎が孝子の母を食ってしまうという、多くの虎故事に著しく反する展開を用意している。これは読者に意外の感を与え、故事に新鮮味をもたせる工夫ではないだろうか。しかしその直前に虎が孝子をゆるす義虎故事を利用し

たニセ李逵故事を配することで、決して従来の虎のイメージを無視しているわけではないという配慮も示している。

また、この状況を逆の方向から見ると、最終編纂時期の読者の趣味や共通理解を垣間見することもできる。たとえば『虎苑』、『虎薈』のごとき、正統な文學観では価値を認められなかった通俗書物に掲載されるような噂話が、実際には上層の知識人にまで好まれ、広く知られていたことが感じとれるし、玄壇神の手下といえど黒虎であるという前提が當然のこととして共有されていたこともわかる。

そして本稿でもっとも注目したいのが、水滸傳編纂における李逵の重要性である。

前述のとおり、李逵は水滸傳を完成させるために、構成上欠かせない役割を擔っている。この点については章を改めて詳しく論じることとし、ここではまず李逵が宋江の分身ないし密接不可分の手下であることを確認しておきたい。

李逵が宋江の影であるという指摘は少なくないし、本稿第二章でも宋江がその形象を變化させていくなかで捨て去ったさまざまな特徴を李逵が吸収していることを確かめた。さらに、そこで言及していなかった要素がもうひとつある。まず、李逵が宋江の影であることを示唆する研究を

ひとつ掲げる。

李逵出于对宋江的崇拜，而本人就是一个讲义气的汉子，所以更乐于仿效宋江的这种”济人贫苦，稠人之急，扶人之困”的精神，饶恕了那个自称要养赡九十岁老母的剪径歹徒李鬼，给他十两银子改业谋生，然而结果却是相反。实施义气的对象错了，其效果适得其反……<sup>三十九</sup>

李逵は宋江への尊崇の念に加え、そもそも義氣を重んずる男であったことから、宋江の「他人が金がなければ援助し、危機にあれば救い、難儀していればささえる」精神をすすんで模倣し、自稱九十歳の老母を養う追剥の李鬼を許し、商賣替えして生活するよう銀子十兩をやった。ところが結果はまるで違うものだった。義氣の対象を誤れば、その効果は正反対になるのである。

三十九 张芳「李逵悲剧形象简论」『襄樊职业技术学院学报』第三卷第三期、二〇〇四年

四十 小松謙は元人雜劇の李逵は、「黒旋風敷演劉耍和」、「黒旋風喬教學」、「黒旋風喬斷案」など、その朴訥な亂暴者という印象とは似ても似つかぬ人物に扮装したり、およそ似つかわしくない状況でとんちんかんな行動をとったりしてそのギャ

李逵は崇拜する宋江の行為をまねてみたものの、そのような時に限って相手は嘘つきで、詐欺に遭ってしまう。コピーは所詮コピーでしかなく、本物とおなじことはできなかった。結局は暴力に訴え、相手を惨殺して金をとりかえすいつもの李逵にもどってしまう。水滸傳における李逵の道化的役回り、短氣で亂暴という性格がよく表れている場面である<sup>四十</sup>。しかし張芳が「義」のみをふたりの共通点として挙げるのには不足の感が否めない。義を重んじる人物はほかにいくらでもいるのである。義のみではふたりが特に強い結びつきを有した関係であることを説明したことにはならない。

薩孟武『水滸傳與中國社會』は、中國の歴史を動かしてきたのは紳士と流氓であると説く。紳士とは支配階層であり、すなわち地主である。彼らは父祖の財産を受け継いでツプのおかしさを楽しませるキャラクターだったのではないかと推測している（小松謙「水滸雜劇の世界——『水滸傳』成立以前の梁山泊物語」）。李逵が宋江の不完全なコピーとして行動すること、虎の代わりを演じることは、この元人雜劇の李逵の役回りの延長上にあるとも言えよう。また、その李逵を真似るニセ李逵を登場させたことも、過去の李逵像を轉用したものであると考えられる。

いるがゆえに安樂な生活ができるのだから祖先への感謝、孝の情が芽生えるのは當然である。これに對し流氓は家庭の幸福を享受したことがない。彼らは勞働の際に暴徒や野獸に備えて仲間をつくることが多いため友人を重んじ、義氣を最高の道德とする。梁山泊は流氓の集團ゆえ義を重んじ、孝は重んじない。水滸傳で高俅に迫害される好漢として最初に登場する王進が梁山にのぼらなかったのは彼が孝子であるからであるという。

たしかにその通りで、梁山泊の豪傑ははじめから孝の對象を有しない、孝心を發揮し得ない人物ばかりである。父母を守ろう、養おうという言動を見せるのはほぼ宋江、公孫勝、李逵の三者に限られる<sup>四十一</sup>。このうち公孫勝は老母を養うことを口實に梁山をはなれたきり戻って來ない。つまり「孝」を「義」より重視していることになり、「義」を最高道德とする流氓集團にはなじまない。「義」と「孝」とをともに重んじようとする価値觀を宋江と共有し

<sup>四十一</sup> 史進は父を亡くした後で喪に服す場面があるが、その後は郷里を離れ天涯孤獨の無頼漢となる。阮兄弟には母親が健在であるが、宋江の死後の後日談として末弟の阮小七が母を養ったと語られるのみで、具體的に母とのエピソードが描かれることはない。

得るのは、李逵のみなのである。

「義兄弟と生死をともにする誓い」と「家族への情愛」の兩立がむずかしいと考えられていたことは他作品からも感じとれる。もっとも極端な例は「花關索傳」の冒頭部分であろう。姜子牙廟で義兄弟の誓いをたてた劉備、關羽、張飛の三人のうち、すでに妻子を持っていた關羽と張飛が、係累への情によつて三人の目標への決意が鈍ることをおそれ、互いの家族を殺し合うことにしたという場面である<sup>四十二</sup>。李福清は、『三國志演義』、『花關索傳』、『三國志平話』に劉備、關羽、張飛の兩親が一切現れないのは、「孝」を重んじる傳統思想のためだろうと言う。「兩親がいては義兄弟を作れない（有雙親不可結拜兄弟）」<sup>四十三</sup>。ゆえに英雄たちの兩親はけんか、家出、兩親の死など何らかの形で物語を離れる<sup>四十四</sup>。水滸傳は「孝」を準則とする知識人向けの作品であるから、「花關索傳」のように義のために家族を殺すなどという暴舉を描くことはできない

<sup>四十二</sup> 「新編全相說唱足本花關索出身傳」

<sup>四十三</sup> 李福清「三國故事與民間敘事詩」二「英雄奇生」（『李福清論中國古典小說』洪葉文化事業、一九九七年）、十二頁

<sup>四十四</sup> 李福清「三國故事與民間敘事詩」一「導言」、七、八頁

四十五。梁山泊入りするほとんどの人物が、家族と死別しているか<sup>四十六</sup>、家族を梁山泊に迎え入れていること<sup>四十七</sup>などは、この「孝があつては義が結べない」問題に對して用意された解決策なのだろう。「孝」が「義」と兩立しがたいと考えられていたことは公孫勝の行動がよく證明している。そのなかで宋江が父への孝を標榜していることは特筆すべきことであろう。『宋史』、『三十六賛』、『宣和遺事』に姿の見えなかった宋江の父が登場したことは、宋江が「傳統思想」を守る知識人に變つたことを讀者に傳えている。

李逵は水滸傳において「義と孝の兩立」という価値觀を宋江と共有できるほとんど唯一の人物であり、前掲のとおり明後期の版本に附された批評二種も李逵の行動に「孝」を讀みとっている。李逵が孝の人であることは讀者にも明らかであり、編纂者も李逵を孝の人として第四十三

四十五 秦明は官軍の將として梁山泊軍と戦つた際、寢返りを疑つた上官に妻を慘殺されている(第三十四回)。これは落草のために家族を殺す場面の變種かもしれない。秦明自身は身内殺しに手を染めることはなかったが、係累がなくなつたために梁山泊に加入しやすくなつたのは事實である。

四十六 林冲、秦明など。  
四十七 徐寧、李應など。

回を編んだと考えられる。そうであつてこそ李逵に宋江のコピー役を與え得たのである<sup>四十八</sup>。宋江は父を梁山泊に迎え入れることで孝と義の兩立を試みた。一方李逵は母を虎に食われることで孝を實踐できなくなつた。こうして現實の孝行の對象を失つたことで、公孫勝とは對照的に、以後は孝心をいだきつつもひたすらに宋江に寄り添い續けることが可能となる。李逵から母を奪うことは水滸傳全體の構成から必要なことだったのである。第四十三回は、宋江と李逵が密接不可分の關係にあること、今後梁山泊集團の物語が宋江と李逵とを中心にまわっていくことの宣言なのである。

\*本章は拙稿「李逵殺虎故事成立の背景」(『中国—社会と文化』第25号、二〇一〇年)を加筆・修正したものである。

四十八 張芳は宋江を皇帝擁護・忠孝思想の代表、李逵を反皇權・守舊思想否定の代表と定義して論を組み立てている。この對立構圖にもとづくかぎり、李逵が孝を重んじると言うことはできない。これが張芳が李逵に孝を認めなかった理由であるかもしれない。



## 第四章 エピソードの改編・創作と高級

### 文藝化

#### 一・最終編纂者の手元

前章で李逵の故事を通じて検討したように、水滸傳のなかで最終編纂者が創作ないし従来材料に大幅に手を加えた部分は、その編纂方針を考えるうえで重要な手がかりとなる。本章ではまず、編纂者による新たな挿入故事の要素を備えている部分に注目し、その編纂方法を分析する。そのうえで、編纂者が新たなエピソードを挿入する際に利用した材料の性質とそれを採用した理由について考えたい。

#### 二・挿入故事の分析——第六十五回

水滸傳には、前章で扱った第四十三回と同様の新作故事の特徴を顕著に備えている回がいくつかある。そのひとつが第六十五回である。

宋江率いる梁山泊軍は、敵方にとらわれている石秀と盧俊義を救い出すべく北京大名府を攻め落とそうとするも苦戦していた。あせる宋江の夢枕に梁山泊先代の頭領・晁蓋が現れる。晁蓋は宋江に、江南の地靈星にしか

治せない「血光之災」に見舞われるゆえ軍を引けと命じる。翌朝気づくと宋江の背中には腫れ物ができていて、軍師の呉用が薬を処方しても治らない。そこで張順が建康府の名醫・安道全を迎えに行くとし、宋江らは梁山泊へ軍を引き上げ、張順の歸りを待つことにした。

張順は道中、長江の渡し船に乗る。ところがその船頭は強盗で、金銀を奪うと張順を縛りあげて長江へ投げ込んだ。張順は水底で縄を噛み切って對岸へ泳ぎ着き、土地の老人に助けられる。

安道全の元に着いた張順は、宋江の治療に来るよう懇請したが、安道全のなじみの妓女・李巧奴が行かせようとし、張順は安道全が承諾するまで妓樓で待つことにした。その夜なんと妓樓に、張順を長江に投げ込んだ強盗・張旺がやってきた。張順は夜中、虔婆と李巧奴を殺すが強盗はとり逃がしてしまう。そして安道全に殺人の罪名を着せると、ともに梁山泊へ向けて旅立った。

張順は歸路ふたたび老人の家に立ち寄り、その息子・王定六の協力を得て強盗を殺した。王定六が仲間になりたいと言うので親子ともども梁山泊へ迎え入れることにした。

安道全によって宋江の病氣は治った。宋江はふたたび

参謀の呉用と大名府を攻め落とす相談を始めた。

先行研究はこの回をどう見ているのか。宮崎市定は第六十回から六十八回が後から加えられた部分と判定するのみで、それより細かく分割してはいない<sup>一</sup>。小松謙はまず構成面から、「第六十一回から第六十六回までの盧俊義の物語（そのうち：第六十五回は安道全の物語）」で、前代の故事にもとづくことなく「梁山泊集團完成の部分として創作された可能性が高い」<sup>二</sup>と推定し、さらに語彙分析の観点からも第六十五回は歴史小説の語彙を有し、遅れて成立した部分に属するとしている<sup>三</sup>。達富睦はより細かく、宋江が體調を崩すまでは比較的古い語彙が、安道全にまつわる部分では明初の語彙が使われていると述べる<sup>四</sup>。第六十五回は最終編纂時期に作られたと見てさしつかえないようである。

この回には奇妙な點が少なくない。頭領の病氣のために戦争を中断して引き返すのはよいとしても、宋江が恢復し

て再び軍を發するまで敵方が石秀と盧俊義をずっと殺さずに待っているし、宋江が二人を心配することばを一度言う以外は誰も氣にも留めない。そもそも、一刻も早く城市を攻め落とし味方を救い出さねばならないという切迫した状況で醫者を呼びに行くくだりに丸一回分も使うというのが間延びしている。その間に旅の目的とは關わりなく現れ、急に仲間入りする王定六の扱いもおざなりである。これらはすべてこの部分が挿入故事、つまり最終編纂段階に回数あわせ、人數あわせの目的を兼ねてここに置かれたものであると考えれば納得がいく。たとえばエピソードの開始時點と終了時點とで宋江を中心とする梁山泊集團自体にはなんら變化がなく、このエピソードを取り去っても全體の進行に影響はない。新たに仲間に加わる安道全（第五十六位）、王定六（第四百四位）はいづれも地煞星で、宋江三十六贊、『宣和遺事』、『豹子和尚自還俗』雜劇にその名は見えないため、三十六人を百八人へと増やすべくはじめて書き込まれた人物であると考えられる。李逵が李雲、朱富を

<sup>一</sup>宮崎市定『宮崎市定全集12水滸伝』目「水滸伝的傷痕」

<sup>二</sup>小松謙『『水滸伝』成立考―内容面からのアプローチ―』

<sup>三</sup>高野陽子・小松謙『『水滸伝』成立考―語彙とテクニカル・

チームからのアプローチ―』

<sup>四</sup>達富睦「用字の違いから見る『水滸伝』の成立」

連れ歸った第四十三回同様、第六十五回も彼らに仲間入りの場面を与えたものである。宋江が醫者を必要とすることが張順に旅をさせるきっかけとなる。連れ歸った醫者が宋江の治療をすることはすなわち場面を張順が旅立つ前の状態に戻すことである。宋江らが囚われの身の仲間を放っておくというのは、このエピソードの挿入以前にはなかった設定なのだろう。ゆえに彼らを心配する描寫も元來なかった。人数や回数をそろえるべく、大名府を攻め落とし仲間を救い出す故事を二つに割り、新しい故事を押し込んだのである。

### 三・既存の故事類型の活用（二）―血光之災

最終編纂者はこの挿入故事をいかにして作り上げたのだろうか。

第六十五回には元明期の故事に用いられていたパターンを利用した形跡が見られる。

まず冒頭で晁蓋が警告する「血光之災」である。「血光

五 明・唐順之『稗編』（中國歴史地理文獻輯刊第八編、類書類地理文獻集成七、上海交通大学出版社、二〇〇九年）巻六十四に引く宋・柴望『六神論解』、明・萬民英『星學大

之災」は本來は占い用語で、體に傷を受けたり、それによって命を落したりする運命を指す<sup>五</sup>。この語は直前の第六十一回で用いられたばかりである。そこでは、盧俊義を梁山泊におびきよせ仲間入りさせるべく、道士に扮した呉用が盧俊義の家を訪れる。そして、百日以内に「血光之災」があり刀劍の下に死ぬことになるが、東南方向（梁山泊のある方角）へ行けば逃れられると告げる。盧俊義はその占いを真に受けて旅に出、果たして梁山泊の豪傑に生け捕りにされてしまう。先に確認したとおり、第六十一回から第六十六回は明代の挿入と見られている。この挿入部分は第六十一回、盧俊義が「血光之災」の占いにより旅立つことではじまる。第六十五回の二度目の「血光之災」は、第六十一回を意識したものであろう。

占い師が「血光之災」を預言したことでストーリーが動き出すというのは水滸傳の創作ではない。

無名氏「叮叮瑤瑤盆兒鬼」雜劇<sup>六</sup>では第一折で正末・楊從善が占いで「一百日血光之災」があると言われる。

成』（四庫全書術數類集成）第二十三卷、天津古籍出版社、一九九九年）巻二十二などに見られる。

六 『古本戲曲叢刊』第四集「脈望館鈔校本古今雜劇」（商務印書館、一九五八年）

正末云 父親、您孩兒昨日在長街市上算了一卦、道我有一百日血光之災、千里之外可趨。您孩兒與趙客兄弟出去、一來做買賣、二來就趨災避難。

正末云 父上、昨日街で占ったところによれば、わたしには百日の血光之災があり、千里の彼方へ行けば逃れられるとのこと。わたしは趙兄弟と、ひとつには商賣のため、ひとつには災いを避けるために出かけてまいります。

しかし旅に出て九十九日目、強盗に殺されたうえに遺體は燃やされて灰となり、證據隠滅のために泥に混ぜて焼きものの材料にされてしまう。

武漢臣「包待制智賺生金閣」雜劇<sup>七</sup>でも、第一折で正末郭成が次のように言う。

正末云 父親、您孩兒長街市上算了一卦、道我有一百日血光之災、千里之外可趨。……您孩兒一來上朝取應二來趨災避難去。

正末云 父上、昨日街で占ったところによれば、わたしには百日の血光之災があり、千里の彼方へ行けば逃れられるとのこと。……わたしは、ひとつには朝廷へ求官に、ひとつには災いを避けるに出かけます。

この後郭成は權勢をほこる龐衙内に遭遇し、任官の口利きをしてもらおうと家寶の生金閣を献上する。ところが龐衙内は郭成の妻に目をつけ、妾として譲るよう迫る。これを拒否した郭成は家寶と妻を奪われたうえ殺される。

この二種の劇では、遠くへ出かける目的こそ異なるものの、それ以外の文言はそっくりである。原作以降、テキストが編集されていく過程で實際に一方が他方を参照した可能性は否定できないが、占いで不吉な卦が出たために災いを避けるべく旅に出るといふ話柄はもとより存在し、両者がそれぞれにこの型を利用して作られていたのだろう。旅に出た結果災いを避け得てめでたく終わるのでは物語にならないので、この型の物語では旅先で必ず事件に遭遇し、時に命を落とす場合すらある。

清平山堂話本「楊溫攔路虎傳」でも、「血光之災」とい

う語こそ現れないものの、主人公楊温が占い師に次のように告げられる。

卦中主騰蛇入命白虎臨身、若出百里之外方可免災。

果たして楊温も旅先で強盗に襲われる。

「血光之災」は直接占いに關係しない場面でも、「血を流すような苦難に遭う運命」、「刀劍のもとに殺される運命」を指す語として用いられている。『雍熙樂府』卷十四に引く「祭楊妃」<sup>八</sup>には「人咸道太真妃禁宮中養出禍胎、今日苦痛如血光災」なる句が見える。これは唐玄宗の、實際に打たれたり切られたりしたのではないながらも、貴妃を失った、身を切られるような思いを表現したものである。李直夫「便宜行事虎頭牌」雜劇には、軍法によつて百杖の刑を受けた銀住馬に對する「也是你老官人合受血光災（あなたが受けるべき血光災だったのですよ）」という歌<sup>九</sup>があり、無名氏「小尉遲將闕認父歸朝」雜劇<sup>十</sup>では、唐

將・尉遲敬德が、敵將・劉無敵（實は敬德の生き別れの子）が戦いを挑んできたと聞き、「這小廝今年有些血光災（あの小僧は今年血光災がある）」と言う。これは「自分の刀劍のもとに倒れる」ことを遠回しに表現したものだろ  
う。

こうしてみると、第六十一回の盧俊義のくだりが既存の型を利用した後發の故事であることがわかる。先にあげた、占いをきっかけに旅に出る三つの例において、占い師は偽物ではない。少なくとも物語中に占い師がインチキであることをうかがわせる記述はなく、主人公も素直に占いを信じることから物語が展開していく。「盆兒鬼」雜劇では、九十九日目までなにも起きなかったために油斷した楊從善が郷里に近づいてしまったことで災難に遭うのだから占い師に落ち度はない。「生金閣」雜劇と「楊温攔路虎」では主人公が油斷したり預言に従わなかったりする場面はないが、百日以内に災いに遭うという占いは當たっている。

<sup>八</sup> 『雍熙樂府』（四部叢刊廣編、臺灣商務印書館、一九八一年）卷十四第四折【正宮・収江南】  
<sup>九</sup> 『全元戲曲』（人民文學出版社、一九九〇年）第四卷「便宜

行事虎頭牌」第四折【正宮・収江南】  
<sup>十</sup> 「小尉遲將闕認父歸朝」（『續修四庫全書』集部戲劇類、上海古籍出版社、一九九五年）第二折【中呂・紅繡鞋】

第六十一回はこれらと異なる。讀者には早くから、呉用が占い師に、李逵がその従者の童子に變装している、つまり本當の占いではないことが明かされているのであり、讀者は盧俊義が偽計に陥れられていくさまを観察していくしかけになっている。「盆兒鬼」雜劇、「生金閣」雜劇には主人公に對し父親が「陰陽不可信、信了一肚悶」と占いを盲信せぬよう忠告するセリフがある（このセリフもまた二作においてまったく同じである）。水滸傳でも同様に盧俊義の店の番頭・李固が「常言道賈卜賣掛轉回說話。休聽那算命胡言亂說（占いを生業とするものはあ言えばこう言う」と申します。あの占い師のでたらめをお聞きになりませぬよう）」と、召使の燕青も「休信夜來那個算命的胡講（昨夜の占い師のでたらめを信じてはなりません）」と苦言を呈す。しかしその効用はまったく異なる。雜劇では、占いは信じていいものかどうか知らないものとして描かれるにすぎないが、水滸傳では、せっかく番頭がだまされずにすむきっかけをつくってくれたのにそれすらふいにしってしまった愚かな盧俊義という印象を喚起している。

主人公が旅に出たあとも同様である。雜劇と話本では主人公の努力もむなしく占いが當たってしまう。盧俊義の場合、梁山泊の賊を成敗すると豪語して故意に賊の目を引

くように行動し、あべこべにつかまってしまう。梁山泊では宋江に手厚くもてなされたものの、ようやく家に歸らせてもらえたかと思えば、梁山泊の賊に通じたとして捕らえられ、拷問を受け、血を流すはめになる。たしかに「血光之災」には遭っているのであるが、これはそもそも盧俊義が餘計なことをしなければ遭わずにすんだ災難である。水滸傳は「災いを避けるため旅に出たもののあにはからんや旅先で苦難にあつてしまう」という從來の型にひねりを加えて使用しているのである。既存の故事類型に變化を加えて讀者に異なる印象を與えようとする手法は第四十三回に通じる。その結果、「運命を逃れられない哀れな主人公」は、「だまされ、陥れられる愚かな盧俊義」に變貌する。

このことは、この物語パターンが通俗文藝で廣く用いられ、有名な型であつたことをも意味しよう。その讀者の知識を利用したのが第六十一回なのである。

第六十五回も同様に「血光之災」をきっかけに旅がはじまるが、ここにもひねりが加えられている。預言をするのは占い師ではない。梁山泊の守護神となつた晁蓋の靈であるから、第六十一回とは反對に、この預言は確かなものであるうとの印象を讀者に植えつけようとする意圖が感じられる。さらに、災いを解決するために旅に出るのは本人で

はなく代理人の張順である。讀者の知識や直前の回の内容を踏まえた手のこんだ仕掛けであると言えよう。

#### 四・既存の故事類型の活用（二）——大殺戮

次に張順の殺人の場面である。

張順悄悄開了房門蜚到廚下、見一把廚刀明晃晃放在甕上。看這度婆倒在側首板凳上、張順走將入來拿起廚刀、先殺了度婆。要殺使喚的時、原來廚刀不甚快、砍了一箇人、刀口早捲了。那兩個正待要叫、却好一把劈柴斧正在手邊、綽起來、一斧一個砍殺了。房中婆娘聽得慌忙開門、正迎着張順手起斧落匹胸膛、砍翻在地、張旺燈影下見砍翻婆娘、推開後窻跳牆走了。張順懊惱無極、隨即割下衣襟、蘸血去粉壁上寫道「殺人者安道全也。」連寫數十處。

張順がこっそり部屋の戸を開けて厨房の下へ忍びこむと、きらきら光る包丁が竈の上においてある。やり手婆がわきの椅子のうえに横たわっているのを見ると、張順は入り込んで包丁を手にとり、まずやり手婆に斬りつけた。使用人を殺そうとした時、實は包丁がたいして鋭くなかったため、一人斬ったところで刃がはや

くも鈍くなっていた。二人がいまにも叫ぼうとした時、ちょうど薪割り斧が手近にあったのを取りあげ、一振り一人づつ斬り殺した。部屋の中の女はその音を聞いてあわてて戸を開けたところ、ちょうど張順が手を上げて斧を胸ぐらへ振り降ろしたのを真正面から受け、床へ斬り倒された。張旺は女が切り倒されたのを燈火の明かりで見ると、奥の窓を開けて塀を飛び越して逃げていった。張順は悔やむこと限りなかったが、まもなく（死體の）衣服の襟を裂き、血に浸して白壁に書きつけていわく「人殺しは安道全だ」と、たてづけに數十箇所書いた。

この場面が第三十一回、武松による鴛鴦楼での大殺戮の場面に似ているのは一目瞭然である。

右手持刀、左手又開五指、搶入樓中……蔣門神坐在交椅上、見是武松吃了一驚、把這心肝五臟都提在九霄雲外。說時遲那時快、蔣門神急待掙扎時、武松早落一刀劈臉剝着和那交椅都砍翻了。武松便轉身回過刀來。那張都監方纔伸得脚、動被武松當時一刀齊耳根連脖子砍着撲地倒在樓板上。兩箇都在掙命。這張團練……見剝翻了兩箇、料

道走不迭、便提起一把交椅輪將來。武松只接過住就勢只一堆……也近不得武松神力、撲地望後便倒了。武松趕入去、一刀先剝下頭來。……便去死屍身上、割下一片衣襟來、蘸着血去白粉壁上大寫下八字道「殺人者打虎武松也。」

（武松は）右手に刀を持ち、左手は五本の指を開いて樓の中へ押し入った……蔣門神は椅子に坐っていたが、武松とわかって驚き、心肝五臓は九霄の雲の彼方にぶらさがっているかのよう。説くとき遅く彼の時速く、蔣門神が慌ててもがこうとした時には武松ははやくも刀を真つ向から振り下ろし、椅子もろとも斬り倒した。武松はすぐさま振り返って刀を向けた。張都監はちようど足を伸ばしたところで、一刀のもとに耳から首まで斬られ床板にどっかと倒れ、二人とももがいている。張團練は……斬り倒された二人を見て逃げ切れぬと悟ると、椅子を持ち上げてぐるぐる振りまわした。武松が受け止めて勢いを利用して一押しすると……武松の神力にはかなわず真後ろへどうと倒れた。武松は駆け寄って一刀で頭を斬り落とした。……死体に

近づき衣服の襟のきれはしを裂いてとり、血に浸して白壁に八文字大書して曰く「人を殺したるは虎殺しの武松なり」。

これに似た場面はほかの作品にも見出せる。

無名氏「謝金吾詐拆清風府」雜劇<sup>十一</sup>は楊家將ものの劇で、楊六郎を亡きものにせんとたくらむ遼から宋朝に送り込まれ高官となった王欽若の意を受け、謝金吾が楊家のやしきである清風無佞樓を破壊するところからはじまる。遼との前線の關を守っていた楊六郎はこの知らせを受けるや、朝廷の許可なく持ち場を離れ都へ向かう。六郎の配下の焦贊も勝手にきしたがう。そして都城に入るとどこかへ行ってしまった。實は焦贊は單身謝金吾のやしきに乗り込んでいた。

焦贊上云 ……我打聽這箇宅子便是謝金吾住宅。我先殺了謝金吾滿門良賤、然後殺王樞密去。我聽上衙更鼓咱。三更前後也。我跳過牆來。我來到這後花園中……焦贊做見殺梅香科云 兀那妮子休走喫我一刀……則這個便是



謝金吾的臥房。我踏開門來。……我  
做殺謝金吾科……我  
殺了謝金吾并家眷一十七口也。我這等去了、不為好漢。  
我立不更名、坐不改姓。待我割下一幅衣衫就血泊裏蘸着  
鮮血寫着四句詩在那白粉壁上。詩云 多來少去關西  
漢、殺人放火曾經慣。一十七口誰殺來、六郎手下焦光  
贊。

焦贊登場して云う。……この屋敷が謝金吾の家だと聞  
いた。まずは謝金吾の屋敷中を殺し、それから王樞密  
をやりに行く。時の太鼓を聞いてみよう。三更のころ  
だ。塀を飛び越えて裏庭に入ったぞ。……焦贊、梅香  
を殺すしぐさをして云う。こやつ逃げるな、わが一刀  
を食らえ。……ここが謝金吾の部屋か。謝金吾を殺す  
しぐさ。……謝金吾に一家眷属十七人を殺してやつ  
た。このまま逃げちゃ好漢じゃない。俺は逃げも隠れ  
もせぬ。服をちぎって血だまりにつけ、鮮血で白壁に  
四句の詩を書き残す。詩に曰く。逃げも隠れもせぬ山  
西の男伊達は、殺人放火は日常茶飯事、十七人を殺し  
たるは、六郎が手下焦光贊なり。

ただひとりで武器を手に敵方のやしきに忍び込み、敵への  
復讐のみならずその場に居合わせたものを片端から慘殺し  
ていくさま、遺體から衣服をちぎり、血にひたして壁に犯  
行聲明を残すやり口までそっくりである。こうした例はひ  
とつにとどまらない。次に梁山泊もの雜劇のひとつ高文秀  
「黒旋風雙獻功」<sup>十二</sup>の例。

李逵は宋江の知り合いである孫孔目の護衛を命じられた  
ものの、その孫孔目が白衙内によつて牢に入れられてしま  
う。李逵はまず計略を用いて牢から孫孔目を救い出し、つ  
づいて白衙内のやしきに忍び込む。

正末殺白衙内科 正末云 我把這兩顆頭都放在這裏、衣  
服上扯下一塊來撚做箇紙撚去腔子裏蘸着熱血白壁上寫  
下「宋江手下第十三箇頭領黒旋風殺了白衙内」……我將  
着這兩顆頭上梁山宋江哥哥根前獻功走一遭去。

正末白衙内を殺すしぐさ。正末云う。この二つの首は  
ここに置いて、服をひとかけらちぎりとり、こよりを  
つくつてまだ温かい血にひたし、白壁に書く。「宋江  
が手下、十三番目の頭領黒旋風、小衙内を殺す」……

この首ふたつひっさげて宋江兄貴のもとへ捧げに参らん。

まったく同じ道具立てである。

「謝金吾詐拆清風府」において楊六郎は焦贊を評して「他不騰騰那殺人心、殺人心如烈火（彼のもえたぎる人を殺める心、殺める心は烈火のごとし）」と歌い、「那焦贊好個殺人放火的性兒（かの焦贊は人殺しに火つけの性分）」と言う。「黒旋風雙獻功」の宋江は李逵に「你休與人厮推厮打、打家截道殺人放火（人とけんかしたり、押し込み強盗、追剥、殺人、放火などをしたりしてはならぬ）」と言う。二人とも、親分でも制禦不能になるような厄介な手下と思われているわけである。官軍の將楊六郎の部將である焦贊もここにおいては強盗と同類である。やしきに忍び込んで敵の首をとり、堂々犯行聲明を残すという行為と、「殺人放火」の暴れん坊とはセットになっているのである。李逵でも焦贊でも、はたまた別の類似した人物でも自由に入れ替えが可能で、いくらでも類似の話が再生産できる具合になっていたのだろう。そしてこの殺人放火の強盗に通じる行為を『宣和遺事』では宋江がしている。

却見故人閻婆惜又与吳偉打暖更不係着、宋江一見了吳偉  
两个正在偎倚、便一條忿氣怒髮衝冠、將起一柄刀把閻婆  
惜吳偉两个殺了、就壁上寫了四句詩。道是

詩曰 殺了閻婆惜 寰中顯姓名

要捉兇身者 梁山灤上尋

なじみの閻婆惜が吳偉とねんごろになり宋江には目もくれない。宋江はふたりがまさによりしくやっているところを見て怒り心頭、怒髪天を撞き、刀をふりあげ閻婆惜、吳偉の二人を殺し、壁に四句の詩を書いた。

詩に曰く 閻婆惜を殺し、天下にその名を表す

よい 犯人を捕らえたくば 梁山灤まで来るが

殺人の経緯は異なるものの、李逵や焦贊同様、人を殺し、盗人猛々しく名を書き残して立ち去るという点で、『宣和遺事』のころ、宋江がたしかに「殺人放火」の凶悪強盗という人物像を有していたことがわかる。さらに、殺人放火ではないが、朱有燬「黒旋風仗義疏財」雜劇でも、李逵が白壁に犯行聲明を残す場面がある。

（二末云）……將這趙都巡、我不殺他。只綁縛了、也放在

中庭。待明日官府來看審問明白、自治他罪。兄弟燕青點把火來、尋的筆來、我在他庭中白壁上、寫下四句、明日上司官府來看、要個明白也。(末寫科)(念云)

都巡倚勢把民欺 賣免官糧娶艷姿

要問夜來段的事 梁山寨上李山兒

二末云う。……この趙都巡は殺さずに縛り上げ、庭に置いておこう。明日お調べを受ければ罪は裁かれよう。燕青よたいまつを持て、筆を探して来い。庭の白壁に四句の詩を書き残そう。明日上級府の役人が見に来るだろうから、明らかにしておかねば。末書くしぐさ。讀んで云う。

都巡は権勢を笠に民をあざむき 官糧を売り払い美女を娶る 夜の事件を知りたくば 梁山の寨の李山兒をたずねよ。

朱有燉は先行する雜劇に見える型を利用したのだろう。

こうして見ると、第六十五回の張順の殺戮は武松の殺戮の模倣というより、既存の物語パターンを利用したものと

十三 「忽然想着武松舊時。忽然偷用武松文法。而其實與武松一字不同。何則。武松是自認。張順是推人。……自認只一而

考えるべきだろう。編纂者はこの型が武松の故事にも採用されていることをわかつていたはずだし(あるいは採用した張本人であるかもしれない)、讀者が讀む順序は第三十一回の武松が先になるのがふつうであるから、單純な繰り返しはできない。ここで注目すべきは金聖歎のことばである。金聖歎は張順の殺戮について「ふとかつての武松の話を思い出した。突然武松の文法をまねているが、その實武松とは一つ異なる。それは何か? 武松は自白で、張順は他者に押しつけていることだ。……自白なら一つで十分だが、人を陥れるなら多ければ多いほどよい」<sup>十三</sup>と評している。たしかにその通りで、焦贊、李逵、宋江、武松と張順との最大の相違は、犯行を他人に押しつけている點にある。しかも自分の名を残した者たちはただ一回書いているのに對し、張順は數十回も書いている。凄慘な殺人の場面にもかかわらず、その不必要とも思える過剰さにはどこか滑稽さがただよう。焦贊の「このまま逃げては好漢じゃない」というセリフを思い起こせば、張順は好漢ではないということにすらなる。張順の殺戮のくだりは、既存の物

已足。陷人多多為益善也。」(『第五才子書施耐庵水滸傳』)

語の型を、その型がすでに水滸傳内で一度現れていることを意識したうえで利用したものであり、編纂者には読者もこの型を用いた物語の存在を知っているだろうとの期待もあったのだろう。

## 五・治療の描寫

宋江が病氣にかかった場面は次の如くである。

只見宋江覺道神思疲倦、身體酸疼、頭如斧劈、身似籠蒸、一臥不起。眾頭領都在面前看視。宋江道「我只覺背上好生熱疼。」眾人看時、只見鰲子一般赤腫起來。

宋江は氣はうつろで疲れ果て、體は痛く頭は斧で割られたよう、體は蒸籠で蒸されたよう。床に臥したきり起き上がれない。頭領衆はみなそばで見守っている。

宋江は「背中がひどく熱く、痛い」と言う。みなが見ると、鍋ほどの赤い腫れものができている。

「癰」は毛包の急性化膿性炎症である。皮膚の深部に發生し、皮表に鶏卵大から手掌大の範圍の紅斑、腫脹を生じる。悪寒發熱、激しい疼痛を伴い、敗血症を發して死に至ることもある<sup>十四</sup>。

宋江の病を見た吳用は「此疾非癰即疽（この病は癰か疽だ）」と言う。李時珍『本草綱目』<sup>十五</sup>卷四中「癰疽」<sup>十六</sup>には「深為疽、淺為癰、大為癰、小為癰（深いものが疽、浅いものが癰、大きいものが癰、小さいものが癰）」とあり、本草學の基礎となつた陶弘景『本草經集注』<sup>十七</sup>卷一「序錄」など、さまざまな醫書に「癰疽」という呼稱が見られる<sup>十八</sup>ことから、癰と疽とは同じ病氣を症狀の進度によ

<sup>十四</sup> 上野賢一『皮膚科学』第7版（金芳堂、二〇〇二年）、荒

田次郎監修『標準皮膚科学』第七版（医学書院、二〇〇四年）、『中国大百科全书 现代医学Ⅱ』（中国大百科全书出版社、一九九三年）による。

<sup>十五</sup> 『吳氏重訂本草綱目』東京大學文學部藏順治十二年刊本  
<sup>十六</sup> 「癰」は、標題、本文ともに「癰」に「邕」という表記  
になっている。

<sup>十七</sup> 『本草經集注輯校本』、人民衛生出版社、一九九四年

<sup>十八</sup> 孫思邈『千金要方』（永徽元年、六五〇年成書）卷二十二「癰疽第二」、王燾『外台秘要方』（天宝十一年、七五二年成書）卷二十四「癰疽方」、宋・太宗の勅撰醫方書『太平聖惠方』（淳化三年、九九二年成書）卷六十一「癰疽論」など。  
本草書、醫方書の性質、成書年代については岡西為人『本草概説』（創元社、一九七七年）、小曾戸洋『漢方の歴史 中国・日本の伝統医学』（大修館書店、二〇〇二年）を参照した。

って言い分けたものであることがわかる。疽のほうが進んだ、重い症状である。

さらに、第六十五回の終盤には「將軍發背少寧安千里迎醫道路難」という詩句がある。「發背」は政和年間（一一一一—一一一八年）刊行の『聖濟總錄』<sup>十九</sup>卷百三十一「發背」によれば「熱毒の氣が背中に生じ、悪化して癰疽になったもの」である。つまり癰疽の一種なのだが、『千金要方』<sup>二十</sup>卷二十二が「癰疽第二」とは別に「發背第三」を立てていたり、『太平聖惠方』<sup>二十一</sup>卷六十二に「發背論」「治發背諸方」など「發背」を含む見出し八種、『外臺秘要方』<sup>二十二</sup>卷二十四にも「發背方」が設けられていたりするところから見て、癰疽のなかでも特にとりあげておく

<sup>十九</sup> 『大徳重校聖濟總錄』醫學館舊藏江戸文化年間刊本、國立公文書館内閣文庫藏

<sup>二十</sup> 『孫真人備急千金要方』（四部叢刊三篇）臺灣商務印書館、一九七五年

<sup>二十一</sup> 『太平聖惠方』一〇六（東洋医学基本叢書第十六冊）第二十一冊）、オリエント出版社、一九九一年

<sup>二十二</sup> 『宋版外台秘要方』上・下（東洋医学基本叢書第四冊）第五冊）、オリエント出版社、一九八一年

<sup>二十三</sup> 『东坡志林（传世藏書）』（海南国际出版中心、一九九六年）

<sup>二十四</sup> 達在北平病背疽、稍愈、召還、明年春疾篤、遂卒、年

べき症状だったようである。

宋江の病は新たな仲間の梁山泊入りの話をはじめめるためのきっかけであり、最終編纂段階の新エピソード挿入のたとえとどまらないようである。それは、史上の著名人にもこの病で亡くなったとされる人が多数あるからである。項羽の謀臣であった范増が發背で亡くなったことは『史記』、『漢書』、『東坡志林』<sup>二十三</sup>に見える。明開國の功臣徐達も發背で死んだと『明史』<sup>二十四</sup>に記されており、弘治十八年（一五〇五年）の進士・徐禎卿の著とされる『剪勝野聞』にもその死にまつわる逸話が記される<sup>二十五</sup>。王安石の息子王雱も『宋史』には「發背」で、『宣和遺事』には「疽」で、

五十四。『明史』（中華書局、一九七四年）卷第二百二十五、列傳第十三。

<sup>二十五</sup> 徐禎卿『剪勝野聞』（『勝朝遺事』初編、「明清史籍系列明清史料叢書續編」、國家圖書館出版社、二〇〇九年）。徐達が背に癰疽を患う点では同じだが、具合が悪くなった後、明太祖が病をぶり返させるような禁忌に触れる食品を下賜してその死を早めたのではないかと疑わせるような記述になっている。開國皇帝が功臣を殺したと、はっきりと、あるいは聲高に噂することはできないが、當時の人々にとっての關心事にはなっていたであろう。

若くして死んだとされている。

天から與えられた罰としてこの病を描く話も少なからず傳えられている。笠井直美は悪事の報いとして癰疽をふくむ腫れ物ができて死に至る話を八例挙げている<sup>二十六</sup>。編纂者は、癰疽は死にもつながるかもしれない重病であり、天の譴責である可能性もあると讀者がわかっていることを想定して、宋江もなんらかの行いを天に責められて死ぬ運命にあるのではないかと讀者をはらはらせる展開を仕組んでみたのではないか。

この回では宋江の病に對し二度治療が試みられている。一度目は呉用によるものである。

吳用道「此疾非癰即疽。吾看方書、菉豆粉可以護心、毒氣不能侵犯。便買此物、安排與哥哥吃。」一面使人請藥醫治、亦不能好。

呉用が「これは癰か疽だ。醫書によれば菉豆の粉が心臓を護り、毒氣に侵されなくなるから、買って兄貴に飲ませよう」といい、一方で人をやって薬をとりよせて治療したが、それでも治らない。

その後連れてこられた安道全の治療は次の通り。

寨中大小頭領接着、引到宋江臥榻内、就牀上看時、口内一絲兩氣。安道全先診了脈息、說道「眾頭領休慌。脈體無事、身軀雖見沉重、大體不妨。不是安某說口、只十日之間、便要復舊。」眾人見說、一齊便拜。安道全先把艾焙引出毒氣、然後用藥、外使敷貼之餌、內用長托之劑。五日之間、漸漸皮膚紅白、肉體滋潤、飲食漸進。不過十日、雖然瘡口未完、飲食復舊。

寨の頭領衆が（安道全を）出迎え、宋江の寢所へ連れて行き寢台のそばで見ると、口にはかすかな息のみ。安道全はまず脈を見ると言った。「頭領方お慌てめさるな。脈は大事ない。體は重態のようだが、おおかた問題ない。それがし大口を叩くわけではなく、十日もすれば回復しましょう。」みなはそれを聞き、一齊に拝禮した。安道全はまず艾の灸で毒氣を吸い出し、次に薬を使った。外には貼り薬、内には長托の薬を用いた。五日のうちに次第に皮膚は赤味を帯び、體

は潤い、飲食も進んできた。十日もしないうち、傷口は完全には治らないものの、食事は元通りになった。

安道全の処方方は艾葉（よもぎの葉）の灸、傷口への膏藥貼付と内服薬との二段階に分かれる。『千金要方』卷二十二「發背」には「粗い艾葉で大きくもぐさをつくり、泥の塊の上に据え、傷口に貼って灸をする」、『太平聖惠方』「發背論」にも「艾で大きくもぐさをつくり灸をする」という。正徳十年（一五一五年）刊、虞搏『醫學正傳』<sup>二十七</sup>も艾の灸は「鬱毒を抜く」といい、第一段階の文言と一致する。

第二段階も各種醫書の記載に通じる。『千金要方』「癰疽」には「薬を貼る方法をとるならみな傷の頭に貼るべきである」とあり、背中に生じた癰疽に塗る膏藥数種を挙げている。『太平聖惠方』卷六十二は特に「治發背貼諸方」の項を設け、貼り薬や塗り薬を収めるほか、卷六十三「治一切癰疽發背通用膏藥諸方」以下にも各種膏藥を記載している。『聖濟總録』も膏藥療法を多数収める。『醫學正傳』

「瘡瘍」も癰疽の治療に「外から薬を貼るのは表面の邪氣を發散させることだ」と言う。

「長托之劑」に類似した呼稱は各種醫書に見られる。

『聖濟總録』は「發背、腦疽、あらゆる悪性の傷を治すにはまず「托裏藥」を使って毒の氣をすべて出し、そののち薬を塗るべきである」と言う。『玉機微義』卷十五「内托之劑」には「機要内托復煎散は裏を托し胃を健ならしめる」といい、「内托之法」の項には朱震亨の言として、「病が皮肉にあるとき、氣が盛んでなければ必ず體内に侵入されてしまうから、内托して裏を救わねばならない」という説明が附されている。正徳から嘉靖年間に宮廷醫として活動した薛己のまとめた『薛氏醫案』<sup>二十八</sup>卷十六「治瘡瘍各症附方」に収められている「内托復煎散」は、「外皮の傷やできものが腫れて熱くなっている、脈が浮き出、邪氣が体内を侵しそうなものを治療するにはこれを用いて托するのがよい」と説明されている。その薛己が校注した宋・陳自明『外科精要』は癰疽の專著であるが、ここに實際に起きた例として、患者が薬を誤用して反って毒を助長し、元

<sup>二十七</sup> 『新編醫學正傳』（四庫全書存目叢書子部第四十二冊所收浙江圖書館藏明萬曆六年刻本）、齊魯書社、一九九五年

<sup>二十八</sup> 「薛氏醫案（1）、（2）」臺灣商務印書館、『景印文淵閣四庫全書』第七百六十三〜七百六十四冊、一九八三年

氣を損ねてしまったため、陳自明が托裏藥を用いて補ったとある。現代漢方にもこの語は見られ、「千金内托散」は「化膿症で虚状を呈し、体力虚耗の傾向あるものに体力をつけて治癒機転を促進させるもの」である<sup>二十九</sup>。つまり「托」とは病に抵抗できる體力をつけさせることであるから、「長托」もこの種の滋養強壯藥を指しているのだろう。『外科精要』には艾による灸の効果も述べられるほか、「内には追毒排膿（の藥）を服し、外には消毒の藥を敷く」という文言もあり、水滸傳の書きように非常に近い。安道全の處方は、非常に簡潔な書き方ではあるが、その手順も用いる藥も傳統的醫書にのっとって書かれている。

呉用の處方にはなにかよるところがあるのだろうか。

勅撰の醫方書『聖濟總錄』卷百二十六「療歷門」に、綠豆粉と乳香とを混ぜた「凝冰散」について「風熱毒氣、項の結核や、癰疽、瘡癤、發背になりそうなものを治す」とあり、卷百三十一「發背」には「發背、腦疽やあらゆる悪

性の傷を治すには、まず托裏藥を用いて毒氣をすべて出さねばならない」として、乳香と真綠豆粉とを混ぜた托裏湯が挙げられている。紹興十二年（一一四二年）前後刊行の許叔微『類證普濟本事方』<sup>三十</sup>卷六には、「あらゆる瘡毒を治す」處方「内托散」の材料として菴豆粉と通明乳香が挙げられ、「難名癰腫」にも服用できると説明している。同

後卷六「治諸癰癤等患」にも、發背が潰れたあとと耐えられないほどの吐き氣や痛みがあるときに服用すべきものとして、菴豆粉と乳香とを混ぜた乳香散が見える。綠豆が毒氣を排したり、癰疽による疼痛を軽減したりする効果があると考えられていたことは確かである。しかし呉用は「菴豆粉を買ってきて飲ませる」とだけ言っている。もしこれが呉用の處方のすべてであるならば（これしか書いていない以上、讀者がそう受けとる可能性は高い）、藥材を複數混ぜることなく單獨で處方する、いわゆる單方ということになる。しかし正統醫學では單方は多用されない。丁光迪編・小金井信宏訳『中藥の配合』<sup>三十一</sup>丁光迪「初版まえが

<sup>二十九</sup> 矢数道明『臨床応用漢方処方解説』創元社、一九七九年  
<sup>三十</sup> 許叔微『類證普濟本事方』、『海外回歸中醫古籍善本集粹（一九）』、中醫古籍出版社、二〇〇五年

<sup>三十一</sup> 丁光迪編・小金井信宏訳『中藥の配合』（東洋學術出版社、二〇〇五年）



き」に次のように言う。

中薬が臨床で使われる場合、その多くは「薬の組み合わせ」として使われます。『神農本草經』名例は「薬には七情というものがある：薬は単味で使用することもできるが、多くは合わせて用いる。そして合わせて使う場合、薬同士には相須・相使・相畏・相惡・相反・相殺などの関係が生まれる。薬を使おうとする物は、こうした七情について総合的に理解していなければならぬ：

…。」と述べています。また「薬は君臣佐使を明確にして、適切に使うべきである」「薬には陰陽に従った子母兄弟による合わせ方もある」という論述もあります

（『本草綱目』序例）

『玉機微義』卷十五「瘡瘍門」には朱震亨の言として、内托散は毒氣を防ぎ臟腑を刺激するので護心散と呼ぶ、菉豆は丹毒を解くとある<sup>三十二</sup>。『本草綱目』卷四中「癰疽」に

も、「綠豆粉 一應癰疽初起惡心、同乳香甘草服、以護心（あらゆる癰疽の初期、胸がむかつくとき、乳香、甘草とともに服用すると心臓を護る）」とある。ここにはいずれも呉用の、「綠豆粉が心を護る」という発言に似た表現が見られる。特に『本草綱目』は、「綠豆粉」の項目の最初と最後をつなげば「綠豆粉護心」と、呉用のセリフとまったく同じになる。『本草綱目』の特色のひとつに「各地の民間療法を『單方』として細かく記録している」<sup>三十三</sup>ことがあげられるという。『本草綱目』はそれまでの主流本草書の體例を踏襲することなく、新たな薬品や解釋もとりこんだうえで再編集したものである。この際、各地を訪問して薬物を採集し、人々にその地に傳わる單方をたずねて記録したという。細かな症状の差異に言及しない、「あらゆる癰疽に」というおおまかな言いかたも民間療法に由来するのかもしれない。しかし水滸傳の最終編纂が嘉靖以前であるとなると、編纂者が萬曆六年成立の『本草綱目』を参照することはできない。

<sup>三十二</sup> ただし、文淵閣本四庫全書電子版検索によれば、四庫全書に収める朱震亨の醫書の中に菉豆粉の文字は見えない。  
<sup>三十三</sup> 御影雅幸「日本民間薬のルーツ―環日本海域における植

物資源の利用―」（金沢大学学術情報リポジトリ、  
<http://hdl.handle.net/2297/5583>、二〇〇三年）



は、編纂者が民間療法や専門醫の治療を實際に目にしたことがあってこうした記述にいたったとも考えられようが、比較的容易にさまざまな書物を参照できる環境にあり、それらを適宜にかいつまんで物語に盛り込む能力も備えた人物であつたことをも示しているとは言えまいか。

## 六・物語の擴げ方

細かく治療描寫の背景を考えてみたが、そもそも晁蓋が夢の中で江南の地靈星が必要であると告げ、張順がまさしくその江南にいる名醫と知り合いであつたのであるから、治療描寫なしでも張順の物語をはじめることではできたのではなからうか。

ここで思い出されるのは、呉用の行動が新しい人物の仲間入りのきっかけとなる旅を引き起こすエピソードがほかにもあつたことである。

第三十五回から第四十二回にかけて宋江が各地を巡る物語がある。

閻婆惜を殺してしまった宋江は捕り方の追跡をかわして逃亡していたが、郷里の父が死んだという知らせを受け、

急ぎ地元に戻る。そこで宋江の歸郷を知つてやつてきた捕り方に捕まってしまう。罪人となり江州配流が決まった宋江は護送役人とともに梁山泊のそばを通る。ここで晁蓋が宋江を山寨に招き入れ、仲間入りを勧める。雜劇冒頭に書き込まれた物語では宋江はここで梁山泊に入っている。實際そういう話もあつたのだろう。しかし水滸傳では誘いを斷つて江州へ向かい、その過程で張横、穆弘、穆春、李俊、童威、童猛、張順、侯健、戴宗、李逵と知り合う。最終編纂者は、これらの人物をかきあつめて梁山泊へ入れさせるという構成面での必要上、宋江にすんなり梁山泊入りさせるわけにはいかなかったのである。この全員が江州から一齊に梁山泊へのぼつた後、宋江は郷里に父を迎えに行き、またもや同じ捕り方に追われる。しかし今度は梁山泊から仲間が救出に駆けつけ、捕り方を殺して梁山泊に歸還する。この二度の捕り方の場面が挿入話の起點と終點であることは早くに宮崎市定の指摘がある<sup>三十四</sup>。江州配流の物語と第六十五回とは、ともに張順が登場するほか、渡し船で船頭が旅人を襲うという類似した場面もあり、挿入話同士の共通性を感じさせる。

この挿入故事の終盤、宋江らが江州から大舉梁山泊に向かうきっかけとなったのが呉用である。宋江は江州で反詩を吟じたために謀叛人として再逮捕された。江州知事・蔡得章は、父である宰相・蔡京に宋江の處分の指示を仰ぐため、道術で一日に八百里を走れる牢役人戴宗に東京開封府まで手紙を届けさせる。その途上戴宗は梁山泊に連れ込まれる。呉用はこの手紙を手にした蔡京が宋江を處刑せよと命じることを恐れ、宋江を殺さず都へ護送するよう命じる偽の返信を作成することにした。そしてこの計畫實行のため、ともに濟州に住み、いかなる筆跡も模倣できる蕭讓と當代一の印鑑職人の金大堅を梁山泊に呼び寄せる策をめぐらせる。この部分もまた員數合わせの役を担った挿入話であることは明らかである。蕭讓、金大堅ともに地煞星で、水滸傳以前の名簿には名が見えない。宋江を救うために梁山泊の好漢が派遣され新たな人材を連れ歸らせるという構造は第六十五回とまったく同じである。その新たな人材が、罪を犯して逃亡したり盗賊になったりしてみずから梁山泊に身を寄せてくる可能性のほとんど考えられない職人・専門技能者である点も同じである。

この短い説話をはさんで宋江救出劇が再開される。しかし、ニセ手紙を戴宗にもたせて江州に戻らせたものの、呉

用のミスで手紙が偽物であることが發覺し、宋江は戴宗とともに處刑されることになる。後から誤りに氣づいた呉用は、梁山泊の豪傑たちに軍を率いて江州まで宋江を救出に行かせる。山東の梁山泊と長江邊の江州とは遠く離れており、大軍が道中官軍の抵抗も受けずに長驅押し寄せることができるとは考えにくい。しかしこうでもしなければ多数の豪傑をまとめて山東へ移動させることはできない。そこで、梁山泊の計略を一手に擔う呉用が智恵を驅使しても救えなかったのだから危険を冒してでも軍勢を出して力づくで奪うしかなかったのだと理由をつけようとしたのがこの偽手紙失敗のくだりなのではないか。

第六十五回の治療を偽手紙同様の單純な失敗と斷ずることはできないが、呉用の策が一度空振りに終わる場面を入れておくことが、捕らえられた仲間を放っておく、大軍を長距離移動させるなどの、少々無理がある行動に出ざるを得ない必要性を増す効果を持つていると編纂者は考えたのではないか。「あの呉用でもうまくいかなかったのだから仕方ない」と讀者に感じさせるよう描くことが、エピソードを増やす手法のひとつであった。その意味では水滸傳の成立に呉用もおおきく貢獻していることになる。さすればこそ呉用の治療は民間療法であり、安道全は専門醫の治療で

あったことを明確に對照的に描かねばならなかったのだらう。

## 七・最終編纂と雜劇

第六十五回でも、同時代の讀者が知り得た知識を利用して新たな故事を組み立てる手法が確認できた。その知識は、史書、筆記、小説、雜劇、醫書などさまざまな書籍にわたる。編纂者はそれらの知識を収集し得る立場にあったのみならず、同等の知識を持ち得る人々を讀者として想定していたのである。新作故事はもはやまっすぐで打算のない豪傑が爽快な大暴れをするといった素朴なものではなく、書き手にも読み手にもある程度の預備知識を要求するものになっているのである。それは、ひとつには古風で素朴な名作に對抗するにはまったく異なる作風をもってするしかなかったからなのであるが、最終編纂者には、もうひとつ、エピソードの質を変えたかった理由があったのではないかと思われる節がある。それは雜劇の利用から推測できる。

前述の通り、水滸傳に見える梁山泊もの雜劇そのもののとりこみはわずかであるが、それは編纂者が雜劇を輕視したことを意味しない。第六十五回には、「血光之災」、

「無差別殺戮と犯行聲明」と、雜劇で確立していた物語パターンが二種見られるし、雜劇で共有されていた人物形象、プロットが部分的に利用されている場面は水滸傳のところどころに見える。

また、「まるごとそのもの」であることに固執しなければ、編纂者の目にとまったと思しき梁山泊もの雜劇はもうひとつある。宣徳八年に朱有燉の藩王府である周憲王府で刊行された朱有燉「豹子和尚自還俗」雜劇である。この作品の内容は次のとおり。

宋江ら梁山泊に集う三十六人は生死とともにする誓いをたてていた。ところがそのうちのひとり魯智深が宋江に叱責されて腹を立て勝手に山寨を離れ、髪をおろして寺にこもってしまった。宋江は李逵に、魯智深の妻子をともなつて魯智深を連れ戻しに行くよう命じる。妻子は魯智深が養つてくれなければ生活できないと訴えるが、魯智深は戻ろうとしない。宋江はさらに、魯智深の母を説得に行かせる。母も、梁山泊に戻って以前同様養つてくれと訴える。すると魯智深は逆に母に、檀家の住む村で何不自由なく暮らせばよいと提案する。これを知った宋江は一計を案じ、手下の小者をその村にやる。小者は魯

智深の母の家へ行き、ありもしない借金を返すようつめより、魯智深の母が拒否すると、これに殴りかかるそぶりをみせた。そこに魯智深が駆けつけ、小者を殴りたおし、母を救う。すると宋江が現れ、實は魯智深をだますための策であったと告げる。魯智深は戒を破って人を殴ってしまったことで、ついに山寨へもどることを承諾した。

水滸傳の魯智深は華語文化圏でもっとも有名なキャラクターのひとりと言っても過言ではないだろう。粗暴で酒を好み、たびたび人に迷惑をかけながらも、理不盡な出來事を許さず、兄弟の危機にはわが身を顧みず駆けつける、歴代の批評が絶賛する人物でもある<sup>三十五</sup>。

この雜劇の魯智深はまったく異なる。かつて南陽の寺にいて、還俗してから梁山泊にのぼったことになっているし、なにより母、妻、子が現れ、孝にあついというのだから水滸傳における天涯孤獨の無頼漢の趣はどこにもない。

<sup>三十五</sup> 「如魯智深、吃酒打人、無所不為、無所不做、佛性反是完全的、所以到底成了正果。」（容與堂本第四回回末總評）、「魯達自然是上上人物。寫得心地厚實、體格闊大。論麝鹵

兩魯智深は名前が偶然一致した赤の他人というほど違うのである。最終編纂者が水滸傳の軸とした變化型ストーリーはすでに宋元以来の英雄故事のとりこみをほぼ済ませていたであろうから、キャラクターのまったく異なる「豹子和尚自還俗」雜劇をそのままとりこむなど無理な相談である。水滸傳の魯智深が杭州六和寺で坐化する場面は前半の魯智深故事とは來歴が違うのではないかと指摘される通り、寺のおだやかな暮らしを楽しむ雜劇の魯智深と通じないこともないかもしれない。しかしこの場面は物語の最終盤で、宋江集團は梁山泊という根據地を捨てて官軍となっているうえ、豪傑たちの多くが戦死したり離脱したりして、安定型のエピソードはともに入できない。

しかしながら「豹子和尚自還俗」雜劇は魯智深とは関係のない箇所に変えて生き残っている。それが第五十三回である。この回の概要は左のごとし。

梁山泊の一員であつた公孫勝は、宋江が父と弟を梁山

處、他也有些麝鹵。論精細處、他亦甚是精細。……魯達已是人中絕頂。」（金聖歎「讀第五才子書法」『第五才子書施耐庵水滸傳』卷三）

泊に招いた直後、自分も母が心配になったので一時的に歸らせてほしいと申し出、了承を得て山を降りた。そしてそのまま約束の期日が過ぎててもどらない。宋江は戴宗を派遣して公孫勝を探させたが、結局居所をつかむこともできないまま歸ってきた。

高唐州の官軍と梁山泊軍との間に戦闘が勃發した。梁山泊軍は敵將高廉の妖術に苦しめられ、城市を攻め落とすことができない。宋江と呉用は、高廉の妖術に打ち勝てるのは公孫勝だけだと考え、戴宗と李逵に公孫勝のつれもどしを命じる。

二人はついに公孫勝の居場所をつきとめるが、應對に出てきたのは公孫勝の母で、公孫勝はいないと言う。うそをつかれていると感づいた戴宗は翌日、先に李逵一人を行かせ、前日同様にうそをつかれたら殴りかかるそぶりをするよう命じる。李逵が殴りかかろうとしたその時、公孫勝が飛び出してきた。戴宗は急いで李逵を制止し、公孫勝をおびき出すための策だったことを告げ、わ

びる。

侯會も指摘する通り、魯智深は僧、公孫勝は道士、宗教こそ違え、梁山泊を離れた出家者を呼びもどすという筋書きは同じである<sup>三十六</sup>。使者のなかに李逵がいること、出家者には母があり、その母が暴力をふるわれそうになるやあわてて駆けつけ、計にかかったことを知り、歸ることを承知するという筋立ても同じである。水滸傳の公孫勝の人物像が固まったのは最終編纂段階であると考えられるゆえ、第五十三回の成立も最終編纂段階であろう。宮崎市定は、第四十四回と第五十三回の二度にわたって戴宗が公孫勝を探しに行くのは、ひとつのエピソードをふたつに分けたうえで間に新たな話を挿入しようとした手術のあとであろうと言う<sup>三十七</sup>。一度目の搜索に派遣された戴宗、楊林は、道中石秀、裴宣、鄧飛、孟康と出會い、その梁山泊入りのきつかけをつくり<sup>三十八</sup>、二度目には李逵が湯隆と知り合い、連れ歸っている。ともに地煞星の仲間入りのエピソードを創

三十六 这两段情节，同是写梁山头目中的僧道人物下山不归，宋江差人多次招徕，最终文冕不成，改为武取，以武力胁迫其母，终于引出孝子，重返山寨。所不同者，不过一为和尚一为道士而已。（侯会「后来居上的《水浒》人物——公孙胜」

『《水浒》《西游》探源——与德堂古典小说研究丛稿』、一〇八頁）

三十七 宮崎市定『宮崎市定全集12水滸伝』Ⅲ「水滸伝的傷痕」  
三十八 裴宣、鄧飛、孟康の三名は飲馬川で盜賊稼業をしていた

出するための最終編纂段階の挿入話の特徴がよく現れている。このとき、公孫勝の人物形象を印象づける恰好のエピソードとして編纂者が利用したのが「豹子和尚自還俗」雑劇だったのではないか。そして、水滸傳の内容に合わせるべく、エピソードの細部はさまざまに變更されている。

まず、主役を魯智深から公孫勝に變えた。これにより、山寨の兄弟のもとへ歸るよりも母に盡くす「孝」を優先する公孫勝像を確立できる。

公孫勝も初登場時は江湖を渡り歩く無頼漢であった。第十五回、諸國漫遊の道士と稱して晁蓋のやしきを訪れるが、その目的は北京知府梁中書から太師蔡京への贈り物である金銀財寶、いわゆる生辰綱を輸送途中で強奪せんとの誘いであった。そして門衛に止められると、晁蓋に會わせると暴力沙汰におよぶ盜賊まがいの人物であった。生辰綱強奪のくだりでは道術を使う場面もない。第五十三回および第九十回以降の、山奥で母親を養いながら師匠に仕える道士のイメージとはかなりの徑庭がある。『宣和遺事』で

グループをまとめて誘ったものである。石秀はこの後楊雄、時遷と出會ったのち梁山泊に投じる。つまり、この回だけで六名の梁山泊入りのきっかけを作ったことになり、員數合わ

は生辰綱強奪メンバーに公孫勝はいない。水滸傳の生辰綱強奪の公孫勝と第四十二回以降の公孫勝の材料はそもそも別人だったのではあるまいか。そして最終編纂者は第四十二回以降の公孫勝像をより強く打ち出したかったようである。

公孫勝は第九十回、師匠と母のそば近くつかえるため一足早く集團を離れ、方臘征伐に加わらない。妖術使いを缺いた宋江軍は苦戦し、多くの戰死者を出す。宮崎市定は、征遼戰で公孫勝が妖術を使って大活躍するのは、公孫勝に集團を離れる口實を與えるのに必要なことであったという<sup>三十九</sup>。高島俊男はこの説を支持し、次のように説明する。

公孫勝は魔法使いである。風をおこし雨をふらせ、天地を真暗闇にし、神魔怪獸を現出して敵に襲いかからせる。もちろん戰に際してははじめからそんなことはしないが、いざとなればこの奥の手がある。だから梁山泊軍は保險がかかっているようなもので一時的に不利におちい

せとしては大成功と言える。  
<sup>三十九</sup> 宮崎市定『宮崎市定全集12水滸傳』Ⅱ「水滸傳―虚構のなかの史実」



っても最終的に負ける気づかいはない。

しかしまた公孫勝は道士であり俗世の外の人であるから、いつまでも梁山泊にいるつもりはない。……だからこの人は、いずれはぬけるのである。……といって、官軍になったとたんにぬけてしまうのもおかしい。朝廷に對して申しわけが立たないし、だから宋江がゆるすはずがない。……

しかし方臘との戦に公孫勝がいてはぐあいが変わる。……もし公孫勝が軍中にいたら、なぜ魔法を使わないのかと読者が納得しないだろう。公孫勝は梁山泊の保険なのだから、梁山泊が潰散するという結末にしようとすれば、保険ははずれてないといけない。

そこで公孫勝のために活躍の場をつくり、宋江も引きとめ得ないような状況を準備するために、遼との戦争を設定した。

（『水滸伝の世界』 十二「遼国征討」 二百二十五～二百二十六頁）

最終編纂者が、征遼戦で公孫勝が大活躍し、方臘征伐を前に離脱してしまうことにした理由の説明には十分である。ただしこれ以前に、公孫勝は「俗世の外の人」で「いずれ

はぬける」という印象を確立しておかなければならない。そのためには初登場時の公孫勝のままではだめである。最初の公孫勝は「俗世」の人そのものである。そこで編纂者は第四十二回末と第五十三回で公孫勝に初登場時と異なる人物像を與えた。

まず第四十二回末で、母の様子を見に歸りたいと申し出させる。そしてさらに第五十三回で「豹子和尚自還俗」雜劇を轉用した。この二度のエピソードにより、公孫勝は義より孝を重んじる人物、一時的に俗世にいただけでいつかは師匠のもとへ戻るさだめにある人物へと變じたのである。

水滸傳に孝を標榜する人物は少ない。天涯孤獨の身は魯智深一人に限らぬのである。孝にまつわる目立ったエピソードといえば、宋江と父、李逵と母、公孫勝と母の三例しかない。この三者の探親エピソードはつらなつて配置されている。宋江は孝をもつて知られた人物であり、第四十二回に宋江自身が、梁山泊の仲間に多大な手間をかけさせてまで郷里から父を迎え入れたばかりであるだけに、母のもとへ行きたいという公孫勝の願いを拒絶するわけにはいかぬ。編纂者は、宋江が拒否することのできないようなタイミングに公孫勝のこの申し出を配置し、兄弟の結束を重視

する宋江がなぜ一時的とはいえ個人的な目的で山を下りることを許したのかと読者が疑念を覚えることがないようにしたのである。

## 八・「孝」の質的差異

「豹和尚自還俗」雑劇と水滸傳との比較をさらに一歩進めると、細部にも變更が加えられていることがわかる。まず、「孝」をめぐる違いがある。

雑劇では宋江が魯智深について「這兄弟却孝順、他見他母親去喚、他必然跟他母親來也（この弟は親孝行だから母が迎えに行けばきつとついてくるだろう）」と言う。この「却」は、妻や子が飢えそうになっても心を動かさない魯智深でも母を思う心は強いから成功するだろうという對比を意味しよう。事實、母が魯智深に、「做和尚的受苦有甚麼好處、你跟我去、山寨上養活我去（坊主になつてきつい思いをしてなんの得があるものか。一緒に歸つて山寨で私を養つておくれ）」と頼むと、魯智深もすげなく追い返すことはせず、檀家の村に引越してくるよう勧める。そこならば環境はよく、人は親切で、衣食に不自由させることもないから、「不曾將孝道虧（孝の道に背くことにならない）」というのである。ここで言う「孝」が「母に衣食

に不自由のない暮らしをさせる」意であることは明白であり、議論の焦點は「どこならば衣食足りる暮らしを提供できるのか」である。母は山寨にもどれば實現できると言い、魯智深は、ほかのあらたな選擇肢を提示したのである。

水滸傳の公孫勝のくだりでは直接「孝」を用いた表現は出てこないが、公孫勝は次のように言っている。「自從梁山泊分別回郷、非是昧心、一者母親年老無人奉侍、二乃本師羅真人留在座前聽教。恐怕山寨有人尋來、故意改名清道人、隱居在此（梁山泊を出て歸郷したのは義にそむこうというのではなく、ひとつには母が年老い、世話するものもないこと、第二にわが師羅真人が私をそのお膝元にのこし説教しようとしているためなのです。山から誰かが呼びに来るのではない、清道人と名をあらため、ここに隱居していました）。ここから「孝」を讀みとることにさしつかへはないだろう。ところが公孫勝は老いた母のそばに居ることを第一にあげながら、いざ宋江の助太刀に赴くことが決まるや、母は残していく。戴宗の口からも、自分の母には山寨で「大塊肉大碗酒」の「快活」な生活をさせたいと願っていた李逵の口からも、母も梁山泊に連れ歸つて衣食住に困らない暮らしをさせてやればよいとのことばは聞か

れない。一時的に世話をする者がいなくなろうとも、母を山寨に迎え入れようとの考えは、公孫勝にはつゆほども浮かばないのである。

水滸傳で宋江は、江州で生命の危機にさらされたところを梁山泊軍に救い出されるまでは一貫して梁山泊入りを断り続けている。その理由は、父に「怕你一時被人攛掇落草去了、做個不忠不孝的人（おまえがそのかされて落草し、不忠不孝の輩になるのがこわい）」、「倘或他們下山來劫奪你入夥、切不可依隨他、教人罵做不忠不孝（もし彼らが山からおまえを奪いとりにきて仲間にしようとしても、ゆめゆめそれにしたがって不忠不孝とそしられるようなことはするな）」ときつく言われているからであり、仲間入りを勧められても「小可不爭隨順了哥哥、便是上逆天理、下違父教、做了不忠不孝的人在世、雖生何益（わたくしが兄貴にしたがえば、上には天理に逆らい、下には父の教えにそむくことになります。不忠不孝ものとなってこの世に生きてなんになりましょう）」と拒否している。自分ひとりで落草し梁山に入ることにすら不孝なのだから、ましてやそこで樂な暮らしができるからといって父を連れて一緒に山寨に入ろうなどという考えの生まれてこようはずはない。宋江が恐れていたのは人に「不孝もの」と指弾される

ことであつた。ごく單純に言えば「親の顔に泥を塗るな」ということだろう。そのなかでも最惡の行為が「あの家の子は盜賊になつた」と後ろ指をさされることである。親のそば近くにいられずとも、極論すれば親が飢えや寒さにさいなまれていても、親に不名誉な思いをさせるよりはましなのである。この場合の「孝」は精神的高潔さといった抽象的な意味が強い。盜賊の寨であろうが檀家の村であろうが衣食住に不自由させないことを重要とする雜劇の「孝」とは性質を異にしている。雜劇の孝はいわば「物質的な孝」、水滸傳の孝は「精神的な孝」である。公孫勝は、母に生活面で不自由させようとも指名手配犯のなかで暮らすことはさせようとしなかった。宋江も、江州で死刑に處せられんとするところを梁山泊の豪傑たちに助け出され、もはや行くあてもなくなつてはじめて父を迎え入れたのである。

水滸傳における精神的な孝は李逵にまで浸透している。李逵は母を迎えに旅立つ當初、このように考えていた。

我只有一個老娘在家裡、我的哥哥又在別人家做長工、如何養得我娘快樂？我要去取他來這裡、快樂幾時也好。

おふくろはたった一人で家にいる。あにきは人に雇わ

れて住み込みではたらいっているし、どうやっておふくろに樂をさせてやれるもんか。おふくろを迎えに行つて、しばらく樂をさせてやつてもいいだろう。

李逵は平素より「快活」を口癖とする。「快活」とは、「肉の塊にかぶりつき、酒をがぶ飲み（大塊肉大碗酒）」し、「金銀財寶を山分け（論秤分金銀）」しと、愉快に暮らすことである。なにものにも束縛されず、食うにも飲むにも不自由せず、金も山ほどある。江湖の豪傑たる李逵の面目躍如である。そして李逵はわが身のみならず、母にも「快活」を味わってもらいたいと考える。まさしく物質的な孝である。ところがいざ郷里につくや、「我若説在梁山泊落草、娘定不肯去、我只假説便了（もし梁山泊に落草したと言ったらおふくろはうんと言わないだろう。うそをついたほうがいい）」と思いなおし、母に「鐵牛如今做了官、上路特來取娘（鐵牛は役人になってかあちゃんを迎えに來たんだ）」とうそをつく。たとえ物質的に恵まれたところであっても、おたずねもの集團のなかで暮らしたいと母は思わないのではないか、樂な暮らしより名譽をとるのではないか、李逵にもこのような分別があることになっているのである。世間の人々は精神的要素をより重視すると

いう「物語世界内の常識」は李逵にも及んでいる。しかし兄の李逵によって、李逵は江州で大殺戮をした舉句梁山泊に逃げ込んだ懸賞首だと暴露されるや本性をとりもどし「一發和你同上山去快活、多少好（いっしょに山にのぼって愉快にやったほうがどれだけいいか）」と言い、母には「只顧去快活便了（愉快に生きることだけ考えたらいいんだ）」と本音を告げ、母を背負つて梁山へ向かう。「快活」こそが重要である李逵にとつては、何處であろが母に何不自由ない快適な暮らしを提供できればよいという物質的孝こそがもつともわかりやすい価値観である。しかし宋江や公孫勝、梁山泊集團、ひいては水滸傳という物語は精神的な孝をより重んじていた。その雰圍氣は李逵にも傳わっている。孝の三部作とも言えるエピソードは、三人それぞれの孝に對する考え、それに發する親への待遇に少しずつ相違を見せ、三者三様の結末を迎える。精神的孝を重んじる宋江は父を連れ歸ることに成功し、山賊であることと母の名譽を汚さないことが兩立しがたいとわかつていた公孫勝は母を連れ歸らなかつた。李逵は母を山寨に入れるという不名譽を犯しても物質的な孝を強行せんとし、その途上で虎に母を殺されてしまう。しかし見方を變えれば、精神的孝の勝る世界において、母を盜賊集團の仲間にする

いう大罪を犯しそうになるところを虎が水際で食い止めてくれたとも言い得るのではないか。そして母は失ったものの、仇討を遂行した李逵には「孝子」の美名が與えられることになる。

このように水滸傳では李逵の物質的な孝は宋江式の精神的孝に押されたとさえないが、雜劇では積極的に打ち出されている。むしろ親自身が、養ってもらうのに最適の場所と考えれば山寨に行くよう勧めるのである。それでもなお梁山泊に戻ろうとしない魯智深に母は、「你不肯做賊呵罷。只回山寨上住去、看營守寨也好（賊になりたくないというならそれもいい。山寨に戻って住むだけ住んで、見張り番でもすればいい）」と言う。しかし魯智深はこう答える。

【倘秀才】我若是守着箇賊營坐地、怎當那做賊的干連帶累。「末云」若是竊盜小賊呵、也趕過了。若是強劫殺人賊呵、不分首從都是該死。「末唱」便守寨的也少不得雲陽血染衣……

【倘秀才】賊の陣地を見張っていれば、賊との連座は避けられぬ。「末、せりふ」コソ泥だったら逃れられようが、強盜殺人なら首領も手下もみんなそろって死

刑だ。「末、うた」留守番とても雲陽の血染めの衣

（死刑）は免れぬ……

母は山寨にもどっても盜賊稼業に手を貸さなければ犯罪ではないと考えているが、魯智深の意見は異なる。わが手で強盜、殺人をせずとも、寨を見張ることはすなわちその罪行を後方支援したことになるではないか。私はなにも盜っていないし人を傷つけてもいませんよなどという言い譯が通用するはずがないと反論している。母子の議論の焦點が梁山泊に在ることの是非ではなく、犯罪行為に關わるか否かにあることは注目すべきところである。ただ、梁山泊にいれば、遅かれ早かれ強人たちの犯罪行為に協力することになると魯智深は懸念しているのである。山寨に在ることが即ち悪人であることとは考えていない以上、山寨に入ることへの心理的ハードルはそれほど高くない。

とりわけ注目すべきは、母親のほうから主體的に、盜賊集團のなかにもどれば養えるだろうという意見が出てくることである。水滸傳の宋江の父や公孫勝の母には絶対に言わせられないセリフであろう。ここでは名譽よりも衣食、千年の清名より明日のおまんまなのである。ここでは盜賊の一味と見なされる不名譽は、水滸傳ほどには強力な抑止

力になっていない。

笠井直美「義賊の誕生―雜劇『水滸』から小説『水滸』へ―」が、梁山泊もの雜劇において「強人が恐れられ非難されるのは『殺人犯』『強盜犯』といった、刑事犯的側面を持つからであって、『謀反人』という政治犯と見なされているからではない」のに對し、水滸傳では「落草すること即ち謀反することと見なされる」と分析しているのがこの母子の會話のよい注釋となる。梁山泊入りすることイコール反國家の謀反人と見なされるのであればこの會話は成立し得ない。もっとも他の梁山泊もの雜劇では、梁山泊の一員でもなく、ただ梁山泊の強人と義を結んだというだけで犯罪行為と見なされる場面もある。ゆえに魯智深の言い分も根據がないわけではないのであるが。

雜劇からはさらに、宋江の孝に對する態度も水滸傳とは異なることが読みとれる。

我今有一智量、必然勸的他回來也。今差兩箇小婁囉粧辨  
做客人去那村里胡索債。到他母親住處尋些事打他母親。  
魯智深聞知有人打他母親、必來救也。我親自後去、好歹  
賺他回來。

必ずやあいつを呼びもどせる知恵が浮かんだぞ。まず

小者に商賣人のなりをさせて偽りの借金の取り立てに行かせる。あいつの母親の住んでいるところへいかせてなにか因縁をつけてなぐる。母をなぐっているものがあると聞けば魯智深は必ず助けに来る。そこへわしがみずから出て、どうあってもあいつを言いくるめて歸らせる。

このように雜劇では宋江が魯智深をおびき出す計略を授ける。一方、水滸傳では次のとおり。

戴宗道「小可再來、就辭了婆婆。」却來門外對李逵道  
「今番須用着你。方纔他娘說道不在家裏。如今你可去請  
他。他若說不在時、你便打將起來、却不得傷犯他老母。  
我來喝住你便罷。」

戴宗が言った。「わたくしまたおうかがいします。これにて失禮いたします。」そして門の外へ出て李逵に行つた。「おまえに頼る時が來たぞ。さっきお母さんは、公孫勝は家にいないと言つた。おまえも公孫勝を呼びに行け。もしいらないと言つたら暴れだすんだ。でもお母さんを傷つけてはいけけない。俺がしかりつけたらすぐにやめなさい。」

計略のあらましはおなじだが、雜劇では宋江が立案し、最後はみずから登場して真相を告げる。水滸傳の宋江は公孫勝を連れ歸るよう命じただけで、具體的な指示はあたえていない。計略を立てたのも真相を明かすのも戴宗である。遠く離れた高唐州で敵と對峙している宋江は現地で公孫勝がいかなうな暮らしをしているのか、歸還を快諾するのかわらないのか知る由もなく、具體的指示ができようはずもない。物語世界内の現實的に、宋江の不出馬も、戴宗が現場の責任者として臨機應變に策を案じるのも理にかなっている。しかし單に構成上の都合とのみ見るのではなく、我々はこの改編から、宋江に「孝」を傷つけるような行為はもちろん、それを示唆するような言動すらさせてはいけないという編集方針をも読みとることができるのではないか。水滸傳以外の宋江は義なる人物ではあっても孝なる人物ではなかった。兄弟の義がなににもまさる。ゆえに義氣を守るためには他人の孝心を利用しようが、他人の母を脅迫しようがかまわない。しかし水滸傳ではそうはいかない。水滸傳は初登場の時から宋江を孝と義とを兩立できる人間として描いている。孝を重んじる宋江に、他人の孝心を利用して人をだます行爲をさせられようか。宋江が、義兄弟の

母に對しては脅したりすかしたりしてもよいという態度では、自分自身の孝は重視するが他人の孝はどうでもよいということになってしまう。それこそ金聖歎の言う「偽」であり、宋江の形象を傷つけることはなほだしい。編纂者には宋江をそのような偽善者に描く意圖はなかった。ゆえに現場から宋江を遠ざけ、公孫勝の孝心を逆手にとった計略のことは一切あずかり知らぬという状況を用意したのではないか。そしてまた、公孫勝の母を脅迫する實行役が李逵であったことも忘れてはならない。李逵は宋江の分身であり、短氣、粗暴、直情といった宋江の負なる部分を引き受けた人物であった。この代理執行人のおかげで宋江は「孝義黒三郎」という高潔な形象を保持し得たのである。

ここで當然湧くであろう疑問がある。現場におらず、計略實行に攜わっていないとはいえ、そもそも公孫勝を連れ戻すよう命じたのは宋江ではないか。その使命をまっとうするために戴宗は計略をたてたのである。宋江は間接的とはいえ公孫勝の孝心を傷つけたのであり、その任命責任は問われないのか。

これに似た狀況が第五十一回、第五十二回に見える。宋江はかつて自分の命を救ってくれた朱仝を梁山泊に迎え入れるべく呉用、雷横、李逵を遣わす。朱仝は罪人とな

っていたが、配流地の知府に氣に入られ、その息子の世話を任されていた。呉用らが梁山泊に来るようすすめても、知府の信賴に感謝し、生活に不満のない朱全は承知しない。そこで呉用は李逵に命じ、呉用、雷横と朱全が話をしているすきに知府の子、小衙内を殺害せしめた。朱全は怒り心頭に發し、李逵を殺そうとする。しかし息子を死なせたとあつてはもはや知府のもとへもどることはできず、呉用らの説得を聞き入れ、李逵の首を交換條件に梁山泊入りを承諾した。笠井直美<sup>四十</sup>がこの事件を詳しく分析したうえで、水滸傳の本文からは宋江が小衙内殺しを指示したと確言することはできず、この事件の真相は「藪の中」状態になっていると言う。たしかにそのとおりなのであるが、同時に、これも笠井が指摘するとおり、この事件の被害者である朱全はひたすらに李逵のみを憎み、頭領である宋江はおろか、直接李逵に殺害を指示した呉用、それを黙認したと思われる雷横、柴進に對してすら、文句こそ言え、憎しみをもっている様子がない。下手人である李逵にもっとも強い怒りが向けられるのは當然としても、呉用、宋江には

<sup>四十</sup> 笠井直美「誰が小衙内を殺したか―『水滸傳』における『宣言としての暴力』の馴致」(『水滸傳の衝撃 東アジアに

なんらの監督責任も求めていないかのようなものである。水滸傳の世界では、直接手を下したものが犯人であり、間接に計畫に加わったものの責任は意識されていないようなのである。公孫勝の母を脅迫する場合も同様なのではないか。ゆえに宋江は他人の孝を輕んずる偽善性、目的を果たすためには子どもまで手にかかる殘虐性などをもつて指弾されることは、少なくともこの物語世界内においては、ない。編纂者は宋江を現場から切り離すことで徳の高い人物という宋江の形象を護持し得たのである。

#### 九・「個」と「全體」

このほかにも雜劇と水滸傳の間には小さいながらも兩者の本質的な差異をあらわす違いがある。

「豹子和尚」雜劇で宋江が魯智深を呼び戻さんとする理由はこうであつた。

想俺兄弟結義時曾有誓願云、來時三十六去後十八雙、若還少一箇定是不還鄉。這箇誓願怎敢違了。今日只少他一

おける言語接触と文化受容」、勉誠出版、二〇一〇年)



箇。這衆兄弟内誰敢去勸化他喚回來依舊做賊。

われら兄弟は結義のときに誓った。來たる時三十六人、去る時十八雙、一人でも缺ければ決して戻らぬ。この誓いをたがえることなどできようか。さて、いまあいつが足りない。兄弟衆の誰か、あいつを説き伏せて元通り盜賊をさせようというものはいないか。

非常に單純明快である。三十六人で生死をともにすると誓ったのだから誰ひとり缺けてもいけない。仲間同士のきわめて強力な結束意識だとも言えようが、ひとたび足を踏み入れたものは個人の事情は一切顧慮されず、いかなる理由であれ族抜けは徹底して批判されるという、非合法集團の強制力であるとも言える。

第四十四回で宋江が最初に公孫勝を連れ戻すよう命じた時は次のように言っている。

一日、宋江與晁蓋、吳學究并衆人閒話道「我等弟兄衆位今日都共聚大義。只有公孫一清不見回還。我想他回薊州探母奈師期約百日便回、今經日久、不知信息、莫非昧信不來。可煩戴宗兄弟與我去走一遭、探聽他虛實下落、如何不來。」

ある日、宋江は、晁蓋、吳學究とその他の人々と雑談の折に言った。「われら兄弟衆はいまこうして大義に集っているが、公孫一清だけがまだ戻らぬ。薊州に戻って母を見舞い、師を拝し、百日で戻るはずだというに、ずいぶんと経つが便りもない。まさか約束を違えて戻らぬのではあるまいか。戴宗よ、ご面倒だがひとつ走りして彼がどこへ行ったのか、どうして戻らぬのか探ってきてくれないか。

雑劇と違い、ここでは個人の約束を理由にしている。出発の際、公孫勝はみずから「暫別衆頭領三五個月再回來相見（親分衆にはしばしの暇をいただき、數か月後ふたたびお目にかかります）」と言い、宋江が「百日之外專望鶴駕降臨、切不可爽約（百日後のおもどりをひたすらお待ちします、ゆめゆめ約束を違えませぬよう）」と答えたのに對してさらに「小道豈敢失信（わたくしがどうして約束を破りましたるか）」と應じて出發している（第四十二回）。特定の状況に應じた約束であり、かつ具體的に期日も定めている。戻って來ない公孫勝の約束違反は明確であり、連れ戻そうとするのに十分な理がある。

この個人の色彩は第五十三回の二回目の呼び戻しにおい

てより濃厚になる。

話說、當下吳學究對宋公明說道「要破此法、只除非快教人去薊州窺取公孫勝請來、便可破得高廉。」

さて、その時吳學究が宋公明に言うよう、「この法を破るにはいそいで薊州に人をやって公孫勝を呼びもどしてくるしかありません。そうすれば高廉を倒せます。」

二度目の理由はよりはっきりしている。敵方の道術使い高廉によって梁山泊軍は苦しめられ、道術使いである公孫勝の力が必要になったのである。「いくさに勝つために必要な戦力」という個別的、具體的で明確な理由である。ひるがえって雑劇を見ると、特に魯智深が缺けてはいけない理由はどこにも述べられていない。戦力として必要になったわけでもなく、魯智深でなければできない任務があるわけでもない。ただ、三十六人死ぬまで運命をとまにすると誓った以上これから三十五人でやろうというわけにはゆかぬからというだけである。水滸傳で感じとれる「個人」が雑

劇には見られない。

筆者はこれにより水滸傳に人権意識なり個人主義なりを見出そうというのではない。この違いは思想的、社會的背景より、やはり兩者の物語構造の違いに由來するのではないか。

雑劇で梁山泊の豪傑が梁山泊外の人物と義を結ぶことは少なくないが、その人物が梁山泊入りすることは決してない。事件が終わればもとの世界のもとの生活に戻っていくのである。なぜ水滸傳のように仲間入りをしないのか。宋江は引き止めないのか。雑劇の物語世界では水滸傳のように「落草すること即謀反すること」とは見なされず、「結義による集團が、強人同士の集團として閉じておらず、堅気の人に向かって『開いている』」ために、梁山泊の強人と堅気の人が「相互的・取り引き的」に結義することが可能になっいて、梁山泊の豪傑と義を結んだ一般人はもとの世界にもどることができるといふ笠井直美の分析<sup>四十一</sup>は説得的であるが、それと同等、あるいはより重要な理由として、「梁山泊の三十六人」は不變、なにも足さないないも引かないという安定型作品の約束事があるのでない

か。梁山泊といえど三十六人なのであって、それ以上でもそれ以下でも不自然な状態である。そしてまた、安定型であることがもうひとつの制約を生む。それは差異を與えることのむずかしさである。

雜劇はすべて獨立した故事で、梁山泊集團という基本設定以外に互いの影響関係はない。既存の作品のストーリーを繼承する必要もなければ、現存する限りでは續作が作られた形跡もない。複数の作者がそれぞれに作品を作る場合、これがもっとも便利で効率的な方法なのだろう。作品間で各種設定をすり合わせることもあまりなかったのだろう。李逵のように黒い肌の亂暴者という、わかりやすく、作者や観客に廣く知られた特徴を有する人物は重寶したであろうが、それ以外の多くの登場人物は、それが誰であれ、「梁山泊の豪傑らしい」要素を備えているだけでよく、こちらの作品の魯智深とあちらの作品の魯智深との間に違いがあってもかまわない。また、形式の制約もある。「仗義疎財」雜劇は例外的に五折仕立てになっているが、雜劇は原則四折と篇幅が短い。加えて正末の獨唱という形式もあいまって、メインで活躍する登場人物がすくない。基本的には一人か二人、多くてもせいぜい三人である。このため一人の人物が賢かったり狡猾だったり短氣だったり

亂暴だったりとさまざまな表情を見せることになる。そのほうが現實の人間に近いとも言えようが、各人物の個性は出にくい。結果として「梁山泊の豪傑」というラベルを貼られた類型的な登場人物がideaあがる。單發の話で、他の話を引き繼ぐでもなく、次回に續くわけでもないのだからそれで不都合は生じない。

これに對し水滸傳は篇幅も長く、登場人物も多い。各故事が互いに影響なく獨立しているわけではないので、前後のつながりも考慮しなくてはならない。百人すべてを書き分けることはできず、事實區別のつかない人物が何人もいるという指摘はあるが、少なくとも主だった十數人についてはそれぞれに特徴的な個性を打ち出すことが重要になる。第四十二回以前はそれぞれの出身、落草に至ったいきさつを紹介する個人の物語のつらなりで、個性を書き分けることこそが眼目である。

また、變化型である以上、梁山泊集團の人數は一定しないのが常態である。原則として増えつづける方向ではあるが、王倫の暗殺、晁蓋の戦死のごとく、まれに減少することもある。第四十二回で宋江が得た天書は、『宣和遺事』のように集まるべき豪傑の名簿ではなく、百人こそが天の定めた數であると判明するのはようやく第七十一回であ

る。水滸傳における梁山泊集團の安定期はごくみじかい。固定の數を持ち出して、一人も缺けてはならぬゆえ連れ戻せというせりふは使えない。魯智深の個としての事情、能力や役割に顧慮しない雜劇と、山を降りる個人的事情が考慮され、個人の約束が重視され、公孫勝の能力が必要な具體的事案に應じて呼び戻される水滸傳との差異はこのような事情にも關係していよう。

ゆえに雜劇のストーリーを水滸傳に移植しようとするならば、この、より細かく具體的なエピソードや特徴を與えて他の人物との差異化を圖る作業にせまられることになる。李卓吾、金聖歎が水滸傳の優れた點のひとつに個性が巧みに書き分けられていることをあげているように、その作業は成功したといえる。この點こそが梁山泊もの雜劇と水滸傳との重要な違いと言ってもよい。「黒旋風雙獻功」雜劇では黒旋風ひとりが粗暴、冷靜、智慧、狡猾、装傻などさまざまな表情を見せ、それがまた雜劇の魅力ともなっているのだが、水滸傳の黒旋風李逵は、短氣、粗暴に徹底的に單純化されている。雜劇の黒旋風の有していた冷靜、狡猾、理知的などの性質は、水滸傳では、李逵とコンビを組む燕青にゆずりわたされ、ストーリーの円滑な進行を守っている。燕青は雜劇中では没個性と言っている人物であ

るが、最終編纂者によって、賢く、抜け目なく、李逵を止めることのできる人物という個性を與えられたのである。

「豹子和尚自還俗」雜劇からの改編は複雑である。個性に應じて人物を差し替え、思想性にも手を加えている。最終編纂者はこれらの差異をよく理解していた、つまり現在編纂中の作品の目標とする全體像がはっきりイメージできていたのである。それにしても、編纂者はなぜそれほど手間のかかることをしてまで雜劇を導入したかったのか。

すでに分析したように、水滸傳は南方系の變化型ストーリーを軸に構成されている。ここに豪傑個々の銘々傳を加えるだけでも充實したエピソードをそろえることはできただろう。水滸傳中で雜劇が原型をかなりとどめる形でとりこまれていると思われるのは先述のとおり一回半分にすぎず、ストーリーを轉用した「豹子和尚自還俗」雜劇、一場面の趣向を借りた「血光之災」、「大殺戮」を加えても全體の數パーセントにしかならない。わずか數パーセントならば雜劇を使わずとも十分に篇幅を埋めることはできただろう。筆者は、雜劇がとりこまれた最大の理由は材料不足ゆえでも、回數あわせのためでもないと考える。むしろ手間のかかる變換作業を加えてでもとりこむだけの価値を雜劇に認めていたからなのではないか。

## 十・文體としての雜劇の意義

水滸傳が世に問われるまえの宋江集團に關する物語は主に口頭藝能として語り繼がれていたと考えられる。民間の口頭藝能の多くは詩讚系と稱される文藝に属する。詩讚系演劇は齊言句を用い、打樂器による簡單なリズムに合わせ歌う。リズムの變更が容易であるため作詞もしやすく、各地の方言にも對應できるため民間で廣く流行し、現在でも農村などに残る演劇は詩讚系であるという。説唱詞話もおなじく詩讚系の唱を用いた語り物で、元代にはこの詞話を演劇として上演することもあったらしい<sup>四十二</sup>。しかし文人的教養をもつ知識人からは藝術と見なされず、その歌詞や臺本が書籍化される機會はほとんどなかった。

一方、知識人が藝術と認めた唱いものが樂曲系文藝であった。樂曲系はまず音樂（曲牌）があり、作者はそれに應じて詞を埋めていく。そのためには豊富な語彙量とともに、十分な音韻の知識がなければならず、知識人でなければ

ば製作はおろか鑑賞もできない文藝作品であった。諸宮調、散曲、雜劇がその代表的なものである。このような高級文藝であつてようやく書籍化され、形に残る。ここに、「樂曲系」文學的、音樂的、「詩讚系」野暮」という構圖が成り立つ<sup>四十三</sup>。この「野暮」は音樂性や修辭のみならず内容にもおよぶ。明代初期には、説唱詞話で語られる内容があまりにでたらめであるとしてこれをきらう知識人もあつた<sup>四十四</sup>。

明代中後期になると、水滸傳に限らず、かつて知識人が齒牙にもかけなかった通俗文藝が陸續と出版されるようになる。この現象の背後には知識人の審美觀の大轉換があると言われる。水滸傳（ないしはその材料）が知識人の目に止まった理由については多くの研究がある。ごくおまかには、この時期の知識人のもっていた、真に道德的なものは素朴、野暮なところにこそあるという思想、その思想を體現する人物やエピソードが多く含まれていたからと言えよう<sup>四十五</sup>。識字層が擴大したため、その素朴な藝能

<sup>四十二</sup> 金文京「詩讚系文学試論」（『中国—社会と文化』第七号、一九九二年）

<sup>四十三</sup> 金文京「詩讚系文学試論」参照

<sup>四十四</sup> 宮紀子「花閑索と楊文広」参照

<sup>四十五</sup> 島田虔次『中国における近代思惟の挫折2』（平凡社東洋文庫、二〇〇三年）第三章「李卓吾」、大木康『明末のはぐれ知識人 馮夢龍と蘇州文化』（講談社選書メチエ、一九九五年）第四章「文学の大轉換」3 『真』の探求」、小松謙

に比較的近い距離にいた人々も讀者に加わり得たという背景もあっただろう。

民間の素朴なものがよしとされる風潮があつたとはいえ、高級知識人をも讀者に想定する以上、それまで忌み嫌われていた「素朴」で「野暮」なものそのままの形で印刷に付されることはなく、多かれ少なかれ手を加えられるのが常であつた。『三國志平話』と『三國志演義』とを比べ

た際、過度に荒唐無稽な要素が前者には多く後者には少なく、史書に符合する内容が前者には少なく後者に多くなっている。これは讀者として想定する高級知識人の鑑賞にふさわしいよう編纂した結果であろう。一種の「高級化」である。そして、「この荒唐無稽な要素の削除と歴史書に基づく記述の追加という二点は、『三國志演義』に限らず、『全相平話』と明代歴史小説との間に一般的に認められる現象である」<sup>四十六</sup>。ところが水滸傳はこのような改編があまりなされなかったとも言われる。小松謙は『三國志平話』は水滸傳と大差ない性質のものであり、さまざまな改

編を経て「『水滸傳』的要素を払拭」<sup>四十七</sup>することで『三

國志演義』が成立したと述べている。なぜ水滸傳は徹底的にメスを入れられなかったのか。ひとつ考えられるのは、水滸傳は史書により修正可能なものがほとんどないからであろう。また、そもそも民間の賊をあつかった物語ゆえ、登場人物が非知識人的倫理觀で行動しても抵抗が少なかったのかもしれない。とはいえ、水滸傳も知識人向けの改編から自由であつたわけではない。既述のごとく、宋江を南宋期の抗金英雄とする傳承もあつたのだが、編纂者はこの設定を採用しなかった。史書の宋江は北宋期の人物であるため、これに合っていないかなければならなかったのだろう。その宋江は、水滸傳以前の傳承や類似の故事から想定できる姿から大きく様変わりして知識人的倫理の持ち主になっている。宋江が牙を抜かれていく一方、元來宋江が有していた無頼漢的性格を引き受けた李逵や王英はみな非知識人である。知識人にふさわしくない性質を非知識人にゆずりわたしているのである。主人公の知識人化という點で宋江像

「『四大奇書』の研究」第三部『水滸傳』第三章「水滸傳はなぜ刊行されたのか」参照。

<sup>四十六</sup> 小松謙「三國志物語の変容」(『中国四大奇書の世界』、和

泉書院、二〇〇三年)、四十六頁四十七頁

<sup>四十七</sup> 小松謙「三國志物語の変容」(『中国四大奇書の世界』、五十八頁

の改變と劉備像の改變とは共通する。ただ物語全體を見ると、三國もの同様の方法で高級化された人物やエピソードの割合は低かったということなのだろう。

では水滸傳の編纂者はほかにいかなる方法で高級化をはかったのか。

水滸傳の材料の中核は詞話であつたと思しい。詞話は詩讚系の藝能であり、金文京は、長篇白話小説は「詩讚系講唱文学と深い関係にあ」り、「前身に詞話の存在があ」つたことから、「小説に対する戯曲の優位は、ある意味では、楽曲系の詩讚系に対する優位の反映であつたとみるこゝとができる」<sup>四十八</sup>と言う。水滸傳最終編纂者は、この「野暮な詩讚系」主體の物語に、「高級な楽曲系」由來の成分を加えることで高級讀者への對應を圖つたのではないか。すなわち雑劇の採用である。

元代、雑劇が舞台で演じられていたころは高級知識人とは言えない都市住民も鑑賞していただろう。この時の雑劇は大衆性を有していたと言つてよい。しかし明代になると民間では南曲が流行し、雑劇は宮廷と王府以外では上演さ

れる機会を失い、書籍を通じて鑑賞する文字藝術に變つていく。ストーリーから切り離してさまざまな雑劇から曲を採取した讀曲用の書籍が出版されていることもこの状況を反映している。その讀者は曲牌、曲譜、音韻を理解できる知識人に限られる。

水滸傳の編纂者が基礎教養を備えた知識人であつたことは間違いない。このような人物が編纂することではじめて雑劇をとりこむ機会が生じる。本稿で水滸傳が雑劇を利用した部分について、「讀者の知識を利用した」、「從來の形に改變を加えることで違つた雰圍氣を打ち出した」と解釋したが、それは編纂者も讀者も雑劇に親しんでいる讀書人であることが前提となる。編纂者が想定する對象讀者はもはや高級文藝に縁のない大衆ではない。そう考えると、「黒旋風雙獻功」雑劇のとりこみについて「元曲が既に普及していたため、この人氣者を取入れなければフアンを満足させることができなくなっていたのであろう」<sup>四十九</sup>なる宮崎市定の解釋が俄然深い意味を持つ。その「フアン」は、それを讀んで楽しめる知識人なのである。雑劇がとり

こまれたのは、ストーリー自体のおもしろさのみならず、梁山泊もの雑劇を知る知識人読者に馴染みのエピソードを提供し彼らを満足せしめるためだったのではないか。そして宮崎市定が「人気者」と指摘する李逵は、『宣和遺事』ではなんら目立つことのない人物であった。「梁山泊の物語」と言えば李逵」と連想し得るのは雑劇を読む人々であり、そうした高級読者にとってはまさに「人気者」だったことをこの現象は意味するのではないか。

馬幼垣は水滸傳における宋江の「你和黑廝最好、你可略等他一等、隨後與他同來（きみと黒ん坊は仲がいちばんいいから、彼を待って、あとから一緒に来てくれ）」（第七十二回）ということばに着目し、水滸傳ではこのせりふ以前に李逵と燕青が親しくしている描寫はおろか、それを預期させる一言半句もないと指摘したうえで、「黒旋風仗義疏財」雑劇で李逵と燕青が組んで行動していることが水滸傳のこの場面に影響しているのだと解釋している<sup>五十</sup>。つまり雑劇に親しんだ読者ならばわかる設定だということである。そして、わずか一回半とはいえ雑劇のエピソードを利用した以上、雑劇の世界と水滸傳の世界とはつながったも

のであるとの印象を讀者に與える。讀者は水滸傳にとりこまれなかった雑劇作品をも思い起こし、この一回半と同時に起きた出來事と理解することができるところである。梁山泊に豪傑が集結し安定している時期に、好漢が一人二人と山を降り、ひと騒動ののち山へ戻っていく構成であるから、そこに描かれる事件はこの時期に起きたとしか考えられない。構成の都合上直接雑劇作品をとりこむのは一回半にとどまるけれども、讀者はその何倍ものサイドストーリーを想起できる仕掛けになっているのである。水滸傳は決して宋江集團を語る唯一かつ完結した物語という位置づけではなく、完成後なお、とりこまれなかった他の物語と交流し得る、開かれた作品であつたのではないか。雑劇を知る讀者にとつても、雑劇そのままのエピソードが何回分もあるより、民間由來の、野暮で素朴な物語が多く盛りこまれているほうが新鮮味があつただろう。

これに關して興味深いのは、『三國志演義』においては「『江湖』の人々や庶民の代表選手であつた張飛の役割」



が大幅に減らされていることである<sup>五十一</sup>。張飛と李逵は同類型の人物と考えられている。同様に民間の傳承に高級化の手を加えた結果、同類型の人物の活躍が、かたや大量に挿入され、かたや大幅に削られているのである。想像をたくましくするならば、これは表裏一體の現象なのかもしれない。張飛は自稱漢の正統たる劉備直屬の臣ゆえあまり荒唐無稽なことをされてはこまるため、演義で大幅に出番を削られた。しかし張飛のキャラクターそのものは知識人にも受け入れられていた。雜劇で李逵、焦贊など張飛と同様の性格、言動を見せる人物が活躍していることもその傍證となろう。三國の世界の制約で活躍できなくなった張飛を、そうした制約の少ない水滸の世界で大いに暴れさせて

五十一 小松謙「『四大奇書』の研究」第二部『三國志演義』第二章

「三國志物語の變容」、八十八頁

<sup>補注三</sup> 本稿全體に關わることであるが、特に本章で多用している「知識人」ないし「高級知識人」という語について、口頭試問の際にその定義のあいまいさへのご指摘と、それに附随する助言を頂戴した。まず、「知識人」とは身分なのか、あるいは素養なのかという點が問題である。筆者は漠然と科擧官僚になるために國家が求める知識を有している（またはその準備をしている）人々、ないしその知識をもって地位を確立している人々、傳統的教養を修め、その後繼者を自任する

やろうというのが李逵臺頭の原因のひとつだったのでないか。編纂者も讀者もそうはつきりと考えていたのではないだろうが、張飛のようなキャラクターを見たい、出したという傾向があり、演義で張飛が活躍できなくなったことでその要求が水滸に向いたという言い方はできるだろう。しばしば併稱される三國と水滸は、結果的に相互に不足している部分を補完し合う關係にあるものとして讀まれていたのかもしれない。

人々という程度に考えていた。これについてはより明確な定義を用意するか、用語を變更するか検討が必要となる。また、「高級」と非「高級」の違いはなにかという點についても明快な定義を與えていなかった。また、本章ではもっぱら知識人が從來注目していなかった（注目しないふりをしていた）文藝を堂々ととりあげはじめた點を強調しているが、明代には從來「知識人」ではなかった人々が教養を備え、發言力を増したり社會的地位を高めたりするようになったという現象にもより目を向けなければならなかった。そうした人々が自分たちの価値觀を攜えて「知識人」となったために文藝の面でも變化が生じた面への言及が不足していた。

## 第五章 宋江と李逵を軸とした作品編成

### 第三十八回から第百回まで

#### 一・中核人物の目安

最終編纂者は水滸傳の完成のためにさまざまな作業をおこなった。そのなかで、見た目にもわかりやすく、かつ大規模な改造のひとつが三十六人から百八人への擴張であった。晁蓋ら生辰綱強奪にはじまる初期メンバー、林冲のように自ら落草することを選択せざるを得なかった人物を除けば、梁山泊に上る面々のほとんどは先に梁山泊にのぼっていた、ないしは関わっていた人物と接觸することにより梁山泊入りする機会を得る。つまり、ごく單純に計算すれば、ネズミ講式に三十六人がそれぞれ二人づつ新メンバーを勧誘すれば百八人になる。しかし物語はかように機械的には作られない。登場する場面の多い人物のほうが新規に接觸する人物を多くしやすい。その典型例が宋江である。

『宣和遺事』、雜劇などからうかがい知れる明初期以前の傳承では宋江は捕縛されてからまもなく救い出されて梁山泊にのぼっているが、水滸傳ではそこで宋江自身が梁山泊入りを拒み、判決に従って江州へ護送されていく。その途上および配流先の江州で多くの豪傑と知り合い、酔った勢

いで作った反詩をきっかけとする大騒動ののち、それらの豪傑たちが大舉して梁山泊入りする。張横、張順、穆横、穆春、李俊、童威、童猛、薛永、戴宗、李逵、侯建、李立と、その數、十二人にも及ぶ。そしてそのうち六名（穆春、童威、童猛、薛永、侯建、李立）が「三十六贊」、『宣和遺事』には見えず、最終編纂段階ではじめて加わったと思しき人物である。こうして『宣和遺事』と異なり、宋江は梁山泊入り以前に危険な行動をとにした自らのグループをもつことになる。これを江州グループと稱することにする。第四十回「白龍廟小聚義」がいわば江州グループの結團式である。宋江は梁山泊集團の主となる人物であるから、三十六人を百八人に増やすという構成上の要請に應じて行動するのはもつともなことである。また、首領から直々に誘われた人物が多ければのちの集團の結束力の説明ともなりやすい。さりとて宋江に百七人ひとりひとりに聲をかけさせるわけにもいかぬ。では、最終編纂者はこの重要な役割をほかに誰に任せたのか。これまでに見てきたとおり、李逵はこの點で水滸傳の編纂に貢献している。誘い入れた人數が多いということはすなわちその人物自身の登場場面も増えるということであるから、誘い入れた人數の多寡はある程度最終編纂者にとっての重要度を反映してい

ると言えるだろう。

## 二・仲間の誘い方

表3は、梁山泊の百八人が誰の仲立ちで梁山泊入りするに至ったのかをまとめたものである。その人物の梁山泊入りに複数の人物が関わっている場合は、戦って捕らえた、だましておびきよせた、交渉して説得したなど、もつとも直接的に影響をおよぼした人物の名を記した。たとえばAという豪傑を仲間に引き入れよとBが命令し、Cが説得するもうまくいかず、結局Dが力づくで捕らえて歸り、最後に宋江が接見して仲間入りを承諾させたという場合は、DがAを梁山泊入りさせたとみなす。そうしなければ「宋江の義氣を感じて承諾した」というフレーズが見られる人物は、宋江がその引き込み工作に参加していなくともすべて宋江が梁山泊入りさせたことになりかねないからである。なお、影響力がほぼおなじ人物が二名いる場合には兩名を併記した。「自」は、誰かの仲立ちで梁山泊入りしたのではなく、みずから梁山泊に落草しようと決意した人物、「某某グループ」とあるのは、集團で梁山泊入りしていることを示す。

表に明らかなように、グループで梁山泊入りしたものが

少なくない。紙幅が限られているなかで百八人を集めるには何人かがまとめて梁山泊入りするほうが効率がよいし、その分ひとつの事件を長く描けるからであろう。グループ単位で合流させるという手法は『宣和遺事』と共通する。なかでも二龍山グループは、魯智深ら六名の二龍山グループ、李忠・周通の桃花山グループ、孔明・孔亮の白虎山グループがまず合流し、そのうえで梁山泊本體に加わるという入れ子型方式をとっている。個人で梁山泊入りしている人物、特に水滸傳以外の資料に名が見えない人物に目を向けると、李逵が勧誘している人物が七人ある。これは個人別の勧誘人数では宋江に次いで二位である。

李逵が最初に新成員を連れ歸ったのは第四十二回で、地煞星第五十七位の笑面虎朱富、同六十一位の青眼虎李雲の二名である。兩名とも水滸傳以外にその名は見えない。

つづいて第五十二回の朱全である。これは呉用、柴進、李逵の共同作戦である。この事件の後、李逵は梁山泊にもどらず柴進のやしきに逗留する。

柴進は、高唐州に住む叔父・柴皇城が危篤であるとの知らせをうけ、高唐州へ向かう。李逵も強引に隨行する。

表 3				
	托塔天王	晁蓋	自	晁蓋グループ
1	呼保義	宋江	晁蓋	
2	玉麒麟	盧俊義	宋江	
3	智多星	吳用	自	晁蓋グループ
4	入雲龍	公孫勝	自	晁蓋グループ
5	大刀	關勝	宋江	
6	豹子頭	林冲	柴進	
7	霹靂火	秦明	花榮	
8	雙鞭	呼延灼	宋江	
9	小李廣	花榮	宋江	
10	小旋風	柴進	李逵	
11	撲天雕	李應	揚雄、石秀	
12	美髯公	朱仝	吳用、李逵	
13	花和尚	魯智深	自	二龍山グループ
14	行者	武松	自	二龍山グループ
15	雙鎗將	董平	宋江	
16	沒羽箭	張清	宋江	
17	青面獸	楊志	自	二龍山グループ
18	金鎗手	徐寧	湯隆	
19	急先鋒	索超	宋江	
20	神行太保	戴宗	宋江	江州グループ
21	赤髮鬼	劉唐	自	晁蓋グループ
22	黑旋風	李逵	宋江	江州グループ
23	九紋龍	史進	魯智深	少華山グループ
24	沒遮欄	穆弘	宋江	江州グループ
25	插翅虎	雷横	自	
26	混江龍	李俊	宋江	江州グループ
27	立地太歳	阮小二	自	晁蓋グループ
28	船火兒	張横	宋江	江州グループ
29	短命三郎	阮小五	自	晁蓋グループ
30	浪裡白跳	張順	宋江	江州グループ
31	活閻羅	阮小七	自	晁蓋グループ
32	病關索	楊雄	自	楊雄グループ
33	拼命三郎	石秀	自	楊雄グループ
34	兩頭蛇	解珍	自	顧大嫂グループ
35	雙尾蝎	解寶	自	顧大嫂グループ

36	浪子	燕青	自	盧俊義部下
1	神機軍師	朱武	魯智深	少華山グループ
2	鎮三山	黃信	秦明	秦明部下
3	病尉遲	孫立	自	顧大嫂グループ
4	醜郡馬	宣贊	秦明、扈三娘	關勝部下
5	井木犴	郝思文	秦明、扈三娘	關勝部下
6	百勝將	韓滔	彭玘	呼延灼部下
7	天目將	彭玘	扈三娘	呼延灼部下
8	聖水將	單廷珪	關勝	
9	神火將	魏定國	關勝	
10	聖手書生	蕭讓	戴宗	
11	鐵面孔目	裴宣	戴宗、楊林	飲馬川グループ
12	摩雲金翅	歐鵬	自	黃門山グループ
13	火眼狻猊	鄧飛	戴宗、楊林	飲馬川グループ
14	錦毛虎	燕順	宋江	清風山グループ
15	錦豹子	楊林	戴宗	
16	轟天雷	凌振	宋江	
17	神算子	蔣敬	自	黃門山グループ
18	小溫侯	呂方	花榮	
19	賽仁貴	郭盛	花榮	
20	神醫	安道全	張順	
21	紫髯伯	皇甫端	張清	
22	矮腳虎	王英	宋江	清風山グループ
23	一丈青	扈三娘	林冲	
24	喪門神	鮑旭	李逵	
25	混世魔王	樊瑞	項充、李袞	芒錫山グループ
26	毛頭星	孔明	自	白虎山グループ
27	獨火星	孔亮	自	白虎山グループ
28	八臂那吒	項充	公孫勝	芒錫山グループ
29	飛天大聖	李袞	公孫勝	芒錫山グループ
30	玉臂匠	金大堅	戴宗	
31	鐵笛仙	馬麟	自	黃門山グループ
32	出洞蛟	童威	宋江	江州グループ
33	翻江	童猛	宋江	江州グループ
34	玉幡竿	孟康	戴宗、楊林	飲馬川グループ
35	通臂猿	侯健	薛永	江州グループ
36	跳澗虎	陳達	魯智深	少華山グループ

37	白花蛇	楊春	魯智深	少華山グループ
38	白面郎君	鄭天壽	宋江	清風山グループ
39	九尾龜	陶宗旺	自	黃門山グループ
40	鐵扇子	宋清	宋江	
41	鐵叫子	樂和	自	顧大嫂グループ
42	花項虎	龔旺	林冲、花榮	張清部下
43	中箭虎	丁得孫	呂方、郭盛	張清部下
44	小遮攔	穆春	宋江	江州グループ
45	操刀鬼	曹正	自	二龍山グループ
46	雲裡金剛	宋萬	(創設メンバー)	
47	摸着天	杜遷	(創設メンバー)	
48	病大蟲	薛永	宋江	江州グループ
49	金眼彪	施恩	自	二龍山グループ
50	打虎將	李忠	自	二龍山グループ
51	小霸王	周通	自	二龍山グループ
52	金錢豹子	湯隆	李逵	
53	鬼臉兒	杜興	楊雄	李應部下
54	出林龍	鄒淵	自	顧大嫂グループ
55	獨角龍	鄒潤	自	顧大嫂グループ
56	旱地忽律	朱貴	(創設メンバー)	
57	笑面虎	朱富	李逵	
58	鐵臂	蔡福	柴進	
59	一枝花	蔡慶	柴進	
60	催命判官	李立	宋江	江州グループ
61	青眼虎	李雲	李逵	
62	沒面目	焦挺	李逵	
63	石將軍	石勇	宋江	
64	小尉遲	孫新	自	顧大嫂グループ
65	母大蟲	顧大嫂	自	顧大嫂グループ
66	菜园子	張青	自	二龍山グループ
67	母夜叉	孫二娘	自	二龍山グループ
68	霍閃婆	王定六	張順	
69	險道神	郁保四	宋江	
70	白日鼠	白勝	自	晁蓋グループ
71	鼓上	時遷	楊雄	
72	錦毛犬	段景住	自	

柴皇城の病は、高唐州知府高廉の妻の弟・殷天錫が、その權勢をかさに柴皇城をやしきから追い出してその庭園を乗つとろうとしたことに對する怒りと心勞によるものだつた。柴皇城は柴進に後を託して他界する。その喪も明けぬうちに殷天錫がやつてきてやしきを明け渡せと迫る。そこに飛び出した李逵が殷天錫を撲殺してしまう。柴進はまず李逵を逃亡させ、柴氏は後周皇族の末裔で、そのやしきは宋朝皇室から丹書鐵券を賜っている治外法權の地であると主張して切り抜けようとするが、引きずり出されて投獄され、拷問をうける羽目になる。李逵は梁山泊へ柴進の窮地を知らせに駆け戻った。宋江は、自身を含む多數の梁山泊の成員がかつて世話になった柴進を助け出さねばならぬと軍を起こすが、高廉の妖術に苦しめられ、城市を攻め落とすことができない。ここから、公孫勝を呼び戻すための戴宗の旅が始まる。李逵は、「我打死了殷天錫却教柴大官人吃官司。我如何不要救他。今番並不敢惹事了（俺が殷天錫を殴り殺したばかりに柴のどんなは投獄されたんだ。俺が助けないわけにはいかない。こんどはなにも厄介は起こさないから）」と訴え、戴宗に同行する。李逵の短氣でけんかつぱやい性格が引き起こした事件ではあるが、このセリフに見える李逵の人物は義理堅い好漢である。

公孫勝つれもどしの歸途（戴宗は報告のため一足先に歸っている）、李逵はさらにもう一人新たな人物を連れ歸っている。前後のエピソードとはまったく關係がなく、新しい人物を登場させるために挿入した場面であること明らかである。

只聽得路傍側首有人喝采道「好氣力」。李逵看時、一夥人圍定一個大漢把鉄爪鎚在那里使。衆人看了喝采他。李逵看那大漢時、七尺以上身材、面皮有麻、鼻子上一條大路。李逵看那鉄鎚時、約有三十來斤。那漢使的發了一爪鎚正打在壓街石上、把那石頭打做粉碎、衆人喝采。李逵忍不住便把棗糕揣在懷中便來拿那鉄鎚、那漢喝道「你是甚麼鳥人。敢來拿我的鎚」。李逵道「你使的甚麼鳥、好教衆人喝采、看了倒污眼。你看老爺使一回教衆人看」。那漢道「我借與你。你若使不動時、且吃我一頓脖子拳了去」。李逵接過爪鎚、如弄彈丸一般使了一回、輕輕放下、面又不紅、心頭不跳、口內不喘。那漢看了倒身便拜說道「願求哥哥大名」。李逵道「你在那里住」。那漢道「只在前面便是」。引了李逵到一個所在、見一把鎖鎖着門。那漢把鑰匙開了門請李逵到裏面坐地。李逵看他屋裏都是鉄鉗鉄鎚火爐鉗鑿家火、尋思道「這人必是個打鉄匠

人、山寨裡正用得着。何不叫他也去入夥」。李逵又道

「漢子、你通個姓名教我知道」。那漢道「小人姓湯名

隆、父親原是延安府知寨官來因爲打鉄上遭際老經略相公帳前敘用、近年父親在任亡故、小人貪賭流落在江湖上。

因此權在此間打鉄度日、入骨好使鎗棒。爲是自家渾身有麻點、人都叫小人做金錢豹子。敢問哥哥高姓大名」。李

逵道「我便是梁山泊好漢黑旋風李逵」。湯隆聽了再拜道

「多聞哥哥威名。誰想今日偶然得遇」。李逵道「你在這

里幾時得發跡、不如跟我上梁山泊入夥、教你也做個頭

領」。湯隆道「若得哥哥不棄肯帶携兄弟時、願隨鞭鐙」、

就拜李逵爲兄。

ふと道端で人々が「すばらしい力だ」と喝采するのが聞こえた。李逵が見ると、一群の人々が、鐵鎚をふり

まわしている大男をとりかこんでいる。人々はその男を見て喝采している。李逵がその男を見ると、七尺以

上はある体、顔にはあばた、鼻筋はまっすぐ通っている。李逵がかの鐵鎚をみると、三十斤ほどはありそう

だった。男が鐵鎚で街路の石を一打ちするや、石は粉々に碎け、人々は喝采した。李逵はこらえきれず棗

の蒸し餅を懷にねじこんでから近づいてその鐵鎚を奪おうとした。男は「なにやつ。俺の鎚をとろうとはい

い度胸だ」。李逵は言った。「そんなへなちよこ技で喝

采をとろうなんて目が腐る。おれさまが使ってみせるから見ておけ」。男は言った。「貸してやろう。使いこ

なせなかったらときには頭突きを一發お見舞いしてやる」。李逵は鎚をうけとるとボール遊びのように輕々

と使ってみせた。顔も赤くならなければ心臓も暴れず、息も切れない。男は見るや拝禮して言った。「お

なまえをお聞かせください」。李逵は言った。「おまえの家はどこだ」。男は言った。「すぐ目の前です」。李

逵をつれて行くと、門に錠がかけてある。男は鍵で門を開け、李逵を中へ招じ入れて坐らせた。李逵は部屋

のなかに鐵鉋、鐵鎚、火爐、鑿などの道具があるのを見て思うよう、「この男は鐵匠だろう。山寨でちよう

ど必要としているところだ。仲間入りさせない手はない」。李逵は「姓名を教えてくれ」と言った。男の言

うよう。「わたくし姓は湯、名は隆、父はもと延安府知寨の部下で、鐵匠の腕で老經略相公の御前に仕えて

おりました。近ごろ父が在任のままなくなりました、わたくしも博打がすぎて江湖に身を落しました。しば

らくここで鐵を打って暮らしておりますが、鎗棒が好きで、體中にあばたがあることから、金錢豹子と呼ば



れています。失禮ですがおなまえは」。李逵は言った。「おれは梁山泊の好漢、黒旋風李逵だ」。湯隆は聞くや改めて拝して言った。「兄貴の威名はうかがっております。まさか今日お目にかかれるとは」。李逵は言った。「ここで目の目を見るのを待つよりおれについて梁山泊に仲間入りして頭領になったほうがよからう」。湯隆は「お連れくださるのであればお供いたしとうございます」と、李逵を拝して兄とした。

家のようなすを見て鍛冶師だと悟り、梁山泊には鍛冶師が必要だと考え、相手の身の上を聞き、梁山泊へ行って頭領になることが益であることをすすめる。「若是上風放火、下風殺人。打家劫舍、衝州撞府、合用着你。這是做細的勾當、你性子又不好去（風上にあれば放火、風下にあれば人殺し。押し込み強盗に城攻めならばふさわしからうが、これは忍びの仕事、おまえの性格では無理だ）」などと、直情的で冷静な判断、行動ができないと叱られる李逵イメージとはかなりのへだたりがある。

李逵が公孫勝を連れ歸り、梁山泊軍の高唐州攻めが再開される。ようやく城市を攻め落とすと、宋江らは敵方に捕らえられていた柴進の搜索にとりかかる。そして柴進が始

末されることを心配した獄卒が枯れ井戸のなかに隠したことを知る。ここでも李逵が枯れ井戸に入って柴進を探したいと名乗り出る。

第五十二回の小衙内殺害事件から第五十四回の柴進救出まではまったく李逵を中心に物語が展開される。李逵が何かしでかすことで新たな事件が起き、梁山泊の面々が驅り出されるといふ展開が繰り返されている。

李逵が柴進を救い出すのは、そもそも柴進が枯れ井戸に押し込められる羽目になった原因が李逵であるからなのだが、それだけではなく、水滸傳の材料にも理由があると思われる。

柴進は「小旋風」とあだ名される。高島俊男は、皇族の末裔であり、「李逵とまったく似たところのない、しごく温厚な」柴進がなぜ李逵とおなじ「旋風」と稱されるのかと疑い、「治外法権的な屋敷うちに、常に四五十人のお尋ね者がとぐろを巻いて、滄州郊外のおだやかな村に不穩の気配をかもしていることを言ったのであろう」と推測して

いる。

しかし水滸傳以前の材料を見ると、柴進と李逵とがかけはなれた人物像を有していたと思わせるものはまったくない。「宋江三十六贊」では第二十位に黒旋風李逵、第二十位に小旋風柴進が並んでいる。『宣和遺事』では十四位黒旋風李逵、十五位小旋風柴進、『菽園雜記』では十六番目に黒旋風李逵、十七番目に小旋風柴進がいる。「宋江三十六贊」では二人ともに贊の第一句に「風有大小」とある。これらの記載から、かつての宋江集團物語では李逵と柴進は二人一組で、「小」旋風のほうが弟分であったのだろうと考えられる。『豹子和尚自還俗』では六位に黒旋風李逵、小旋風柴進はすこしはなれて十六位であるから、両者がコンビととらえられていなかった可能性はあるが、柴進が下位にあるのは同じである。両者の順位が逆轉しているのは水滸傳以外では『七修類稿』で七番目に柴進、二十一番に李逵が記されているのみである。水滸傳で「沒遮欄」穆弘と「小遮欄」穆春の「遮欄」コンビが同時に仲間入りするように、かつて李逵と柴進の「旋風」コンビがうちそろって宋江の手下に加わるという物語があったのでは

ないか。最終編纂段階で李逵は宋江直屬の重要人物となり、柴進はその姓から連想されて後周皇帝の末裔ということにされ、コンビは解消された。しかし、李逵が柴進を梁山泊に連れてくるという設定だけは水滸傳にも引き継がれたであろう。

しばらく間が空き、第六十七回、攻め寄せてくる單廷珪、魏定國の官軍二將を打ち破るべく、宋江は關勝を主將とする軍勢を派遣する。李逵は遠征軍に加えてくれと訴えるが認められず、夜中にこっそり山を下りる。

行不得一日、正走之間、官道旁邊只見走過一條大漢直上直下相李逵。李逵見那人看他便道「你那厮看老爺怎地」。那漢便答道「你是誰的老爺」。李逵便搶將入來、那漢子手起一拳打箇搭擲。李逵尋思「這漢子到使得好拳」。坐在地下仰着臉問道「你這漢子姓甚名誰」。那漢道「老爺沒姓。要厮打便和你厮打、你敢起來」。李逵大怒、正待跳將起來、被那漢子肋羅裡又只一脚踢了一交。李逵叫道「贏他不得、扒將起來便走。那漢叫住問道「這黑漢子、你姓甚名誰、那里人氏」。李逵道「我說與你、休

要吃驚。我是梁山泊黑旋風李逵的便是」。那漢道「你端的是不是、不要說謊」。李逵道「你不信只看我這兩把板斧」。那漢道「你既是梁山泊好漢、獨自一個投那里去」。李逵道「我和哥哥驚只氣、要投凌州去殺那姓單姓魏的兩個」。那漢道「我聽得你梁山泊已有軍馬去了、你且說是誰」。李逵道「先是大刀關勝領兵、隨後便是豹子頭林冲、青面獸楊志領軍策應」。那漢廳了納頭便拜。李逵道「你端的姓甚名誰」。那漢道「小人原是中山府人氏、祖傳三代相撲爲生、却纔手脚父子相傳不教徒弟、平生最無面目到處投人不着、山東河北都叫我做沒面目焦挺。近日打聽的寇州地面有座山名爲枯樹山、山上有個強人平生只好殺人、世人把他比做喪門神、姓鮑名旭、他在那山裡打家劫舍。我如今待要去那里入夥」。李逵道「你有這等本事如何不來投逵俺哥哥宋公明」。焦挺道「我多時要投逵大寨入夥、却没條門路。今日得遇兄長、願隨哥哥」。李逵道「我却要和宋公明哥哥爭口氣了下山來、不殺得一個人空着雙手怎地回去。你和我去枯樹山說了鮑旭、同去凌州殺得單魏二將便好回山」。

一日も行かぬうち、歩いていけると國道のわきに大男が一人いて、李逵を頭から爪先まで眺めている。李逵は男が見ているのに気づき、「おのれ、なぜおれさまを

見ている」と言った。その男は「おまえがどこのお偉いさんだというのだ」と言った。李逵がすぐさま飛び込むと、男は手をふりあげひと拳で防いだ。李逵は「この男、拳法ができる」と思い、地べたにすわり、見上げて言った。「おまえの姓名は」。その男は「名などない。戦いたければ戦ってやる。起き上がれるものなら起き上がってみろ」と言った。李逵が怒って飛び上がらんとするや、あばらにひと蹴りを喰らった。李逵はとてもかなわないと思い、這い上がって逃げ出そうとした。男は李逵を呼び止め、「黒いやつ、姓名はなんだ、どこのものだ」と問うた。李逵は言った。「聞いて驚くな、おれが梁山泊の黒旋風李逵だ。」男は「ほんとうか、ウソをつくなよ」と言った。李逵は「信じぬというならこの二丁の板斧を見ろ」と言った。男は「梁山泊の好漢だというならただ一人でどこへ行こうというのだ」と言った。李逵は言った。「兄貴とちよつといざこざがあつてな、凌州へあの單やら魏やら言う二人を殺しに行くんだ。」男は言った。「梁山泊はすでに軍勢を送ったと聞いている。誰だか言ってみろ。」李逵は「まず大刀關勝が率い、あとから豹子頭林冲、青面獸楊志が軍を引き連れ、これに應じ

る」と言った。男はそれを聞くや額づいて拝禮した。李逵は「おまえはほんとうに何者なんだ」と言った。男は言った。「わたくしもとは中山府のもの。三代つづく相撲を生業としておりますが、父から子へ受け継ぐのみで弟子はとりません。平生人づきあいがなく、どこにも身を寄せられないので、山東河北ではみなわたしを没面目焦挺と呼んでいます。近頃、寇州に枯樹山という山があつて、そこで賊が人殺しばかりしているというので、人々は彼を喪門神になぞらえています。その姓名は鮑旭、山地で押し込み掠奪をはたらいていると聞きました。そこへ行って仲間入りするつもりです。」李逵は言った。「こんな實力があるのになぜわが兄貴宋公明に身を寄せようとしなかったんだ。」焦挺が言うよう。「わたしも長らく山寨へ入りたいと思っていたのですが、つてがなかったのです。今日お

二 佐竹靖彦は、李逵、鮑旭に加え、項充、李袞の四名が一組となつて戦闘を行う場面が多いことからこの四名を「李逵アクション・チーム」と名づけ、方臘討伐部分においてまず完成し、その後、それ以前の部分にも押し及ぼされたと考え、このチームの成立を現行本成立に近い萬曆年間と推測している。佐竹靖彦『梁山泊―水滸伝・108人の豪傑たち』（中公新書、一九九二年）第六章「魯智深と李逵」「李逵アクショ

會いできましたので、これからは兄貴にしたがいま

す。」李逵は言った。「おれは宋公明兄貴とけんかして山を下りてきた。一人も殺さず手ぶらでかえるわけにはいかない。枯樹山へ行き鮑旭と語らい、ともに凌州へ行って單と魏の二將軍を殺してから歸ろう。」

梁山泊本體と別行動をとつた李逵が新たな仲間を誘い入れるのは第四十三回、第五十三回におなじである。鮑旭はこれ以降、戦闘の際李逵とともに動くようになる。李逵はいわば自前の部下をもつことになったのである<sup>三</sup>。魯智深、史進などのように、もともと有していた仲間や部下をひきつれて梁山泊入りする頭領は少なくないが、このように梁山泊入り以降の行動のなかで部下を獲得する例はほとんどない<sup>三</sup>。最終編纂者に李逵が重視されていたことのひとつの現れと言えよう。この後李逵、焦挺、鮑旭は敗れて

ン・チーム」、百十七〜百二十五頁参照。本稿は現行本成立を萬曆年間とする説はとらないが、李逵の手下が最終編纂段階であたえられたという点には賛同する。

三 第一百回に、朱武と樊瑞が道士となり公孫勝のもとに身を寄せたところがあるが、これは後日談にすぎず、實際に二人が公孫勝の弟子として活躍する場面があるわけではない。

官軍につかまっていた宣賛、赫思文を救出し、關勝らの梁山泊軍本體が凌州から打って出た官軍と交戦している間に凌州城に攻め入り陥落させるなどの手柄をたてる。

### 三・物語展開を變える男

李逵は新成員の獲得とエピソードの増加のために重用されているのみならず、ストーリーの轉換點においてもたびたび重要な役割をはたす。

第七十二回、宋江らは東京へ元宵節の燈籠見物におもむいた。宋江の反對を押し切り李逵も同行した。東京で宋江は偶然李師師のいる妓樓を見つける。李師師にとりなしてもらって皇帝の赦免を得られないものかと考えた宋江は、燕青の機智により柴進、燕青とともに李師師に會うことに成功した。しかし、戴宗とともに門外で待たされていた李逵が、妓樓で楽しい宋江の様子をうかがっているうちにしびれをきらし、ちようどそこにやってきた楊大尉になぐりかかったことで騒動となる。一同は赦免のことを頼めぬまま逃げ出さざるを得なくなった。この後、雜劇に取材し

た安定型エピソード、話本に取材したと思われる燕青の泰山奉納相撲<sup>四</sup>という、李逵と燕青のコンビの活躍が展開される。

第七十四回末、朝廷で宋江らを招安することが決まり、使者が遣わされる。招安に反對する面々は内心おもしろくなく、さまざまに妨害工作をする。ようやく招安の儀式がはじまると、詔勅を讀み上げている最中に李逵が飛び出し、詔勅を奪って破き、使者に殴りかかる。宋江は平謝りにあやまったが、招安は破談となった。報告を受けた朝廷は梁山泊討伐に方針を轉換し、童貫が二度、高俅が三度、軍勢を率いて梁山泊に攻め寄せることになる。

梁山泊と官軍との戦闘が繰り廣げられたあとの第八十一回、燕青が單獨でふたたび李師師のもとを訪れ、皇帝への直訴に成功、第八十二回の招安につながる。第七十二回と第八十一回の二度の李師師訪問は、宮崎市定の指摘するごとく本来一度であったものを二度に分けて間にエピソード

<sup>四</sup> 大塚秀高『漢文古典Ⅱ（放送大学教材）』（放送大学教育振興会、一九八七年）7「短篇小説だった水滸伝―長篇小説の

育たぬわけ―」が、『清平山堂話本』『楊温欄路虎傳』と燕青の泰山でのエピソードの類似を論じている。

を挿入したものに相違ない<sup>五</sup>。李逵はエピソード挿入の空間を作り出すのに利用されているのである。その空間には二度の招安失敗が書き込まれ、二度目の招安失敗が梁山泊と官軍との戦争を引き起こしている。二度目の失敗の場面で招安に反発しているのは李逵一人ではないが、招安をだいなしにする決定的な役割を李逵が果たしていることは間違いない。

招安失敗ののち朝廷から送りこまれた討伐軍を梁山泊軍はことごとく破る。特に五回目の戦役では總大將の高俅を生け捕りにするほどの大勝利を収め、前回より好条件での招安を引き出すことに成功する。

招安を受けた梁山泊軍はまず北方の遼との戦いに送りこまれる。ところが、凱旋した梁山泊軍にはさしたる恩賞も與えられなかった。これにはつねに忠義を口にする宋江も不満を漏らす。

宋江嘆口氣道「想我生來八字淺薄、年命蹇滯。破遼受了許多勞苦、今日連累衆弟兄無功、我自職小官微、因此愁悶」。吳用答道「兄長、既知造化未通、何故不樂萬事分

定、不必多憂」。黑旋風李逵道「哥哥好沒尋思。當初在梁山泊裡不受一箇的氣、却今日也要招安、明日也要招安。討得招安了却惹煩惱。放着兄弟們都在這裡、再上梁山泊去却不快活」。宋江大喝道「這黑禽獸又來無禮。如今做了國家臣子、都是朝廷良臣。你這廝不省得道理、反心尚兀自未除」。李逵又應道「哥哥不聽我說、明朝有的氣受里」。衆人都笑、且捧酒與宋江添壽。

宋江はため息をついて言った。「私は生來八字もはかばかしくなく、運勢もよくない。遼を破るのにさんざん苦勞したというのに兄弟たちにはなんの功績も認められないし、私もつまらぬ官職をもらっただけ、それで氣が晴れないのだ」。吳用が答えた。「兄者、運氣が開けぬと言われますが、すべてのことは運命です。すでに定められたことを樂しめばよいのです。お考えすぎになりませぬよう」。黑旋風李逵が言った。「兄貴はほんとに考えなしだね。梁山泊にいたときにはなんの惱みもなかったくせに、今日も招安、明日も招安。いざ招安されてみたら惱むことばかり。兄弟を連れてもういっぺん梁山泊に行ったほうが愉快じゃないか。」

宋江は一喝した。「この黒けだものめ、また無禮なことを。國家の臣になった以上はみな朝廷の赤子なんだ。おまえはそんな道理もわからずいまだに叛心を抱いているのか。」李逵はさらに口答えする。「俺の言うことを聞かなきゃまたバカにされるぜ。」みなは笑って宋江に酒をすすめ、長壽を願った。

李逵が朝廷への忠心に反發し宋江が一喝するところまではいつも通りである。しかし普段それで引き下がる李逵がここではもう一言附け加える。そして事態はその李逵のことば通りに展開していくのである。不平不満を抱くものが多いことを知った宋江は、ちょうど朝廷が江南の方臘征伐を計畫していることを知り、この戦役に派遣してもらうことでガス抜きをはかる。朝廷が遠征を準備しているという情報をもたらしたのは、これまた李逵と燕青であった（第十八回）。方臘征伐戦はそれまでの戦いとは比べものにならないほどで、梁山泊軍も多くの戦病死者、離脱者を出し、都に凱旋した頭領わずか二十七というありさまであった。残った者には官職が與えられたものの任地はバラバラで、梁山泊軍は完全に潰散するに至る。さらに宋江と盧俊義は、梁山泊集團再集結の核になることを恐れた高俅らの差

し金で毒殺される。まさに李逵の言うごとく「受氣」の憂き目に遭ったのである。

#### 四・第百回から見る水滸傳

本稿では水滸傳の最終編纂を「全百回、百八人の好漢、梁山泊集團の誕生、發展、完成から崩壊までを一貫したストーリー」としてまとめる作業」と定義した。そう考えた場合、第百回は最終編纂者が創作した可能性がもっとも高い場面のひとつである。主人公が最後に非命の死をとげることは英雄物語によく見られるから、宋江の發跡、貴種流離の口頭傳承にすでに宋江が奸臣によって暗殺されるというラストシーンは存在したかもしれない。しかし、最終編纂者が準主役に拔擢した李逵とともに死ぬという場面は最終編纂時期に完成されたとしか考えられない。

主役たる宋江、準主役たる李逵が物語冒頭からしばらく登場しないのは奇妙に思えるかもしれない。聶紺弩は、第十六回、楊志が梁山泊を離れてから鄆城縣の新任知事文彬が登場する間にはまったく何のつながりもなくあまりに唐突であるとして、そもそも水滸傳はこの場面にはじまっ

ていたのではないかと推測している<sup>六</sup>。たしかに水滸傳は通常、異なるエピソードの間にも共通の人物を登場させるなどしてなんらかのつながりを設けている。第十六回以前にならんでいるエピソードを見ると、洪大尉が龍虎山で妖魔を放つ、高俅ににらまれた王進の逃亡と史進との邂逅、史進と少華山の盗賊たち、史進の逃亡と魯智深との出会い、魯智深の鎮關西殺し、五臺山での大暴れ、李忠や史進との再會を経て東京へ出て林冲との出会い、林冲が罪に陥れられ流罪となり梁山泊へのぼる、と人物が数珠つなぎに登場する形式で物語が連續している。その流れを断ち切って第十六回の途中で唐突に晁蓋の生辰綱強奪の物語がはじまるのはたしかに奇妙である。第十六回以前の物語のうち、王進、林冲の物語は、「やむにやまれず落草した好漢たちと奸臣・佞臣との對立」という構圖を讀者に印象づけるために水滸傳編纂時に置かれたものであると考えられる

<sup>六</sup> 聂绀弩『《水滸》的思想性和艺术性是逐渐提高的』(『《水滸》四议』、七十七〜七十八頁。第十三回以前の物語はもとの水滸物語にはなかったもので、特に王進と林冲の物語はもともとまったく關係ないものであったのだが、これを冒頭に入れることで、好漢たちの敵對者が地方的な人物から朝

<sup>七</sup> 魯智深、史進は「三十六贊」、『宣和遺事』以來ずっと名簿に見える名であるが、『宣和遺事』にはその仲間入りの経緯が見えない。兩者とも、梁山泊の一員としての物語はなく、最終編纂時にこの部分に配置されたうえで、後で梁山泊入りするように設定されたのだろう。楊志の花石綱運搬失敗は『宣和遺事』に見えるものの、水滸傳では過去の出来事として話題にのぼるのみで、実際には描かれな

い。そもそも『宣和遺事』でも、楊志とともに花石綱を運搬した面々とともに太行山に落草し、あとから晁蓋グループと宋江グループとが合流してきたというだけで、梁山泊入り前には他グループとの接觸が一切ない獨立性の高い物語であつた。第十六回以前は、編纂者が材料とした宋江集團物語には含まれていなかった故事を、宋江の物語がはじまるまえに附加したのであろうと推測できる。小松謙もまた、第一回は水滸傳ができあがつた時に加わつたもの、史

廷に變わり、「反朝廷」というテーマが鮮明になったと説明している。

<sup>七</sup> 石昌渝「林冲与高俅——《水滸傳》成书研究」は、水滸傳における「官逼民反」は高俅と林冲の故事があつてはじめて成り立つものだと述べる。



進の物語も新しく作られたもの、魯智深の部分は獨立した物語をここに挿入したもの、林冲物語は戯曲を題材に新しく創作されたものと見ている。また、楊志の花石綱物語が採用されなかったのは太行山を物語に登場させないための處置であるという<sup>八</sup>。生辰綱強奪事件以前の部分は、のちの梁山泊に係りてくる人物たちの物語ではあるものの、獨立性が高く、武松の十回とともに最終編纂段階でようやく「宋江と梁山泊集團の物語」に加わったと考えてよい。

第十六回にはじまる生辰綱強奪物語の主役は晁蓋グループであるけれども、宋江が義侠心から晁蓋を助けたという重要な要素を含み、第一期梁山泊集團の成立と宋江の人物紹介とを兼ねた、宋江と梁山泊集團の物語の本格的なはじまりである。そして晁蓋らが梁山泊に落ちついた第十八回

<sup>八</sup> 小松謙『『水滸傳』成立考』内容面からのアプローチでは、林冲を主役とした戯曲『寶劍記』は水滸傳におくれて成立したと述べているが、のちに同『寶劍記』と『水滸傳』——林冲物語の成立について——（『京都府立大学学術報告 人文』第六十二号、二〇一〇年）では見方をあらため、『寶劍記』の前身作品が水滸傳最終編纂前にすでに完成していた可能性が高く、水滸傳の林冲はこの戯曲にもとづいて人物像が形成されたのではないかと分析している。水滸傳における

から本格的に主人公宋江の發跡故事が展開される（ただし間に武松の十回をはさむ）。その最終盤に李逵に出會い、發跡故事がほぼ完了し、梁山泊の頭領宋江としての物語に切り替わったところに李逵個人の故事が配置される。そして最終回、宋江と李逵の死をもって梁山泊集團も水滸傳も實質的な終わりを告げる。梁山泊集團の物語に組み込むことができず冒頭に附されることとなった史進、魯智深、林冲の列傳部分を別とすれば、梁山泊集團の物語は宋江に始まり、宋江出身傳が終わるところで李逵が現れ、宋江と李逵で終わっているのである。そして回数、人數をそろえる構成上の必要のためにエピソードや登場人物を増やさなければならぬところや、ストーリーの轉換點などの要素所に宋江と李逵が利用されている。そしてその要素に見える宋江と李逵は、しょっちゅう對立している。意見がまっ

「小張飛」と稱される林冲像と「小心な律義者」として描かれる知識人風の林冲像との矛盾とはかねてから指摘される問題であった（たとえば高島俊男『水滸傳の世界』五「人の殺しかたについて」）。『寶劍記』が、水滸傳成立以前にすでに知識人好みに改變された林冲像を有しており、これが水滸傳にとりこまれたために、民間傳承由來の張飛もどきのキャラクタ―としての林冲と同居することになったと考えれば確かにこの矛盾を合理的に説明することができる。

たく合わないのにも関わらず、互いの信頼関係は消えるところかむしろ深まる一方であり、李逵は死ぬ理由にはまったく納得ができないのに、宋江とともに死ぬのならばと受け入れる。この、まったく實益をともしない信頼関係、「義」が軸となって二人の物語は展開されているのである。

## 第六章 「義」から見た編纂方針

### 一・水滸傳のキーワード

最終編纂者は非武力式發跡英雄の宋江を主役とし、粗暴にして無知ながらまっすぐな氣質を持つ平話式英雄の李逵を準主役とし、この二人を軸に水滸傳を編みあげたことがわかってきた。この二人を結びつけるものは「義」、「孝」という価値観である。「孝」については先にすでに検討した。本章ではもうひとつの価値観「義」を最終編纂者がいかに利用しているかについて考えたい。この問題は、宋江と李逵とのあつかいとどまらず、水滸傳全體の構成にも關わるものだからである。

### 二・問題の所在　とらえどころのない「義」

水滸傳で「義」が重要な役割を演ずることばであることは衆目の一致するところである。「この語をはっきりさせなければこの小説を理解したとは言えない」ということばがこのことを端的に示している。「義」は容與堂本には

一 孫述宇「梁山泊英雄的義氣」(『明報月刊』第十三卷第十期、一九七八年十月)

筆者の數えたかぎり四百十二例現れる<sup>二</sup>。數が多いのみならず、様々な状況下で自在に用いられるため、この語の本質を把握することは容易ではなく、これまでもさまざまに解釋されてきた。

全百回の中に四百例以上という常用語であるから、文中では至極自然に、簡單につかわれている。

1 林冲大喜、就當結義、智深為兄。

林冲はおおいによるこび、すぐさま義をむすび、智深を兄とした(第七回)

2 一者是天罡之數、自然義氣相投。

ひとつには天罡星のひとつであつたことで、自然と義氣が投合した(第五十八回)

これらの「義」にはいったいどのような含意があるのか、「義」という語を使うことでなにか特別な意味が發生するのか。「義を結ぶ」と「兄弟になる」、「氣が合う」と「義氣が合う」との間にはどのようなちがひがあるのか。

二 人名、軍營の名稱、山寨の集會所の名稱、官職名などの固有名詞をのぞき、回目をふくむ。

水滸傳の文章はそのことを詳しく説明してはくれない。水滸傳においても宋代の制度など、明代の讀者にわかりにくいことには説明が書き加えられている。「義」にそれがなっているのは、編纂者は、「義」と書けば讀者はそれがどのような含意を有するのかすぐにわかると考えていたからであろう。當時の共通認識であつても現代のわれわれにはわかりにくくなつてしまつたものは多々あり、「義」もそのひとつなのである。抽象概念であることがこのわかりにくさに拍車をかけているようでもある。

これまでの研究は水滸傳の「義」をどのように解釋してきたのだろうか。

「忠は君に対する忠誠心、義は友に對する義侠心を意味する」<sup>三</sup>という説明がある。これにもとづき、朝廷とのタテの関係と義兄弟間のヨコの関係の雙方を追求する際に生じる矛盾が水滸傳の重要なテーマであると解釋されることも多い。たとえば第十八回、生辰綱強奪犯として逮捕されるはずの晁蓋に宋江がその情報を教え、先んじて逃げさせる

た事例は、宋江が義兄の晁蓋との「義」ヨコ」の関係と、朝廷への「忠」タテ」の関係とを天秤にかけて前者を選んだ代表例とされる。しかし次の例は「友に對する義侠心」と呼ぶには不向きであろう。

3 又得當案葉孔目仗義疎財、不肯陷害平人。

また文書係の葉孔目は義によつて財をうとんじる人で、罪のない人をおとしいれようとはしなかった。

(第三十一回)

第三十一回、武松は無實の罪で投獄される。葉孔目は武松がおとしいれられたと知り、なんとか罪を軽くしてやろうとした。これ以前にこの二人は一面識もない。葉孔目の武松への態度を「友に對する」ということはできない。「タテヨコ」説は李卓吾「忠義水滸傳序」に「君に忠たり、友に義たり」<sup>四</sup>とあることがひとつのよりどころになつてゐるのだが、これは「君との関係が忠、友との関係が義」と

三 中鉢雅量『中国小説史研究——水滸傳を中心として——』第四章「水滸傳の後半部について——その歴史性と文学性——」、百七十六頁

四 最後南征方臘、一百單八人者陣亡已過半矣。又智深坐化于六和、燕青涕泣而辭主、二童就計于「混江」。宋公明非不知也、以為明幾明哲、不過小丈夫自完之計、決非忠于君義于友者所忍屑矣。(最後は南に方臘征伐に行き、百八人は戰陣で

言っているのではなく、「君に對して忠の心を持ち、友に對して義の心をもつ」と言っている（友以外に「義」の心をもつこともできると讀める）のであり、依然「義」の根本的な意味はどういうことかという疑問は残る。

「義はヨコの關係」という解釋に近いものにまた、「義は兄弟・仲間間の相互扶助、助け合いの心である」という説明もある<sup>五</sup>。しかし次のような例は「助け合い」と言えるだろうか。

4 小乙本待去辭宋先鋒、他是箇義重的人、必不肯放。只此辭別主公。

わたくし（燕青）はもともと宋先鋒（宋江）にもごあいさつに參るつもりでしたが、あの人は義が重い人、きつと行かせてはくれないでしょう。ここでご主人にだけお別れを申しあげます。（第九十九回）

死んだ者は半數を超えた。魯智深は六和で坐して死に、燕青は泣いて主を離れ、二童（童威・童猛）は「混江」（混江龍李俊）の計畫にしたがった。宋江は知らなかったのではないが、預兆を察知するのは小人が自分の身をまっとうしようとする計略にすぎず、決して君に忠であり、友に義であるものができることではないと考えたのだ。）

方臘征伐戰で勝利を収めたものの仲間の三分の二を失った梁山泊軍が京師への歸途につく。その途上燕青は、都に戻ったところで不幸な運命が待っているだけと悟り、梁山泊参加以前からの主人・盧俊義に、いまのうちに身をひいて靜かにくらそうと提案する。これから恩賞を受け、官職を授かり、榮耀榮華が待っていると信じている盧俊義はこれを受け入れない。そこで燕青が言ったのがこのセリフである。これに對し編纂者も「若燕青、可謂知進退存亡之機矣（燕青のような人は進退存亡の機微がわかっている）」（第九十九回）とその預見能力を認めている。にもかかわらず燕青はなかなか集團を離れることができなかった。その理由は「宋江が自分を自由にさせてくれないだろうから」である。燕青は宋江に置手紙を残し、そこでも「5 本待拜辭、恐主將義氣深重、不肯輕放、連夜潛去（暇乞い申し上

つまり燕青は状況判斷能力は高いが「義」をまもるころは足りない」と評価されている。

<sup>五</sup>「《水滸》所推崇的“义”主要是一种江湖义气，其着眼点是人与人之间的互相扶助、支持。」（邹少雄「论《水滸》的文化精神」『孝感学院学报（社会科学版）』第二十卷第三期、二〇〇〇年）

げるつもりでしたが、將軍の義氣が深いゆえ行かせてくださるまいと思い、夜のうちにこっそりおいとまします」と言う。これでは宋江が一方的に燕青を束縛しているようで、「助け合い」とは言えそうにない。

特殊な世界を描いているがゆえにその「義」も特殊で、一般の人々の「義」とは異なるのだとする見解も多い<sup>六</sup>。

孫述宇は、「義」には①正義、②不正、假の、③對等ないしは下の相手、同じ稼業のものに對する忠誠心や約束を守る心、④人への施しと手助け、の諸義があるとし、一般に「義」というと①を連想するために水滸傳の「義」を誤解するのだと説明している。孫術宇によれば、②の例には「結義」があり、人々が結束することを意味し、③は「義氣」の「義」で、是非を問わない人々の情誼であり、②と

は關係ない。③、④は①に由來するのだが、すでにその意味はかけはなれて關係のないものになっている。そして梁山泊で「義」を標榜するもつとも重要な目的は「團結互助」を推進することである。「結義」と「聚義」とはやや

異なるもので、「聚義」は集まってなにか（多くの場合非法で危険をとまなうこと）をすることである。江湖の人物は安全を渴望し、團結と助け合い、お互いの忠誠をつねに必要としているので「義」を結ぶ。そしてこの「義」は正義とはまったく關係ないと強調する<sup>七</sup>。この説に従えば、例3の葉孔目の「義」は①、4の燕青の「義」は③にあたり、兩者はまったく關係がないということになる。孫述宇はまた「水滸傳…強人説給強人聽的故事」<sup>八</sup>において、水滸の義は少數の例外をのぞいて正義とは關係のない

<sup>六</sup> 「（義氣は）純粹にはだかの人間のあいだだけに存在する連帶感で、人間同士がじかにふれあってそこに生まれる」（小川環樹『『水滸傳』の文学』『中国の八大小説』平凡社、一九六五年、百三十八―百三十九頁）、「流氓と總称され…：仲間同士の双務的なモラルともいうべき『義』を第一の規範として標榜する、特殊な習俗を形成していた」（木山英雄『『水滸傳』の世界』『世界の歴史6東アジア世界の變貌』筑摩書房、一九六一年、二百六十一頁）など。

<sup>七</sup> 孫述宇「梁山英雄的義氣」

<sup>八</sup> 孫術宇「水滸傳…強人説給強人聽的故事」（『水滸傳的來歷、心態與藝術』時報文化出版事業有限公司、一九八一年）。邦譯に孫述宇著・田仲一成訳「水滸傳―強盜が強盜に語った物語―」（『東洋文化61』東京大学東洋文化研究所、一九八一年）がある。

「江湖之義」であると言う。そして「江湖義氣是亡命漢的商標。……在危險環境中討生活的亡命漢、卻沒有不講求江湖義氣以求安全互助的（江湖の義氣は亡命者の目印である。：危険な環境で行きぬく亡命者に江湖の義氣を掲げて相互扶助を求めないものはいない）」と言う。鄒少雄も孫説を引き、水滸傳の「義」とは江湖の義氣のことで、梁山泊の好漢同士、または梁山泊好漢と貧しい民衆との間の相互扶助を表し、傳統的な倫理觀の「義」とは無關係であるという<sup>九</sup>。舒媛媛「生“与”死“的背反——《水浒传》的道德觀」<sup>十</sup>も、江湖は世俗の秩序をぬけだして化外の民となつた人の生活する場で、そこでの行動基準は他を利する道德「義」であるとする。王學泰「从《水浒传》看江湖文化」<sup>十一</sup>は、江湖は主流社會から承認されず彈壓された遊民の社會であり、その成員は大多數が統治者から異類、甚だしくは「匪」と見なされる者で、そのなかで最高の道德準

則が義氣であるとする。

水滸傳の描寫對象の中心はたしかにこのような人物たちであり、「武人及び彼らを取り巻く藝人、それにアウトローといった人々を主な擔い手とする藝能」<sup>十二</sup>が主な材料のひとつであつたと考えられる以上、士大夫と異なる倫理觀が作中に現れることには注目すべきである。しかしそのことと、「義」という語自体が他の作品に表れるそれと異なる特殊なものであることとはイコールではない。水滸傳の最終編纂者はまぎれもなく知識人であり、讀者として想定されていたのは官僚・郷紳・大商人などの上層階級および科舉受験生・中規模商人・僧侶・道士などの中間層の人々であつたと考えられる<sup>十三</sup>。藝能由來の物語を多分に利用しながらも、編纂者や讀者の立場にあわせた改編がほどこされていることもこれまでに見てきた通りである。この際、用語の面でも編纂者・讀者が理解できるものが採用された

<sup>九</sup> 鄒少雄「论《水浒传》的文化精神」

<sup>十</sup> 舒媛媛「生“与”死“的背反——《水浒传》的道德觀」『明清小说研究』二〇〇七年第一期

<sup>十一</sup> 王學泰「从《水浒传》看江湖文化」『上饒師範學院學報』

社科版』二〇〇五年

<sup>十二</sup> 小松謙『中国歴史小説研究』第七章「詞話系小説考」、二三百三十頁

<sup>十三</sup> 大木康『明末江南の出版文化』第二章「明末江南における出版業隆盛の背景」、九十頁

であろうことは想像に難くない。「義」も特殊用語としてではなく、まずは當時讀者一般に理解可能であった語としてとらえるべきだろう。

水滸傳の「義」を全面的に解釋すべく詳細に分析、分類を行う試みもなされている。

霍有明は「義」を①江湖の倫理、②謙遜して他者に譲る、③義兄弟の結束、④集團での造反、⑤「忠」と分類する<sup>十四</sup>。賀信民は、「義」には多様な含意があるが、その具體的な現れには①「轻利。即疏财仗义」②「自觉担当，不避风险」③「恩谊高于一切」④「事业心」⑤「忠诚」⑥「温情主义与平均思想」があり、梁山好汉の最も重要な精神品格と道德規則であるとする<sup>十五</sup>。盧忻は、「義」は①「对外劫富济贫即仗义疏财」②「对内讲义气，好交结」とに分かれるとする<sup>十六</sup>。これらは水滸傳で「義」が使われているそれぞれの場面を理解するのにふさわしい含意をくみとろうとした研究であり、参考にすべきものである。しかしこれら先行研究には、詳細に分類しすぎた結果、

ややもすればそれぞれの例がまるでちがう語であるかのようにあつかわれてしまう憾みがある。たとえば霍有明は、②謙遜して譲る「義」の例として金聖歎本第五十七回（容與堂本第五十八回にあたる）、官軍の將・呼延灼が梁山泊にとらえられながらも宋江に鄭重にあつかわれ、頭領の座をゆずろうとまで言われ、「非是呼延灼不忠於國、實感兄長義氣過人、不容呼延灼不依（わたしが國に不忠なのではない、兄上の義氣が人なみはずれているのを切に感じ、従わないわけにゆかぬのだ）」（容與堂本では「實慕兄長義氣過人」と答えた場面をあげ、④集まって造反する「義」では金聖歎本第十五回（同第十六回）、これから生辰綱の強奪をしようとする場面の「今日我等七人聚義舉事（今日われら七人が聚義してことをおこす）」（容與堂本も同じ）を例に引いている。このように「義」には複数の異なる意味があり、場面ごとにどの解釋に該當するのか考え、それぞれ②と④にあたるのだとわかればよく、それ以上に關連性を追及することはない。このような「辭書的配列法」と

<sup>十四</sup> 霍有明「由『义』词源的演化略探《水滸》的『忠』、  
『义』」《唐都学刊（西安联合大学社会科学学刊）》二〇〇一年第十七卷第四期

<sup>十五</sup> 賀信民「论『水滸气』」《人文杂志》二〇〇〇年第四期  
<sup>十六</sup> 盧忻「《水滸传》作者的英雄观」《江汉论坛》一九八七年第一期



でも呼べる分析は、あまりに具體的にすぎると根本の意味を離れてしまうことになりかねないのではあるまいか。

水滸傳各部分の來源は非常に雑多であるが、ただやみくもに伝わってきた文をひきうつしたのではあるまい。一定の方針のもと、最終編纂を経て完成したひとつの作品において、人物の様々な性格・言動に對して「義」という同じ語をあてている以上、編纂者はそれらには根底に共通するものがあり、みな「義」と呼ぶに値する条件を満たしているともなし、それは讀者にも理解できるものと考えていたのである。香坂順一は次のように述べている。「『水滸』が世に問われた時代、この雑多さの中に、当時の一般の讀者の理解を越えたものが多く含まれていたとは考えにくい。なぜならば、一般の讀者の理解を越えたものが余りにも多ければ、それは文学作品としての成立条件を欠くことになり、刊行と同時に消え去る運命を担っているからである。……また纂脩した時点では、その仕事に携った人の頭の中には、その当時の讀者を対象に編んでいるという意識

が働いているから、『当世風』に書きかえたところもあつたにちがいない<sup>十七</sup>」。本稿で分析してきた各部分にはいずれも讀者に讀んでもらおうという意識が感じとれた。販賣を目的とする通俗小説なれば當然のことである。最終編纂者が、讀者が讀んでわかるかどうか判断しながら用語を選んだと考えるのは不自然なことではあるまい。そこで本章では先行諸研究の分類の基礎に立ちつつ、さらになぜこれほどさまざまな現象がひとしく「義」の一語をもって表現しえたのかについて考えたい。この「義」の核心的イメージを想定することは、編纂者の意圖を考えるうえでも大いに助けになろう。

水滸傳の道德語彙に關してはすでに、笠井直美「隠蔽されたもう一つの「忠義」——『水滸傳』の「忠義」をめぐる論議に關する一視點——」<sup>十八</sup>が、從來「朝廷への忠誠」と理解されてきた「忠義」を再検討している。笠井は水滸傳に見える「忠義」は「損得や結果にこだわらず、わが身の犠牲を顧みず、甚しくはわが身を捨てて、他人のために力を

<sup>十七</sup> 香坂順一『『水滸』語彙の研究』（光生館、一九八七年）、二〇三頁

<sup>十八</sup> 笠井直美「隠蔽されたもう一つの「忠義」——『水滸傳』の

「忠義」をめぐる論議に關する一視點——『日本中國學會報』第四十四集、一九九二年

盡くすこと」であり、「その対象は本来限定されない」とまとめている。対象ごとに細かく分類されがちであった「忠義」という語の核心的な意味を見出したこの研究は、本稿の大いに参考とするものである。

次節以降、水滸傳に現れる「義」の全用例を観察し、どのような状況下で、どのようなできごと、人、行為、発言を「義」と稱しているのかを先行研究の「辭書的配列」の方法を参考に分類し、そのうえでそれらの共通點、つまり「義」の核心について考えたい。

### 三・「義」の「辭書」

水滸傳の「義」を理解するのにもっともよい用例集は水滸傳そのものである。しかし水滸傳の「義」は、水滸傳が書かれ、讀まれた時代の「義」の用法の反映であろうから、時代、地域、受容者層が重なれば、他の作品における「義」も、その含意はきわめて近いはずである。本稿では嘉靖壬午序『三國志通俗演義』（以下、「三國志演義」）、馮

夢龍編「三言」、明人の筆記を參考資料として用いる。

「三國志演義」を選んだ理由は、刊行年代が近いこと、水滸傳同様江南地域で出版され、知識人讀者を対象とした長篇小説であること、實際に水滸傳と併稱する知識人讀者が少なからずあったことである。

「三言」は、『古今小説』が天啓元年（一六二一年）ごろ、『警世通言』は天啓四年（一六二四年）、『醒世恒言』が天啓七年（一六二七年）の刊行で、水滸傳から百年ほど遅れる。しかし編者馮夢龍の出身地は蘇州であり、『警世通言』は南京の兼善堂、『醒世恒言』は蘇州の葉敬池が刻しており、地理的には近い<sup>十九</sup>。馮夢龍は水滸傳をほめた李卓吾の思想の影響を強く受けているし、自身もまた楊定見の水滸傳刊刻に関係があったようである。水滸傳に近い言語感覚を持っていると考えてもよいだろう。「三言」には唐宋以來の前歴をもつ故事を利用、改變したもの、明代に書かれたもの、馮夢龍自身が創作したものなどが混在しているが、水滸傳同様、最終的に編者のチェックを経たもの

<sup>十九</sup> 「三國志演義」、「三言」の刊行事情に関しては孫楷第『中國通俗小說書目（外二種）』（中華書局、二〇一二年）、魏安『三國演義版本考』（上海古籍出版社、一九九六年）、金

文京『三國志演義の世界』（東方書店、一九九三年）、大木康『明末のはぐれ知識人 馮夢龍と蘇州文化』、『明末江南の出版文化』を参照した。

であるに相違ない。さらに、収録作品の原材料がはっきりとわかる篇もあり、材料どおりのことばづかいを踏襲しているのか、それとも改編を経たのかを確認することもできる<sup>二十</sup>。『醒世恒言』のうち二十二篇は馮夢龍に近い存在の明人が創作したという指摘<sup>二十一</sup>もあるが、少なくとも時代性、地域性、階層性の条件は満たしているから、参考資料として排除するには及ばない。このほか明代に改編された元人雜劇も、明代の讀者にわかるようにまとめられた讀み物としてあつかってよいだろう。これらの「辭書」を参考にしながら水滸傳の「義」の意味を考えたい。

#### 四・「義」のさまざまな表情

<sup>二十</sup> 佐藤晴彦「古今小説」における馮夢龍の創作——言語的特徴からのアプローチ——（『東方学』第七十二輯、一九八六年）、同「醒世恒言」における馮夢龍の創作（Ⅰ）——言語的特徴からのアプローチ——（『神戸外大論叢』第39巻第6号、一九八八年）、同「醒世恒言」における馮夢龍の創作（Ⅱ）——言語的特徴からのアプローチ——（『神戸外大論叢』第41巻第4号、一九九〇年）、同「警世通言」における馮夢龍の創作——言語的特徴からのアプローチ——（『神戸外大論叢』第

從來水滸傳の「義」の統一的解釋がなされにくかった要因のひとつに、「義」にもとづく言動のもたらす結果が多種多様で共通性を見出しがたいことがあげられる。

例として同一人物の二種の「義舉」をあげる。

まず第二十八回の一場面。殺人犯となり牢城營へ護送される途上、武松と護送役人二人は居酒屋に立ち寄る。そこは痺れ薬入りの酒を客に飲ませる強盜酒屋であった。護送役人は盛りつぶされてしまうが、そのたくらみを見抜いていた武松は逆に店の者を組み伏せる。店主夫妻はこの男がうわさの豪傑であることを知ると、役人二人をここで始末して逃げるようすすめたが、武松は二人は道中ずっと自分を鄭重に扱ってくれたのだから殺すわけにはいかないと答

43巻第2号、一九九二年）、同「古今小説」における馮夢龍の創作（改稿）——言語的特徴からのアプローチ——（『神戸外大論叢』第44巻第1号、一九九三年）参照。これらにおいて馮夢龍が明代の言語感覚にもとづいて文章を書いたと思われる巻の推定も行われている。

<sup>二十一</sup> Patrick HANAN, *The Chinese Short Story: studies in dating, authorship, and composition* (Harvard-Yenching Institute. Monograph series, 1973), IV The Late Stories: Individual Style and Authorship, Origins, and Composition, pp.66-74

えた。それを聞いた店主・張青のことば。

## 6 「都頭既然如此仗義、小人便救醒了」

「都頭がかくも義によって行動されるのなら、わたくしは二人を目覚めさせましょう」

次に第五十七回に見える例。かつて武松をやしきに居候させていた孔明とその叔父孔賓とが官に捕えられ牢に入れられたことを聞き知った武松のことば。

## 7 「那時我與宋江在他庄上相會、多有相擾。今日俺們可以義氣為重、聚集三山人馬、攻打青州」

「当時おれと宋江は彼らのやしきで出會い、いろいろと面倒をかけた。いまわれわれは義氣を重んじ、三山の人馬を集めて青州を攻めるべきだろう」

そしてことば通り魯智深らとともに軍勢を率いて都市に攻めこみ火を放つ。

兩例の行動の結果は、かたや國家の法に服し、かたや刃向かうもので、正反對と言ってよい。後者のような例が少なくないため、水滸傳の「義」は江湖の者の朝廷への造反

を表すとみなされるのも不思議なことではない。

しかしまた、兩例ともに「義」という語が選ばれている事實にも着目すべきではないか。二つの考え方に共通点があるからこそ同じ語が用いられたのである。そう考えると、確かに結果はよほど異なるが、危機に陥った恩人を助けようという動機は一致していることがわかる。その動機に従って行動するとき、前者では「自由をあきらめる」、後者では「官軍と戦う」という試練がたちはだかる。反権力的行為か否かに注目して兩例に大きな差異を見出そうとするより、恩人を助ける際の障碍が異なるにすぎないと考え、二つの「義」の類似性を重視する方がこの語の使用實感に近いのではないだろうか。

「義」はそもそも徳目、つまり人の思考を規定するものである。このことから、結果主義的觀點ではなく、笠井直美が「忠義」を整理した際と同様の動機主義的解釋がより妥当であろう。このような觀點から物語中における「義」によるさまざまな行為を觀察し、その行為を支える動機をさぐっていききたい。

## 1 交誼斷黃金　　團結の「義」

第十六回、晁蓋らが生辰綱を奪い取る計畫をたてたとき

呉用は「8 保正夢見北斗七星墜在屋脊上、今日我等七人聚義舉事、豈不應天象（晁保正是北斗七星が屋根に落ちる夢を見た。今日われら七人が聚義して事を起こすのは天の示しに應じたものにちがいない）」と言い、その直後に「我等七人和會、並無一人曉得（われら七人がつどっていることはだれも知るものではありません）」とも言う。ここで「聚義」と「和會」とはおなじ行動を指している。

第三十五回、清風寨で騒動を起こした宋江は、清風山の山賊たちや元武官の花榮、秦明、黃信に、「我等何不收拾起人馬、去那裡入夥（人馬をまとめてかの地に仲間入りに行こう）」と提案する。その道中、さらに郭盛、呂方を仲間にしたところで今度は「9 宋江就説：轅隊上梁山泊去投奔晁蓋聚義。那兩個歡天喜地、都依允了（人々をまとめて梁山泊へ行き、晁蓋に身を寄せて聚義しようと宋江がいうと、二人とも大喜びで従った）」とある。「入夥」と「聚義」とは同じ行動を指している。

その後宋江は江州で反詩をよんだかどで處刑されることになる。刑の執行直前、梁山泊の好漢たちが刑場に亂入して宋江を救い出し、江州城外の白龍廟にたどりつき、援軍と合流する。その場面に「張順等九人、晁蓋十七人、宋江、戴宗、李逵、共是二十九人、都入白龍廟聚會。這個喚

做白龍廟小聚會（張順ら九人、晁蓋ら十七人、宋江、戴宗、李逵、あわせて二十九人はみな白龍廟に入り、集合した。これを白龍廟の小聚會と申します）」とある（第四十回）。つづく第四十一回ではおなじ場面を「10 城裡黑旋風李逵引衆人殺至潯陽江邊、兩路救應、通共有一百四五十人、都在白龍廟裡聚義（城内では黑旋風李逵が人々をひきつれて潯陽江のほとりまで突進し、二方面からの救援をあわせて百四五十人、みな白龍廟のなかで聚義した）」と言う。おなじ場面を指すのに「聚會」、「聚義」という二種の言い方をしている。

さらにそこから梁山泊への歸途、四人の山賊に出會った宋江は「11 今次宋江投奔了哥哥晁天王、上梁山泊去一同聚義。未知四位好漢肯弃了此處、同往梁山泊大寨相聚否（いまわたしは兄の晁天王に身をよせ、梁山泊にのぼり聚義するところです。あなたがた四人もここを捨ててともに梁山泊の大寨にあつまりませんか）」と言う（第四十一回）。この「聚義」と「相聚」の指す内容も似ている。「集まる」、「仲間になる」行為を「聚義」と稱す例は少なくない。

12 「老母平生只愛清幽、吃不得驚説、因此不敢取來。：

小道只去省視一遭便來、再得聚義。」

「老母は平生静かな環境を好み、肝を冷やすようなことには耐えられませんからつれてこようとはおもいません。：ちよつと様子を見に行き、すぐに歸つてきてふたたび聚義いたします。」（第四十二回）

13 「當初軍師好意、啓請盧員外上山來聚義。今日不想却教他受苦、又陷了石秀兄弟。」

「はじめは軍師の好意で盧員外をおまねきして山にのぼつて聚義していただこうとしたのに、いまかえつて彼を苦しませ、しかも石秀兄弟まで窮地に陥いつてしまうとは。」（第六十三回）

14 當時會集大小頭領盡來集義飲宴。

そのとき大小の頭領を集め、みな集義して宴會をした（第八十二回）

類似の形に「聚大義」も見られる。日本語としてはやや不通だがひとまず「大義にあつまる」と譯す。

15 「小可宋江久聞三位壯士大名、欲來禮請上山、同聚大義。」

「わたくし宋江はお三方の壯士のおなまえを久しく

うかがつており、禮をもつて山におまねきし、ともに大義にあつまつていただこうと思つておりました。」（第六十回）

16 「某與宋公明哥哥面前多曾舉你、特來相招二位將軍同聚大義。」

「わたしは宋公明兄のまえで何度もあなたを推薦し、特にお二人の將軍とともに大義にあつまるようお招きにまいりました。」（第六十七回）

個人間の場合、1のように「兄弟になる」という例が多い。

17 「他和我心腹相交、結義弟兄：四海之内、名不虛傳。結義得這個兄弟、也不枉了。」

「彼（宋江）はわたしと心腹の交友があり、義を結んだ兄弟だ。：世の中に虚名は傳わらないものだ。義を結んでこの兄弟を得たことはむだではなかった。」（第十八回）

18 皆是張都監和張團練兩箇同姓結義做兄弟：。張都監と張團練の同姓の二人は義をむすんで兄弟となつていて：（第三十回）

17 は晁蓋、18 は康節級のセリフである。これらとは逆の「壊義氣」という形も見られる。

19 李逵見他兩個趕來、恐怕爭功壞了義氣、就手把趙能一斧、砍做兩半、連胸膛都砍開了。

李逵は二人（引用者注…梁山泊の仲間である歐鵬と陶宗旺）が駆けよってくるのを見て、功績を争って義氣をこわすのを心配し、すぐさま趙能を斧でまっふたつにし、胸まで切り裂いてしまった。（第四十二回）

次は、李應が同盟を結ぶ祝家莊の横柄な態度に腹を立て、武装して乗り込もうとするのを楊雄と石秀が押しとどめている場面。

20 「大官人息怒。休為小人們壞了貴處義氣」

「だんなさまお怒りをおしずめください。わたくしどものためにあなたがたの義氣をこわしてはいけません。」（第四十七回）

21 「你便是真箇了得的好漢、我好意來幫你、你道翻成惡意。我却偏鳥要去」。燕青尋思、怕壞了義氣、便對李逵說道「和你去」。

「あんたは實にたいした好漢だな、好意で手傳つてやろうというのにあべこべに悪意にとろうとする。おれはどうしたって行くぞ」。燕青は考え、義氣をこわすのをおそれて李逵に言った。「一緒に行こう」。 （第七十四回）

晁蓋、公孫勝ら生辰綱強奪メンバーの梁山泊入りをしぶる王倫を林冲がののしり、おそいかろうとする場面では晁蓋らがこのことばを使う。

22 「休為我等壞了大義」

「われらのために大義をこわすのはおやめください」（第十九回）

同様の言いまわしは『警世通言』卷二十一「趙太祖千里相送京娘」にも見える。二人の盜賊が女を一人つかまえ、どちらの妻とするかもめたが、「恐壞了義氣（義氣をこわすのをおそれ）」、ひとまず女を軟禁し、もうひとり女をつ

かまえに行くことにしたという場面である。

「壞義氣」は「結束が亂れる」、「仲間同士で争う」という場面で使われているから、「義氣」は「仲間同士結束しようとする心」を表すと言ってよからう。

「聚義」、「結義」は「入夥」、「相會」、「相聚」などとうちがうのだろうか。第三十九回に「23 因請二位上山入夥、共聚大義（そこでおふたりに山にのぼって仲間になり、ともに大義にあつまっていたきたいのです）」という言いかたがある。まったくおなじ意味であればこのような繰り返しはすまい。單なる「あつまる」にはない意味が「義」には含まれているのだろう。ではどのような意味が附加されるのか。第九十回に宋江が「義」の説明をする場面がある。

24 一失雌雄、死而不配、此為義也。

ひとたびつれあいを失うと死んでも再びつれあいを得ようとしなない、これが義である。（第九十回）

宋江の考えでは、夫婦であるだけではまだ「義」と呼ぶには足りない。一度築いた関係を、たとえその相手が死しても絶対に變えない決意があつてようやく「義」と呼び得

るのである。

この考えを踏まえると4のセリフの真意が明確になる。なにがあらうとも関係を變えないことが「義」であると宋江が考えている以上、一度「聚義」した者の離脱は、いかにその状況判断が正確であろうとも許されるはずがないと燕青は予測したのである。このような考えは水滸傳に限ったものではない。

元末明初の陶宗儀の『輟耕録』卷二十四に「结交重氣義」と題する文がある。張、李、鮮于という三人の同僚がおり、ともに官職についたが、李が先に死んでしまった。張は鮮于に手紙を書き、李の家は貧しく、子はまだ幼いから自分たちが助けてやらなければならない、自分は娘を李の次男にとつがせると言った。そこで鮮于も娘を李の長男にとつがせることにした。そして最後に「於此可見前輩结交重義氣。不以貴賤貧富易其心，誠可敬也（ここに先人たちが交友に義氣を重んじたことが見てとれる。貴賤や貧富によって心變わりすることがないのは、まことにうやまう



べきである)」と結ばれている<sup>二十二</sup>。

明・李贄『初譚集』巻十九「篤義」には次のようなエピソードがおさめられている。

僧曇遷は范蔚宗と交友があった。のち蔚宗の一族が誅せられると、誰も近づくものはなかったが、曇遷はその葬儀をした<sup>二十三</sup>。

孔融が魏武帝に誅せられると、かつて孔融と親しかったものたちは誰もその遺體をひきとろうとしなかったが、脂習だけはさがりついて泣き、「文舉、あなたが私をすてて死んでしまったら、わたしは誰と語らったらいいの

<sup>二十二</sup> 陶宗儀『南村輟耕録』（四部叢刊三編子部、上海書店、一九八五年）、『輟耕録』（叢書集成初編、中華書局、一九八五年）。叢書集成本は題名を「結交重義氣」とあらためている。

<sup>二十三</sup> 李贄『初譚集』中華書局、一九七四年。何良俊『語林』（上海古籍出版社、一九八三年）巻一にもほぼ同じものをのせるが、「義」とは言わない。

<sup>二十四</sup> 『後漢書』（中華書局、一九八七年）巻七十、宋・司馬光『資治通鑑』（古籍出版社、一九五六年）巻六十五、赦經

だ」と言った<sup>二十四</sup>。

脂習のエピソードは「三國志演義」にも採用されており、脂習を殺そうとする曹操を荀彧がいさめて「乃義人也、不可殺（義の人です。殺すべきではありません）」と言っている（八巻七十九則）<sup>二十五</sup>。これらは一度結んだ人間関係はどんなことがあっても保ちつづけ、變えない氣概を描いたものである。李贄は、「誰も近づくものはなかった」、「誰もひきとろうとしなかった」のあとに「千古如此（むかしからこういうものだ）」と評をつけている。その時々利害關係で、以前の人間關係を重んじなくなってしまう人が多い現實をふまえ、そうではない人を「義にあつてい

『續後漢書』（『景印文淵閣四庫全書』、臺灣商務印書館、一九八三年）巻七十上に同じくだりがある。文の長短、使っていることばにちがいはあるもののいづれも「義」とは言わない。『冊府元龜』（中華書局、一九六〇年）巻八百二は文中に「義」はないもののこの話を「義」の項目に分類する。<sup>二十五</sup> 『三國志通俗演義』（人民文學出版社、一九七四年）。以下、特に注記しない場合、「三國志演義」の引用は本書からのもの。

と稱えているのだろう。

明・謝肇淛『五雜組』<sup>二十六</sup>卷十四は辛辣な口ぶりで義を重んじない状況を皮肉っている。「訓蒙受業之師真師也。其恩深其義重（訓蒙受業の師はまことの師である。その恩は深く、義は重い）」。にもかかわらず現實には出世して富貴になるとその恩を忘れ、「甚至利害切身之日、戈可操也、石可下也（利害關係が切實になった時には、矛もとるべし、石も投げつけるべしということにまでなってしまう）」という。かつての人間關係を忘れたり、利害によって敵對關係にかえてしまったりすることはあるべき姿ではないのである。「梁山泊李逵負荊」雜劇では、李逵に人さらいの犯人との濡れ衣を着せられのしられた魯智深が機嫌を損ね、李逵を助けてやらないと言うが、呉學究に「你只看聚義兩個字、不要因這小忿壞了大體面（ただ聚義の二字だけを思い、小さな怒りで大きな體面を傷つけないでくれ）」<sup>二十七</sup>とたしなめられる。個人的な感情のもつれよりも、集團の結束のほうが重視されるべきだということである。これらの用法に照らせば、宋江に従っていてもよいこ

とはなさそうだと判斷して集團を離れようとする燕青は、義兄弟の風上にも置けぬと批判されても仕方がないことがわかる。事實、李卓吾はその「忠義水滸傳序」のなかで、「燕青の涕泣して主を辭す」一事を「小者が自分の身を守る策（小丈夫自完之計）」と批判している<sup>二十八</sup>。だからこそ編纂者は燕青に、自分の行動に理があることを宋江に直接説かせることなく、夜中にこっそりと立ち去らせることにしたのである。

ゆえに「仲間になる」よりも「義を結ぶ」ほうが条件はきびしい。義をむすぶ際にはつきりこの條件を擧げる場面は少ないが、なかには義を結ぶに値する相手かどうかを確かめる、あるいは永遠に裏切らないことを誓い合ってから關係をとりむすんだ例もある。

生辰綱強奪を決意した晁蓋ら三人は、晁蓋が夢に見た北斗七星にあわせ、仲間を七人そろえようとする。呉用は知り合いの阮家三兄弟を推薦する。その際、「<sup>25</sup> 有三箇人、義胆包身、武藝出衆、敢赴湯蹈火、同死同生、義氣最重（義が全身をつつみ、武藝はひとなみすぐれ、煮えたぎ

<sup>二十六</sup> 明・謝肇淛『五雜組』、東京大學文學部藏和刻本  
<sup>二十七</sup> 元曲選、酹江集所収本ともに同じ文言。

<sup>二十八</sup> 注四引用文参照。

る湯にもとびこみ、火をものりこえ、生死をともにする度胸があり、義氣は最も重いという三人があります」、

「26 这三箇是親弟兄、量有義氣（この三人は實の兄弟で義氣があります）」、<sup>27</sup> 他雖是箇不通文墨的人、為見他與人結交真有義氣、是箇好男子、因此和他來往（彼らは學のない者ではありませんが、人づきあいにまことに義氣があり、いい男たちなのでつきあっているのです）」（第十五回）と、ことさらに「義」を強調している。ひとたび仲間となれば何があろうと決して裏切ることはないと晁蓋を安心させようとしているのであろう。そして晁蓋は阮氏三兄弟らと紙錢を焼き、「我等六人中但有私意者、天地誅滅神明監察」と個人よりも六人の結束を優先することを誓うのである。

このような関係を壊した場合には「背義」、「負義」などの語で非難される。

<sup>二十九</sup> 笠井直美「へわれわれ」の境界…岳飛故事の通俗文藝の言説における國家と民族（上）」『言語文化論集』第十三卷二號、二〇〇二年）、同「へわれわれ」の境界…岳飛故事の通俗文藝の言説における國家と民族（下）」『言語文化論集』第十四卷一號、二〇〇二年）は、明代の通俗文藝には、「國

28 恩相放心、小將必要擒此背義之賊。

閣下ご安心ください、わたくしがかならずやこの背義の賊をとらえましょう。（第五十八回）

元官軍の將で梁山泊に歸順した秦明について、知州は「與花榮一同背反」（花榮とともに背いた）と言い、官軍の將呼延灼は「背義の賊」と言っている。將軍として宋朝に盡くすという「義」があつたにもかかわらず<sup>二十九</sup>、それを斷ち切つたと批判しているのである。この例からも「水滸傳の義はヨコのつながり」とは言えぬことがわかる。

仲間入りの際に語られる「義」には「いかなる障礙があろうとその関係を維持しつづけなければならない」という條件が附帶し、自分が裏切らないのと同様、相手も自分を裏切るはずはないという期待を抱かせるのである。

## 2 信士豈敢爽信 〵 約束の「義」

家」は生まれながらに所屬しているものではなく、それぞれが個別に關係を結ぶ對象であり、「所屬」の變更も可能であるという考えを反映したものが少なくないことを指摘している。この「義」もその一例と言えよう。

「いったん口にしたことは實行することが義だ」という用法も見られる。第五十一回で宋江が、これに先立つ祝家莊との戦いで捕虜にした女將一丈青扈三娘と、梁山泊の王英とを結婚させる場面がある。この縁談は扈三娘の意志とは無関係に設定されたものであるが、<sup>29</sup> 一丈青見宋江義氣深重、推却不得（一丈青は宋江の義氣が深いのを見て斷りきれず）、宋江にしたがい、<sup>30</sup> 晁蓋等衆人皆喜、都稱賀宋公明真乃有徳有義之士（晁蓋たち人々はみなはとも喜び、宋公明は實に徳があり義がある人だとたたえた）。この場面を理解するには第三十二回を見る必要がある。この時清風山の盜賊であった王英は、手下が捕らえてきた清風寨の文官知寨劉高の妻を自分の妻にしようとしていた。その場に居合わせた宋江は、その劉高の同僚である清風寨の武官知寨の花榮をたずねて行くところであったため、劉高の妻を歸すよう説得し、「宋江日後好歹要與兄弟完娶一個、教你歡喜便了。小人並不失信（私がいつかなんとしてもあなたに一人めとらせ、喜ばせてあげましょう。決して約束は違えません）」と言った。第五十一回で宋江

はついにその約束をはたし、人々は約束を守った行為を「義」と賞賛しているのである<sup>三十</sup>。

梁山泊集團の方臘征伐中、水軍頭領李俊らは、地元の好漢費保らと知り合い、結義して兄弟になった。費保は、いまのうちに梁山泊集團を離れ、船を準備して大海に漕ぎ出し終の棲家を求めようと提案する。李俊はこの考えに大いに感じ入り、「若是衆位肯姑待李俊、容待收伏方臘之後、李俊引了兩箇兄弟逕來相投、萬望帶挈。是必賢弟們先準備下這條門路。若負今日之言、天實厭之、非為男子也（もしおのおのがたがしばしお待ちくださるのであれば、方臘を屈服させたあと、第二人を連れて身を投じますので、どうかお連れください。賢弟たちは先にその道の準備をしておいてください。もし今日のこのことばに背いたら天もわたしを男兒に非ずと忌み嫌うでしょう。）」と約束する。費保ら四人は「我等準備下船隻、專望哥哥到來、切不可負約（われらは船を準備し、ひたすら兄貴のおいでを待っています、ゆめゆめ約束を違えませぬよう）」と應じ、<sup>31</sup> 李俊、費保結義飲酒、都約定了、誓不負盟（李俊と費保は義

<sup>三十</sup> 高島俊男『水滸伝の世界』「七女傑たち」も、この場面の「義」は宋江が約束を忘れなかったことを賞賛することば

と解釋している（百十頁）。

を結んで酒を飲み、誓って盟に背かぬことを約した。」  
(第九十四回) 彼らはすでに「結義」して兄弟になっているのだから、この「結義」は兄弟や仲間になることではない。必ず戻ってくるかと約束することであろう。

「三言」はこの種の用例に事缺かない。

『醒世恒言』巻九「陳多壽生死夫妻」。重病をわずらっている陳多壽にとついで朱多福は、獻身的に看病するが、その甲斐もなく治癒のきざしはない。多壽は自殺を思い立ち、自分が死んだ後ほかに良縁を探すと言うが、多福は「我與你結髮夫妻、苦樂同受。今日官人患病、即是奴家命中所招。同生同死、有何理說(私とあなたは夫婦となり、苦樂をともにしています。いまあなたが病をわずらっているのも私の運命によるもの。ともに生き、ともに死にましよう。そんなことを言っではいけません)」とこたえる。多壽は自分の酒に砒霜をまぜ自殺を試みるが、それを知つ

た多福も自ら毒酒を飲み、「奴家有言在前、與你同生同死。既然官人服毒、奴家義不獨生(私はさきに言いました。ともに生き、ともに死ぬと。あなたが毒を飲むのなら、私は義として一人で生きようとは思いません)」と言った。この「義」を「前言をたがえない誓い」と解するのはたやすい<sup>三十一</sup>。

『古今小説』巻十七「單符郎全州佳偶」<sup>三十二</sup>の場合はこうである。子ども同士の將來の結婚の約束をしていた兩家があつた。しかし、女の子の兩親は盜賊に殺されてしまい、女の子は賣られて妓女となる。男のほうは出世して官となり、妓女となっていた女と再會する。事情を知った二人は結婚する。そこに「上司官每聞飛英娶娼之事、皆以為有義氣(上官たちは飛英が妓女を娶ったことを聞き、みな義氣があると思った)」とある。いやしい身分である妓女を娶れば自分の不名譽になるおそれがありながら、幼いこ

<sup>三十一</sup> 佐藤晴彦「『醒世恒言』における馮夢龍の創作(一)」——言語的特徴からのアプローチ——はこの巻を、馮夢龍の創作の可能性が高い回と推定している。明・許浩『復齋日記』(百部叢書集成『歷代小史』、藝文印書館、一九六六年)、『情史』巻十にこのエピソードが簡潔にのっているが、「義」のくだりはなく、「夫をかえることを肯んぜず、獻身

的にひとりの夫につくした妻が最後に報われる(婦貞烈之報)」ことがテーマとなっている。「前言をたがえない義」は馮夢龍が書き加えたのであろう。<sup>三十二</sup> 佐藤晴彦「『古今小説』における馮夢龍の創作(改稿)」——言語的特徴からのアプローチ——は明人の筆になると推定している。

ろからの約束を守ろうとした気持ちの強さを「義」とたたえたのであろう<sup>三十三</sup>。『情史』もこの話を収め、「每有不了辦公事、上司督責、聞有此事、以為知義、往往多得解釋（公務をはたせないと、上官は督促し、責めたてようとするのだが、このことを聞いて義であることを知り、よく許された）」、「毎對士大夫具言其事、無所隱諱、人皆義之（士大夫たちに詳しくそのことを話し、隠すことがなかった。人々はみな彼を義だと思った）」と、約束を守ること  
を「義」と呼んでいる（後者は「眞實をつつみ隠さず話す態度」を「義」としているのかもしれない）。

つづいて『古今小説』卷十六「范巨卿鷄黍死生交」の例。兄弟のちぎりを結んだ范式（巨卿）と張劭は重陽節に張劭の家で會う約束をする。范式はなかなかやってこないが、張劭は「巨卿信士也、必然今日至矣、安肯悞雞黍之約（巨卿は信士だ。かならず今日やってくる。鷄黍の約束をたがえるはずがない）」と信じて待つ。實は范式はうっかり約束の期日を間違えそうになったのだが、死んで靈魂となれば日に千里を行くことができることを思い出し、自害して靈魂となり、約束に間に合うよう飛んできた。それを聞

いた張劭は「今為義兄范巨卿為信義而亡、須當往弔（いま義兄の范巨卿は信義のためになくなったのだからとむらいに行かねばならない）」と巨卿の故郷へ行き、祭文をささげて「於維巨卿、氣貫虹霓、義高雲漢（巨卿よ、その氣は虹を貫き、義は雲より高い）」とたたえ、後を追って自刎した。「信義而亡」、「義高」はそれぞれ「約束を守るために死んだ」、「約束を守ろうとする心がつよい」と解釋するほかない。「巨卿既己為信而死（巨卿は信のために死んだ）」という表現もあり、「信」と「信義」がほぼ同じ意味でつかわれている。この巻ではほかに、「信士」「失信」、「爽信」、「負約」など、さまざまなことばで「約束」が表現されている。

この話は長い前歴をもつ。『清平山堂話本』「死生交范巨卿鷄黍」は前半を缺くが、後半は『古今小説』と同じ内容で、「為信義而亡」という語もそのままである。これが直

接の資料であろう<sup>三十四</sup>。「死生交范巨卿鷄黍」雜劇<sup>三十五</sup>は

筋が異なり、約束の日に范式はちゃんとやってくる。そして翌年も張劭の家で會う約束をして別れるが、その日より前に張劭は病で死んでしまう。夢に現れた張劭からそのことを聞いた范式が張劭の郷里へ駆けつけると、それまでどうしても動かなかった張劭の棺が動かせるようになった。

約束を守るために自殺するだの、その思いに感じて後を追うだのという壯絶な話ではない。雜劇では、二人の最初の約束を扱った第一折に「俺哥哥是至誠君子、必不失信（わが兄は誠實な君子で、約束に背くことはない）」、「巨卿千里赴會、真乃信士也（巨卿は千里の道を會いにやってきた、まことの信士だ）」とある<sup>三十六</sup>ように、「約束」にかかわる表現は一貫して「信」、「約」であり、「義」は二人の交友の強さという意味で用いられている。第四折末で范巨卿を「信義雙全」とたたえているのは、約束を守る「信」と、二人の交友「義」の並列であろう。さらにさかのぼって『搜神記』にも二人は登場する。記述は簡潔であるが、

<sup>三十四</sup> 佐藤晴彦「《古今小説》における馮夢龍の創作（改稿）」

—言語的特徴からのアプローチ—は、先行する話本にもとづいて書かれた文章だと推定している。

<sup>三十五</sup> 元刊雜劇三十種、脈望館校鈔本、酹江集本、元曲選本が

筋は雜劇とほぼ同じ。ここでも「巨卿信士、必不乖違（巨卿は信士です、約束を違えるはずがない）」と言うのみ。

『後漢書』『獨行傳』も「巨卿信士、必不乖違」、「巨卿果到（はたして巨卿はやってきた）」と言うのみ。この四者をならべると次第に話が壯絶に、おおげさにかわっていく過程がわかって興味深い。また、約束を表す語はそもそも「信」だけだったものが、『清平山堂話本』にいたって

「信義」が加わっていることがわかる。

「三國志演義」にも目を轉じてみよう。劉繇の部將として戦い、孫策に捕らえられた太史慈は、敗れた劉繇の部下の將兵を味方に加えることが得策であると進言した。孫策は同意し、明日かならず歸ってくるよう言う。孫策麾下の諸將は、太史慈は約束を破るのではないかと疑うが、孫策は「子義（太史慈）乃青州名士、信義為重、必不肯背我（子義は青州の名士で信義を重しとするのだから、裏切るはずはない）」と言う（卷三第三十則）。卷五第四十九則では、張遼の説得で曹操にくだることを承知した關羽が曹操に、

ある。

<sup>三十六</sup> 酹江集本では前者は「俺哥哥是誠實君子必不失信」、後者は同じ。脈望館校鈔本では前者は酹江集本に同じ、後者は「真乃傑士也」。元刊雜劇にはこの白自体がない。

いったん劉備の二人の夫人に報告に行かせてほしいと言  
う。荀彧は、關羽は心變わりするかもしれないから行かせ  
てはならないと進言するが、曹操は「吾知雲長忠義之士  
也、必不失信（わたしは雲長が忠義の士であるとかかつて  
いる。約束を違えることはない）」と言い、關羽を行かせ  
た。よく似た場面が水滸傳にもある。官軍の將として梁山  
泊と戦い、とらえられた關勝が宋江に對し、官軍の將の單  
廷珪と魏定國を説得して梁山泊にくだらせたいと提案す  
る。宋江はこれを認めたが、軍師の呉用は信用せず、見張  
りをつけたほうがよいと進言する。しかし宋江は「32 吾  
看關勝義氣凜然、始終如一。軍師不必見疑（わたしが見る  
に關勝はきつぱりとした義氣があり、始終變わらない。軍  
師が疑うにはおよばない）」と言う（第六十七回）。關勝は  
關羽の子孫という設定である。水滸傳は、關勝に先祖と同  
じ「約束を守る」場面を用意したのであろう。

### 3 感承大恩必圖報 ～ 報恩の「義」

#### 6 都頭（武松）既然如此仗義，小人便救醒了。

都頭がこれほど義によっているのなら、二人を助け  
ましょう。

武松が殺人犯として護送されている途上、張青・孫二娘  
は武松に、藥入りの酒を飲んで昏倒した護送役人二人を殺  
し落草するようすすめた。しかし武松は、この二人は道中  
ずっとよく面倒をみてくれたのだから、「我若害了他，天  
理也不容我（もしここで彼らを殺したら天の理も自分を許  
すまい）」と言って斷る。それを聞いた張青のことばであ  
る。

張青はなにを「義」と稱しているか。武松は護送役人二  
人と仲間として生死の誓いをたてたわけではない。わが身  
の自由を拒否してまで二人を救おうとした理由は、二人が  
道中武松を大切にあつかっていたこと以外に見當たらな  
い。そのような相手を自分の都合で殺すのは天理に反する  
と言うのである。「如此」の指す内容は直前の武松のこと  
ばに相違ないから、「自分によくしてくれた人には自分を  
犠牲にしても恩返しをしなくてはならない」という道理  
が「義」なのだと考えるしかない。他の場面で武松が護送  
役人に「33 難得你兩個送我到这里了、終不成有害你之  
心。……我們並不肯害為善的人、我不是忘恩負義的（きみ  
たちふたりがここまで送ってくれたのはありがたいことな  
のだから、殺そうなどと思うはずがないではないか。……  
われわれはよいことをする人は殺さない、恩を忘れて義に



そむくような者ではない」と言っているのもその傍證となろう。「7 那時我與宋江在他庄上相會、多有相擾。今日俺們可以義氣為重、聚集三山人馬、攻打青州（当時おれは彼のやしきで宋江に出會い、いろいろと面倒をかけた。いまおれたちは義氣を重んじ、三山の人馬をあつめて青州を攻めよう）」の「義」も同様に「世話になった人には恩返しすべきである」ということだろう。

類例の例は第十一回にも見られる。柴進の紹介で林冲は梁山泊に身を寄せんとするが、頭領の王倫はほかへ追いやろうとする。王倫の部下の杜遷は「34

哥哥若不收留、柴大官人見知道時怪顯的我們忘恩背義。日前多曾虧了他、今日薦個人來、便恁推却、發付他去（もし兄貴がうけいれなければ、柴大官人が知ったとき、われわれは明らかに恩を忘れ義にそむいていると氣を悪くされます。以前さんざん世話になっていながら、いま推薦してきただ一人を斷り、追い出すなんて）」と反對する。以前面倒をみてくれた人の頼みを斷るのは「義」ではないのである。

三十七 佐藤晴彦「《古今小説》における馮夢龍の創作（改稿）」  
「言語的特徴からのアプローチ」は、馮夢龍が書いた文章

『古今小説』卷八「吳保安棄家贖友」<sup>三十七</sup>。吳保安は、宰相郭震の甥で同郷人の郭仲翔に、面識はないものの自分の推舉をたのむ手紙を書いた。仲翔は保安を將軍李蒙の書記に推薦する。その後仲翔は李蒙にしたがって蠻族征伐におもむくが大敗、李蒙は自害、仲翔はとらえられた。蠻族は仲翔が宰相の甥と知り、絹千匹を身代金として要求する。仲翔は手紙で保安に、伯父に知らせてくれるよう頼むが、すでに郭震は死んでいた。保安は仲翔を救うため妻子を捨てて姚州へ行き、十年で絹七百匹をためた。一方保安の妻は困窮の末、息子を連れて保安を探しに姚州へむかう。途上、姚州都督の楊安居にたすけられ、事情を話す。安居は姚州で保安を探し出し、たりない絹を出してやり、とうとう仲翔をとりもどした。のちに仲翔は保安に「私恩」を返そうとするが、保安夫妻はすでに死んでいた。そこで保安夫妻をとむらい、石碑をたてて「棄家贖友」のこゝとを記した。また、朝廷に上奏して吳保安の息子・吳天祐を推薦した。

この話には二種の恩返しがある。ひとつは自分を推舉しである可能性が高いと推定している。

てくれた郭仲翔を、家族を犠牲にしても救い出さんとする呉保安である。その保安を安居は「此人真義士（真の義士だ）」と感じ、「慕公之義、欲成公之志耳（あなたの義を慕い、その思いをとげてほしいと思うだけです）」という理由で援助し、「為呉保安義氣上十分敬重（義氣があるとして敬う）」。もう一種は保安に救われた仲翔の報恩である。本人への恩返しこそかなわなかったものの、その息子を朝廷に推挙し、このときの上奏で「有恩必酎者亦匹夫之義（恩をうけたら必ず報いることが匹夫の義であります）」、「下臣酬恩之義（恩に報いるわたくしの義）」と述べている。他の官員たちは「雖然保安施恩在前、也難得郭仲翔義氣、真不愧死友者矣（保安がかつて恩をほどこしていたとはいえ、郭仲翔の義氣は得がたいものだ。さすがに生死をこえた友人である）」とたたえた。さらに死後は「雙義祠」にまつられた。

この話の原型は『太平廣記』巻百六十六におさめる『紀聞』「呉保安」<sup>三十八</sup>である。話の筋は『古今小説』とほぼ

<sup>三十八</sup>牛肅『紀聞』はすでに散逸している。『紀聞』「呉保安」については溝部良恵「牛肅『紀聞』について」・「呉保安」を中心に、「『中唐文學會報』第十一号、二〇〇四年」に詳し

おなじ。楊安居が呉保安の思いに感じ入る部分は「何分義情深、妻子意淺。捐棄家室、求贖友朋（なんと義に厚く、妻子への思いの薄いことか。家族を捨てて友を買いもどそうとするとは）」。「古今小説」の「慕公之義」にあたる部分は「思公道義」となっている。ほかにも「欽呉生分義（呉さんの義を尊敬したのです）」という安居のことばがある。恩返しの「義」の用法が『紀聞』が書かれた八世紀中葉からあることがわかる（ただし郭仲翔が呉保安の息子を推挙した行為は「義」とは言っていない）。さかのぼって『後漢書』にも呉保安が自分を推挙してくれた郭仲翔を蠻族から買いもどそうと苦勞したくだりがある。文中でこの行為を「義」と稱することはないが、巻百九十一「忠義傳」に収められていることから「忠義」のエピソードと考えられていたことがわかる。この「忠義」は笠井直美の言う損得を顧みず他者に尽くす「忠義」であろう<sup>三十九</sup>。

「三國志演義」に、曹操は袁譚を滅ぼしてその首をさらし、袁譚のために哭したものは三族皆殺しにすると宣告し

い。ここで溝部は二人の行動を「忠義」と表現している。<sup>三十九</sup>笠井直美「隠蔽されたもう一つの「忠義」——『水滸傳』の「忠義」をめぐる論議に関する一視点——」

た場面がある。以前袁譚に仕えていた王修はそれと知りながら袁譚の死體に哭した。皆殺しが恐ろしくないのでかとう曹操に、「畏死忘義、何以立世乎。吾受袁氏厚恩、若得收葬譚屍於殘土、然後全家受戮、瞑目無恨（死を恐れて義を忘れては世の中にはいられない。わたしは袁氏の厚い恩をうけたのだから、袁譚の死骸を葬ることができれば、そのあと一家皆殺しになろうとも心残りはない）」と答えた。曹操は「河北義士何如此之多矣（河北に義士のなんと多いことか）」と感嘆した（七卷六十五則）。

『輟耕録』卷七「義奴」にも同様の用例が見える。劉信甫は富商曹氏の下僕で、主人亡きあと息子を託されていた。その子が殺人の嫌疑をかけられた時、信甫はみずから身代わりに殺人犯の汚名をかぶり、同時に巨額の金銭をつかってついに冤罪を晴らした。曹氏の子はその費用を返そうとするが、信甫は「奴之富、皆主翁之蔭也。今主有難、奴救脱之、分内事耳（わたくしめの繁榮はすべてだんなさまのおかげです。いま主が苦難におちいり、それをわたくしめがお助けするのは當然のことです）」と言った。

これらの例から、「自分のためになにかしてくれた人に

は力をつくして恩返しをしなければならない」という考えを「義」と呼んだことがわかる。それをおきたれば非難され、當然と思われる程度を超えて恩返しをすれば評価はさらに高まる。武松が逃げ出す機会をふいにしたこと、信甫が自分の財産をはたいたこと、呉保安が家族を捨てたことなどはすべて、「義」の強さを強調し、評価を高める要素になっている。

では反対に、「人に悪いことをされたら仕返しをしなければならぬ」という考えも「義」といえるのだろうか。

鄒少雄は「義」の特徴に「有恩必報、有仇必復」をあげ、武松の仇討ちを例としている<sup>四十</sup>。武松は兄武大の仇の西門慶と潘金蓮を殺したうえで自首する。管轄の陽穀縣の縣官は情狀酌量しようとした。

35 念武松那廝是個有義的漢子、把這人們招狀從新做過。

武松が義のある男であることを思い、この人たちの供述書を作りなおした。（第二十七回）

この「有義」を鄒少雄は「肉親を殺されたら仕返しをす

るのが當然であり、武松はそれを果たす意志の強い男である」と讀んだのだろう。

#### 4 路見不平一聲吼 援助の「義」

梁山泊討伐に派遣された官軍の將・彭玘は、梁山泊軍にとらえられ、宋江のもとに連行される。宋江は手ずからその縛を解き、無禮をわびた。彭玘は「<sup>36</sup> 素知將軍仗義行仁、扶危濟困、不想果然如此義氣（將軍が義によって仁をおこない、危険や困難にある人を助けているとはもとより存じていましたが、これほどの義氣がありとは思ひもありませんでした）」と言う（第五十五回）。「義によって仁をおこな」うのだから、この「義」は「仁」をささえる行動原理と考えてよい。彭玘は捕虜であり、殺されて當然と思っていたのに、預想に反して宋江は自分を鄭重に遇した。そのことが「仁」であり、「弱い立場にある相手を害してはならない」という行動原理が「義」であるという假説が導き出せる。ほかにも不利な立場にある人を助ける「義」の用例はある。

梁山泊討伐軍の將・關勝が逆に梁山泊軍にとらえられ、配下の將・宣贊、郝思文とともに宋江のまえにひきだされた。宋江は連行してきた兵士をしかりつけ、みずから縄を

解いて無禮をわびた。そこに「<sup>37</sup> 關勝看了一般頭領義氣深重、回顧與宣贊、郝思文道『我們被擒在此、所事若何？』（關勝はいならぶ頭領たちの義氣が深いのを見、ふりむいて宣贊と郝思文に言った。『われわれはつかまってしまったが、どうしたらよいだろうか』）」とある（第六十四回）。

梁山泊軍が東昌府に攻め寄せた際、敵將の石投げの名手張清に苦戦し、何人もがその石つぶてで負傷した。ついに東昌府を打ち破り、張清を生け捕りにすると、恨みをもつ梁山泊の頭領たちは張清におそいかかろうとしたが、宋江は手を下してはならぬとしかりつけ、非禮をわびた。すると「<sup>38</sup> 張清見宋江如此義氣、叩頭下拜受降（張清は宋江のこの義氣を見て、頭を地にうちつけて拝禮し、降伏した）」（第七十回）。「如此」は直前の捕虜に手をくだしてはならぬという命をさすと考えられる。<sup>36</sup>、<sup>37</sup>、<sup>38</sup>のどれも、宋江には彼らを仲間にしうという意圖があつて助けられているのだが、捕まったものの視點を借りて「義」で表されているのは、「不利な立場にあるものを害してはならない」という、負けたものへの配慮であろう。

梁山泊の好漢・張順に出會った土地の老人が梁山泊の評

判を語る場面にはこうある。「<sup>39</sup> 老漢聽得說、宋江這夥端的仁義、只是救貧濟老、那里似我這里草賊（わたくしが聞くとくところでは、宋江たちはきっぱりとした仁と義があり、貧しきを救い老いたるを助けるとのこと、このあたりの盜賊とはちがいます）」（第六十五回）これも弱者に對する思いやりということだろう。

「三國志演義」にも同様の例がある。曹操に敗れた呂布が、徐州にいた劉備に身を寄せた。曹操は劉備を徐州牧に任命し、呂布を殺すよう命じた。張飛は呂布を殺したほうがよいと進言したが、劉備は「他人志極事窮而來投我。我若殺之、大不義也（彼はどうしようもなく私に身をよせてきた。それを殺したら大いなる不義だ）」（三卷二十八則）と答えた。

これらの「義」は、「不利な立場にある人や困っている人は害さず、援助の手をさしのべるべきだという考え」であることがわかる。その考えに基づいた救済が「思いやり」、「情け深い」と評価されれば「仁」、「不忍」、「慈悲」

<sup>四十一</sup> 明・楊慎『丹鉛總錄』（東京大學文學部所藏康熙五十九年序本）「人事類」に「諺曰慈不掌兵、義不主財」とある。「仗義疏財」（義を大切にし、惜しみなくお金を使う）という慣用句に應じて、つまり「義のある人はお金を管理できない」

などと描寫される。このため「義」と「仁」がほぼおなじ意味で用いられているように見える場合も少なくない。

『警世通言』第二十五卷「桂員外途窮織悔」には「慈不掌兵、義不掌財」という慣用句が引用され<sup>四十一</sup>、「為仁不富、家事也漸漸消乏不如前了（仁をなす人は金持ちにはなれない、家もしだいに貧しくなつて、昔のようではなくなつてしまふ）」と解釋が附されている。「義」と「仁」が「思いやり」という似た意味を表している。

この「義」はさらに、下心なく弱い立場の人を助けることをも表す。李贄『初譚集』卷十九「篤義」には、嚴植之という人が、病氣になつて雇い主に捨てられた人を助けて看病してやり、病氣が治つたこの人が感謝して植之の召使になりたいと申し出たが斷つたという話が見える。

「三國志演義」一卷六則では董卓の部下の李肅が、當時丁原のもとにいた呂布を味方につけるべく計略をめぐらす。李肅は名馬を呂布に送ることにするが、それはあくまで同郷のよしみを通じての呂布への好意という形にする。

のであり、ゆえに「義があると金持ちになれない」と言っているのだらう。『丹鉛總錄』では論語や易をひき、そんなこととはないのだ、と反論している。

「布謝肅曰『兄與此龍駒、布將何報之？』肅曰『某為義氣而來、豈望報乎。』」（呂布は李肅に感謝して言った。『大兄はこの馬をくださるというが、いかにこれに報いればよいのでしょうか。』李肅は言った。『わたしは義氣によって來たのです、お禮なんぞ望んでいません』」。

『醒世恒言』卷十「劉小官雌雄兄弟」では、嵐で難破した船から落ちた少年を助けあげ、家で介抱する劉老人を人々が「還是劉長者有些義氣。這個異鄉落難之人、在此這一回、並沒个慈悲的肯收留回去、偏他一曉得了便攙扶回家（やはり劉長者は義氣がある。この異郷で災難にあった人を、慈悲の心でひきとろうという人がひとりもないなかで、このことを知るなりつれ歸ろうとしている）」とたたえている。當人は「不忍之心人皆有之：若說報答便是為利了（見捨てられない心は誰でももっているものだ：お禮などと言われると、利益のためにしたことになってしまふ）」と言う。

この三例では純粹に相手のために行動し、その見返りは望まない態度を「義」と稱している。

四十二 佐藤晴彦「『警世通言』における馮夢龍の創作——言語的特徴からのアプローチ——」は馮夢龍の筆になると推定。

『警世通言』卷二十一「趙太祖千里相送京娘」<sup>四十二</sup>に興味深い例がある。趙太祖は若いころ、盜賊に軟禁されていた若い娘・趙京娘を救った。そして郷里まで護衛して送り届けることにした。その恩に感じた京娘は恩返しのために

も妻となってお世話したいと申し出るが、太祖は「實出側隱之心、非貪美麗之容（氣の毒に思う気持ちによるもので、美女を得ようとしたのではない）」<sup>四十三</sup>と言い、さらに頼むと、「你把我做看施恩望報的小輩、假公濟私的奸人（あんたはおれを、恩を賣って禮をのぞむけちなやつ、人のためのふりをして得しようとする腹黒いやつだと思っているのか）」、「本為義氣上千里步行相送、今日若就私情、與那兩個响馬何異（そもそも義氣のために千里の道を歩いて送ろうとしているのに、いま私情にはしれば、あの二人の盜賊となにも違わぬではないか）」と怒りだす。無事に京娘を郷里に送り届けると、京娘の家族も太祖が京娘を娶ることを望む。京娘が「公正直無私。：此事不可題起（公子はまっすぐで私心のない人です。：この件を持ちだ

四十三 『孟子集注』卷三に「惻隱之心、仁之端也」とあり、これによれば太祖の行為は「仁」であるともとれる。

すのはやめてください」と言うのも無視し、また怒らせてしまう。太祖は「俺為義氣而來、反把此言來汚辱我。俺若貪女色時、路上也就成親了、何必千里相送。你這般不識好歹的、枉費俺一片熱心（おれは義氣のためにきたのに、逆にこんなことばで侮辱しやがった。もし女色をむさぼるのなら道中でものにしてしまえばいい。千里の道を送る必要なんかなかったはずだ。もののわからんやつらめ、人の気持ちをむだにさせおって）」と飛び出してしまふ。他者救済の心「義氣」は純粹に相手のためであり、なんらかの利益を求めたものではないこと、その動機は最後までずつと維持しつづけるべきもので、なにがあるかと變えてはいけないということ、もし心變わりをすればはじめからそれが目的であったかのように見え、動機が汚されてしまうことなどが読みとれる。京娘が恩返しをしようとするのは京娘側の「義氣」だとも言えようが、太祖にとっては「義」を實行するに當たつての障礙にすぎない。相手方の義氣をまったく受けないというのだからこれはいささか極端な例であるが、「利益を求めず純粹に他者を救済しようとする

四十四 鄒少雄「論《水滸》的文化精神」は梁山泊の「義俠」の特徴の第一にこの路見不平、拔刀相助」をあげる。この場面のほ

る、「障礙や誘惑があらうと、當初の意志、決定をつらぬこうとする」ことも「義」の要件なのである。

これをふまえてふたたび水滸傳を讀んでみよう。

40 「我弟兄兩個也是外鄉人、因見壯士仗義之心、只恐足下拳手太重誤傷人命、特地做這個出場」

「われわれ兄弟二人（戴宗・楊林）もよその土地のものです。壯士の義による心を見て、あなたのこぶしが強すぎて人をあやめてしまうのではないかと心配し、こうして首をつっこみました」（第四十四回）

楊雄が數人がかりで襲われている場面に遭遇した石秀は、それまで一面識もなかったにもかかわらず助太刀にはいつた。40はそれを見た戴宗が石秀に言ったことば。この前にも戴宗は「端的是好漢！此乃路見不平、拔刀相助。真壯士也！（まったくの好漢だ。これこそ道で不正をみかけたら助太刀するというもの。まことの壯士だ）」<sup>四十四</sup>と感想を

かにも、第四十九回で無實の罪で投獄された解珍・解宝兄弟について牢役人の樂和が言った小人路見不平、獨力難救。只想一者占

もらしている。「不利な状況にある人は助けなければなら  
ない」という行動原則「義」があり、それにもとづく「わ  
が身が危険な目にあうこともかえりみず助ける行動」を  
「壯」と評価したのである。

## 5 用力於人道之所宜 〱 道理の「義」

例3で、牢役人・葉孔目が「仗義疏財」であるがため、  
無實の罪で投獄された武松をかたづけするようにと渡された  
金を受けず、逆になんとか助けてやろうと思案していた場  
面をとりあげた。その葉孔目を武松の支援者である施恩が  
こう評している。

41 「這人忠直仗義、不肯要害平人、亦不貪愛金寶」

「この人はまじめでまっすぐ、義に従う性格で、無  
實の人を害 そうとはせず、金銀財寶もむさぼらな  
い」(第三十回)

3の「疏財」と41の「不貪愛金寶」がわいろを受けない

親、二乃義氣為重、特地與他通個消息(不正をみたら助けるべ  
きだが、ひとりではむずかしい。ひとつには親戚でもあるし、ふたつには

ことをさすのは確かである。では「仗義」とはどういうこ  
とか。

42 知府道「雷横為何打死了那娼妓？」朱仝却把雷横上項  
的事備細説了一遍。知府道「你敢見他孝道、為義氣上  
放了也」

知府が言った。「雷横はなぜその娼妓をなぐり殺し  
たのか」。朱仝は雷横の一件をことこまかに語つ  
た。知府は言った。「きみは彼の親孝行を見て、義  
氣から彼を逃がしてやったのだろう」(第五十一  
回)

白秀英殺しの罪で流刑となった雷横を、護送を担当した朱  
仝はわざと逃がす。42はその罪で配流された朱仝と、配流  
先の知府との会話である。雷横は白秀英に母親を侮辱され  
たことに怒って白秀英を殺した。これを知府は「孝道」と  
稱している。親を侮辱から守るという理由があつての殺人  
であつたゆえに逃がしてやったのかという問いである。

義氣をおもんじることを思い、特に彼らに事情を知らせたのです」  
など八例ある。



これは武松の仇討ちにも共通する。兄・武大を毒殺した潘金蓮と西門慶を殺した武松は陽穀縣に自首する。陽穀縣縣官は武松の上司であり、そのよしみから刑を軽くしてやりたいという思いもあるものの、どうやら理由はそれだけではないようである。

43 縣官念武松是個義氣烈漢、又想他上京去了這一遭、一心要周全他、又尋思他的好處。

県官は武松が義氣の烈しい男であることを思い、また都へ（使いに）行ってくれたことを思い、ひたすら彼に便宜をはかってやろうとし、また彼の有利な點を考えた。（第二十七回）

その後、上級の東平府へ送られた武松を扱ったのが府尹の陳文昭であった。

44 陳府尹哀憐武松是個有義的烈漢、如常差人看覷他。

陳府尹は武松が義のある豪傑であると同情し、つねづね人を見舞いにやった。（第二十七回）

陽穀縣縣官は武松と事件以前からつきあいがあるが、陳府

尹が武松について知っているのは事件のことのみである。その情報から武松をどのように「義がある」と評したのか。それは雷横の場合と同様、兄の仇討ちという「まっとうな理由にもとづいて行動した」ということではないか。

3、41の葉孔目、43の縣官も同様であろう。葉孔目は、武松は冤罪であり、罪を負わせる正當な理由はないと考えた。賄賂は武松を有罪にする「まっとうな理由」にはならない。その「まっとうな理由がなければ行動しない」態度が「義」なのだろう。縣官、陳府尹は、武松の殺人には兄の敵討ちというまっとうな理由があることを最大限に考慮してやろうとした。とはいえ、殺人を犯した以上、無罪にはできない。まっとうな理由にもとづいた行動でも、その行為が社会秩序を亂したと判断されれば「正義」とは呼ばれず、他者に貢献した、少なくとも害を及ぼさなかったと判断されれば「正義」になる。ゆえに、一部の人には「正義」に見えるが他の人からみれば「正義」ではないという行為も十分あり得る。「正義」とはあやふやなものである。

『醒世恒言』卷三十「李汧公窮邸遇俠客」に、暗殺のため劍俠を雇おうと相談する場面がある。「有一人悄對小人說『那人是个劍俠、能飛劍取人之頭、又能飛行、頃刻百

里。且是極有義氣、曾與長安市上代人報仇、白晝殺人、潛綜於此。』相公何不備些禮物前去、只說被李勉陷害、求他報仇（ある人がこっそり私に教えてくれました。『あの人は劍俠で、劍を飛ばして人の首をとることができ、またひとつ飛びでまたたくまに百里を行くことができる。そのうえ非常に義氣があり、かつて長安で人のために仇討ちをし、白晝人を殺し、行方をくらましていた』と。ご主人は贈りものを用意して行き、李勉に陥れられたので仕返しをしたいと言えましょうございます）。この人は義氣があるので、人殺しを引き受けてもらうには理由が必要である。そして理由さえきちんとしていれば罪を犯すことも辞さず、「他是个義士、重情不重物、得三百金足矣（彼は義士ですから、情を重んじ、物品は重視しません、三百金もあれば十分でしょう）」というように、報酬には淡泊なのである<sup>四十五</sup>。

「三國志演義」の呂伯奢一家殺しのくだりにも「義」が使われている。曹操は陳宮とともに逃亡中、父の義兄弟の

<sup>四十五</sup> 佐藤晴彦「『醒世恒言』における馮夢龍の創作（II）——言語的特徴からのアプローチ——」は明人の文章と、Patrick HANANも馮夢龍以外の明人が書いたものと推定。李肇『唐國史補』（『唐國史補等八種』世界書局、一九六二年）巻中、

呂伯奢の家に立ち寄って休ませてもらった。その呂伯奢の外出中、刃物をとぐ音と「縛って殺そう」という声を聞いた曹操は、呂伯奢の家族が自分の命を狙っているのだと思い、皆殺しにしてしまう。ところが家族は豚を殺そうとしていただけだった。あわてて家を出た二人は呂伯奢が戻ってくるのに出くわし、曹操は呂伯奢をも斬り殺してしまった。そこに「操曰『伯奢到家見殺死親子、安肯罷休。吾等必遭禍矣』。宮曰『非也。知而故殺、大不義也』。」（曹操は言った。『伯奢が家について家族が殺されているのを見たらそのまま放っておくはずがない。われらは必ず災いにあつてしまう』。陳宮は言った。『それはちがう。〔敵意がないと〕知っていながら殺すのは大いなる不義だ』。）」とある（一卷八則）。殺す理由がないのだから曹操の行爲は認められないというのである。これと反対に、葉孔目には世間の大多数の人が賛同する行動原則があり、雷横や武松の場合も、母の名譽のため、殺された兄のためという理由があるので酌量の余地は十分にあった。む

『唐語林』（古典文學出版社、一九五七年）巻四に収めるこの話には「義」は見えない。『太平広記』巻百九十五では「義」と稱していて、この話を「義俠」と題す。

しろ罪を犯すこともかえりみずになすべきことをしたと評価されてすらいる。だからこそ朱全が、自分が罪人となろうとも「孝」という根據にもとづいて殺人を犯した雷横を逃がした行爲が理解を得られるのである。

## 6 さまざまな「義」

「義」が用いられる環境を五項目にわけて整理してきたが、無論あらゆる例がはつきり分類できるわけではなく、中間的な例や複合的な例もおおい。はつきりと境界線を定められないということは、「義」のそれぞれの意味が孤立して相互無關係に存在しているのではないことを證明しているとも言える。

第四十三回に、李逵がとらえられ護送される場面がある。その護送を担当していた李雲のまえに、李雲に棒術の手ほどきを受けていた朱富が現れ、李雲以下護送役人に祝い酒をふるまった。これは李逵を救うための計略で、酒にはしびれ薬が入っていた。李雲たちが麻痺している間に李逵らは梁山泊へむけて逃げるが、朱富は途中で残り、李雲が追ってくるのを待つことにした。

45 「我想他日前教我的恩義：就請他一發上山入夥、也是

我的恩義、免得教回縣去吃苦。」

「彼が以前教えてくれた恩義を思い：彼を誘いともに梁山泊にのぼり仲間入りすることはまた私の恩義です。縣に戻ってつらい目に遭わせずにすみます」

（第四十三回）

ひとつめの「恩義」は「思いやり」であろう。ふたつめは「恩返し」でもあり、「私からの思いやり」でもある。

46 「忘恩背主、負義匹夫。」

「恩を忘れ主君に背く、負義の匹夫め！」（第六十七回）

官軍から梁山泊に降った單廷珪を、もと同僚の魏定國が非難している。「負義」は「朝廷から受けた恩に背く」とであると同時に「朝廷とのつながりを断ち切る」意でもある。

「團結」と「援助」の例も多く目につく。第二十二回、殺人を犯した宋江を、捕り方ながら宋江とつきあいのある朱全が逃がしてやった場面の回目「47 朱全義釋宋公明

（朱全義もて宋公明を釋す）」がそうである。郷里の母と師のもとへ帰った公孫勝を、戴宗と李逵が迎えに行った時、公孫勝の師・羅真人が「48 今為汝大義为重、權教他去走一遭（いまはおまえたちの大義を重んじ、ひとまず彼を行かせよう）」（第五十三回）と言ったのも、「ひとたび義を結んだ仲間が危機に陥ったらかつての關係を忘れずに助けるべきである」という道理であろう。42に續く場面で呉用に會った朱全は「49 雷橫兄弟他自犯了該死的罪、我因義氣放了他（雷橫兄弟は死罪にあたる罪を犯したが、わたしは義氣によつて逃がした）」（第五十一回）と言う。この「義」は、42と同様に解すこともできようが、雷橫と同僚であり友人でもあつた朱全自身のことばであるから、「交友ある人は助けるべきだと判斷した」と讀んでもよいだろう。そして逆に、「義をむすんだ相手なら自分の危機を救つてくれるはずだ」という期待も成立する。病にかかつた宋江が江南に名醫がいると聞き、「50 兄弟、你若有這箇人、快與我去、休辭生受、只以義氣为重（弟よ、そのような人がいるのならはやく行つてきてくれ。勞苦を厭うてくれるな。ただ義氣を重んじることだけ考えてくれ）」（第六十五回）と言つたのがそれである。

「團結」と「約束」とは密接な關係にある。決して變わ

らない關係をとりむすぶことは約束の一種である。時にその約束の内容を「誓」、「願」などによつて明確に讀者に示している場面もある。

第二回で史進が少華山の賊の一人陳達をとらえる。残る二人も生捕りにしてやろうと息巻く史進のもとにその朱武と楊春がやつてきて、陳達とともに捕まえてほしいと言う。朱武は「51 小人等三箇：當初發願道、不求同日生、只願同日死。雖不及關張劉備的義氣、其心則同（わたくしども三人は：はじめに願をたてました：同日に生まれようとは望まぬが、同日に死なんと願うばかり。關・張・劉の義氣には及ばぬとはいえ、その心は同じです）」と言う。史進はこれを見て「52 他們直恁義氣、我若拿他去解官請賞時、反教天下好漢們耻笑我不英雄（これほど義氣があるというのに、もし彼らを官につきだして恩賞をもらつたりしたら、天下の好漢たちに、英雄にあらずと笑われる）」と思ひ、「53 你們既然如此義氣深重、我若送了你們、不是好漢（これほど義氣が深いことから、もしおまえたちをつきだしたらおれは好漢ではない）」と言ひ、三人ながらに許し、歸らせる。この「義氣」は、「死ぬまで運命をもにするとする」といふ誓ひを決して反故にしない氣概」と解釋できよう。「關・張・劉」は言うまでもなく「桃園結義」の

三人をさす。「三國志演義」一卷一則に「三人焚香再拜、而説誓曰…『念劉備、關羽、張飛雖然異姓、皆為兄弟、同心協力救困扶危、上報國家下安黎庶、不求同年同月同日生、只願同年同月同日死。皇天后土、以鑒此心、背義忘恩、天人共戮！』」（三人は香を焚いて再拝し、誓いをたてて言った。『劉備、關羽、張飛は姓は異なるが、兄弟となり、心を同じうし力をあわせ、困難にあるものを救い、危うきにあるものを助け、上は國家に報い、下は庶民を安んじ、同年同月同日に生まれたいとは願わぬが、ただ同年同月同日に死せんことのみを願う。天地の神々はこの心に鑑み、義に背き恩を忘れるものあらば、天も人もこれを誅すべし』）とあり、最後までともにあること、裏切らないことをはつきりと約している<sup>四十六</sup>。

第十五回、生辰綱強奪のためにあつまった六人（このときまだ公孫勝は加わっていない）は「個個説誓道（それぞれ誓いをたてて言った）：『我等六人中、但有私意者、天地誅滅、神明鑒察（われら六人のなかに私心をいだくものがあれば、天地がこれを誅殺し、神明もこれを了察されよ

う）』と、個人よりも結束を優先させることを約している。不法行為をするにあたり、絶対に裏切らないことをかさねて強調する必要があったからだろう。

『宣和遺事』にも「誓」で強調される「義」が見られる。花石綱運搬の任にあたった十二人はまず「結義為兄弟、誓有災厄、各相救援（義を結んで兄弟となり、災厄があれば助けあうことを誓った）」。このうち十人は無事に運搬を終えるが、楊志は孫立を待っていて遅れてしまった。そのうち雪にふりこめられて動けなくなり、路銀も不足してきたのでやむなく寶刀を賣っていたところごろつきにからまれ、そのごろつきを斬り殺してしまう。楊志は罪人となり護送されることになった。その楊志に出會い一部始終を聞いた孫立は「楊志因等候我了犯著這罪。當初結義之時誓有厄難相救（楊志はおれをまつていて罪を犯したのだ。かつて義をむすんだとき、災いや困難があれば助けようと誓ったではないか）」<sup>四十六</sup>と思ひ、ほかの十人とともに護送役人を殺し、みなで太行山に落草した。ここには、兄弟として助けあうという誓いと、十人は運搬をつつがなく終えて

四十六 「水滸傳」が「三國志演義」のこの場面を直接引用したという限定的な意味ではない。「桃園結義」は史書には見え

ないものの、「花關索傳」の冒頭にも見えるように、民間の三國語りでは広く知られた場面であつたと思われる。

いるのだからそのまま安穩としていることもできたのに、罪を犯しても誓いを履行しようとする態度が見てとれる。

この種の約束のもっとも大規模なものが第七十一回にある。天からくだされた石碑により、梁山泊につどった百八人はすべて天上の星に對應する仲間であることがわかった。宋江が「必須對天盟誓、各無異心、死生相托、吉凶相救、患難相扶、一同報國安民（おのおの二心なく、生きるも死ぬも信賴しあい、めぐりあわせのよいときも悪いときも、艱難にあつても助けあい、みなで國家に報い、民衆を安んじることを天に誓わなければならない）」と言い、百人はその通り誓った。

54 宋江為首誓曰「……若是各人存心不仁、削絶大義、萬望天地行誅、神人共戮、萬世不得人身、億載永沉末劫。但願共存忠義于心、同著功勳于國、替天行道、保境安民、神天察鑒、報應昭彰」

宋江を先頭に誓つて言うよう、「もし各々が心に不仁をもち、大義を消し去ることあらば、天も地もこれを誅し、神も人もこれを刺し、萬世人の身となることを得ず、一億年の長きに末法の劫に沈まん。ただ願うはともに心に忠義を存し、ともに國に功勳を

あらわし、天に替わつて道を行い、境を保ち民を安んじ、神も天もご覧じ、報いを明らかにされん」と。

本文ではこれを「梁山泊大聚義處」と稱している。第九十回にもかさねて「設誓道『只願弟兄同生同死、世世相逢』（誓いをたてて言った。『ただ願うは兄弟たちがともに生きともに死に、未來永劫めぐりあえること』）」とある。これらは「誓」をたて、「義」による結束、決して裏切らないことを再確認しているのである。

『新刻繡像批評金瓶梅』（崇禎本）第一回の西門慶ら十人が「結拜兄弟」になる場面は桃園結義を模している。形式こそ模倣しているものの、その實態はいつもつるんで遊びまわっているという程度にすぎない。ここで讀者は水滸傳や三國志演義の命がけの結義を思い出し、そのギャップにやりとしたのだろう。水滸傳にはかように結義を茶化して遊ぶ余裕は見られない。パロディを作るには、その基礎に誰もが知っている意味・用法があることが必須である。金瓶梅は三國志演義や水滸傳の「義」を誰もが思い起こせることが大前提になっているのである。

#### 四・「義」の核心義

##### 1 「義」の共通項

これまで各項にわけて見てきた「義」には共通点があった。それは、「このような立場にある人はこう考えるべきだ」という規範意識である。それが場面に應じて、「仲間になったらその関係を維持しつづければならない」、「約束をしたらその通り実行しなければならない」、「人に世話になったらそのことを忘れず、恩返しをしなければならない」、「助けが必要な人がいたら手をさしのべねばならない」などさまざまな形で現れる。さらに、いかなる障碍があろうとも最後までやりぬく決意が必要であり、自分を犠牲にする覚悟まであればより高い評価が與えられる。六十七回回頭の詩で古今の俠客をたたえて「<sup>54</sup> 丈夫取義能捨生、豈學曹兒誇大口（大丈夫は義をとり生を捨てる、こどもが口先だけ大きなことを言うのとはちがうのだ）」という。「命を捨てても義をつらぬく」ことが最高の評価なのである<sup>四十七</sup>。

逆に、すべきであることをしなかったり、途中でやめた

り變更したりすれば「背義」、「負義」などの語をもって批判される。そのなかでも特にいけないのは個人的な事情、利益によるもので、「私」、「利」と指弾される。一度定まった目的は徹底的に「公」であり、個人的事情よりも優先しなければならぬのである。

以上をまとめると、「義」の核心は「人間関係を律する規範意識」であり、「道義的理由」にもとづいて「やらねばならぬことをなしとげんとする」こと、俗に言えば「筋をとおす」ということである。また、そのような意識を持つて行動することの宣言である。他人の「義」を助けることも「義」であり、他者の「義」を妨げること、害することとは「不義」である。さらに個人的事情、利益を犠牲にする程度、障碍をのりこえる程度の高さが「義」をつらぬこうとする意志の強さをあらわす。これらの要件を満たしたものが水滸傳におけるもつとも「義らしい義」である。

「義」の条件のなかでもつとも重要なのが「道義的理由」であるが、同時にこれはあいまいな条件でもある。たとえば、「仲間を裏切つてはいけない」と言えば、至極正

<sup>四十七</sup> 姜国鈞「“义气”词义演变探析」（《邵阳师范高等专科学校学报》第二十二卷第六期、二〇〇〇年）は、「義を重んじ

利を輕んじる」ことが強調されたために、義は單純な「自己犠牲」の意味にまで縮小されていったという。

當な道義的理由に見えるが、これが一般庶民同士の助け合いではなく盗賊仲間の助け合いとなれば、「道義的」と感じない人も出てくる。當事者にとつてはまっとうな理由であつても盗賊の被害にさらされるものからすれば、犯罪者を助けることのどこが道義的かとも言いいたところだろう。しかし當事者はたしかに「筋を通そうとする動機」にもとづいて行動しているのであり、そのことは誰も否定できない。

「いかなる障碍をも乗り越える」も同様である。この「障碍」が他者の利益である場合はどうなるのか。國家や法である場合はどうなるのか。利益を侵される立場や、國家の側からすれば、それは許せないということになる。

水滸傳の主役は落草したものであるから、彼らにとつてなすべきことが一般の人には受け入れがたいことはまある。彼らが「義」をつらぬく際の障碍が一般人の利益や國家の法であることはいくらもある。「正義」を「世の中の壓倒的多数の人や國家の法が認める行動」と定義した

場合、彼らの行動に「正義」に反すると言えるものが多く含まれることは間違いない<sup>四十八</sup>。ここから、水滸傳の

「義」は正義とは別のものだという論法が生まれる。しかしそこを重要な境界と見ることは適當なのだろうか。例6では武松が、自分が逃げ出す機會をふいにしてもいままでも世話になった護送役人を助けようとする。これは合法である。例7では、以前世話になった人が投獄されたので牢破りに行こうと言う。これは違法である。しかしこのふたつの行動の動機に目を向ければ、世話になった人を助けたいと思い、目的を果たすために障碍をのりこえたという性質においてはなんら變わりはなく、編纂者もその共通點に注目してひとしく「義」と稱しているのではないか。結果として表れる行為が合法であつたか違法であつたかはこの語の定義にかかわる本質的な問題ではない。ただ、「道義的に正當な理由」、「排除すべき障碍」という意識を共有できる人間關係の範圍がその人、その時の立場によって異なるのである。當事者はそれぞれの人間關係の範圍においてな

<sup>四十八</sup> 中鉢雅量『中国小説史研究——水滸傳を中心として——』も「義は仲間内の助け合いの精神であるが」、「各人はそれに拘束され、本心に反する言動や反社会的な行動を余儀なくさ

れることもある。彼らがその義を実践した行動は、一般的な正義や社会正義と一致する場合もあるが、それらと抵触するケースが少なくない」と言う（九十七頁）。



すべきことをする。國家の法の支配下にある人たちはその秩序がひとつの單位である。また、個人同士という單位があり<sup>四十九</sup>、家族という單位があり、同業者集團という單位があり、盜賊集團という單位がある。定住民社會と非定住民社會もこの單位のひとつと見なすことができよう。

## 2 定型表現について

水滸傳中の「義」は、編纂された當時の言語感覚にもとづいて使用されたものがほとんどであろう。しかしなかに一字ごとの意味を追求することなく慣用表現、定型表現としてひきつがれているとおぼしきものもある。

「不義（之）財」は第十四回から十六回の三回で、計六度現れる。<sup>55</sup> 此等不義之財、取之何碍（これは不義の財、奪ってなんの問題があるものか）（第十四回）、「<sup>56</sup> 梁中書在北京害民詐得錢物、却把去東京與蔡太師慶生辰。此一等正是不義之財（梁中書は北京で民を苦しめ、財物をだましとり、東京の蔡太師の誕生日祝いに贈ろうとしています。これはまさに不義の財です）」（第十五回）のように用いられる。この言いかたは古くからあり、漢・劉向『列

女伝』『齊田稷母』には、齊の宰相田稷子が吏から贈られた金を母に贈ったところ、母は君に仕え祿を食むものがその他の方法で得た金は「不義之財」だと非難したとある。宋・洪邁『夷堅志』支丁卷第四「張妖巫」では妖術で人を病死させることのできる男が人々にさしださせていた財物を「不義之財」と表現している。宋・周密『癸辛雜識』別集上「楊髡發陵」では、皇族の墓あばきをして得た財寶を「不義之財」とする。これらは「正當ならざる手段で得た財物」と解釋できる。水滸傳における梁中書の財物も民から搾取したものであり、本来ならば彼のものであるべきではない不當な財産だと言いたいのだろう。ただ、晁蓋には搾取された住民を助けようという目的はなく、財寶を自分たちのものにしており、「義賊」としては不完全な描寫になっていることから見て、古くからある言いまわしを踏襲したのみで、この「不義」と晁蓋らの「義」との関係は考慮されなかったようである。また類似の表現に、魯智深から布施を受けた智真長老の「<sup>57</sup> 吾弟子此物何處得來？無義錢財、決不敢受（わが弟子よ、これはどこから得たものか。無義の財物は受けとれぬぞ）」（第九十回）がある。

範圍は個人間の「私誼」にまで縮小していると言う。

これも財物の入手方法を問う、共通の発想であるが、『列女傳』の例と同様、不正な手段によって手に入れた金銭であるならば受けとるわけにはいかないという、智真長老自身の「義」にも對應して用いられている點で、晁蓋らの「不義之財」の用い方と異なる。

「仗義疎財」も多く見られる。「仗義疎財」、「疎財仗義」、「好義疎財」あわせて三十二例ある（異體字の「疎」、「疏」を含む）。このうち、58 想起大官人仗義疎

財、特來投達（あなたが仗義疎財であることを思い出し、身を寄せにきたのです）」（第二十二回）は「友人を私財をもつて助けてくれる」意であるし、3の葉孔目の場合は正當な裁きをするために賄賂を拒んだことが明記されていて、どのような「義」をなすためにどのような「財」を捨てたかが明確にわかる。しかしそれ以上に多いのが、個別、具體の行動なしに人柄を「仗義疎財」と稱する例である。それらのうちにはのちにたしかに「義」のために財を捨てているものもある。第十四回の登場時に「仗義疎財」と紹介される晁蓋は、のちに仲間とともに逃亡するために自分のやしきと家財を灰にしている。柴進も行き場のない

人を自分のやしきに住まわせ、金品を援助している。一方で59 原是本處富戸、只因他仗義疎財、結識江湖上好漢（もともとこの土地の金持ちのもの、ただ仗義疎財であるがために、江湖の好漢たちと交友がある）」（第十三回）と紹介される朱全は、「義」にあつ場面はあるが私財を投じる場面はない。宋江もさかんに「仗義疎財」と言われるものの、「せいぜい貧乏人には金銭をめぐみ、博奕打ちから金を何べんたかられても怒らないくらいの程度<sup>五十</sup>」と皮

肉られてしまう。「仗義疎財」は實際をとまなう場合もあるが、それ以上に人格をほめるときに定型句として使われている節がある。これは「水滸傳」にはじまったことではない。『舊唐書』卷百七十一では李景儉は「疏財尚義」であつたため、死んだ日にはその名を知る人たちはみな惜しんだとあるが、具體的にどのような「疎財」を行ったのかは書かれていない。『金史』卷九十五で「疏財尚義」とさされている董師中も、弟の子を推舉したことを「上義之（皇帝はこれを義とした）」と書かれているのみで、具體的な「疎財」行爲には言及がない。このような場合、「義のためなら私財を惜しまぬほどの気概がある」というほどの意

味で、「疎財」は「仗義」の程度の強さをあらわす修飾成分と解しておけばよいのではないか<sup>五十一</sup>。

これに對し、戴宗が「貪財背義ではない」ことを李逵の長所としてあげているように（第五十三回）、「金品の誘惑に負けて義にそむく」は、人格を非難することとなる。

水滸傳によく見られる定型表現にまた「義士」があり、七十一例見られる。そして、前後の文脈と照らして「義士」と稱する理由がはっきりわかる例よりも、わからない例のほうが多い。第四十八回、宋江が李家莊の主人・李應に對面を求める際に「義士」と自稱する場面、第五十九回、呉用が宿元景大尉に對して宋江を「義士」と稱する場面などは「怪しいものではない」という意味であらうし、第八十回、梁山泊征伐におもむき、逆にとらえられてしまった高俅がしきりに宋江を「義士」と呼ぶのは相手のご機嫌をとるためである。「義士」は、ほめことばとしてすでに定着しており、いちいち具體性を求める必要はないのだ

<sup>五十一</sup> 具體的にどの行為をさすのか、はっきりわかる場合もある。朱有燉『黒旋風人仗義疎財』雜劇では、上納する米がなくて困っている親子に李逵が梁山泊の糧米をめぐんでやった行為をさして「仗義疎財」と言っている。『散家財天賜老生兒』雜劇では、男の子の生まれない男が、私財を投じて貧し

ろう。

## 五・水滸傳と明代の空氣

### 1 四書との比較・刷り込まれた「義」

「義」は經書にも見える徳目である。水滸傳の編纂者はおそらく知識人であり、その想定する讀者にも知識人がふくまれている。知識人は科擧に應じるための勉強を経験したものであり、幼い頭に經書を徹底的にたたきこまれたはずである。そこに見える「義」の含意が彼らの思考に多かれ少なかれ影響を及ぼすことは避けられまい。明代は朱熹の注釈した四書にもとづいて科擧がおこなわれていたから、明代の四書の「義」の理解はすなわち朱熹を通じて「義」理解である。そこで、『論語集注』（以下「論語」）、『孟子集注』（以下「孟子」）、『中庸章句』（以下「中庸」）、『大學章句』（以下「大學」）に現れる「義」がどのように説明されているかを簡単に見ておきたい<sup>五十二</sup>。

い人や困っている人を救い、功德を積むと言い、そのことを歌のなかで「仗義疎財」と言う（元刊雜劇三十種本、酹江集本による。元曲選本には現れない）。

<sup>五十二</sup> 四書における「義」の整理に際しては溝口雄三ほか編『中国思想文化事典』（東京大学出版会、二〇〇一年）「義」

四書およびその朱熹注（以下、朱注）<sup>五十三</sup>において

「義」は「宜」という語で説明されることが多い。「義者、事之宜也」（「論語」卷一朱注）、「義者、天理之所宜。利者人情之所欲」（「論語」卷二朱注）、「所行合宜」（「論語」卷六朱注）、「好義、則事合宜」（「論」卷七朱注）、「義、人之正路也」朱注「義者、宜也」（「孟子」卷七）、「義、人路也」（「孟子」卷十一）朱注「義者、行事之宜」、「義者、宜也」（「中庸」第二十章）朱注「宜者、分別事理、各有所宜也」などがそうである。朱熹の高弟であった陳淳の記した『北溪字義』<sup>五十四</sup>でも「義就心上論、則是心裁制決斷處。宜字乃裁斷後字。裁斷當理、然後得宜。：且如有一人來邀我同出去、便須能剖判當出不當出（義は、心について言えば、心でよく考え決斷することである。宜は決斷した後のことをいう語である。決斷が理になくなっていけば宜しきを得る。：たとえばある人が一緒に出かけようと誘いに來たら、出るべきか出ざるべきかを判斷しなければならぬ）」、「到那義、裁斷千條萬緒、各得其宜、亦都渾是這天理流行（義に至るとは、あらゆることを考えて

を參考にした。

<sup>五十三</sup> 『四書章句集注』（中華書局、一九八三年）を使用し

決斷することで、それぞれが宜を得るのもまたすべてこの天理が廣がったものである」（卷上「仁義禮智心」と説明する。その場の状況を見て適切な行為はなにかを判斷し選擇するというのが「義」の基本的な意味のようである。ではなにをもって適切と見なすのか。次のような解説がある。

「君子有勇而無義為亂、小人有勇而無義為盜（君子に勇があり義がなければ亂になる、小人に勇ありて義がなければ盜になる）」（「論語」卷八）、「害義者、顛倒錯亂、傷敗彝倫（義を害するとは、順序を亂し、人倫を損ねることである）」（「孟子」卷二朱注）。「義」の目的は人と人との關係の秩序を保つことであるから、適切な判斷とはすなわち秩序維持という目的にかなった判斷である。その判斷には具體的にどのようなものがあるのか。「孟子」卷七には「義之實、從兄是也（義の實は、兄に従うことだ）」、その朱注に「義主於敬而敬莫先於從兄（義は敬をつかさどり、敬は兄に従うことより優先するものはない）」とあり、卷十三にも「敬長、義也（年長者を敬うことは義である）」

た。

<sup>五十四</sup> 陳淳『北溪字義』（中華書局、一九八三年）

とある。

年長者を敬うことは長幼の序を守ることにつながる。

「孟子」巻五には「父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信（父子に親あり、君臣に義あり、夫婦に別あり、長幼に序あり、朋友に信あり）」とある。この一文は「論語」巻九「子路曰『不仕無義。長幼之節不可廢也。君臣之義如之何其廢之？』（子路が言った。『仕官しないことは義がないことである。長幼の序は廢してはならない。君臣の義をどうして廢することができようか』）」に對する朱注にも引用されている。また、「禮義、所以辨上下定民志（禮義とは上下の區別をし、民の心を定めることだ）」ともいう。

なすべからざることを適切に判斷するのも「義」である。「人能充無穿踰之心而義不可勝用（人は盗みをしない心がいつぱいになれば、用いきれないほど義があることになる）」（「孟子」巻十四）、その朱注「能滿其無穿踰之心而無不義矣（盗みをしない心が滿ちれば義でないものはない）」、「言不及義、則放辟邪侈之心滋（ことばが義におよばないとは、ほしいままに不正なことをする心のこと）」（「論語」巻八朱注）のように、したいことでも、その行為が秩序を亂すのならば、しないという判斷をくださねば

ならない。そのため、「義者、人心之裁制（義は人の心を抑えるものである）」（「孟子」巻三朱注）という解釋も生まれる。欲望と社會秩序とが對立する場合は自制するのが「義」である。「人皆有所不為、達之於其所為、義也（人はみなしないことがある。これをそれまでしていたことに及ぼしたものが義である）」（「孟子」巻十四）。その朱注に、この抑止する心が義のはじまり（端）なのだと言う。

自己の欲望と同様に「義」と對立するものに「利」がある。たとえば、「君子喻於義小人喻於利（君子は義にもとづいて理解し、小人は利にもとづいて理解する）」、朱注「義者、天理之所宜。利者人情之所欲（義は天の道理がふさわしいとすること。利は人の情がほしがること）」（「論語」巻二）。「此謂國不以利為利、以義為利也（これは國は利をもつて利をなさず、義をもつて利をなすということだ）」（「大學」十章）などと説かれている。

欲や利にとらわれなすべきことをおこたるのが「小人」である。これに對し、「非義之義、大人弗為（義のようで義でないことは大人はしない）」朱注「因時而處宜（時に應じてふさわしいことをする）」、「大人者、言不必信、行不必果、惟義所在（大人は言ったとおりにするとは限らず、しはじめたことを最後までするとも限らず、ただ義あ

るのみである」朱注「大人言行、不先期於信果、但義之所在、則必從之（大人の言動とはあらかじめ結果を見込んだものではなく、ただ義のあるところにしたがうのである）」（「孟子」卷九）。「義主於制斷、故退以義（義は判斷の基準であり、ゆえに退くにも義をもつてする）」（「孟子」卷九朱注）と、いかなるときでも「義」を行動基準にできるのが「大人」である。その極端な言いようが「孟子」卷十一の「生、亦我所欲也。義、亦我所欲也。二者不可得兼、舍生取義也（生は私の欲するものである。義もまた私の欲するものである。兩方を得ることができないのであれば、生を捨て義をとる）」である。なすべきことについて確乎たる判斷基準をもち、決して迷わない強い意志が要求されていることがわかる。

人間關係秩序維持のためになすべきことをなさんとし、場合によっては生命を賭してもなす氣慨が求められ、個人の欲や利に流されれば非難される。これは水滸傳の「義」もおなじであった。「義」の核心義において朱子學と水滸

五十五 溝口雄三・池田知久・小島毅『中国思想史』（東京大学出版会、二〇〇七年）第三章「轉換期としての明末清初期」（溝口雄三）

傳とに本質的な差はない。しかし武松の「義舉」を朱子學の規範に照らせば、6の行為は「正義」、7は「不正義」と正反對の評価を下されるはずである。それは、朱子學においてはなににもまして守るべき人間關係秩序が確定しているからである。朱子學は純粋な倫理道德學ではなく、個々人の道德的修養が社會全體の秩序安寧につながるとする政治學である<sup>五十五</sup>。「朱子學は本質的に旧秩序の保守、体制護持への志向をもつ……礼は社会的な『しきたり』のことであり、その中心的な機能は君臣父子の身分秩序を保持することにある。朱子學にとっては礼はそのままに理であり、体制の護持は理の命ずるところであった」<sup>五十六</sup>と言うように、國家秩序が最優先であり、そのためになすべきことが、現今の人間關係を亂さないことである。もし小さな單位の人間關係秩序を保つための判斷が大きな單位の秩序維持に反しそうな場合はどうすべきか。「大學」一章の有名な一節がその答えとなる。「物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身脩、身脩而后家齊、家

五十六 森三樹三郎『中国思想史』（第三文明社レグルス文庫、一九七八年）、三百六十四頁

齊而后國治、國治而后天下平。：其本亂而未治者、否矣  
（物格しくして后知至る、知至りて后意誠なり、意誠にして后心正し、心正しくして而后身脩まる、身脩まりて后家齊ふ、家齊ひて后國治まる、國治まりて后天下平かなり。  
：其の本亂れて未治まる者、否ず）というように、人間関係秩序には動かしがたい階梯性がある。なぜ小規模單位の秩序を保たねばならないのか。それはより上位の秩序維持に貢献するがゆえである。最終目標が平天下である以上、下位の秩序を守るために上位の秩序を亂すことはありえない。朱子學で「義」によって保たれる秩序はひとつに集約した、ピラミッド状、同心圓状と解し得る體系である。「孟子」卷八に「君義、莫不義（君主が義であれば、義でないものはいない）」というように、「義」を守れば必ず秩序は保たれる。逆に、上位單位の秩序に反するものは「義」ではない。ゆえに國家秩序に反する例7は、いくら恩人を助けることは道義的にすべきことだと主張しようと、朱子學から見れば「義」にはなりえない。これを水滸傳が「義」と稱しているのは、武松とその恩人孔明、孔亮という三者の人間関係のみに注目し、上位秩序に反していることを考慮しないからである。水滸傳では上位下位というよりも、複数の單位が並立し、それぞれの内部に「義」

があるようなのである。水滸傳の「義」の特徴はこの獨立した秩序範圍の存在にこそ求められるだろう。

## 2 情義雙全

朱子學の説く「義」はきわめて理性的で、感情的、衝動的な行動とは一線を劃した価値観である。水滸傳でも「義」は道理にもとづく判断なのだが、往々にして道理による行動と感情による行動が並列され、時に同一視する様子も散見される。

60 自此梁山泊十一位頭領聚義、真乃是交情渾似股肱、義氣如同骨肉。 221

これより梁山泊の十一人の頭領が聚義し、まさに交情は手足のごとく、義氣は骨肉のごとし。（第二十回）

61 梁山結義堅如石、此別難忘手足情。

梁山の結義のかたきことは石のごとく、この別れに兄弟の情は忘れがたし。（第九十四回）

62 「吳某心中想念宋公明、恩義難報、交情難捨、正欲就

此處自縊一死、魂魄與仁兄同聚一處、以表忠義之心」

「わたくし呉用は心中で宋公明のことをおもえば、恩義には報いがたく、交情は捨てがたい、ここでもずから首をくくって死に、魂魄は兄上とひとところにあつまり、わたしの忠義の心をあらわそうと思ふ。」（第百回）

22で公孫勝は王倫らの結束のことを「大義」と言うが、その直前に呉用は「頭領息怒。自是我等來的不是、倒壞了你山寨情分（頭領、お怒りをおしめください。われらが來たのがわるかったのです。あなたがた山寨の情をこわしてしまいました）」と言っている。これらの例では「義」による結束、「情」によるつながりがひとつのものとして表現されている。

「三言」においては夫婦關係を表すのに、「情」を用いる場合と「義」を用いる場合とが見られる。「義」は夫婦となった以上最後までせいとげるべきであるという道理をさし、「情」は愛情があるゆえ一緒にいることを指すのだと思われる。そして一組の夫婦關係をその兩方を用いて表現していることがまある。『警世通言』三十四「王嬌鸞百年長恨」では「薄情」（感情面）、「背盟」（道理面）の二

種のことばで婚約にそむいた男を非難する。『古今小説』

卷一「蒋興哥重會珍珠衫」では、妻の不義密通を知り離縁した男を、その事情を知らない舅が「無情無義」と言う。當の妻は「負了丈夫恩情」と、もっぱら感情面から夫を裏切った反省をする。『警世通言』第二卷「莊子休鼓盆成大道」では、妻が夫を批判して「没仁没義」と言う。このように、「無情無義」、「没仁没義」などと並列の表現をする場合、「情」と「義」とには明確な區別はなされず、「人」と人の結びつき」という漠然とした意味で理解されているように見受けられる。

梁山泊の百八人のつながりも同様に、義と情をないまぜにした「人を結びつけるもの」として表現される場合が少なくない。

楊雄の妻潘巧雲は、不義密通をしたうえ、それに気づいた石秀を楊雄と仲たがいさせ追い出そうとした。ようやくそれに気づいた楊雄は妻をのしる。

63 「一者壞了我兄弟情分、二乃久後必然被你害了性命、不如我今日先下手為強。」

「ひとつにはわれら兄弟の情をこわしたこと、ふたつにはいづれ必ずおまえに殺されるであろうこと。」



いま先に手をくだすにこしたことはない。」（第四十六回）

楊雄と石秀とは、ごろつきに絡まれていた楊雄を見ず知らずの石秀が助太刀に入ったのが出會いで、<sup>64</sup> 我如今就認義了石家兄弟做我兄弟（わたしはいま石兄弟を、義を認めて兄弟とした）」（第四十四回）という関係である。その二人の仲を引き裂こうとした潘巧雲に對し「壞義氣」と言ってもよさそうところで「壞情分」という語が選ばれている。

第百回、毒殺された宋江が軍師呉用の夢枕に立ち、次のように頼む。

65 「軍師若想舊日之交情、可到墳塋親來看視一遭。」

「軍師がかつての交情を思ってくれるならひと目會いに墓まで来てほしい。」

「義」で結ばれている梁山泊の成員たちは、自分たちの関係は「情」のつながりであるとも認識している。これは

また、編纂者がそう考えていたことをも意味するのではないか。あるいは「義」で結ばれた関係をつづけるうちに情もうつつてきたと説明することもできるかもしれないが、とまれ梁山泊集團はただ道理によって義務的に保たれているのではなく、仲間とともにありたいという感情もそなえた「血の通った」團結として描かれている。

このことは梁山泊成員以外のセリフでも表現されている。<sup>66</sup> 宿元景が、歸順した宋江たちについて奏上したときのことば。<sup>67</sup> は、羅真人が弟子の公孫勝を遼を破るまでは宋江にしたがわせることを認めた場面である。

66 「宋江這夥好漢、方始歸降、百單八人、恩同手足、意若同胞<sup>五十七</sup>。他們決不肯便拆散分開、雖死不捨相離」

「宋江ら好漢は歸順したばかりで、百八人は恩情は手足に同じ、心は兄弟のごとし。彼らは決してばらばらになろうとはしませんし、死すとも離れ離れにはなりません。」（第八十三回）

67 「若今日便留下在此伏侍貧道、却不見了弟兄往日情

分。」

「もしいまここに残してわたくしの世話をさせれば、あなたがた兄弟のいままでの情を無視することになります」(第八十五回)

では、血の通わない、道理だけで成り立つ人間関係とはどのようなものだろうか。『世説新語』<sup>五十八</sup>卷一「德行」の一條を例に考えてみたい。

華歆と王朗が賊を避けて船に乗って逃げた。ある人が一緒に逃げたいと言ったが華歆はしぶった。王朗は連れていった。しかし賊が追いついてくると、王朗はその人を捨てようとした。華歆は一度連れて行くと決めたのだからいまさら見捨ててはならないと言った。

この條の注に引かれる華嶠『譜敍』に「義」が出てくる。そこでは華歆と王朗以外にも逃げている人々がいる。はじめ連れていくのをしる華歆のことばは「不可。今在危険中、禍福患害、義猶一也。今無故受之、不知其義。若有進

退、可中棄乎？(だめだ。いまわれわれはまさに危険にあり、災いがあるとき義は一貫しているべきだ。いま受け入れる理由はなく、その義はわからない。もしいきづまったら捨てられるのか)である。ほかの人は「不忍」、見捨てることができず助けた。のちにこの人が井戸に落ちたのでみناه見捨てようとした。華歆は「已與俱矣、棄之不義(すでにいっしょになっているのだから見捨てるのは不義だ)」と言った。この義は水滸傳のそれとは雰圍氣がちがう。背筋がぞっとするような冷たい義である。華歆以外の人は、かわいそうだからつれていこうと言ったと思えばまた、足手まといになったから置いていこうと言う。華歆はその場の感情で意見を變える人々を冷ややかに見ている。助けるも助けられないも、ただ道理によるのみである。そこに「かわいそうだ」、「面倒だ」などの感情が割り込む餘地はない。『譜敍』は華氏の家系を飾りたてるためのものだから、このエピソードも華歆がどんな時にも冷静に道理を重んじていたことをたたえるために記されたと考えられる。水滸傳の義は往々にして情と一體化する。物語の終盤、梁山泊集團の崩壊の過程で、先行きが暗いことが分かって

いるにもかかわらず離れられないまま運命をともにするのは、「已與俱矣、棄之不義」という道理だけではなく、感情面でも深いつながりがあるゆえであった。

そしてこれはひとり水滸傳のみのことではない。大木康「馮夢龍『三言』の意圖について（続）」は、「作品採否の基準は、登場人物の真率な心情に根ざした純粹な行動であるか否か、という点」<sup>五十九</sup>であったという。水滸傳の

「義」も、「約束は守りたい」、「お世話になった人に恩返ししたい」、「仲間を裏切りたくない」という「真率な心情」と、人間関係はどうあるべきかという道理とが合致したものと描寫されているのではないか。四書や『譜叙』の「義」は、感情を排した、義務的でドライな「義」である。水滸傳の「義」は感情面の欲求と一致している。編纂者は道理と感情の両面から梁山泊の結束の強さを表現することで、その結束のあまりの強さゆえ、集團が崩壊への一途をたどるなかでも愚直なまでに運命をともにすると

いうストーリーを完成させたのであり、読者もその理屈に納得できたのではないか。

## 六・陽明学の「義」

感情と道理にかなった判断が一體化すると言って思い起こされるのが陽明學である。明代はまた「主知主義、理性主義の朱子学を離れ、情意を動力とする陽明学へと向かう」<sup>六十</sup>時代でもあった。陽明學は朱子學を「理を外に求めるもの」と批判し、道德的な判断はそれぞれの純粹な心によるもので外部に規定されるものではないと考える<sup>六十一</sup>。

王陽明はその『傳習錄』に「君子之學、終身只是集義一事、義者宜也。心得其宜之謂義。能致良知則心得其宜矣。故集義亦只是致良知。君子之酬酢萬變、當行則行、當止則止、當生則生、當死則死（君子の學は生涯ただ義を集めるの一事のみである。義とは宜である。心が宜を得ることを義という。良知を致すことができるとは、心が宜を得るこ

<sup>五十九</sup> 大木康「馮夢龍「三言」の編纂意圖について（続）」

「真情」より見た一側面——（『伊藤漱平教授退官記念

中国学論集』汲古書院、一九八六年）

<sup>六十</sup> 森三樹三郎『中国思想史（下）』第九章「元・明の思

想」、三百八十四頁

<sup>六十一</sup> 「心即理也。天下又有心外之事、心外之理乎？」、「至善只是此心純乎天理之極便是。更於事物上怎生求？」『傳習錄』上卷（『王陽明全集』、上海古籍出版社、一九九二年）

とである。故に義を集めることもまた良知を致すことにほかならない。君子はあらゆる變化に對應し、なすべきならばなし、止まるべきならば止まり、生くべきならば生き、死すべきならば死す」(『傳習錄』中卷「答歐陽崇一」)、「義即良知、曉得良知是頭腦、方無執著。且如受人餽送、也有今日當受的、他日不當受的。也有今日不當受的、他日當受的。你若執着了今日當受的、便一切受去、執着了今日不當受的、便一切不受去、便是適莫、便不是良知的本體、如何喚得做義。(義とはすなわち良知だ。良知が要點である)とわかれば執着がなくなる。たとえば人から贈りものを受けるとき、今日は受けるべきであり別の日には受けるべきではない。また今日は受けるべきでなくほかの日に受けるべきだ、など。もし今日受けるべきであったことに執着してすべて受けることにしたり、今日受けるべきでなかったことに執着してすべて受けないことにしたりするのが適や莫であり、良知の本體ではない。義ということができようか」(同下卷)と説く。ここでも朱熹の注釋と同じように「當(當然……すべきだ)」という語が説明に用いられ

ていることからわかるように、「義」の根本は水滸傳や朱子學と異なるものではなく、各場面に應じてなすべきことを適切に判斷することである。注目すべきは、「義」はすなわち「良知」だとし、さらに「致良知は學問大頭腦(致良知は學問のもっとも肝腎のもの)」(同中卷「答歐陽崇一」と説いている點である。そしてまた、「喜怒哀懼愛惡欲謂之七情。七者俱是人心合有的……七情順其自然之流行、皆是良知之用(喜怒哀懼愛惡欲を七情という。この七つはすべて人の心にあるはずのものである。七情の自然にまかせて流れ出たものはみな良知の用である)」(同卷下)と述べるように、「良知」を媒介に「義」と自然な感情とはつながっている。「良知は、意図や計慮によらず自然にほとぼしりする心の働きを意味する……良知さえ十全であれば、その良知からやむにやまれず発露された行為はすべて妥当とな」<sup>六十二</sup>り、「諸行為の妥当性は結果によって判斷されるのではなく動機の次元で判斷される」<sup>六十三</sup>のである。

さきに、水滸傳をふくむ通俗小説では「義」と「情」が

混然一體となつてゐると述べた。王陽明もまた、自然な感情に突き動かされた行動は心のなかにある良知の発露であり、「義」であると述べてゐる。陽明學、なかんづく泰州學派に傾倒してゐた馮夢龍は『情史』卷一「情貞類」卷末の評語において「自來忠孝節烈之事、從道理上做者必勉強、從至情上出者必真切。夫婦其最近者也、無情之夫必不能為義夫、無情之婦必不能為節婦（むかしから忠孝節烈とされる行為で、道理にしたがつてしたものはずや無理やりした行為となり、真の心より生じた行為は必ずや真實である。夫婦はもつとも近しい關係であるが、無情の夫は決して義夫にはなれず、無情の妻も決して節婦にはなれない）」と、「義」で結ばれる關係は必ずや「情」でも結ばれていなければならないと、情義の一體を主張してゐる。

水滸傳の「義」は陽明學を信奉する知識人たちの主張によく似てゐる。陽明學が通俗小説の發展に影響を與えたこと、通俗小説に陽明學好みの人物が多數見られることなどはこれまでも指摘がある<sup>六十四</sup>。李逵が準主役とされた理

由はまさにここにある。李逵はいちいち立ち止まつて道理に照らして判斷する人物ではない。しかし、ひとたび信賴し、付き従うと決めた宋江にはいかに意見の食い違いがあろうとも、きつく叱られようとも、宋江がいかに落ち目になろうとも見捨てることなく最後まで運命とともにせんとする。この行動は「義」のいう「なすべきこと」によくなつてゐる。明代の知識人讀者を視野に入れた最終編纂段階で李逵が一躍重要人物に躍り出たのもむべなるかなである。

しかしながら、水滸傳の「義」が陽明學と完全に合致するということは、もちろんできない。道德的是非の判斷を個人にゆだねてゐるとはいうものの、陽明學の言う「是非」とは、「父母に孝、兄長に敬、郷党隣里や宗族親戚に恭順、財利をむさばらないなどの上下秩序倫理」であり、「良知における主体性とは、中国儒教の道德的な秩序体制へ主体的に参入することをその内容としてゐる」<sup>六十五</sup>のである。また、「体制の維持、名教の擁護」ということは、両

<sup>六十四</sup> 石昌渝「王陽明心學与通俗文學得崛起」（『文學遺產』二〇〇七年第二期）、小松謙『四大奇書の研究』第三部『水滸傳』第三章「『水滸傳』はなぜ刊行されたのか」、陳才訓

「儒學平民化思潮与明代通俗小説」（『天津社會科學』二〇一六年第二期）  
<sup>六十五</sup> 『中國思想文化事典』「陽明學」

者（引用者注…朱子學と陽明學）がひとしく高唱した大理想であった。…陸王學の方が、より徹底して体制に対して奴隸的であった、という説を立てることすら可能である」<sup>六十六</sup>と云うように、陽明學はそもそも國家秩序の安定

を目標とし、國家の教學になることを視野に入れて、朱子學の缺陷を改めようとしたものである。そのためには經書に埋没するのではなく人が本來具有する天理を發揮するほうが理想に近づけると説いているのであり、朱子學と目標を同じくしつつそこに至る道すじを異にしているにすぎない。ゆえに、朱子學と水滸傳との「義」の秩序範圍の差異と同様の違いが陽明學と水滸傳との間にもあるはずなのである。

## 七・「義」の運用上の差異

明代の各種文體に見える「義」はいずれも「人としてなすべきことを適切に判断し、それを果たそうとする意志」を意味する。なすべきことの放棄や私利私欲への批判も異なるところはない。當時の讀者であれば、いかなる文體においても、「義」という語を目にしたとき、人によってひ

どくかけはなれたイメージを抱くことがあったとは思われない。このように根本の意味が共通してはいるものの、その運用面、具體的な表れには差異が生じる。それは「義」を實踐する環境の差異に由來する。

朱子學は官學であるから、なすべきことは國家體制を基準に決まり、これに従って判断することが求められる。小規模範圍の秩序維持は上位範疇、ひいては體制全體の秩序維持に貢献しなければならず、個人の判断がそれに合わない場合は「義」とは呼べない。

陽明學ではなにをなすべきかを個人の率直な判断にまかせるが、それはすべてが自由であることは意味しない。陽明學の最大の目的もやはり全體秩序の維持であり、「良知」に従う以上個人の率直な発想が上位秩序を亂すことはありえないと考える。全體に貢献しない個人の判断は人欲が天理を妨げているとされ、「義」とは呼ばれない。

梁山泊の好漢たちが集團内の秩序のためになすべきことを行うと、その範圍外に悪質な副作用をもたらすことがある。にもかかわらず、ひたむきに對象範圍内の秩序を維持しようとする心がけさえあれば「義」と稱され得る。秩序

を保つ範圍が國家を中心としたピラミッドないし同心圓状のものとしてとらえられていないためである。別の秩序の單位は外にあり互いに獨立しているものであるから、他者に及ぼす影響への配慮をみずからの範圍内の秩序維持より優先することはない。外部の秩序を亂さないこともあるが、それは結果的にそうであつたにすぎない。この「他への無關心」が儒學の「義」との最大の違いであろう。こうした獨立した「義」の範圍が策定され得る理由は、梁山泊の成員が定住民社会秩序から疎外された非定住民中心であること、閉鎖的な社會を形成していることに求められよう。この、從來の社会秩序とは相互無關係に策定された範圍の内で行われる「義」が、いわゆる「江湖の義」であると言える。「義」を行う範圍が互いに獨立しているからこそ、官軍には官軍の「義」があり、遼には遼の「義」があり、梁山には梁山の「義」が存在する。

68 「全望早成大義、免俺遼主懸望之心。」

六十七 もっとも客觀的な基準があるわけではなく、言う人の主觀によるところが大きいように見える。王朝を中心とした秩序のように明らかに大きなものには「大」がつく、梁山泊の

「はやく大義をなし、われら遼主がまちかねている気持ちを叶えてください」（第八十五回）

69 却説這江南方臘、起義已久、即漸而成、不想弄到許大事業。

さて江南では方臘が起義してからすでに久しく、次第におおきくなり、はからずも巨大な勢力になつた。（第九十回）

68 は遼の欧陽侍郎が、遼征伐に來た宋江を遼に招安している場面。「大義をなす」とは遼に加わることである。69 は方臘が仲間をあつめたことを「義」と言っているが、宋朝から見ればその行為は叛亂である。これらは遼や方臘集團内部のものとしての「義」であり、宋朝とも宋江とも、そして大部分の讀者とも相容れないものであるが、編纂者は獨立集團内部の理論としてこの語を用いている。

水滸傳に「大義」は二十八例あるが「正義」は一例もない。規模の大きなものには「大」がつくのだろうか 六十七。

成員が自分たちの集團を大きく言うために「大」がつく、自分たちにとって大切に譲れないなどの高い価値を強調した場合にも「大」をつけるなどのおおまかな基準は認められる。

「正」をつけないのはそもそも正しいか正しくないかの問題ではないからだろう。唯一の正しい「義」があり、その他は「義」と見なさないという考え方は、少なくとも梁山泊の多くの好漢たちからは見出せない。

仁井田陞は中國の社會集團、特に兄弟的結合形式の特徴を次のように説明している。中國の傳統的な兄弟的結合は、「一旦加入した以上は絶対に脱退は許され」ず、「そこには仲間だけの孤立した正義が行われ」る。しかしこういった集團は「必ずしも反社会的なものばかりとはいえないし、特に仲間結合として別段特殊なものでもない。それはもろもろの閉鎖的集團の一つにしかすぎない。……そしてその秩序は反社会的であるとは限らないものである」。これはまさに、上位秩序に貢献しないの言うに及ばず、他の秩序範圍を顧慮しない「義」である<sup>六十八</sup>。

どの集團にも人間關係を保つためになさねばならないことがある。閉ざされた範圍内の秩序を維持するための行為は、集團外に悪影響を及ぼさないこともあれば、集團外の人にとっての迷惑行為や悪事となることもある。他の集團

に屬する人の「義」と衝突することもある。それらは集團内部の「義」に伴って生じる副作用にすぎない。ただ、王法秩序に屬さない集團の場合、體制側から悪事と判断される頻度が格段に高くなる。結果として「義」が不法行為を心理的に支える要素になることは確かにある。アウトロー集團にとって「義」は必要條件であろうが、「非合法集團が悪事を行う」という意味の「義」が、儒學の「義」と別に存在しているわけではないのである。

#### 八・明代作品中の「義」

獨立した閉鎖社會のなかで行われる「義」と儒學の「義」との運用上の違いは輕視できないが、實際に明代の各種の文章中に現れる「義」がいったいどの種の「義」に近いのか、區別できないことも少なくない。ただ「恩人を裏切つてはいけない」とだけ言うならば、朱子學であろうが陽明學であろうが水滸傳であろうが文句なしに「義」である。恩人を裏切らないようにすると體制秩序に背く可能性があるなど、運用上の制限がかかる状況になつてはじめ



それぞれの違いが浮かび上がる。そのような危険を冒さずに「義」を實行できる状態であれば、どの種の「義」でも考えかたは同じであり、おそらく編纂者にとっても読者にとっても区別の必要を感じないことであつたろう。では、「義」の實踐に制限がかかる場面になつても、これを障碍とみなし強い意志をもって排除していこうという思想は、體制秩序から獨立したアウトローにしか持ちえないものなのだろうか。もしそうであるのならば、社會秩序のなかに生きる編纂者や読者はこうした「義」に共感できたのだろうか。

「三國志演義」卷十七「范強張達刺張飛」には、劉備が關羽の仇討ちのためにすぐにも軍を進めようとするのを臣下の秦宓がいさめる場面がある。

學士秦宓出班奏曰…「陛下此行固為關公報讐、臣切惟不可。陛下捨萬乘之驅而成小義、古人所不取也。」…先主怒曰「關公與朕猶一體也。大義尚在、豈可忘耶。」

學士の秦宓が進み出て上奏した。「陛下のこの行いはもとより關公の復讐であり、思考いたしますになすべきではありません。陛下が萬乘の御身を顧みられず小義をなそうとなさるこの行爲は、古人はとりませ

ん。」…先主は怒つて言った。「關公と朕とは一心同體なのだ。大義はある、忘れてよいはずがあるか。」

劉備は關羽・張飛と生死をともにする誓いを立てている。その關羽の仇を討つのは、理においても情においてもなすべきことである。その一方で劉備には蜀漢皇帝という立場がある。この立場でなすべきは第一に國家秩序の維持である。無謀な戦いをはじめるとは王朝に危険をもたらす。小規模範圍の義は上位の秩序に貢獻するために存在するという考えでは劉備の行爲は義にもととされてしかるべきである。しかしこのくだりの執筆者は秦宓に、義兄弟としてなさねばならないという動機を「義」と認めたうえで、その「義」は國家の臣としては受け入れられないという態度をとらせている。劉備の考えは國家秩序に貢獻しないどころか迷惑ですらあるが、その心がけが「義」であることは否定してないのである。

この考え方と儒學との相違がよく表れた例がある。諸葛亮が劉備に、荊州を奪つて本據とするよう進言した場面を「三國志演義」卷八「獻荊州稟說劉琮」は次のように描寫する。

孔明曰「新野小縣、不可久居。近聞荊州劉景升病在危篤、借此郡以圖安身、兵精糧足、可以抗拒曹操也。」玄德曰「公之言甚善。奈何備感景升之恩、安忍圖之。」孔明曰「今若不取、後悔何及。」玄德曰「吾寧死、不忍作無義之人。」衆皆嗟嘆不已。

孔明が言った。「新野は小縣で、長居するわけにはいきません。近ごろ聞きましたところ荊州の劉景升は病で危篤とのこと、この郡を拝借して身を落ち着ければ、兵も鍛えられ、糧食も十分となり、曹操に對抗できます。」玄德は言った。「あなたの言うことは非常によいのだが、いかんせん私は景升の恩に感じ入っており、そのようなことはどうしてもできないのだ。」孔明が言った。「もしいま奪わなければ、後で悔んでも手遅れです。」玄德が言った。「私は死すとも義のない者にはなりたくないのだ。」みなは嘆いてやまなかった。

陳淳は同じ状況を次のごとく解釋する。

劉琮以荊州降曹操、則是魏之荊州矣。是時先主未有可據之地、孔明欲取之、以為興王業之本、此正大義所當然。

先主不決以大義、卻顧戀劉表之私情而不忍取、是利也。

劉琮が荊州を曹操に獻じて降伏すれば魏の荊州となる。このとき先主はまだ據點とできる地をもっていなかったもので、孔明は荊州をとり王業の原點としようした。この大義はしかるべきことである。先主は大義のもとに事を決斷することなく、それどころか劉表への私情に流されて奪うことを決めかねた、これは利である。『北溪字義』卷下「義利」

劉備は以前劉表に身を寄せていたので恩人を裏切るわけにいかないと感じていた。「三國志演義」の劉備は、集團全体を考えれば諸葛亮の提言が最良の選択であることは認めつつもなお、劉表との個人の關係においてなすべきことを貫こうとしており、その心がけは「義」と書かれている。

陳淳は劉備軍團、つまりのちの蜀漢政權の安定を圖る諸葛亮の獻策のみを「大義」とみなし、その障碍となる劉備の心がけは「義」と認めないばかりか、「私」、「利」と切り捨てている。同じ動機に對する評価が正反對になる分岐點は、國家の「義」と相容れない閉鎖的な判斷を「義」と認めるか否かにある。なお、「三國志演義」の編纂者も陳

淳も見たであろう正史『三國志』の該當箇所には「義」とも「私」とも書かれていない<sup>六十九</sup>。これらの評価が、のちに異なる立場からそれぞれにくだされたものであることがわかる。

「三國志演義」における劉備、關羽、張飛三者の「義」は水滸傳同様のアウトローの「義」の影響を濃く残したものだと言われる<sup>七十</sup>。しかし次の例はアウトローではなく、たしかに國家秩序内に生きる知識人の「義」である。

『古今小説』卷七「羊角哀捨命全交」の主人公二人、羊角哀と左伯桃は、「我二人雖非一父母所生、義氣過於骨肉（我ら二人は同じ父母から生れたものではないが、義氣は肉親以上だ）」という、兄弟のちぎりを結んだ仲であった。二人は仕官を求めて楚の元王のもとへ向かう道中で大雪に見舞われ、伯桃は衣服と食料を角哀に譲り、凍死する。角哀は元王のもとで官職を得た後、伯桃を弔いに戻

<sup>六十九</sup> 曹公南征表、會表卒、子琮代立、遣使請降。先主屯樊、不知曹公卒至、至宛乃聞之、遂將其衆去。過襄陽、諸葛亮說先主攻琮、荊州可有。先主曰「吾不忍也。」（『三國志』卷三十二・蜀書・先主傳）

<sup>七十</sup> 小松謙『四大奇書の研究』第三部『水滸伝』第三章「『水

る。そこで伯桃の靈が荊軻の靈に苦しまれていることを知り、「義に報いる（報吾兄併糧之義）」ため自ら命を絶ち、靈となつて荊軻と戦い、倒す。そして「元王感其義重、差官往墓前、建廟加封上大夫（元王はその義の重さに感じ入り、役人を墓前に遣わし、廟を建てて上大夫に封じた）」。この「義」は兩者の結びつき、特に命を賭しても恩に報いんとする角哀の強い意志を指す。この意志を貫けば主君には貢献できない。貢献の対象としては捨てられた元王も、羊角哀は「義」があると認めている<sup>七十一</sup>。上位秩序に反するかどうかを考慮せず、當事者にとつてもっとも身近かつ重要な人間關係のなかでなすべきことを最優先するさまを「義」と稱することは、水滸傳以外の通俗小説でも認められる。その結果他の秩序に悪影響を及ぼしてしまうものをも「義」と稱することもあり、體制秩序内に生きていたはずの執筆者が特にこれを忌避しているようには感じ

『水滸傳』はなぜ刊行されたのか」

<sup>七十一</sup> 笠井直美「隠蔽されたもう一つの「忠義」——『水滸傳』の「忠義」をめぐる論議に關する一視點——」は元王が二人の墓に「忠義之祠」の廟額を下したことを、國家を對象としな

い「忠義」の例としてあげている。

られない。

編纂者や読者が、自分たちとは異なる、関わりない世界のこととして距離をおいて「江湖の義」を鑑賞していたという言いかたも可能かもしれないが、筆者はやや異なる考え方をしたい。これらの「義」はやはり編纂者や読者にとつて身近で、皮膚感覚で理解可能なものだったのではないか。ひとつには「義」の根本義は儒學と共通していること、いまひとつは、江湖の人を描いたわけではない物語にも類似した「義」が見えるからである。また、いささか主観にかたよるきらいはあるが、こうも考えられる。人が最も身近な人間関係を保とうと努力することは自然なことである。その際既存の秩序一切を亂さないことは確かに理想的ではある。しかし現實には最も身近な人間関係を最優先すれば他者への配慮がおろそかになってしまうこともある。儒學の説く「義」を理解し、その秩序のもとに暮らす人々も、日常の思考、行動すべてがその秩序になっただとは思えない。儒學的な「義」は理想、あえて悪い言いかたをするならばお題目である。讀書を通じて學ぶもの、

科擧において答案に記すもの、それは體制秩序に資する理想的な「義」にちがいない。しかしひとたびあらたまった場を離れば、家族、友人など身近な人々との「義」のため、他に迷惑をかけることもやむなしとすることもありえよう。明代中期には「挙業のための学とほぼ一体化した」とにより、朱子学的教養の位置づけは形式主義に墮落することを免れなかった。……朱子学的教養の獲得そのものが目的ではなく……明朝の官僚として政治に参加するため、の必須条件として、強制的に学ばされるものとなってしまう」<sup>七十二</sup>というから、理想と現實とは別であると割り切ることも少なくなかったのではないか。

良民を題材とした物語が「義」を描寫してもそれが反権力や反體制につながることは少ない。また、「義」としてなさねばならぬと感じていても、上位秩序との関係から、より具體的に言えば官憲の取締りや權勢者からの壓力などによって實踐できないこともある。これに對し、體制からこぼれおちた人物、そもそも體制秩序に守られていない人物の場合、既存の秩序との間に衝突が生じて「義」の

<sup>七十二</sup> 鶴成久章「明代の科擧制度と朱子学——体制教學化がもたらした学びの内実——」（『中国社会と文化』第二十二号、二〇

〇七年）

實踐をあきらめるきつかけにはなりにくい。良民とアウトローとの大きな違いは、萬難を排して強引に「義」を實行できる力なり覺悟なりがあるか否かにある。

これと正反對に、體制秩序に反せずに行行できるにもかかわらず、意志の弱さから「義」を捨てた話が『警世通言』<sup>七十三</sup>卷三十二「杜十娘怒沉百寶箱」である。「三言」中でもとりわけ著名な作であるが、あらずじを確認しておく。

科擧のために都にいた李甲は、妓女の杜十娘と戀仲になる。李甲は金を使い果たしてしまったが、友人からの借金と杜十娘が蓄えた財寶とで杜十娘の身を請け出すことができた。ともに郷里に歸ることにしたものの、李甲の胸中には、身を立てることもできないまま妓女を連れ歸れば父の怒りを買うであろうとの怖れが渦巻いていた。道中、杜十娘の美しさにひかれた商人の孫富が、大金を得て歸れば故郷の父にも顔向けできるからと、杜十娘を賣り渡すようもちかける。李甲ははじめ、「但小妾千里相從、義難頓絶（彼女は千里の道をともししているの

だ、義は斷ちがたい）」と反論する。都を離れる際、絶對に杜十娘を裏切らないと誓っていたからである。しかし結局は自らの體面、父への懼れ、大金の誘惑などから杜十娘を賣り渡すことにした。杜十娘は李甲の負心に怒り、ひそかに蓄えていた金銀財寶を川にぶちまけ、自らも入水する。

最後に李甲と孫富が人々に毆られることからわかるように、作者も讀者も、李甲の行為は「義」にもとると考えていたはずである。しかし現實の世界では、なさねばならぬと十分承知していながら諸々の狀況に迫られ「義」を捨てることは起り得たであろう。

水滸傳の數々の例はちょうど逆である。「義」を遂行する際の障礙は一般社會の比ではない。しかし強靱な意志をもつて障礙を排除せんとし、その結果わが身にいかなる不利益が生じるかも顧慮しない。水滸傳以外でも、天下の大局よりも生死をともししてきた義兄弟の仇討ちを優先する劉備や、義兄弟三人の關係をなによりも重んじ、「義絶」と呼ばれる關羽などが人氣を博している。こうした強靱な

意志に支えられた「義」は、当時の小説編纂者、讀者に、「氣持ちはわかるが、自分にはとてもできない」と受け止められていたのではないか。友人の命を助けたのはやまやまだが、そのために役人を殺したり牢破りをしたりできるかと言われればとてもできない。その「とてもできないこと」を強い意志で貫きとおすからこそその英雄なのではないか。水滸傳に見える「義」は、結果として反社會的な事態を招くことはあるものの、その思想自體は共感し得るものであり、それゆえに編纂者も重要なキーワードとして使用したのであろう。

## 九・「義」の使いかた

水滸傳が「義」の小説であることはすでに定説と言えよう。研究者によつては、「忠義」の小説であり、招安を受けるまでは「義」が、招安後は「忠」が強調されると分析することもある。

編纂者は「義」という語をいかように使い、讀者に「義」の小説という印象を與えるに至ったのか。

表4は水滸傳各回で「義」が使用された回数を調べたものである。ただし、宋江の綽名「呼保義」、梁山泊の集會所の名「聚義廳」、「忠義堂」などの固有名詞は算入してい

ない。「義（一）」がその總數である。「義（一）」から、定型表現として使われる「仗義疏財」、「義士」の二語を除いたものが「義（二）」である。「義（三）」は、「義（二）」からさらに「忠義」の數を減じたものである。笠井直美の研究で明らかのように、「忠義」は必ずしも朝廷への忠誠心を示すものに限らず、「義」とほぼ同様に、人間關係の筋を通す意に用いられる場合も多いのだが、「招安前は義、招安後は忠の物語」とする研究が少なくないことに鑑みたものである。

義（一）から（三）の出現總數はそれぞれ四百十二度、三百三度、二百四十二度、一回あたりの平均出現數は、四・一、三・〇、二・四（少數點以下第二位四捨五入）であつた。本稿で水滸傳最初の大轉換點と位置づけた第四十二回までの義（三）の出現回數は九十度、一回平均は二・一度である。梁山泊集團百八人がそろい、多くの研究者が「義」から「忠」への轉換點として注目する第七十回までの義（三）は百八十一度で一回平均二・六度、第七十一回から第百回までは六十一度で同平均二・〇度である。一回あたりの長さは一樣ではないからあくまで參考値であるが、第七十一回以降の値は、第七十回以前と一回あたり〇・六の差しかない。また、第四十二回以前とはほぼおな

表 4	義(一)	義(二)	義(三)
引首	0	0	0
1	0	0	0
2	5	5	5
3	0	0	0
4	1	0	0
5	1	1	1
6	0	0	0
7	1	1	1
8	1	1	0
9	2	1	1
10	1	0	0
11	3	2	2
12	1	1	0
13	3	2	2
14	7	4	4
15	14	10	10
16	6	4	4
17	4	4	3
18	8	6	6
19	5	3	3
20	12	8	8
21	2	2	2
22	7	3	2
23	1	1	1
24	0	0	0
25	0	0	0
26	1	1	1
27	5	5	5
28	5	4	4
29	8	0	0
30	6	3	3
31	1	0	0
32	5	3	3
33	0	0	0

34	2	0	0
35	5	4	4
36	3	1	1
37	3	1	1
38	4	1	1
39	4	3	2
40	2	1	1
41	7	6	5
42	4	4	4
43	2	2	2
44	12	8	8
45	2	2	2
46	1	1	1
47	4	3	2
48	1	0	0
49	2	2	1
50	1	1	1
51	9	9	9
52	1	1	1
53	9	7	7
54	1	1	1
55	2	2	2
56	3	3	2
57	4	4	4
58	10	6	6
59	7	1	1
60	6	6	6
61	5	3	2
62	4	3	2
63	7	6	5
64	8	8	5
65	8	7	4
66	0	0	0
67	7	7	7
68	4	4	3
69	2	2	1
70	8	8	6



71	13	9	5
72	1	1	1
73	0	0	0
74	1	1	1
75	3	3	0
76	0	0	0
77	0	0	0
78	1	1	1
79	0	0	0
80	10	3	1
81	6	3	1
82	25	10	6
83	2	2	1
84	0	0	0
85	7	7	3
86	2	2	1
87	1	1	1
88	6	6	5
89	1	1	1
90	6	6	4
91	0	0	0
92	0	0	0
93	4	4	4
94	8	8	8
95	2	2	2
96	1	1	1
97	3	0	0
98	1	1	0
99	4	4	4
100	24	24	10
	412	303	242
平均	4.1	3	2.4
42 回まで	150	96	90
平均	3.6	2.3	2.1

70 まで	280	203	181
平均	4	2.9	2.6
71 以降	132	100	61
平均	4.4	3.3	2

じである。出現頻度を見る限り、「義」の重要性がどこかを境に急に變化したとは言いがたい。

より細かく見ると、第一回、第三回、第四回、第六回、第八回、第十回、第十二回、第二十四回、第二十五回、第二十九回、第三十一回、第三十三回、第三十四回、第四十八回、第六十六回、第七十三回、第七十六回、七十七回、第七十九回、第八十四回、第九十一回、第九十二回、第九十七回、第九十八回の計二十四回には「義」(三)が現れていない。このうち、第一回、第三回、第六回、第二十四回、第三十三回、第六十六回、第七十三回、第七十六回、第七十七回、第七十九回、第八十四回、第九十一回、第九十二回の十三回は、対象を義(一)まで廣げてても使用例がない。

第一回は發端であるから別としても、第三回の主要人物は史進と魯智深、第四回と第六回は魯智深、第八回は魯智深と林冲、第二十四回、第二十五回、第二十九回、第三十回は武松、第三十三回と第三十四回は宋江と花榮と、義をもつて聞こえた有名人ばかりであり、他の回には彼らを義とする地の文、發言も存在する。しかし、彼らを描寫した文章にかならず「義」が使われているとは限らないのである。これらの各回にも「義」の成立要件を十分に満たす

と考えられる言動はあるのだが、編纂者はそれらを「義」と表現していない。これには大きく分けてふたつのケースがある。まずは梁山泊メンバー以外の言動、もうひとつは梁山泊メンバーの言動である。

梁山泊の成員以外の人物の例として第二十四回の西門慶があげられる。王婆に潘金蓮との密通の手引きをたのんだ西門慶は、成功したら必ず報酬を拂うと言い、「如何敢失信」、「不要失約」、「不可負信」など何度も約束する。萬難を排して約束を果たすという強い意志があることのアピールとして「義」と表現させれば、潘金蓮を得ようと必死な西門慶のセリフにはふさわしいように思える。しかしこの場面で「義」は用いられない。このほか、張都監が武松に嫁をとらせると言い、「我既出了此言、必要與你。你休推故阻、我必不負約(わしがいったん口に出したからには必ずやおまえにあたえる。斷つてくれるな。約束は破らぬ)」と言った場面(第三十回)、楊雄の妻潘巧雲と裴如海が不義密通の約束をする場面(第四十五回)、梁山泊にかまつた高俅が帰りたい一心で皇帝に招安の件を奏上すると約束し、宋江が「太尉乃大貴人之言、焉肯失信(大尉とのすなわち貴人のおことば、約束をお破りになるはずはありませんせぬ)」と答える場面(第八十回)などにも「義」は

見えない。これは、のちに梁山泊の成員に害をなす、あるいは約束を破ることなどが編纂者にはわかっているがゆえに「義」を用いにくかったのではないか。つまり物語世界内の人物の心情ではなく、編纂者の心情による使用の回避である。

次に、梁山泊の成員の「義舉」を「義」と表現しない場面である。

第三、四回で魯達（出家前の魯智深）は、土地の有力者・肉屋の鄭に架空の借金の證文を作られ脅されている金父子を助けようとした際、誤って鄭を殴り殺してしまう。これは困っている人の救済のために身錢を切り、法を犯しても逃がしてやるという、「義」と稱するにふさわしい行為である（第四回で金父子が魯智深を「義士」と呼ぶのはこの意をくんだものである）。第八回は、無實の罪を着せられた林冲が、配流先への護送中に護送役人によって殺されそうになるものの、林冲の身を案じてこっそりつけてきた魯智深がこれを阻止し、配流先の近くまで同行するという筋である。第七回で義を結んだ相手である林冲をひたすらに守り続ける行為は「義」と呼ばれてしかるべきものであろう。第二十回、かつて宋江に救われた劉唐が、おたずねものの身でありながら危険を冒して宋江のもとを訪

れ謝禮を渡す場面も同様に「義」の基準にかなう。ところがこれらの場面で「義」は用いられていない。

「義」が用いられている場面で、その理由を考える参考になるものがある。

32で、關勝は義氣があるので裏切ることはないと宋江が言っている。關勝は戦いに敗れて投降したばかりで、仲間入り後最初の手柄をたてようとしている。作中、關勝が義に厚いさまを見せたエピソードは描かれていないから、仲間入りして日が浅い關勝を疑う呉用の言は讀者の視点にも近く、もつともな疑問といえよう。しかし、ここで關勝の「義」を語るエピソードを入れては話が間延びする。そこで編纂者は、梁山泊の「義」の中核たる宋江に關勝を

「義」と認めさせることで、讀者に向けた描寫がないだけで、物語世界内では魯智深や武松と同類の思考を持った人物であると納得するに足る出来事があったのだという説明に代えたのではないか（加えて、あの關羽の子孫なのだから義でないはずがないと思わせようとのねらいもあるのだろう）。

第五十七回、官軍の將・韓滔が梁山泊軍に生け捕られた場面に次のとき描寫がある。

宋江見了親解其縛、請上廳來、以禮陪話、相待筵宴、令彭玘、凌振說他入夥。韓滔也是七十二煞之數、自然義氣相投、就梁山泊做了頭領。

宋江は韓滔を見るやみずからその縛を解き、聚義廳に招き入れ、禮をもつてわび、宴会でもてなし、彭玘、凌振から仲間になるよう説得させた。韓滔も七十二地煞の一員であったから、おのずと義氣は通じ、梁山泊の頭領となった。

宋江がもてなし、かつての同僚から説得されたなど、韓滔の仲間入りを合理的に説明しようとの工夫はうかがえるが、結局決め手は「義氣が通じた」であり、実際にどのようなやりとりがあつて信用し合うにいたつたのかはわからない。第五十八回の呼延灼の場面もよく似ている。<sup>71</sup>

呼延灼沉思了半晌。一者是天罡之數、自然義氣相投。二者見宋江禮貌甚恭。嘆了一口氣、跪下在地道『非是呼延灼不忠於國、實慕兄長義氣過人、不容呼延灼不依、願隨鞭鐙』（呼延灼はしばし沈思黙考し、ひとつには天罡星の一員でおのずから義氣が通じたゆえ、ふたつには宋江の禮儀作法がたいへんうやうやしかったため、ため息をひとつとひざまづいて言った。『私が國に不忠なのではなく、兄上

の義氣が人並みすぐれているがゆえに従わないわけにはまいらぬのです。お供させていたきたい）。手ずから繩を解いた宋江の、自分を尊重した態度に感銘を受けたのである。後半に入るとこのような場面が多く目につくようになる。

兩個便把宋江如此義氣說了一遍。……「既然宋公明如此大賢、義氣最重、我等不可迷天、來早都下山投拜」（第六十回）

二人は宋江がいかに義氣があるのかをひととおり説いて聞かせた。……「宋公明がこれほどの賢人で、義氣も重いからには、我らは天に罪を受けることもあるまい、はやく山を下りて門下に降ろう」

眾多兄弟都被他打傷、咬牙切齒、盡要來殺張清。……宋江隔住、連聲喝退。「怎肯教你下手！」張清見宋江如此義氣、叩頭下拜受降。（第七十回）

兄弟たちはみな彼にやられていたので、齒ぎしりして張清に襲いかからんとしていた。……宋江はおしとどめ、叱りつけた。「手出しはさせぬぞ。」張清は

宋江がかくも義氣があるのを見、額づいて降伏した。

74 宋江看了皇甫端一表非俗、碧眼重瞳、虬鬚過腹。皇甫

端見了宋江如此義氣、心中甚喜、願從大義。(第七十回)

宋江は皇甫端の、碧眼、瞳は二重、蛟の鬚は腹まで垂れるというなみなみならぬ容貌を見た。皇甫端は宋江がかくも義氣があるのを見、心中たいへんに喜び、大義に従いたいと願った。

72の「ひととおり説いて聞かせ」は象徴的な例である。

物語世界内では「義」と認めるに足るエピソードがあつたとして、具體的描寫なしで讀者に「義」の人物と認識してほしいと提示しているのである。

また、作中人物間で知り合いを紹介するときにも「義」がよく用いられる。

75 問起酒家名字、留住俺過了數日、結義酒家、做了弟

兄。那人夫妻兩個、亦是江湖上好漢有名的：甚是好義氣。(第十七回)

わしの名をたずね、數日引きとめ、わしと結義して兄弟となった。あの夫婦二人は江湖の好漢の間では有名で……はなはだ義氣を好む。

76 他和我心腹相交、結義兄弟。(第十八回)

彼と私は腹心の友、義を結んだ兄弟だ。

77 哥哥不知、這個好漢卻是小弟結義的兄弟、原是小孤山下人氏、姓張名橫、綽號船火兒。(第三十七回)

兄貴は知らぬだろうが、この好漢はわたくしめの義を結んだ兄弟、そもそもは小孤山のもの、姓は張、名は横、綽名を船火兒といいます。

75は、魯智深が楊志に、その場にはいない張青、孫二娘を紹介しているせりふ。楊志はまだ面識のない二人を、魯智深の「義氣がある」という紹介で信用する。76は、生辰綱強奪に成功した晁蓋のもとを宋江が訪れ、まもなく手入れがあると知らせた直後の場面。このとき呉用はまだ宋江と會ったことがないが、晁蓋が「結義」した相手であることからその情報を信用する。77は、李俊が宋江に自分の仲間を紹介する場面である。

32および70から77に共通するのは、どのような出来事ややりとりがあつて他者を信用するに至ったのかが具体的に書かれていないことである。

魯智深、武松のように個人の活躍場面がふんだんに用意されている場合、その具体的な言動の描寫を見れば彼らが「義」であることは難なくわかる。しかし、百人すべてにその人格をうかがわせるに十分な記述をする余裕はない。ただ登場させて仲間入りさせるだけでもいい。そこで編纂者が利用したのが「義」という語だったのではないか。「義を認めた」と書くことによって、魯智深や武松の場合には數百語を費やして傳えていた人格をわずかに一語で表し、「義」のある人物ゆえ、これ以降彼ら同様の倫理觀とそれを実行する強靱な意志と行動力を有する人物として扱うことを宣言する。三十六人から百八人への膨張の際、個別のエピソードを持たずに梁山泊に參入した新たな人物が大勢いた。彼らすべてに詳細なエピソードを用意しようとすれば物語が際限なく擴大してしまうのみならず、先行する著名人物の「義」のエピソードの焼き直しばかりという事態にもなりかねない。「義」は、全百回のな

かに百八人を登場させ、仲間入りさせなければならない編纂者にとって、一人一人に長いエピソードを用意せずとも梁山泊集團を拡張できる魔法のことばだったのである。

#### 十・「義」のリアリティ

第七十一回、宋江は羅天大醮を催し、百八人全員で、決して裏切らぬことをあらためて誓う。

水滸傳以前の資料において、盜賊になる前の職業や身分がわかるものはごくわずかである。しかるに、水滸傳の編纂者はとにもかくにも百八人全員のもとの身分を讀者に紹介せんとしている。

盧焞によれば、梁山泊入りまえの身分・職業は十種におよぶ。盧焞はまた、山にのぼったきつかけの分類とその割合も算出しており、一・自ら加わったものの六十一%、二・官に追われるなどの理由で行き場を失なったものの十七%、三・むりやりつれてこられたものの二十二%となっている<sup>七十四</sup>。これらの人々は當然生きかたも、目標も、志向も異なる。そして梁山泊入り後にも人生の志向を共有できず、方針をめぐって衝突する場面がたびたび描かれる。

象徴的なのは第七十一回、宋江が招安を心待ちにする思いを表現した詞を披露した場面である。

武松叫道「今日也要招安、明日也要招安去、冷了弟兄們的心！」

武松が叫んだ。「今日も招安がほしい、明日も招安がほしいじゃ、われらの心をしらけさせる！」

宋江は招安をうけて朝廷の臣になるのがよい生きかただと思っている。しかし武松はそう思っていない。宋江の方針に反対する者はほかにもある。

李俊捉得劉夢龍、張横捉得牛邦喜、欲待解上山寨、惟恐宋江又放了。兩個好漢自商量、把二人就路邊結果了性命、割下首級、送上山來。

李俊は劉夢龍をとらえ、張横は牛邦喜をとらえ、山寨に連行しようとしたが、宋江がまた逃がしてしまうのではと案じ、ふたりは相談してとらえた二人を途上で殺し、首をきりおとして山寨へおくった。（第七十九回）

宋江は官軍との戦いで敵將をとらえるといつも、招安を待ち望んでいることをよろしくお伝えくださいと言って歸してしまふ。李俊はその方針に抵抗を試みたのである。他方、官軍出身のものは、呼延灼が宋江に「宋江情愿讓位與將軍。等朝廷見用、受了招安、那時盡忠報國、未為晚矣（わたくしは位を將軍におゆずりしたく存じます。朝廷に任用され、招安をうけてから國家に忠義を盡くしてもおそくはありますまい）」（第五十八回）と仲間入りを説得され承諾したように、招安を望んでいる。すくなくとも否定しないものが多い。招安を受けたあとも成員たちの志向は一致しない。宋江の望みを忠實にかなえる参謀の呉用ですら宋を見限って遼につくほうが得策だと述べたことがある（第八十五回）。これほどにまで方針が違うのにも関わらず、方臘征伐での数々の戦死、集團の瓦解までほとんどのものが運命をとにもする。

百八人はみな天上の星に對應しているから團結するのは運命なのだという説明もできよう。しかしそれだけでは百八人のつながりのつよさの説明としては説得力に缺ける。この問題を解決するのが「義」である。ひとたび「義」を結び「死生相托」の誓いをたてた以上、その後志向や方針の違いがあらわになろうと、人間關係の維持という前提



はゆるがない。梁山泊集結後、みなに同じ思想を共有させようとすれば大手術が必要となるし、どうしても不自然になる。異なる個性をもつ人々が個性はそのままに運命をともししてこそ「銘々傳」の魅力が保てるのである<sup>七十五</sup>。この意味でも「義」は水滸傳の成立に不可欠のキーワードであった。

そして「義」の中心にあるのが宋江である。「<sup>79</sup> 若是師父（公孫勝）不肯去時、宋公明必被高廉捉了。山寨大義、從此休矣（もし道士が行かなければ宋公明はきつと高廉につかまってしまいます。山寨の大義もおしまいです）」（第五十三回）ということばや、二度目の招安の際、「宋江を除き、その他の人々の罪を赦免する」という文言を聞いた花榮の「既不赦我哥哥、我等投降則甚（あにきが許されねば、われらが投降して何になる）」（第八十回）ということばがそのことを示している。義を結んだ以上、宋江と別れる選擇はありえない。招安に反對することは宋江

<sup>七十五</sup> 中鉢雅量「英雄たちの栄光と悲惨―水滸傳の世界―」（懷徳堂記念会編『中国四大奇書の世界』、和泉書院、二〇〇三年）は百八人の性格がきちんと描き分けられているのが水滸傳の特徴であると言う（百二十三頁）。陳美玲「论性格”強化”的典型人物―以《三国演义》和《水浒传》为例」（『明代

を見限ることではなく、招安を放棄するよう要求することである。歸順後、朝廷の待遇に不満を抱いた李俊らは、奸臣を殺してもう一度梁山泊に行こうと主張するが、宋江は決して承知しないと呉用にたしなめられてしまう（第九十回）。極端には「（衆將）盡有反心、只碍宋江一箇（諸將はみなそむく氣があるのだが、宋江だけがさまたげになっている）」という文言まである（第九十回）。これを知った宋江は「もし二心があるのならまず私の首をとってから事をおこせ」と言う。當然諸將が宋江に手をくだせるはずはない。宋江もわかってそう言っているのである。4の燕青の苦悩の原因もここにある。「義」をむすんだ以上、状況判断がどれほどの射たものであるうとも、集團を離脱することは「義」にそむき個人の利益を追求するものでしかない。燕青に限らず、聚義に加わった百八人すべてが自由に行動する權利を放棄し、運命をともしする道を選んだのであり、この聚義が梁山泊の末路を決定した。「義」のもた

小説面面觀』、学林出版社、二〇〇二年）は、水滸傳は性格の特徴や微妙な心理活動を描くことで各人物の個性を描き出し、その本性は變わることなく最後まで保たれているとす

らすプラス面とマイナス面とは表裏一體であり、それを承知で「義」はむすばれている。第七十一回は、梁山泊集團の緊密な團結と、その後の不幸な結末を予期させる路線對立とが同時に描かれた象徴的な回である。宋江が招安の方針を強固におしすすめたあとにも成員たちが従いつづけたのは「義」ゆえである。それが全體的には皇帝に對する

「忠」の行動にみえる。集結以降好漢たちが「義」に束縛されて身動きがとれなくなるのは環境がかわったためであり、「義」が變質したためでもなければ、「忠」が「義」を凌駕したためでもない。激變する環境のなかで好漢たちはさまざまな結末をむかえる。公孫勝は「故郷の老母のため」と「師匠との約束」を理由に集團を離れる。李俊は「病氣のためいったん抜ける」という口實で集團を抜けた。呉用や花榮は「義」をまっとうするべく宋江の墓前で首をつってあとを追った。

そしてあらゆる結末のなかでもっとも力を入れて書かれたのが李逵のくだりであろう。宋江は奸臣のさしがねで皇帝から下賜された御酒のなかに毒をもられた。御酒を飲ん

だあとそのことに氣づいた宋江は、自分の死後李逵が謀反をおこすにちがいないとおそれ、李逵を呼びよせてひそかに毒酒を飲ませた。李逵は、宋江が命をねらわれていると聞くと、朝廷にそむいて一旗あげようと言う。そこで宋江はすでに毒酒を飲ませていたことを明かす。すると李逵は一轉、宋江のためなら仕方ないと受け入れる。何度も招安の方針に反對しては叱責されていた李逵である。その朝廷のために自分が死なねばならないと納得するはずはない。しかし李逵には宋江との「義」があつた。「私」よりも

「義」を上においたのである。これが李逵なりの「生、亦我所欲也。義、亦我所欲也。二者不可得兼、舍生取義也（生は私の欲するものである。義もまた私の欲するものである。兩方を得ることができないのであれば、生を捨て義をとる）」の表現である。この場面は、編纂者が「義」をいかに利用して水滸傳をまとめたかの縮圖と言えよう。この場面を當時の讀者は「義を結んだのだから仕方がない」と納得し、また、その「義」を貫かんとする意志の強さに感嘆したのでらう<sup>七十六</sup>。

七十六 中鉢雅量「英雄たちの栄光と悲惨―水滸伝の世界―」  
は、「招安のような大問題をめぐっては、様々な意見が出さ

れて紛糾するはずであるが、水滸伝はこの程度の路線對立で収めてしまい、この点ではリアリティに欠ける」（百七頁）

## 十一・李卓吾の懸念

水滸傳の道德觀は十分當時の讀者の理解を得られたものであった。それならばなぜいっそ李逵や魯智深といった無知無學ながら真情にもとづいて義行をなす人物を梁山泊の主<sup>七十七</sup>に据えなかったのだろうか。實際にこれら「真」なる人物たちの尊崇を一身に集めるのは、むしろ舊來の道德觀を重んじ、經史を修め、文人のはしくれを自認する宋江である。この問題を考へるヒントを提供してくれるのが李卓吾（李贄）である。李卓吾は陽明學の徒でありながら過激なことばで儒者批判をし、儒教倫理にそむくといわれる行動をくりかえしていたことから儒學の叛徒とすら目される。人間が本來的に持つ欲望を眞實として肯定した「童心説」はその代表的な主張のひとつである。また、通俗小説を肯定したこと<sup>七十八</sup>から、「李卓吾批評」と銘打つ偽作が多數現れるなど通俗小説界にも大きな影響力をもち、陽明學と通俗

と述べるが、梁山泊集團の「義」の強さは當時の讀者にとつてリアリティをもつて感じられていたため、集團が路線對立を内包しつつも團結を保っていた理由は十分に表現し得ていたと筆者は考えている。

<sup>七十七</sup> 佐藤鍊太郎「李卓吾『忠義水滸傳評』について」（『東方

小説との關係を語る際に避けて通れない人物でもある。水滸傳も高く評価<sup>七十九</sup>して、水滸傳の英雄たちにとってはず<sup>八十</sup>つてつけの思想的後盾と言<sup>八十一</sup>えるはずである。しかしながらその李卓吾の記した「忠義水滸傳序」は「内亂と夷狄の威脅に對する憤りを晴らすこと、明朝の官僚人事の不正を批判して人材登用を主張すること、叛亂者の投降を勧め、君國への忠義を呼びかけること、人事擔當者の參考に資すること」<sup>七十二</sup>という意圖のもとに書かれ、明朝の治安の悪化を強く憂えていたことがわかるという。國家の法度などおかまいなしに暴れまわる梁山泊の好漢たちのイメージとも、過激な儒學の叛徒という李卓吾自身のイメージとも一見異なるようである。しかし李卓吾も本質的には儒學の徒であるのだから、「民が安養を得てこそ、君臣の責任は始めて果たされたことになる」<sup>七十八</sup>と考<sup>七十九</sup>えていた。それを踏まえれば「忠義水滸傳序」の意圖はまったく怪しむに足りない。實際、李卓吾の數々の發言のなかで過激と言<sup>八十</sup>え

學』第七十一輯、一九八六年）

<sup>七十八</sup> 『藏書』「吏隱・馮道」。和訳は島田虔次著・井上進補注『中国における近代思惟の挫折2』第三章「李卓吾」、六十三頁による。

るのは體制教學の形骸化への批判であり、「夫以率性之真、推而擴之、與天下為公、乃謂之道（自然な本性を押し広げ天下のために公となす、これを道と言う）」<sup>七十九</sup>と言うように、國家秩序の安定を保つための新しい道を訴えているのである。李卓吾は徹底した「合理主義者」<sup>八十</sup>であり、「伝統的且つ空疎な規矩繩墨に拘泥して現実を知らず、役に立たない」<sup>八十一</sup>儒者たちが個別具體の状況を一切考慮せずに經書を「万世の至論と見なすことが、どうしてゆるされようか」と考えた<sup>八十二</sup>。そして、舊來の規則に盲從せず、場面ごとの状況に合わせ、本來心に備わる道德心にもとづいて行動を選択したほうが天下は亂れないという考えを推し進めた結果、過激な主張に至ったのである。

「義」に對する考え方は『續藏書』<sup>八十三</sup>「孝義名臣」、「初潭集」<sup>八十四</sup>卷十九「篤義」に見える。前者には母や義母に盡す子や、主人が没落してもなお獻身する下僕や妾などが

描かれる。後者も同趣旨であるが、國家や體制に背いても自己の道德的判斷を貫く例もある。たとえば、曹操が孔融を誅殺した際、日頃親しかった者もみな関わろうとしなかったが、脂習のみがその死體にすがって哭いたという一條がある。この事件に對する李卓吾の解釋を見ると、他書の類例との興味深い差異が見出せる。第四節の3で「義」が報恩を表す例として挙げた『三國志演義』の曹操と王修のくだりはこの脂習のエピソードとそっくり同じ状況である。

修曰「汝生逼他命、亡而不哭非義也。畏死忘義、何以立世乎。吾受袁氏厚恩、若得收葬譚屍於殘土、然後全家受戮、瞑目無恨。」操曰「河北義士何如此之多矣。」

王修は言った。「貴様はあのかたを死に迫いやった。死して哭さないのは義にもとる。死を恐れて義を忘れ

<sup>七十九</sup> 『焚書』（『焚書・續焚書』中華書局、一九七五年）「答耿中丞」

<sup>八十</sup> 島田虔次著・井上進補注『中国における近代思惟の挫折

2』第三章「李卓吾」、三十頁

<sup>八十一</sup> 島田虔次著・井上進補注『中国における近代思惟の挫折

2』第三章「李卓吾」、六十、六十一頁

<sup>八十二</sup> 『焚書』「童心説」。和訳は島田虔次著・井上進補注『中国における近代思惟の挫折2』、五十四頁による。

<sup>八十三</sup> 李贄『續藏書』中華書局、一九七四年

<sup>八十四</sup> 李贄『初潭集』中華書局、一九七四年

てはこの世に身をおいていられようか。私は袁氏の大恩を受けたのだから、袁譚の遺骸を葬ることができない。」「曹操は言った。「河北には義士がこんなにも多いのか。」（巻七「曹操引兵取壺關」）

明代の類書『天中記』<sup>八十五</sup>「義烈」はこの故事を「義士」と題している。

脩復曰「受袁氏厚恩、若得收斂譚屍、然後就戮無所恨。」操嘉其義聽之。

王脩は答えた。「袁氏の大恩を受けたのだから、袁譚のなきがらを棺に収めることができればその後殺されようと恨みはしない。」曹操はその義をたたえ、その通りにさせてやった。

『天中記』は續けてもうひとつ類話を載せる。袁譚の首に哭した者は妻子まで殺せと曹操は命じたが、そこに二人の者が現れる。

於是王叔治、田子泰相謂曰「生受辟命、亡而不哭、非義也。畏死亡義、何以立世。」遂造其首而哭之哀慟。三軍軍正白行其戮。操曰「義士也。」赦之。

すると王叔治と田子泰は言った。「主君が存命中に仕え、死して哭さぬは義にもとる。死を恐れて義を忘れてはどうしてこの世に身をおいていられようか。」そして首を祀り、哭すこと悲痛きわまりなかった。三軍の軍正は刑の執行を進言したが、曹操は「義士である」と言い、許した。

権力に逆らつても主君や友人との関係を守り抜こうとするさまを「義」と稱している。ここで注目すべきは曹操が「義」と感じたと書かれていることである。彼らの思考は曹操を中心とする秩序に反するものであるにもかかわらず、執筆者は曹操自身に「義」と言わせているのである。

李卓吾はこの話を採用したもの、曹操にその行爲を「義」と評価させていない。さらに「篤義」末尾の總評において「是故士為知己者死、而況乎以國士遇我也（ゆえに

士は己を知る者のために死ぬと言うのだ。ましてや國士として扱われたならば、必ずや國家のために死ぬであろう」と述べている。ここで李卓吾はまた、「義はそもそも

心のなかに生じる（義固生于心也）」もので作爲的な行爲は「義」ではないという陽明學の原則を強調している。しかし各自の自然な発想がすべて國家秩序に貢献するとは限らない。自分の発想だけに頼ればいきおい身近な人間関係だけを見たものとなるだろう。實際王陽明自身が「人間が他者に関わる」とき、「そこには厚薄という優先順位をつけざるを得」ず、「自己が責任を持たなければならない人、また持ち得る人に限定し、その人を優先すべきである」

八十六と考えていた。身近な人間関係を優先していれば、全體の秩序に貢献し得ないばかりか時にはそれに反してしまうことすらある。しかし王陽明は「このような現實を指摘することはな」<sup>八十七</sup>かつた。「儒家説の存在理由をなす

治國平天下への関心はあくまで放棄せられてはならない」<sup>八十八</sup>と考えている王陽明自身が全體の秩序を亂すような身

八十六 上田弘毅「王陽明に於ける近代化への可能性とその限界」(奥崎裕司編『明清はいかなる時代であったか』、汲古書

八十七 店、二〇〇六年)、百二十頁

内びいきを推奨することはあるまい。しかし陽明學を信奉する者が「各自の自然な感情」を擴大解釋した結果、王陽明が期待しなかった誤解をする可能性は十分にある。李卓吾はそのことを承知していたからこそ、障礙をもととせずなすべきことを遂行する心の強さを賞賛する一方で、その行為は「義」とは認めず、推奨すべきはその行動ではなく意志の強さであり、その心がけを國家に向けてこそ「義」であると釘をさしたのではない。この陽明學の危うさに気づいていたのは李卓吾だけだったのだろうか。陽明學に惹かれる知識人たちも、水滸傳の人物の素朴な道德心には魅力を感じても、そのまま全面的に肯定することはできなかったのではないだろうか。

この懸念こそが、梁山泊集團の物語を、無知無學な無賴の徒が大暴れるという形のまま知識人向けの長篇小説に仕立て直すことをためらわせたのではない。陽明學は決して手放して庶民を禮賛していたのではない。「民衆の道德性を誘発」し、「『天下の人々にその良知を発揮させ…

界」、百二十一頁

八十八 島田虔次著・井上進補注『中国における近代思惟の挫折1』第一章「王陽明」、五十五頁

自私自利を捨て』て大堂の世を実現するよう（同、中、答聶文蔚）に仕向ける」<sup>八十九</sup>のは知識人の役目であった。庶民にも聖人と同じ良知があるとしながらも、知識人の導きが必要ならば「愚夫愚婦」のままにすぎないとも考えていたのである。陽明學の徒には農民、職人、商人などを対象に布教をしてまわるものも多かったという<sup>九十</sup>。それは「化俗導愚の目的を実現する」<sup>九十一</sup>べく、國家秩序體制に庶民を組み込まねばならぬからであった。

宋江集團の物語が整理されるときにもこの「本心のままに生きる純粹な無法者たちに知識人が正しい方針を指示してやる」構圖が導入されたのではないか。

第三十八回ではじめて李逵を見た宋江は、李逵の上司である戴宗が李逵の非禮な言動をわびるのに對してこう言っている。

院長尊兄何必見外、量這些銀兩何足掛齒、由他去賭輸了罷、若要時再送些與他。使我看、這人倒是個忠直漢

子。

院長さん、そう他人行儀になさらずに。これしきの銀子なんのこともありません。すらせてやればよいのです。いるというならまたやりましょう。わたしに言わせれば、あの人はむしろ正直なおとこですよ。

初對面の宋江にも遠慮せずけずけものを言い、あまつさえ博打のための銀子を貸してくれとまで言う李逵を、「自分の心に正直でよい」とほめている。これはまさしく知識人たちが「無知ではあるが」、「素朴」、「率直」、「正直」、「かざらない」と「愚夫」をほめるのと同じ態度ではないか。これに對し李逵も、「難得宋江哥哥、又不曾和我深交、便借我十兩銀子。果然仗義疎財名不虛傳（ありがてえ。宋江兄は俺と長いつきあいでもないのにすぐ十兩貸してくれた。仗義疎財って評判も伊達じゃなかった）」、「真個好個宋哥哥、人説不差了、便知我兄弟的性格。結拜得這位哥哥也不枉了（宋の兄貴は評判通りほんとにいい人だ。

八十九 『中国思想文化事典』「陽明学」（市来津由彦・溝口雄

三）「傳習錄」

九十 森三樹三郎『中国思想史（下）』第九章「元・明の思想」

1「王陽明」・2「陽明学の左派」

九十一 陈才训「儒学平民化思潮与明代通俗小说」

すぐに俺の性格をわかってくれる。この兄貴と兄弟になれたのは間違いじゃなかった」と、すっかり信頼を寄せている。

「無知ながら正直」な李逵を愛でる宋江の様子は他人の口を通じて語られる。

第五十三回、公孫勝が梁山泊にもどることを許可しない羅真人に業を煮やした李逵は羅真人を殺してしまおうとする。しかしそのたくらみは羅真人に見抜かれており、法術でさんざんに懲らしめられる。戴宗は羅真人に李逵を許してくれるよう懇願した。

戴宗告道「真人不知、這李逵雖然愚蠢不省理法也有些小好處。第一、耿直分毫不取苟取於人<sup>九十二</sup>。第二、不會阿諛於人、雖死其忠不改。第三、並無淫慾斜心、貪財背義、敢勇當先。因此宋公明甚是愛他」。

戴宗は言った。「真人はご存じないでしょうが、李逵は愚かでもものの理をわきまえぬとはいえ、すこしはよいところもございます。第一に、正直で人のものを奪

いません、第二に、人におもねらず、そのひたむきな心は死すとも改めません、第三に、淫欲な心も曲がった心もなく、利益のために義に背くことなく、勇敢にまっさきに飛び出していきます。それで宋公明も非常に寵愛しているのです。」

第六十七回、李逵が宋江の方針に反発し、ふてくされて山を下りてしまった場面。

宋江見報只叫得苦。「是我夜來衝撞了他這幾句言語、多管是投別處去了」。吳用道「兄長非也。他雖籠鹵、義氣倒重。不到得投別處去。多管是過兩日便來。兄長放心」。

宋江は報告を聞いて嘆いた。「昨日の夜、あいつの言ったことにきつく言い返してしまったせいだ。おおかたどこか別のところに身を寄せに行ったのだろう」。吳用が言った。「兄者、それはちがう。あいつは粗暴ですが義氣は重い。ほかのところへなんか行けるもの



ですか。何日かすれば戻ってきます。ご安心なさい」。

第六十八回、曾頭市との戦いの際、講和の使者として時遷、李逵ら五人が遣わされる。五人を見た曾頭市の將史文恭が、講和とは建前で、呉用の陰謀にちがいないと言うと、李逵は怒って史文恭に殴りかかる。そこで時遷がとりなしに入る。

李逵雖然龕鹵、却是俺宋公明哥哥心腹之人。特使他來、休得疑惑。

李逵は亂暴者ですが、わが宋公明兄の腹心、それを特に遣わしたのですから、どうかお疑いにならぬよう。

しかしその感情に正直な言動が秩序を亂すと判断すれば宋江は厳しく叱責する。第七十一回、招安を願う詞を作り、歌の名手樂和に歌わせていると、李逵が反發し暴れ出した。

黒旋風便睜圓恠眼大叫道「招安招安、招甚鳥安。」一只一脚把卓子跳起擲做粉碎。宋江大喝道「這黑廝怎敢如此無

禮。左右與我推去斬訖報來。」

黒旋風はものすごい目を見開いて、「招安招安、どんなクソ安を招くってんだ！」と叫ぶと、机をひたけり、粉々にしてしまった。宋江は大喝した。「この黒い野郎、なんと無禮な。ものども、ひたてて斬つて來い。」

なお、この時招安方針を痛罵した武松は、切り捨てどころか叱責すらされていない。李逵を牢へ連れて行くよう命じられた兵士が李逵をこわがっているさまを見た李逵は次のように言う。

「你怕我敢掙扎。哥哥副我也不怨、殺我也不恨。除了他天也不怕。」

「俺が暴れると思っているのか。兄貴が俺を切り刻もうが殺そうが恨みやしねえ。それ以外だったら天だって怖かねえ。」

方針に不満はあっても、宋江に管理されること自體にはなら不満を持っていない。

一方の宋江も、高壓的に押さえつけはするものの、情の

うえでは一體のものだと感じている。李逵を許してやるよう諫められたあと、宋江は言う。

「今日又作満江紅詞險些兒壞了他性命、早是得衆弟兄諫救了。他與我身上情分最重、如骨肉一般、因此潜然淚下。」

「今日満江紅の詞を作ってまたあやうく彼の命を奪ってしまうところだったが、弟たちが諫めて救ってくれた。彼は私と情がもつとも深く、骨肉同然なのだ、それではらはら涙が流れるのだ。」

翌朝、頭領たちは李逵に謝りに行くよう促した。

衆頭領睡裡喚起來說道「你昨日大醉罵了哥哥。今日要殺你」。李逵道「我夢裡也不敢罵他。他要殺我時、便由他殺了罷」。衆弟兄引着李逵去堂上見宋江請罪。宋江喝道「我手下許多人馬、都似你這般無禮不亂了法度。且看衆兄弟之面寄下你項上一刀。再犯必不輕恕」。李逵喏喏連

聲而退。

頭領たちは李逵を起こして言った。「おまえは昨日泥酔して兄貴にどなりかかったんだ。今日おまえを殺すと言っているぞ」。李逵は言った。「俺は夢のなかでだってののしかったりはしない。でも殺そうってんならそうすりゃいいさ」。彼らは李逵をつれて忠義堂へ行き、宋江に面會して處罰を請うた。宋江は「俺の下には數多くの人馬がある。それがみなおまえのように無禮ばかりはたらいでは法度が亂れてしまう。ひとまず兄弟の顔に免じておまえの首にかかっていた刀は預かりにしておくが、次にやったらこう簡單には濟まさぬぞ」と叱りつけた。李逵はへいへいと答えて下がった。

宋江の立場はあくまで法度を推し及ぼす側にある<sup>九十三</sup>。これらは編纂當時の知識人たちが民衆に注いでいたものと同類の視線なのではあるまいか。作中の宋江は、編纂者さらには讀者の代理人として李逵を評価しているのではない

九十三  
康珮「論《水滸傳》的狂歡精神與庶民性格」(『興大人文學報』第四十七期、二〇一一年)が、宋江を「官方代言人」

と稱しているのは、このような宋江の立場を表したものである。

か。民衆には生來の道德心が備わっていると信じ、自分たちと同様の価値観を持ち得る仲間であると見なし、感情にもとづく行為が徳目になつていると賞賛する。しかし完全自由にさせることはなく、知識人の理想とする秩序體制に沿わぬ行為があれば叱責し、正しい道を指し示し、導こうとする。

無知な庶民と、それに理解を示し、教え導こうとする知識人という組み合わせはほかにも見られる。康珮は、魯智深と李逵はそのなにもとらわれない本質が讀者の人氣を得たのであつて、魯智深の五台山での大暴れは「民間文化がエリート文化に與えた衝撃」<sup>九十四</sup>であると言う。それはたしかにそうなのであろうが、魯智深はどんなに暴れても智真長老だけには逆らうことはなく、第九十回には教えを請いにふたたび五台山まで出向いている。智真長老とその他の僧侶たちとの違いは、智真長老は「雖是如今眼下有些囉唆、後來却成得正果（いまは騒ぎを起こしているとはいえ、のちのち悟りを得るのだ）」（第四回）と魯智深の

本性に宿る佛性を認めている點である。無知な庶民を見下すだけの知識人にはいつこうよりつかないが、本質を認め評価する知識人は信用する、宋江与李逵との關係と類似した圖式が見られる<sup>九十五</sup>。

秩序から外れる庶民をコントロールする知識人としてもつとも象徴的なのが第百回、宋江が李逵を道連れにしようとする場面である。

李逵道「哥哥、甚麼大事」。宋江道「你且飲酒」。……將至半酣、宋江便道「賢弟不知、我聽得朝廷差人賣藥酒來賜與我喫。如死却是怎的好」。李逵大叫一聲「哥哥、反了罷」。……宋江道「兄弟、且慢着、再有計較」。不想昨日那接風酒內已下了慢藥。當夜李逵飲酒了。次日具舟相送、李逵道「哥哥幾時起義兵、那里也起軍來接應」。宋江道「兄弟、你休怪我。前日朝廷差天使賜藥酒與我服了、死在旦夕。我爲人一世只主張忠義二字、不肯半點欺心。今日朝廷賜死無辜、寧可朝廷負我、我忠心不負朝廷」。

<sup>九十四</sup> 「魯智深大鬧五台山……是民間文化對菁英文化的撞擊」  
（康珮「論《水滸傳》的狂歡精神與庶民性格」）  
<sup>九十五</sup> 二〇一一年に製作されたテレビドラマ『新水滸傳』（北京如意吉祥影視策劃有限公司、北京陽光盛通文化藝術有限公

司）では智真長老は若いころ無賴の徒であり、その武藝を見た魯智深が敬服するという場面が加えられていて、知識人が徳をもつて庶民を導く構圖から、無賴の徒同士の信賴關係へと變更されている。

廷。我死之後、恐怕你造反、壞了我梁山泊替天行道、忠義之名。因此請將你來相見一面。昨日酒中已與了你慢藥服了、同至潤州必死。你死之後可來此處。楚州南門外有箇蓼兒洼、風景盡與梁山泊無異、和你陰魂相聚」。言

訖、墮淚如雨。李逵見說、亦垂淚道「罷、罷、罷、生時伏侍哥哥、死了也只是哥哥部下一箇小鬼」。言訖淚下、便覺道身體有些沉重。當時洒淚拜別了宋江。下船回到潤州、果然藥發身死。……李逵臨死之後、付囑從人「我死了、可千萬將我靈柩去楚州南門外蓼兒洼和哥哥一處埋葬」。囑罷而死。

李逵は「兄貴、どんな大事だい」と言った。宋江は「まあ飲め」と言った。……酒が回ってきたところで宋江は言った。「おまえは知らぬだろうが、朝廷がわたしに毒酒を賜って飲ませようとしていると聞いた。死ぬのならどうしたらよいだろうか。」李逵は大声で言った。「兄貴、謀叛だ」。……宋江は「まあ待て、もう一度よく考えよう」と言った。なんと前日の歓迎の酒にすでに遅効性の毒薬が入っていたのだった。その夜、李逵はその酒を飲んだ。翌日船を準備して見送る時、李逵は言った。「兄貴、いつ義兵を起こす。俺のところでも兵を起こして呼應するぞ」。宋江は言っ

た。「弟、悪く思うな。先日朝廷からの使いがあり、わたしに毒酒を飲ませた。もう間もなく死ぬ。わたしは生涯忠義の二字を訴え、ほんの少しの偽りもなかった。いま朝廷はわたしに無實の死を賜った。朝廷がわたしを裏切ろうと、わたしの忠心が朝廷にそむくことはない。わたしが死んだらおまえが謀叛を起こし、わが梁山泊の替天行道、忠義の名を台無しにするのではないかと思つて會いに來てもらつたのだ。昨日の酒で、もう遅効性の毒薬をおまえに飲ませてある。潤州に歸ったら必ず死ぬ。死んだらここに來てくれ。楚州南門外に蓼兒洼という場所があつて、風景が梁山泊にそっくりなのだ。魂になつてそこに集まろう」。言い終えると涙を雨のごとく流した。そう言われ、李逵も涙を流して言った。「もういい。生きているとき兄貴につかえ、死んでもやっぱり兄貴の部下の亡霊になるだけだ」。言い終えてまた涙を流すと、體がやや重く感じた。そして涙を流して別れのあいさつをした。潤州に歸りつくと果たして薬が回つて死んだ。……李逵は死の間際近習に命じた。「おれが死んだらかならず棺を楚州南門外の蓼兒洼へ持つて行つて、兄貴とひとところに葬つてくれ」。そう言い終えて死んだ。

宋江は自分と異なる考えを持つ李逵を野放しにしてはおけないと考えた。案の定李逵は宋江がもつとも恐れることを提案したのだが、宋江が自分を道連れに死ぬつもりだと知るや、暴れることもわめくこともなく素直に受け入れる。「殺されたって恨みやしない」が現実になったのである。

宋江は李逵が心から「義」を貫きたがっているはずであると信じ、その「義」の心を正しい目標、つまり宋朝の秩序維持に貢献する方へ向かわせたのである。

知識人が庶民を賞賛し、見守り、管理する構圖が宋江と、李逵をはじめとする無頼漢たちとの關係に投影されている以上、李逵はかならずや宋江とともに舞台から去らねばならない。自由奔放に生きる庶民を、管理者が立ち去った後も野放しにしておくことはできない。さすれば宋江の言にある通り世の亂れを招くであろう。それは現秩序の維持を旨とする知識人の望むところではない。人間の本性の解放という美名のはらむ危うさがここに感じとれる。

宋江集團の物語に、純朴で愛すべき庶民と、それを愛し時に厳しく導く知識人という枠組みが導入された時、總大將の宋江はどうあっても知識人でなければならなかった。さもなければ、盜賊集團が自由奔放に大暴れし既存の秩序

を脅かすという、體制秩序側からは受け入れがたい物語になってしまう。無知無學にして感情に正直に生きる庶民が登場人物の大半を占めてはいるが、その管理者として知識人に姿を変えた宋江を据えることで、無頼漢たちの言動を安心して見守ることが可能になったのである。無知な庶民たちが秩序を亂すのは、支配階級である知識人たちの考え方が間違っていたからである。どんな人も萬物一體の仁の一部であるという正しい思想と指導方針をもって庶民に接することで庶民は知識人の管理を受け入れてくれる。これによって物語全體のありようは變質した。舊來の価値觀を打ちこわし大暴れする無頼漢たちはみな、お釋迦様の手のひらで暴れる孫悟空となったのである。しかし見方を變えれば非武力式發跡故事を採用して宋江の身分を文人に變換しただけで、それまでの知識人向け小説にはゆるさなかった要素を大量に残し得たのであるから、この改變は成功であったと言える。事實、水滸傳は「四大奇書」として、他の通俗小説から一段高い評価を得ることとなったのである。全體の構成は知識人に受け入れられるものにすりかえながら、各部分には先行作品や民間傳承の氣風が色濃く残された。それは、最終編纂者自身がそれらの故事を好み、捨て去るのに忍びなかったという事情もあったのだろう。

## 終章 水滸傳編纂の環境要因と編纂方針

水滸傳は数え切れないほどの材料から、さまざまな原因による變化と取捨選擇とを経て、明代中期に現在われわれが知る百回本に近い形に落ち着いた。本稿の考察ではその複雑な過程と要因のごく一部を扱うことができたに過ぎないが、それにより明らかになったことを最後に簡単にまとめておきたい。

史實の流賊に端を發した宋江傳説は、先行の英雄傳説を吸収しながら次第に大きく、詳しくなっていた。その内容は流傳地域、時期、語り手や聞き手の立場によってさまざまであつたはずだが、基本的には平話の英雄たちと同類の、豪放磊落で禮法にとらわれず、人が眉を顰めるような殘忍なことで平氣でできてしまうような無頼の英雄・宋江の物語であつただろう。このような傳承は藝人によって、主に武人や市井の市民、時にはアウトローの人々を対象に語り繼がれていたと思われる。

元代には梁山泊の宋江集團は雜劇の題材としても用いられた。雜劇の宋江は無頼漢集團を統べる屈強な頭領というステレオタイプのイメージしか有さず、特に個性などはなかったようである。豪傑たちも、梁山泊から一般社會に下

りてきて騒動を起こしたり、事件を解決したりしたのちにまた一般社會からは消えていくという存在で、平話の英雄物語などとはおよそその印象を異にするものであつた。雜劇は文藝作品としての一面もあつたから、他の作品から詩句を援用したり、既存の故事類型や人物類型のなかで出來のよいものや人氣を博したものを再利用することも多く、梁山泊もの雜劇が獨自性を打ち出しているとは言いにくい。明代に入ると雜劇は高級藝能化し、知識人が讀んで楽しむものとなつたから、民間の宋江集團の物語とはいつそうかけはなれていったことであろう。

これら來歴もスタイルも内容も受容する地域も階層も雑多であつた材料を整えたのが最終編纂者である。その仕事は次のようにまとめられよう。

まず、全百回、百八人の登場人物、梁山泊集團の誕生、成長、崩壞という物語構成をさだめた。

そして無數に存在したであろう宋江の傳承のなかから非武力式發跡英雄の宋江を選び出した。この物語を軸とし、それまでに傳わっていたさまざまな英雄故事を取捨選擇し、物語の各部に配置した。それ以前には宋江集團を三十六人とする故事が主流であつたから、これを百八人に増員するべく、そもそものは宋江とは關係のなかつた故事を借り

てきたり、新たな故事を創作したりもした。

最終編纂者の功績としてあげなければならないことに、構成を整え、首尾一貫した物語をつくりながらも、各部分の材料の性質や文體などは強いて統一しようとしなかったことがある。

水滸傳には、古い口頭藝能由來の、素朴で單純な内容とリズムよく力強い語り口を有する部分もあれば、神話や民間傳承を利用したと思われる不可思議なエピソードもある。その一方、雜劇などの高級文藝や、史書、文言小説、筆記などさまざまな書籍に取材し、既存の故事類型や人物類型を利用し、また既存の型にひねりを加えることで讀者を飽きさせまいとする知識人の讀書習慣に合った故事もある。また、舞台が宋代であることに固執せずに明代の讀者にとっての同時代的な知識や故事なども堂々と採用している。

最終編纂者は回によって文體に大きな差があること、材料に雅なるものや俗なるものが混在していること、古い故事も新しい故事も採用していることを隠そうとしない。その意味で水滸傳全體の規範となるスタイルは存在しない。強いて言えば多様性こそが水滸傳の特色である。最終編纂者は、その文體、内容、由來に関わらず自身がおもしろい

と感じるもの、讀者が興味を感じると思われるものを遠慮なく取り込んでいったのである。その結果、水滸傳は廣く讀者を獲得することができたのであり、現代のわれわれも水滸傳のなかに多彩な要素を見ることができる。

このような、言ってみれば自由奔放な編纂方針のなかで、物語が崩壊しないよう編纂者が氣を配ったと思われることが二點あった。それが水滸傳を「義」の物語とすることと、宋江を知識人とするのであった。

「義」は多種多様な來歴をもつ豪傑たちをひとところに集め、最後までつなぎとめておくために必要な倫理觀であった。「義」こそが水滸傳の雜多性を確保していると言つてよい。

宋江の知識人化もまた、雜多性を確保するためのもうひとつの保険であった。最終編纂以前にすでに宋江を農村出身の知識人とする語り物はあったと思われるが、これが採用されるに至ったのは、最終編纂者の眼鏡にかなったからにちがいない。なぜ宋江は知識人にならなければならなかったのか。

明代中後期の知識人はある意味で非常に矛盾した存在である。陽明學の隆盛に象徴されるように、明代には經書の文言を絶對視したり前例・慣習を盲目的に墨守したりする

ことへの反省が生まれた。人間の自然な感情の發露に価値を見出し、學問のない下層の人々にも道德は備わっていると考え、その言動に目を向けるようになった。さすれば知識人たちも書物を放り出して庶民になろうとしたかと言えばそうではない。知識人は知識人の身分に落ち着いたまま庶民に注目するということがほとんどであったろう。舊弊にこりかたまつた知識人は批判するものの、世を導くのはやはり知識人であり、知識人が考え方をあらためて庶民を導けば天下泰平は保たれるのである。水滸傳の英雄たちの「義」は書物から來たものではなく、本人たちが自然と心からなしたいと考えるものであったから、この時代背景下での恰好の題材には違いない。しかし、ただ彼らを大暴れさせ、舊弊を破壊させるだけではだめなのである。それでは知識人が庶民を導き秩序を守るという大原則までが破壊されかねない。舊來の頭の固い知識人は叩きのめしてしまわないが、柔軟で合理的な考えをもつ知識人の言うことは聞いてもらわねば困るのである。よき指導者に巡り合えば無賴漢も知識人を信用する。それが宋江であった。宋江は無知無學な無賴漢に理解を示しつつ、全體を自らの目標へまとめようとする。無賴漢たちがいくら暴れようとも、最終的に宋江がだめだと言えばだめなのである。かくして

秩序體制の根本がくずれることはないという「保険」のもと、素朴で單純、陽氣で亂暴、しかしまっすぐな無賴漢たちの物語を知識人が樂しめる状況が完成した。これはうがつた見方をすれば、當局ににらまれて發禁にされたり、編纂者や出版者が處罰されたりせずにはすむようにとの策略であったかもしれない。ともかく、知識人である宋江が、無知無學な無法者たちの信賴を一身に集め統率していくという粹組みのもと、危険視されかねない思想や故事を残しておくという選擇がなされたのである。結果的には發禁處分をうけた時期もあつたのであるが、數多くの高級知識人讀者を獲得したのであるから、この方針は大成功であつた。こうして水滸傳はさまざまな材料をとりこんだ、文藝の寶庫となり得た。それはいかに可能な限り雑多な素材を生かしながら知識人にも受け入れられる物語に變えていくかという最終編纂者の苦心の賜物であると言えよう。



## 参考文献

文字は参照した書籍に記されたものにできる限り忠實に記した。近人書籍・論考は著者・編者姓名の正字筆畫順に配列。

## 水滸傳

容與堂本

『李卓吾先生批評忠義水滸傳』、國家圖書館（北京）

藏本（A本）

『李卓吾先生批評忠義水滸傳』、國家圖書館（北京）

藏本（B本）

『李卓吾先生批評忠義水滸傳』、天理圖書館藏本

『李卓吾先生批評忠義水滸傳』、國立公文書館内閣文

庫藏本

『水滸傳』、上海圖書館藏本

『明容與堂刻水滸傳』、上海人民出版社、一九七三年

（影印本）

『容與堂本水滸傳』、上海古籍出版社、一九八八年

（排印本）

嘉靖殘本

『忠義水滸傳』殘八卷、國家圖書館（北京）藏本

「明嘉靖刊本水滸傳殘頁書影」、『國立北平圖書館館刊』第八卷第二號、一九三四年

石渠閣補刻本

『忠義水滸傳』、國家圖書館（北京）藏本

四知館本

『鍾伯敬先生批評忠義水滸傳』、「古本小說集成二集」、上海古籍出版社、一九九一年（影印本）

百二十回本

『忠義水滸全書』、東京大學文學部藏本

『水滸全傳』、人民文學出版社、一九五四年（排印本）

七十回本

『第五才子書施耐庵水滸傳』、中華書局、一九七五年

文簡本

『京本增補校正全像忠義水滸志傳評林』、「古本小說集

成第三集」、上海古籍出版社、一九九〇年（影印本）

## 宣和遺事

『新編宣和遺事』前後集、國家圖書館（臺北）藏

『新刊大宋宣和遺事』四卷、國家圖書館（臺北）藏

『古本宣和遺事』二卷、中央研究院歷史語言研究所藏デ  
ジタル畫像データ  
『新刊宣和遺事前後集』、『百部叢書集成・士禮居叢  
書』、藝文印書館、一九六六年（排印本）

### その他通俗小説

『歷史通俗演義 全相平話武王伐紂書・全相平話樂毅圖  
齊七國春秋後集・全相秦併六國平話・全相平話前漢書  
續集・全相平話三國志』、國立中央圖書館編印、一九  
七一年

『宋元平話五種』、河洛圖書出版社、一九八一年

『清平山堂話本校注』、中華書局、二〇一二年

『三國志通俗演義』、人民文學出版社、一九七四年

『西遊記（世德堂本）』、『古本小説集成四集』、上海古籍  
出版社、一九九二年

『三遂平妖傳』、『古本小説叢刊第三十三輯』、中華書  
局、一九九一年

『大宋中興演義』、『古本小説叢刊第三十七輯』、中華書  
局、一九九一年

『包龍圖判百家公案』、『古本小説集成二集』、上海古籍  
出版社、一九九一年

『楊家府世代忠勇演義志傳』、『古本小説集成四集』、上  
海古籍出版社、一九九二年

『東漢演義』、明清善本小説叢刊初編『新刻劍嘯閣批評  
東西漢演義』、天一出版社、一九八五年

『全漢志傳』、『古本小説集成二集』、上海古籍出版社、  
一九九一年

『兩漢開國中興傳誌』、『古本小説集成四集』、上海古籍  
出版社、一九九二年

『古今小説』、『馮夢龍全集』二十〇二十一、上海古籍出  
版社、一九九三年

『警世通言』、『馮夢龍全集』二十二二十三、上海古籍  
出版社、一九九三年

『醒世恒言』、『馮夢龍全集』二十四二十五、上海古籍  
出版社、一九九三年

### 詞曲

『朝野新聲太平樂府』（四部叢刊正編）、臺灣商務印書  
館、一九七九年

『雍熙樂府』（四部叢刊廣編）、臺灣商務印書館、一九八  
一年

『董解元西廂記』、人民文學出版社、一九六二年

「豹子和尚自還俗」雜劇（奢摩他室曲叢）、楊家駱主編  
 『全明雜劇』四、鼎文書局、一九七九年  
 「新編黑旋風仗義疏財」雜劇（奢摩他室曲叢）、楊家駱主編『全明雜劇』四、鼎文書局、一九七九年  
 「黑旋風仗義疏財」雜劇、『古本戲曲叢刊』四集「脈望館鈔校本古今雜劇」、商務印書館、一九五八年  
 「黑旋風仗義疏財」雜劇（新鐫古今名劇酌江集）、『續修四庫全書』集部戲劇類、上海古籍出版社、一九九五年  
 「黑旋風雙獻功」雜劇、『古本戲曲叢刊』四集「脈望館鈔校本古今雜劇」、商務印書館、一九五八年  
 「黑旋風雙獻功」雜劇、『四部備要』集部、臧晉叔編  
 『元曲選』、臺灣中華書局、一九七八年  
 「同樂院燕青博魚」雜劇、『古本戲曲叢刊』四集「脈望館鈔校本古今雜劇」、商務印書館、一九五八年  
 「同樂院燕青博魚」雜劇、『四部備要』集部、臧晉叔編  
 『元曲選』、臺灣中華書局、一九七八年  
 「大婦小妻還牢末」雜劇、『古本戲曲叢刊』四集「古名家雜劇」、商務印書館、一九五八年  
 「都孔目風雨還牢末」雜劇、『四部備要』集部、臧晉叔編『元曲選』、臺灣中華書局、一九七八年  
 「爭報恩三虎下山」雜劇、王季思主編『全元戲曲』第六

卷、人民文學出版社、一九九〇年  
 「爭報恩三虎下山」雜劇、『四部備要』集部、臧晉叔編  
 『元曲選』、臺灣中華書局、一九七八年  
 「梁山泊李逵負荊」雜劇、『四部備要』集部、臧晉叔編  
 『元曲選』、臺灣中華書局、一九七八年  
 「包待制智賺生金閣」雜劇、明·息機子編『雜劇選』、國家圖書館藏マイクロフィルム  
 「宋上皇御斷金鳳釵」雜劇、楊家駱編『全元雜劇初編』、世界書局、一九六二年  
 「雲臺門聚二十八將」雜劇、楊家駱編『全元雜劇外編』、世界書局、一九六三年  
 「玎玎璫璫盆兒鬼」雜劇、『古本戲曲叢刊』第四集「脈望館鈔校本古今雜劇」、商務印書館、一九五八年  
 「玎玎璫璫盆兒鬼」雜劇、『全元戲曲』第六卷、人民文學出版社、一九九〇年  
 「謝金吾詐拆清風府」雜劇、『續修四庫全書』集部戲劇類、上海古籍出版社、一九九五年  
 「便宜行事虎頭牌」雜劇、『全元戲曲』第四卷、人民文學出版社、一九九〇年  
 「小尉遲將闖認父歸朝」雜劇、『續修四庫全書』集部戲劇類、上海古籍出版社、一九九五年

「新刊死生交范張鷟」雜劇、『覆元槧古今雜劇三十種』（京都帝國大學文科大學叢書）、京都帝國大學文科大學、一九一四年

「范張鷟」雜劇、『續修四庫全書』集部戲劇類「新鐫古今名劇醇江集」、上海古籍出版社、二〇〇二年

「死生交范張鷟」雜劇、『四部備要』集部、臧晉叔編『元曲選』、臺灣中華書局、一九七八年

「死生交范巨卿鷟」雜劇、『古本戲曲叢刊』四集「脈望館鈔校本古今雜劇」、商務印書館、一九五八年

「明成化說唱詞話叢刊」、文物出版社、一九七九年  
「雍熙樂府」（四部叢刊廣編）、臺灣商務印書館、一九八一年

#### 古籍·經部

『四書章句集注』、中華書局、一九八三年

#### 古籍·史部

『二十五史1史記』、藝文印書館、刊行年未詳

『後漢書』、中華書局、一九八七年

『三國志』、中華書局、一九五九年

『宋史』（百衲本二十四史）、臺灣商務印書館、一九八八

年

『明史』、中華書局、一九七四年

司馬光『資治通鑑』、古籍出版社、一九五六年

『續通鑑長編紀事本末』、北京圖書館出版社、二〇〇三年

敖經『續後漢書』、『景印文淵閣四庫全書』、臺灣商務印書館、一九八三年

李肇『唐國史補』、『唐國史補等八種』、世界書局、一九六二年

『皇宋十朝綱要』、『續修四庫全書』三四七、上海古籍出版社、一九九七年

王稱『東都事略』（國立中央圖書館善本叢刊第4種）、中央圖書館、一九九一年

徐夢莘『三朝北盟會編』、上海古籍出版社、一九八七年

李贄『續藏書』、中華書局、一九七四年

徐禎卿『翦勝野聞』（『勝朝遺事』初編、「明清史籍系列

明清史料叢書續編」、國家圖書館出版社、二〇〇九年

沈德符『萬曆野獲編』、『野獲編三十卷補遺四卷』、『四庫禁燬書叢刊』史部4、四庫禁燬書叢刊編纂委員會、北京出版社、一九九七年

『廬州府志』（中國方志叢書·華中地方·第七二六号）、

成文出版社、一九六六年

『四庫全書總目』、中華書局、二〇〇三年

『四庫全書總目提要』、河北人民出版社、二〇〇〇年

『晁氏寶文堂書目』、『四庫全書存目叢書』史部目錄類第二百七十七冊、莊嚴文化事業、一九九六年

## 古籍・子部

陳淳『北溪字義』、中華書局、一九八三年

王陽明『傳習錄』、『王陽明全集』、上海古籍出版社、一九九二年

郭守敬『二十四孝詩』、東京大學東洋文化研究所藏西本願寺寫字台文庫所藏本(嘉靖二十五年朝鮮刊本室町中期筆寫)複製本

『吳氏重訂本草綱目』、東京大學文學部藏順治十二年刊本

『本草經集注輯校本』、人民衛生出版社、一九九四年

『大德重校聖濟總錄』、國立公文書館內閣文庫藏醫學館舊藏江戸文化年間刊本

『孫真人備急千金要方』(四部叢刊三篇)、臺灣商務印書館、一九七五年

『太平聖惠方』一、六(東洋医学基本叢書第十六冊)第

二十一冊)、オリエント出版社、一九九一年

『宋版外台秘要方』上・下(東洋医学基本叢書第四冊)第五冊)、オリエント出版社、一九八一年

『新編醫學正傳』(四庫全書存目叢書子部第四十二冊所收浙江圖書館藏明萬曆六年刻本)、齊魯書社、一九九五年

「薛氏醫案(1)、(2)」臺灣商務印書館、『景印文淵閣四庫全書』第七百六十三、七百六十四冊、一九八三年

許叔微『類證普濟本事方』、『海外回歸中醫古籍善本集粹(19)』、中醫古籍出版社、二〇〇五年

周亮工『因樹屋書影』、『續修四庫全書』子部雜家類、上海古籍出版社、一九九七年

李贄『初譚集』、中華書局、一九七四年

『新刊校正增釋合併麻衣先生人相編』(劉永明主編)『四庫未收術數古籍大全』第七集(三)、黃山書社、一九九五年

柴望『六神論解』、唐順之『稗編』、『中國歷史地理文獻輯刊第八編、類書類地理文獻集成七』、上海交通大學出版社、二〇〇九年

萬民英『星學大成』、『四庫全書術數類集成』第二十三卷、天津古籍出版社、一九九九年

『太平御覽』、人民文學出版社、一九五九年

『冊府元龜』、中華書局、一九六〇年

『天中記』、文海出版社、一九六四年

『新刻天下四民便覽三台萬用正宗』（明代通俗日用類書

集刊6）、西南師範大學出版社、二〇一一年

徐震堦『世說新語校箋』、中華書局、一九九九年

蘇軾『东坡志林（传世藏書）』、海南國際出版中心、一九

九六年

王讜『唐語林』、古典文學出版社、一九五七年

洪邁『夷堅志』、中華書局、一九八一年

『重刻宋本夷堅志』（百部叢書集成所收）、藝文印書館、

一九六五年

『新編分類夷堅志』、東京大學東洋文化研究所藏本

周密『癸辛雜識』、『百部叢書集成・學津討原』、藝文印

書館、一九六五年

羅燁『醉翁談錄』、古典文學出版社、一九五七年

陶宗儀『南村輟耕錄』（四部叢刊三編子部）、上海書店、

一九八五年

陶宗儀『輟耕錄』（叢書集成初編）、中華書局、一九八五

年

何良俊『語林』、上海古籍出版社、一九八三年

許浩『復齋日記』、百部叢書集成『歷代小史』、藝文印書

館、一九六六年

『虎苑』、『說郭三種』、『說郭續』所收、上海古籍出版

社、一九八六年

『虎苑』、『續集四庫全書』子部、上海古籍出版社、一九

九五年

陳繼儒『虎薈』、『百部叢書集成 十八寶顏堂祕笈』、藝

文印書館、一九六五年

吳從先『小窗自紀』、國家圖書館藏明萬曆末年刊本マイ

クロファイルム

『耳談（北京圖書館藏明刻本）』、『四庫全書存目叢書』

子部小說家類、齊魯書社、二〇〇一年

楊慎『丹鉛總錄』、東京大學文學部所藏康熙五十九年序

本

『撫青雜說』、陶宗儀編『說郭三種』、上海古籍出版社、

一九八八年

祝允明『義虎傳』、『舊小說』、『戊集』、上海書店、一九八

五年

『情史』、東京大學文學部藏用芥子園藏版刊本

謝肇淛『五雜俎』、東京大學文學部藏和刻本

錢希言『戲瑕』、國立故宮博物院藏明萬曆四十一年新野

馬之駿刊本マイクロフィルム

『莊子集釋』、河洛圖書、一九七四年

『漢天師世家』（『中華道藏』第四十六冊）、華夏出版社、二〇〇四年

『正統道藏』第六冊、新文豐出版公司、一九七七年

『清微元降大法（上海涵芬樓藏本）』、『道藏』洞真部方法類、上海商務印書館、一九二三年

『三教源流聖帝佛祖搜神大全』、『中國民間信仰資料彙編』第一輯第三冊正編第二種 臺灣學生書局、一九八九年

## 古籍・集部

錢謙益『列朝詩集小傳』、上海古籍出版社、一九八三年

鄒同慶・王宗堂『蘇軾詞編年校注』、中華書局、二〇〇二年

李若水『忠愍集』（四庫全書珍本四集）、臺灣商務印書館、一九七三年

張鳳翼「水滸傳序」、『處實堂集』續集、『續修四庫全書』集部別集類、上海古籍出版社、

李贄『焚書・續焚書』、中華書局、一九七五年

## 概説書・日本語

上野賢一『皮膚科学』第7版、金芳堂、二〇〇二年

大塚秀高『漢文古典Ⅱ（放送大学教材）』、放送大学教育振興会、一九八七年

荒田次郎監修『標準皮膚科学』第7版、医学書院、二〇〇四年

岡西為人『本草概説』、創元社、一九七七年

森三樹三郎『中国思想史』、第三文明社レグルス文庫、一九七八年

溝口雄三・池田知久・小島毅『中国思想史』、東京大学出版会、二〇〇七年

## 概説書・中國語

章培恒・骆玉明主编『中国文学史』、复旦大学出版社、一九九六年

鲁迅『中国小说史略』、『鲁迅全集 第九卷』、人民文学出版社、一九八九年

鄭振鐸『中國文學史（下）』、五南出版、二〇一五年

譚邦和『明清小说史』、上海古籍出版社、二〇〇六年

## 工具書・日本語

溝口雄三ほか編『中国思想文化事典』、東京大学出版

会、二〇〇一年

稲田浩二ほか編『日本昔話事典』、弘文堂、一九九四年

## 工具書・中國語

孔繁敏『包拯年譜』、黄山書社、一九八六年

朱一玄、刘毓忱『水浒传資料汇编』、南开大学出版社、

二〇〇二年

崔乐泉『中国古代体育文物图录』、中华書局、二〇〇〇年

南京图书馆製「中國传统体育图片数据库」(ウェブサイ  
ト)

姜亮夫『歷代人物年里碑傳綜表』、『姜亮夫全集』十九、

雲南人民出版社、二〇〇二年

孫楷第『中國通俗小説書目(外二種)』、中華書局、二〇  
一二年

錢保塘『歷代名人生卒録』、北京圖書館出版社影印民国

二十五年五月海寧錢氏清風堂刊本、二〇〇二年

『中国大百科全书 现代医学II』、中国大百科全书出版  
社、一九九三年

## 專著・日本語

丁光迪編・小金井信宏訳『中藥の配合』、東洋學術出版  
社、二〇〇五年

二階堂善弘『封神演義の世界 中国の戦う神々』、大修  
館書店、一九九八年

二階堂善弘『道教・民間信仰における元帥神の変容』、  
関西大学出版部、二〇〇六年

大木康『明末のはぐれ知識人 馮夢龍と蘇州文化』、講  
談社選書メチエ、一九九五年

大木康『明末江南の出版文化』、研文出版、二〇〇四年

上田信『トラが語る中国史』、山川出版社、二〇〇二年

小川陽一『日用類書による明清小説の研究』、研文出  
版、一九九五年

小松謙『中国歴史小説研究』、汲古書院、二〇〇一年

小松謙『中国古典演劇研究』、汲古書院、二〇〇一年

小松謙『「現実」の浮上―「せりふ」と「描写」の中国  
文学史』、汲古書院、二〇〇七年

小曾戸洋『漢方の歴史 中国・日本の伝統医学』、大修  
館書店、二〇〇二年

中鉢雅量『中国小説史研究―水浒传を中心として―』、



汲古書院、一九九六年

仁井田陞『中国の伝統と革命2』、平凡社東洋文庫、一九七四年

仁井田陞『唐宋法律文書の研究』、東京大学出版会、一九八三年

井上泰山・大木康・金文京・氷上正・古屋昭弘『花關索伝の研究』、汲古書院、一九八九年

田仲一成『中国巫系演劇研究』、東京大学出版会、一九九三年

吉川幸次郎『元雜劇研究』、岩波書店、一九四七年  
佐々木睦『漢字の魔力』、講談社選書メチエ、二〇一二年

佐竹靖彦『梁山泊―水滸伝・108人の豪傑たち』、中公新書、一九九二年

金文京『三国志演義の世界』、東方書店、一九九三年  
金海南『水戸黄門「漫遊」考』、新人物往来社、一九九九年

林雅清『中国近世通俗文学研究』、汲古書院、二〇一一年

岩城秀夫『中国戯曲演劇研究』、創文社、一九七三年  
香坂順一『《水滸》語彙の研究』、光生館、一九八七年

高島俊男『水滸伝の世界』、大修館書店、一九八七年

宮崎市定『宮崎市定全集12水滸伝』、岩波書店、一九九二年

野口鐵郎・田中文雄編『道教の神々と祭り』、大修館書店、二〇〇四年

島田虔次『朱子学と陽明学』、岩波書店、一九六七年  
島田虔次著・井上進補注『中国における近代思惟の挫折2』、平凡社東洋文庫、二〇〇三年

## 專著・中国語

王学泰『游民文化与中国社会（増修版）』、同心出版社、二〇〇七年

余嘉錫『宋江三十六人考實』、作家出版社、一九五五年  
汪玢玲『中国虎文化』、中华书局、二〇〇七年

侯会『《水滸》源流新证』、华文出版社、二〇〇二年  
侯会『《水滸》《西游》探源―与德堂古典小说研究丛稿』、学苑出版社、二〇〇九年

胡士莹『话本小说史』、中华书局、一九八〇年  
徐大军『中国古代小说与戏曲关系史』、人民文学出版社、二〇一〇年

馬幼垣『水滸論衡』、聯經出版、一九九二年

馬幼垣『水滸二論』、聯經出版、二〇〇五年

張錦池『《水滸傳》考論』、人民出版社、二〇一四年

陳松柏『水滸傳源流考論』、人民文學出版社、二〇〇六年

葉德輝『戲曲小說叢考』、中華書局、二〇〇四年

董國炎『揚州評話研究』、社會科學文獻出版社、二〇〇九年

齊裕焜・馮如常等『水滸學史』、上海三聯書店、二〇一五年

薩孟武『水滸傳與中國社會』、三民書局、一九七一年

盧世華『元代平話研究——原生態的通俗小說』、中華書局、二〇〇九年

魏安『三國演義版本考』、上海古籍出版社、一九九六年

聶紺弩『《水滸》四議』、北京大學出版社、二〇一〇年

## 專著・英語

HANAN Patrick, *The Chinese Short Story : studies in dating, authorship, and composition*,

Harvard-Yenching Institute Monograph series,  
1973

PLAKS, Andrew, *The Four Masterworks of the Ming*

*Novel*, PRINCETON UNIVERSITY PRESS, 1987

## 單篇論考・日本語

千村涉「兄弟譚の昔話——その優劣を中心に——」、「日本昔

話研究集成4 昔話の形態」、名著出版、一九八四年

上田弘毅「王陽明に於ける近代化への可能性とその限界」、奥崎裕司編『明清はいかなる時代であったか』、汲古書店、二〇〇六年

上原究一「『李卓吾先生批評西遊記』の版本について」、

『日本中國學會報』第六十三集、二〇一一年

小川環樹「『水滸伝』の文学」、『中国の八大小説』、平凡社、一九六五年

小松謙「『水滸傳』成立考——内容面からのアプローチ

——」、「中國文學報』第六十四冊、二〇〇二年

小松謙「梁山泊物語の成立について——『水滸傳』成立前史——」、「中國文學報』第七十九冊、二〇一〇年

小松謙「水滸雜劇の世界——『水滸伝』成立以前の梁山泊物語」、「水滸伝の衝撃 東アジアにおける言語接触と

文化受容』勉誠出版、二〇一〇年

小松謙「『寶劍記』と『水滸傳』——林冲物語の成立について——」、「京都府立大学學術報告 人文』第六十二

号、二〇一〇年

小松謙『『水滸傳』諸本考』、『京都府立大学学術報告

人文』第六十八号、二〇一六年

大木康「馮夢龍「三言」の編纂意図について（続）

——「真情」より見た一側面——、『伊藤漱平教授退

官記念中国学論集』、汲古書院、一九八六年

大木康「明清文学における道教・神仙思想に関する覚え

書き」、『筑波中国学文化論叢』第二十三号、二〇〇四年

大内田三郎「水滸伝版本考——繁本と簡本の關係を中心

に——、『天理大學学報』二十卷二号、一九六八年

大内田三郎『『水滸傳』版本考——『容與堂本』につい

て』、『ビブリア』No. 79、一九八二年

大内田三郎『『水滸伝』版本考——再び繁本と簡本の關係

について——』、『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』

汲古書院、一九八六年

大内田三郎『『水滸伝』版本考——容與堂本について

（二）』、『大阪市立大學文學部紀要 人文研究』第四

十五卷第五分冊、一九九三年

大内田三郎『『水滸伝』版本考——鍾伯敬先生批評水滸

伝』について——』、『人文研究』第四十六卷九号、一九

九四年

大塚秀高「瘟神の物語——宋江の字はなぜ公明なのか」、

宋代史研究会編『宋代の規範と習俗』、汲古書院、一

九九五年

大塚秀高「水滸説話について——『宣和遺事』を端緒とし

て——』、『中国古典小説研究動態』第二号、一九八八年

大塚秀高「天書と泰山——『宣和遺事』より見る『水滸

傳』成立の謎」、『東洋文化研究所紀要』第四百十冊、

二〇〇〇年

木山英雄『『水滸伝』の世界』、『世界の歴史6 東アジア

世界の変貌』、筑摩書房、一九六一年

中鉢雅量「英雄たちの栄光と悲慘——水滸伝の世界——」、

懷徳堂記念会編『中国四大奇書の世界』、和泉書院、

二〇〇三年

氏岡真士「平話の基づいた史書——平話の作り手について

の試論——』、『日本中国学会報』第四十九集、一九九七

年

氏岡真士「容与堂本『水滸伝』3種について」、『中国古

典小説研究』第十九号、二〇一六年

丸山浩明「水滸傳簡本淺探——劉興我本、藜光堂本をめぐ

って——』、『日本中国學會報』第四十集、一九八八年

中川諭「上海圖書館藏『京本忠義傳』について」、『新大

国語』第二十二号、一九九六年

白木直也「一百二十回水滸全伝の研究―發凡を通じて試みた―」、『日本中國學會報』第二十五集、一九七三年

佐藤晴彦「《古今小説》における馮夢龍の創作―言語的特徴からのアプローチ―」、『東方学』第七十二輯、一九八六年

佐藤晴彦「《醒世恒言》における馮夢龍の創作（Ⅰ）―言語的特徴からのアプローチ―」、『神戸外大論叢』第三十九卷第六号、一九八八年

佐藤晴彦「《醒世恒言》における馮夢龍の創作（Ⅱ）―言語的特徴からのアプローチ―」、『神戸外大論叢』第四十一卷第四号、一九九〇年

佐藤晴彦「『水滸伝』“嘉靖”残卷について」、『神戸外大論叢』四十二卷三号、一九九一年

佐藤晴彦「《警世通言》における馮夢龍の創作―言語的特徴からのアプローチ―」、『神戸外大論叢』第四十三卷第二号、一九九二年

佐藤晴彦「《古今小説》における馮夢龍の創作（改稿）―言語的特徴からのアプローチ―」、『神戸外大論叢』第四十四卷第一号、一九九三年

佐藤晴彦「國家圖書館藏『水滸傳』残卷について―“嘉

靖”本か?」、『日本中國學會報』第五十七集、二〇〇五年

佐藤鍊太郎「無窮會圖書館所藏、織田覺齋舊藏李卓吾評『忠義水滸傳』一百回」、『汲古』第8号、一九八五年  
佐藤鍊太郎「李卓吾『忠義水滸傳評』について」、『東方学』第七十一輯、一九八六年

金文京「『戲』考―中国における芸能と軍隊」、『未名』第八号、一九八九年

金文京「詩讀系文学試論」、『中国―社会と文化』第七号、一九九二年

金文京「中国民間文学と神話伝説研究―敦煌本『前漢劉家太子伝（変）』を例として」、『史学』第六十六卷第四号、一九九七年

松浦智子「『楊家将演義』における比武招親―その祖型と傳承の一端をめぐって―」、『中国文学研究』第三十一期、二〇〇五年

松浦智子「楊家将『五郎為僧』故事に関する一考察」、『日本アジア研究（埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要）』八号、二〇一一年

神山閨次「水滸伝諸本」、『斯文』第二十編第三號、一九三〇年

荒木達雄「李逵殺虎故事成立の背景」、『中国—社会と文化』第二十五号、二〇一〇年

荒木達雄「『嘉靖本』『水滸傳』と初期の『水滸傳』文  
繁本系統」、『日本中國學會報』第六十四集、二〇一二年

荒木達雄「宋江形象演變考」、『中国—社会と文化』第三十号、二〇一五年

高島俊男「『小嘍囉』小考」、『中哲文學會報』第七號、  
一九八二年

高島俊男「水滸傳石渠閣補刊本研究敘説」、『伊藤漱平教授退官記念中國學論集』汲古書院、一九八七年

高島俊男「宋江実録」、『東京大学東洋文化研究所紀要』百二十二、一九九三年

高野陽子・小松謙「『水滸傳』成立考—語彙とテクニカル・タームからのアプローチ」、『中国文学報』第六十五冊、二〇〇二年

孫述宇著・田仲一成訳「水滸傳—強盜が強盜に語った物語—」、『東洋文化』61、東京大学東洋文化研究所、  
一九八一年

馬場昭佳「『水滸傳』の成立と受容—宋代忠義英雄譚を軸に」、東京大学大学院人文社會系研究科二〇一三年

#### 度博士學位論文

根ヶ山徹「明代における包公説話の展開」、『中国文学論集』第十五号、一九八六年

宮紀子「花関索と楊文広」、『汲古』第四十六号、二〇〇四年

笠井直美「『義賊』の誕生—雜劇『水滸』から小説『水滸』へ—」、『東洋文化』第七十一号、一九九〇年

笠井直美「隠蔽されたもう一つの「忠義」—『水滸傳』の「忠義」をめぐる論議に關する一視點—」、『日本中國學會報』第四十四集、一九九二年

笠井直美「『水滸』における『対立』の構図」、『東洋文化研究所紀要』第二百二十二冊、一九九三年

笠井直美「李宗侗（玄伯）旧藏『忠義水滸傳』」、『東洋文化研究所紀要』第三百三十一冊、一九九六年

笠井直美「へわれわれ」の境界…岳飛故事の通俗文藝の言説における國家と民族（上）」、『言語文化論集』第三卷二号、二〇〇二年

笠井直美「へわれわれ」の境界…岳飛故事の通俗文藝の言説における國家と民族（下）」、『言語文化論集』第十四卷一号、二〇〇二年

笠井直美「北京大學圖書館藏『忠義水滸全傳』—『萬曆

袁無涯原刊』情報の一人歩き―、『名古屋大學中國語學文學論集』第二十一輯、二〇〇九年

笠井直美「誰が小衙内を殺したか―『水滸伝』における『宣言としての暴力』の馴致」、『水滸伝の衝撃 東アジアにおける言語接触と文化受容』、勉誠出版、二〇一〇年

笠井直美「白話小説・戯曲版本の分化と特徴」、『東アジア書誌学への招待』第二卷、東方書店、二〇一一年  
御影雅幸「日本民間薬のルーツ―環日本海域における植

物資源の利用―」、金沢大学学術情報リポジトリ  
(<http://hdl.handle.net/2297/5583>)、二〇〇三年

溝部良恵「牛肅『紀聞』について―「呉保安」を中心に―」、『中唐文學會報』第十一号、二〇〇四年

達富陸「用字の違いから見る『水滸伝』の成立」、『和漢語文研究』、二〇〇三年

澤田瑞穂「『四帝仁宗有道君』―明代説唱詞話の開場慣用句について―」、『中国文学研究』第四期、一九七八年

齋藤護一「百回水滸傳考」、『漢學會雜誌』第六卷第一號、一九三八年

鶴成久章「明代の科举制度と朱子学―体制教学化がもた

らした学びの内実―」、『中国社会と文化』第二十二号、二〇〇七年

### 單篇論考・中国語

王学泰「从《水浒传》看江湖文化」、『上饒師範學院學報 社科版』、二〇〇五年

王齐洲・王丽娟「从《菽园杂记》、《叶子谱》所记、叶子戏、看《水浒传》成书时间」、『南开学报（哲学社会科学版）』二〇一一年第三期

石昌渝「《水浒传》成书于嘉靖初年考」、『上海师范大学学报（社会科学版）』第三十卷第五期、二〇〇一年  
石昌渝「林冲与高俅―《水浒传》成书研究」、『文学评论』二〇〇三年第四期

石昌渝「王阳明心学与通俗文学得崛起」、『文学遗产』二〇〇七年第二期

石剑「句句出奇 字字换色―武松打虎与李逵杀虎之比较」、『天中学刊』一九九八年八月第十三卷增刊

代顺利「试论古典小说中的“犯笔”」、『湖北师范学院学报（哲学社会科学版）』一九九九年第十九卷第四期  
朱介凡「『王莽趕劉秀』傳說的分析」、『俗文學論集』、聯經出版、一九八四年

李永祜「《水浒传》语言的地域色彩与南北文化融合」、

『明清小说研究』二〇〇八年第二期

李永祜「《水浒传》三题」、『明清小说研究』二〇一五年

第三期

李伟实「从水浒戏和水浒传子看《水浒传》的成书年

代」、『社会科学战线』一九八八年第一期

李伟实「从杜堇的《水浒传人物全图》看《水浒传》的成熟年

代」、『社会科学战线』一九九一年第三期

李伟实「《水浒传》成书于元末明初之说不能成立——兼论

《水浒传》的作者为罗贯中非施耐庵」、『社会科学战线』

一九九三年第六期

李伟实「《水浒传》成书于明朝中叶可以定论」、『广东技

术师范学院学报（社会科学）』二〇一一年第六期

李福清「三國故事與民間敘事詩」、『李福清論中國古典小

說』、洪葉文化事業、一九九七年

李豐懋「暴力修行…道教謫凡神話與水滸的忠義敘述」、

『人文中國學報』第十九期、二〇一三年

范宁「《水浒传》版本源流考」、『范宁古典文学研究论文

集』、重庆出版社、二〇〇六年

金文京「關羽之子與孫悟空——明成化說唱詞話『花關索

傳』的神話意義」、『中外文學』第十五卷第四期、一九

八六年

侯会「从南北蓼儿洼看《水浒》故事与淮南之关系」、『文

学遗产增刊』十八辑、山西人民出版社、一九八九年

侯会「《夷坚志》中的《水浒传》素材」、『明清小说研

究』一九九九年第二期

洪晓银「从文人戏《王粲登楼》看元代文人心态」、『闽西

职业技术学院学报』二〇一四年第一期

姜国钧「“义气”词义演变探析」、『邵阳师范高等专科学校

学报』第二十二卷第六期、二〇〇〇年

胡以存「南、北支水浒故事与《水浒传》成书」、『明清小

说研究』二〇一五年第三期

胡绍文「《夷坚志》版本研究」、『大理学院学报』第一卷

第二期、二〇〇二年

胡春华「明清时期古籍丛书浅探」、『华夏文化』二〇〇四

年第一期

高明「王穉登《虎苑》研究」、『图书馆杂志』二〇〇五年

第五期

孙述宇「梁山泊英雄的義氣」、『明報月刊』第十三卷第十

期、一九七八年

孫術宇「水滸傳…強人說給強人聽的故事」、『水滸傳的來

歷、心態與藝術』、時報文化出版事業有限公司、一九

八一年

马幼垣「嘉靖残本『水浒传』非郭武定刻本辨」、「明代小说面面观 明代小说国际学术研讨会论文集」学林出版社、二〇〇二年

马幼垣「嘉靖残本『水浒传』非郭武定刻本辨」、「水浒传二论」、生活・读书・新知三联书店、二〇〇七年（前项与同一论文だが、二〇〇三年付「後記」が附されている）

马成生「在形似与神似之间 『水浒』中“武松打虎”与“李逵杀虎”赏析」、「杭州师院学报（社会科学版）」一九八四年第三期

马雍「《水浒传》李逵故事来源」、「文史」一九八〇年第八期

纪德君「《水浒传》与说唱此话之关系新证」、「广州大学学报（社会科学版）」第十一卷第三期、二〇一二年

荒木达雄「两种《水浒传》为何“再造”一百回本——加州大学柏克莱校藏本与东京大学文学部藏本」、「河北学刊」二〇一六年第一期

荒木達雄「石渠閣出版活動和《水浒传》之補刻」、「漢學研究」三十五卷三期、二〇一七年

孙正国「中国义虎型故事的文化遗产」、「西南民族学院学

报 哲学社会科学版」总二十三卷第一期、二〇〇二年

孫楷第「水浒传舊本考」、「滄州集」、中華書局、一九六五年

孫楷第「水浒传人物考」、「滄州後集」、中華書局、一九八五年

孙绍振「武松打虎和李逵杀虎」、「名作欣赏」二〇〇七年第二十三期

康珮「論《水浒传》的狂歡精神與庶民性格」、「興大人文學報」第四十七期、二〇一一年

陈才训「儒学平民化思潮与明代通俗小说」、「天津社会科学」二〇一六年第二期

陈松柏「宋江演义是连接宋江等三十六人故事与水浒传必不可少的链条」、「明清小说研究」二〇〇八年第一期

陈美玲「论性格“强化”的典型人物——以《三国演义》和《水浒传》为例」、「明代小说面面观」、学林出版社、二〇〇二年

陳兆南「讀『明刊古本宣和遺事』」、「書目季刊」十八卷三期、一九八四年

陈东林「李逵杀虎写得精彩」、「南京理工大学学报（社会科学版）」二〇〇七年第四期

董国炎「论《水浒传》对《五代史平话》的承袭」、「明清



小说研究』二〇一五年第一期

项裕荣「试论李逵形象塑造的南北融合」、《学术论坛》

二〇〇七年第一期

舒媛媛「生“与”死“的背反——《水浒传》的道德观」、

《明清小说研究》二〇〇七年第一期

张芳「李逵悲剧形象简论」、《襄樊职业技术学院学报》第

三卷第三期、二〇〇四年

张真「《三国志平话》中的刘备形象」、《许昌学院学报》

二〇一二年第三期

张祝平「《夷坚志》的版本研究」、《古籍整理研究学刊》

二〇〇三年第二期

贺信民「论『水浒传』」、《人文杂志》二〇〇〇年第四期

黄俶成「《水浒》版本衍变考论」、《扬州大学学报（人文

社会科学版）》第五卷第一期、二〇〇一年

黄霖「一种值得注明的《水浒》古本」、《复旦学报（社会

科学版）》一九八〇年第四期

新江「九天玄女授天书——水浒札记」、《世界宗教文化》

一九九六年第四期（总八号）

邹少雄「论《水浒》的文化精神」、《孝感学院学报（社会

科学版）》第二十卷第三期、二〇〇〇年

赵京深「道教的经书总集——《道藏》」、《内蒙古统战理论

研究》二〇〇八年第五期

刘冬、欧阳健「《京本忠义传》评价商兑」、《贵州文史丛

刊》一九八五年第二期、总第十七期

刘世德「论『京本忠义传』的时代、性质和地位」、《明清

小说研究》一九九三年第二期、总第二十八期

刘相雨「论古代白话小说中流氓无赖发迹的母题模式及流

变——以《五代史平话》为中心」、《郑州大学学报（哲

学社会科学版）》二〇〇二年第二期

刘承训「简论“武松打虎”、“李逵杀虎”描写中的犯与

避」、《怀化师专社会科学学报》一九八七年第三期

鲁迅「马上支日记」、《鲁迅全集》第三卷「华盖集续

编」、人民文学出版社、一九八九年

郑振铎「水浒传的演化」、《中国文学论集 上集》、开明

书店、一九四九年

欧阳江琳「两首希见的元代水浒诗——楚石梵琦《梁山

泊》、《宋江分赃台》考释」、《中国典籍与文化》二〇一

四年第三期

邓宇英「试论『水浒传』的史传笔法」、《广州大学学报

（社会科学版）》二〇〇二年十月第一卷第十期

萧相凯、苗怀明「《水浒传》成书于嘉靖说辩证——与石

昌渝先生商榷」、《文学遗产》二〇〇七年第五期

霍有明「由『义』词源的演化略探《水浒》的『忠』、『义』」、「唐都学刊（西安联合大学社会科学学刊）」

二〇〇一年第十七卷第四期

卢忻「《水浒传》作者的英雄观」、「江汉论坛」一九八七年第一期

罗宪敏「李逵形象塑造的艺术经验」、「明清小说研究」

一九九六年第三期

谭艳玲「论元杂剧中的文人发迹戏」、「韶关韶学院学报・

社会科学」第三十三卷第五期、二〇一二年

テレビドラマ

『新水浒传』、北京如意吉祥影視策劃有限公司・北京陽

光盛通文化藝術有限公司、二〇一一年

（附記）博士論文「百回本『水浒传』の編纂方針」は二〇一八年

三月六日に東京大學大学院人文社會系研究科に提出され、同年七月二十五日に口頭試問を受けた。試問を擔當してくださったのは、大木康先生（主査・東京大學東洋文化研究所教授）、齋藤希史先生（東京大學大学院人文社會系研究科教授）、田口一郎先生（東京大學大学院總合文化研究科准教授）、鈴木陽一先生（神奈川大學外國語學部教授）、小松謙先生（京都府立大學文學部教

授）である。この五名の先生方の審査を経て、同年九月十三日博士（文學）の學位が授與された。本稿は、口頭試問の際にいただいたご指摘のうち、誤字脱字、引用や翻譯の誤りなど比較的單純なものは直接修正を施し、論旨に関わる問題で、本文を修正するとなると大幅な書き換えや構成の煉り直しが必要となるものは補注として加えたものである。このほかにも試問の際に頂戴したものの本稿には反映しきれなかったご指摘も少なくない。五名の先生方の懇切丁寧なご指導に改めて感謝を申し上げます。論文執筆に際してはほかにも様々な方のご支援を賜った。本稿の大部分は臺灣にて執筆したが、臺灣における研究の機会を提供してくださった中央研究院中國文哲研究所の方々、とりわけ胡曉真先生、廖肇亨先生、政治大學の高桂惠先生、林桂如先生、國家圖書館漢學研究中心の方々、筆者が研究機關を離れたのちにご支援くださった成功大學の陳益源先生に特に感謝を申し上げます。また、臺灣では見ることのむずかしかった数々の資料についての情報を提供してくださった上原究一先生（當時山梨大學、現東京大學）、中原理恵さん（京都大學大学院生）のおなまえもここに記しておきたい。本博士論文はこれらのどなたが缺けても完成させることはできなかった。また、ここには記しきれなかった方々についても同様である。ほんとうにありがとうございました。